Angel Beats! :One of Possibilities

ニューノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！：Ｏｎｅ　ｏｆ　Ｐｏｓｓｉｂｉｌｉｔｉｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ４７２５Ｍ

【作者名】
ニューノ

【あらすじ】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　で転生後の話。

天使

立華奏は壁にもたれかかり、行き交う通行人達を眺めていた。
人を観察するのが趣味というわけではなく、ここでゆりと待ち合わせをしているから。
しかし、肝心のゆりがなかなか姿を現さない。

「ゆり遅いな……」
携帯電話を開き、時間を確認する。
ディスプレイの蓮華の花の上に表示されているデジタル時計は、三十分近く約束の時間が過ぎていることを示していた。

――あたしが時間を間違えてるのかしら？
そう考えた奏はゆりに電話をかけることにした。
履歴から素早くゆりの番号を選択し、発信しようとしたその時、一通のメールが届く。

奏は電源ボタンを押して待ち受け画面に戻り、そしてメール画面へと移る。
――ゆりからのメール。
奏はそれを開いた。

『奏ちゃんが遅刻って珍しいね。もしかして渋谷にいない？』
「……忘れてた」
――そう言えば昨日、待ち合わせ場所が急遽変更になったんだ。

音無結弦は人ごみの流れに乗りながら、少し俯き歩いていた。

本当なら今ごろは日向とユイと遊んでいるはずだった。
なのに、ユイが拗ねたからという理不尽な理由でドタキャンされてしまった。

だから、目的もなく街中をぶらぶらと歩いているわけだ。
――特に買いたいものもないし家に帰るか。
そう考えた音無は駅に向かおうと歩みを少し速めた。

そこへ、天使の様な歌声が耳に届く。それに聞いたことあるメロディだ。

反射的に振り向いたが、天使の姿はなかった。
それどころか、歌声さえも消えていた。

――そうだよな。天使なんているわけないじゃないか。
暑いから空耳を聞いたんだ。冷たいコーヒーでも飲んで頭を冷やそう。
コンビニ……いや、さっき自販機があったな。

音無は来た道を戻ろうと方向転換した。
「……天使？」
音無はそこで天使を見つけてしまった。
さっきみたいに歌声なんかじゃなく、純白の羽のはえた白くて腰にまで届くほど長い髪の天使。
そんな神々しい存在が人ごみに紛れて歩いていた。

天使が見えてくるなんて本当に頭がおかしくなったのか。
目をこするとそこにいたのは天使ではなく、きれいな白い髪のごく普通の少女だった。
羽どころか長髪ですらない。ごく普通のポニーテールだ。

――そ、そりゃそうだよな。まったく、俺はなにを考えているんだ。

とは言いつつも音無はその少女から目が離せなくなっていた。

白いワンピースに水色のジャケットをあわせ頭にはつばの小さい麦藁帽子。

ワンピースやジャケットから伸びる手足も真っ白でとてもきれいだった。

それと同時にどこか懐かしいような、旧知の仲であるような感覚を覚えた。

気づけば音無は無意識のうちに少女の後を追っていた。

音無のほうが歩くのは早く、距離は少しずつ縮まっていく。

再び天使の歌声が聞こえてきたようにも感じた。

ついに追いついた音無は声もかけずに少女の肩に手をかけた。

「ガードスキル――ハンドソニック」

儚げな少女の声に合わさった聞きなれない並びの単語の直後、衝撃が心臓を貫いた。

気付けば、目にも留まらぬ速さでこちらを向いた少女の黄色い目がこちらを見上げていた。

ゆっくりと視線を自分の胸元にやると、少女の拳がみぞおちの少し上に突き刺さっている。

問答無用の強烈な一撃の前に音無はその場で崩れ落ちた。

SSS

みぞおち辺りに走る鈍い痛みで音無は目を覚ました。
「やっと起きたわね」
まだ視界がぼんやりとしている中、傍らから気の強そうな声が聞こえてくる。
この声、どこか懐かしいような……。

気だるい体を起こすと、紫っぽい赤髪に黄緑のリボンのついたカチューシャをした少女に目のピントが合った。
姿もその表情もさっきの声と同じで勝気そうだ。なぜか、それらもどこかで見たことがあるような気がする。
「さ、皆が待ってるから行きましょ」
「え？　おい、ちょっと……」
赤髪の少女は思考がまだはっきりしていない音無の袖を掴むとベットから無理やり引きずり出した。

そのまま扉の前で来ると足を止めて顔だけこちらに向けた。
「自己紹介がまだだったわね。私の名前はゆり。よろしくね、音無君」
「なんで俺の名前……」
「いいからいいから」
ゆりと名乗った少女は質問には答えずに扉を開けて音無を隣の部屋に押し込んだ。

転びそうになるのをなんとかこらえるとさっきの部屋よりも大きな部屋に沢山の人がいた。
その中で知的な男が真っ先にこちらに気づく。
そして組んでいた右腕の人差し指と中指をメガネの中央に持って

くると位置を直しながら話しかけてきた。
「おや、お目覚めのようですね」
この知的な男の言葉で他の面々も音無に気付く。
次々と駆け寄ってくると堰を切ったように声をかけてきた。

「キサマ！　ゆりっぺの看護をっ……」
「ねぇねぇ、立華さんの正拳突きは……」
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｆｉｎｅ？」
「敗北の後には肉うど……」
「ぼくのことはクラ……」
「ったく。部外者が入って……」
「あさはかなり……」
でも、ほとんどなにを言っているのか判別できない。
とりあえず、ここには変なやつが多そうなことだけはわかった。

「えっと、まずここはどこなんだ？」
心に思ったことは隠しつつ、この部屋で最初に声をかけてきた知的な男に聞いてみた。
「それはですね……」
「死んだ世界はどうなっているのか戦線の部室よ」
その問いに、後ろから入ってきたゆりが先に答えた。
「死んだ世界はどうなっているのか戦線？」
「そう、略すとＳＳＳになるわね」
あまりにアレな名前だから聞き違えたのかと思ったが違った。

「名前はよく変わるけど戦線だけ……」
「そんなことよりゆりっぺ、今日はなんで俺達を集めたんだ？」
ガラの悪い男がゆりの話をぶった切った途端、斧みたいなものを担いでる男がぶちぎれた。
「藤巻！　ゆりっぺがまだ喋ってんだろぉが！」

「野田君は隅で素振りでもしてて」
「了解だ、ゆりっぺ」
ゆりの一声で素直に引き下がると部屋の隅で素振りをし始めた。
だからって本当に部屋の中で素振りをするなよ。まぁ、外でも明らかアウトだけど。

「それで本当に今日はなんのために集められたの？　まさかまた臨死体験？」
「いいえ、大山君。違うわ」
大人しそうな外見の男から洒落にならない単語がでてきた。
果たして生きて帰れるのか。というかもう帰っていいか？
音を立てずにもう一つの扉のほうに行こうとすると夏なのにマフラーを巻いた少女が扉の前に陣取った。
「あさはかなり……」
どうやら帰るのはダメらしい。

「まったく、今日は音無君が鍵なんだから帰られたら困るわ。それに人は多いほうが助かるしね」
それに気付いたゆりは音無の行動を注意すると部屋とは不釣合いなテーブルの奥にあるイスに座った。
そしてテーブルの引き出しから白のベレー帽を取り出しかぶる。
「彼が鍵？　話が見えてきませんね」
「高松の言うとおりだぜ」
メガネを再び直した男の言葉に音無を含めた何人かが頷いて同意した。

「今日のオペレーションは『エンジェルズ・ティアー』よ」
ゆりのこの言葉で一瞬で部屋に動揺が走った。
「Ｉ'ｍ　ｎｅｒｖｏｕｓ」
「怖ぇ。ヤバすぎんぜ」

「肉うどんが……」
完全に音無だけがこの状況から取り残されてしまった。
にもかかわらず部屋の全員から怒りのこもったような視線を浴びせられる。

それに耐え切れなくなった音無は切り出した。
「なあ、いい加減に俺にもわかるように説明してくれないか。そもそも俺がここにいる理由すら……」
「竹山君。お願い」
ほとんどのメンバーがあからさまに顔を背ける中、ゆりが誰かを指名した。
ゆりの視線の先には壁際にあるパソコンのモニターに釘付けのメガネをかけたおかっぱの男。
「僕のことはクライストとお呼びください」
静かに反応したその男は文字がびっしりのモニターから目を離すと説明を始めた。

襲来

「エンジェルズ・ティアーのエン……」
「あっごめんね。竹山君、ちょっとその前に聞きたいことがあったわ」
竹山が説明を始めてからすぐ、ゆりが遮った。
「それは構いませんが僕のことはクラ……」
「音無君はどうして殴られたの？」
殴られた？　……そうだ！　天使のような少女に俺は殴られたんだ！
そのまま気を失って――ここに運ばれたのか。
胸に手を当てると鈍く痛んだ。

「ぐずぐずするなっ！ゆりっぺが質問してんだからさっさと答えろぉっ！」
すると突然、ずっと素振りをしていた野田が手にした斧の刃先を音無に突きつけた。
こいつ危ねぇ！　今、絶対に髪の毛をかすったぞ！
「もういいから野田君は――外で見張りでもしてて」
「了解だ、ゆりっぺ」
野田はさっきのようにあっさりと引き下がった。
そして肩に斧を担いで夕焼け色に染まった外へ出て行った。
あれ持たせて外に行かせてもいいのか？

メガネに手を当てた知的な男が咳払いをして音無の注意を引き戻そうとした。
「あぁ、すまん」
「それでは続きを聞かせてもらえますか？」
「続きもなにもまだなんも言ってないけど」

音無が真っ当なツッコミを入れると無言でメガネの位置を直した。
「あさはかなり……」
気を取り直した音無は殴られた理由がわからないこと、なぜ天使のような少女に声をかけたのかもわからないこと、そしてあの時に感じた自分の気持ちを語った。
理解されないだろうに、ここまで赤裸々に語ってしまった。
少し恥ずかしかったが不思議と後悔はない。
まるでこいつらがなんでも話せる友達——いや、仲間のようだった。
音無の言葉を聞きいて、思うところがあるのか目をつぶったりダンスをはじめたり筋トレをはじめたりして室内は静かになった。
「そろそろオペレーションの説明を再開してもいいでしょうか」
しばらくしてから竹山がその沈黙を破った。
「そうね、竹山君。お願いするわ」
「だから僕のことはク……」
「はい遊佐さん。うん、奏ちゃんが動いた？」
やっとオペレーションとやらのことが聞けると思った矢先、ゆりがどこからか取り出したトランシーバーでだれかと通話をはじめた。
ゆりの深刻な顔からして状況は相当悪いようだ。顔も心なしか青い。
全員が固唾をのんで通話が終わるのを待った。
「わかったわ。部室に近づいたらメールをくれるのね。うん、うん、よろしくね遊佐さん」
通話が終わるなり大山と藤巻がゆりに詰め寄った。
「ゆ、ゆりっぺ。今日は何瓶だった？」

「死んじまわねぇ量なのか！？」
ゆりはそれを手で制すと立ち上がった。

「皆、落ち着いて聞いて」
緊張感が支配する部室内でだれかのつばの飲む音が聞こえた。
状況を把握してないこっちでさえ緊張してくるな。
ゆりは部屋にいる全員が自分のほうを向いているか確認してから口を開いた。
「今日は――」

「手作りだそうよ」

ゆりが言い放った直後、部室内で大小さまざまな悲鳴があがった。
部屋の角で震えるものあれば
「こんな事例は今まで……」
と喋りながら指を震わせメガネをカタカタ言わせたり
「Ｃｒａｚｙ！　Ｃｒａｚｙ！　Ｃｒａｚｙ！」
と叫びながらヘッドスピンを始めたりとまさに混沌とした部室と化した。
もう、わけがわからない。

そんな中で音無の耳にきれいな音色が入ってきた。
「だれか歌ってる？」
「てめーも恐怖で頭がイカれたか？」
音無が口に出すと藤巻が絡んできた。
それを無視して耳を澄ましているとその正体が掴めた。
「あ、もしかしてこれってガルデモのＭｙ　Ｓｏｎｇじゃないか？」
その言葉に、ゆりは慌てて携帯を取り出し開いた。

「皆！　奏ちゃんが来る！」

次の瞬間、外で金属で殴られたような音と断末魔がした。
「野田がやられたぜ！　どうするんだゆりっぺ！」
「松下君！　お願い！」
「２０秒で頼む！」
松下は扉に体当たりして、押さえこんだ。

押さえてすぐに軽く三度ドアノブがまわった。
しかし、開かないとわかると今度は扉が変形するほどの衝撃が走った。
「このままじゃ持ちこたえられん！」
松下がその圧力に打ち負けそうになったとき、藤巻と高松とＴＫも扉を押さえにいった。
「くそっなんだって部室は内開きなんだ！」
「この肉体、活躍するときが来たようですね！」
「Ｆｕｌｌ　Ｐｏｗｅｒ！」

「音無君！　椎名さん！　こっちにっ！　大山君は入ってきたら時間を稼いで！」
ゆりは2人を連れてベットのある部屋に逃げ込んだ。
その直後、扉が破られるような音と悲鳴が聞こえてきた。
「椎名さんはベットの下で待機、音無君は上で寝たふりよ」
それでもゆりは冷静に小さな声で指示を出した。
音無と椎名が位置につくと自分は丸イスに座って息を整え始める。

じっとしていると、部屋の外から重そうな足音が聞こえてきた。
段々と近づいてくる。
すると大山がその足音の主に声をかけた。
「こ、こんにちは。立華さん。いい天気だね」
「こんにちは、大山君。あたしは音無君に用事があるからそこをどいてくれる」

しかし、世間話に応じてくれなかった。

「もう準備は整ったから時間稼ぎはいいのに……」

ゆりがポツリと呟くが大山には届かない。というか酷くないか。

「待ってください！　こんな時になんですが、ぼっぼくは立華さんのことが好きでっ……」

「どんな時でも、ごめんさい」

大山の一世一代の必要のない勇気ある時間稼ぎは失敗に終わった。

そしてとうとう3人のいる部屋の扉がゆっくりと開く。

「ただいま、ゆり」

「奏ちゃん、おかえり」

入ってきたのはあの天使のような少女だった。

微笑み

部屋に入ってきた天使は頭に三角巾をかぶり手には大きな寸胴を持っていた。
寸胴に隠れて見えないけどもエプロンか割烹着も着ているんだろうな。
よく見ると寸胴の下のほうが凹んでんのは……いや気づかなかったことにしよう。
音無は寝たふりを続けたまま薄目で状況を確認していた。

「奏ちゃん、はい」
「ありがとう」
ゆりが部屋の隅に重ねられていた丸イスを一つとって天使に渡した。
天使は寸胴を部屋の小さな机に置いてからイスを受け取るとゆっくりと座った。
ちなみに着ているのは割烹着の方だ。
ところどころ赤い斑点があるのは見なかったことにしとこう。

「音無君の容態はどう？」
「まだ寝たままだけど、そろそろ起きるんじゃないかしら」
天使の質問にゆりは起きるの部分を強調して答えた。
要するにいいタイミングで起きろってことだな。
じゃあ二人の会話の間を見計らって……。

「……」
「……」
音無の思惑とは裏腹にゆりと天使は全く会話をしなかった。
それどころか天使は瞬きもほとんどせず、真っ直ぐに音無を見続

けているので起きるに起きられなくなった。

しばらく無言が続いていたが急にゆりが天使の後ろでこちらにウインクしてきた。

多分、これはゆりからの起きろって合図だ。……よしっいくぞっ！

「あさはかなりー」

音無が気合を入れた瞬間、気の抜けた椎名の声がベットの下から小さく聞こえた。

い、今のウインクは椎名への合図だったのか!?　でも、どんな意図で!?

天使にも当然聞こえたらしく、不信そうにベットの下を覗き込もうとした。

「あっ奏ちゃん！　音無君が起きたわよ！」

それに慌てたゆりがフォローに入る。やっぱ予定外だったのか。

……起きたわよ？　……ってそんな急に起きたことにされても困る！

ああ、でも、もう！　やるしかないか！

音無は勢いよく目を開くと、ゆっくり起き上がって、わざとらしく伸びをした。

我ながら下手な演技だとは思う。ゆりもすごい睨みっぷりだ。

すると急に天使は立ち上がった。やばい、バレたか？

でも、天使はくるりと反転して寸胴の方に行った。

鍋のふちにかかったおたまをとるとそのまま音無の目の前に突き出した。

湯気が立ち昇るおたまの中にはたっぷりと真っ赤な麻婆豆腐。

「こ、これは？」

「麻婆豆腐よ」

たしかにそうなんだが聞きたいのはそういうのじゃなかった。
起きたばっかりの人間に麻婆豆腐をおたまで食べさせるなんて聞いたことがない。
それに色がおかしい。明らかに麻婆豆腐の色じゃない。
ゆりに視線で助けを求めると任せてとばかりにゆりは頷いてくれた。

「いくら音無君が男だからっておたまは口に入らないんじゃない？」
「たしかにそうね。お皿とってくる」
ゆりの機転で時間稼げ――
「ちょうどここにきれいなレンゲとお皿があるから使って」
なかった。席から離れた隙にゆりに麻婆豆腐を食べさせられる訳を聞いておきたかったんだが。

「ありがとう」
天使はゆりからお皿を受け取るとそこに麻婆豆腐を注いだ。
もう一杯、寸胴から追加するとおたまを寸胴のふちにかけた。
そしてゆりから受け取ったレンゲで皿から麻婆豆腐をすくうと再び音無の前に差し出した。
もうグダグダ考えずに覚悟を決めるしかなさそうだな。

「熱いから気をつけて」
たしかにレンゲからも湯気が立ち昇っている。
「そうそう、むせないようにね」
ゆりの言葉は心の準備をしっかりとしておきなさいとも聞こえた。
おしっ！　気合を入れた音無が天使からレンゲを受け取ろうとすると
「無理しちゃだめ」
と止められてしまった。まさか……
「あーん」

予想外の攻撃に音無だけでなくゆりまでもが驚いた顔をしていた。

音無が固まっていると天使は首をかしげた。

「冷めちゃうわ。それとも、麻婆豆腐は嫌いなの？」

「そ、そんなことないぜ。いただきます」

首をかしげたまま悲しそうにする天使を見た音無は慌てて差し出されたままのレンゲに食いついた。

辛っっッ！

瞬時に広がる痛みの奔流に舌からつま先まで電流が流れたように痺れる。

だけどこれを表情にだせない。まだ心配顔の天使においしいっていってやらなきゃ。

ゆりもそんなに睨まなくても大丈夫だ。わかってるって。

おいしいと言うためにレンゲから口を放した次の瞬間、信じられないことが起こった。

「うまっっっッッ！！！！！」

空気や唾液と混ざり合った麻婆豆腐はベットの下から頭を打ったような音と衝撃さえも気づかないほどの幸福感を音無の脳に与えた。

辛味の上を空気が通り抜ける爽快感。

噛めばたちまち現れてくる辛味の中に隠れた優しい甘みと深いコク。

そしてうぬぼれかも知れないが愛情までもが溢れんばかりに入っている至福の味だった。

あの短い感想はそんな絶品の麻婆豆腐に感動して思わずこぼれた心からの一言だった。

「よかった。まだまだあるからたくさん食べてね」

そんな音無の反応に天使は微笑をこぼした。

二人

今、音無は天使と二人っきりになっていた。
会話はなく食器がこすれる音ぐらいしか部屋の静寂を乱すものはない。
なぜ二人っきりになったか、それは少し前に時間がさかのぼる。

「ねぇ、奏ちゃん。あたしも一口食べていい？」
おいしそうに食べる音無を見てゆりはその麻婆豆腐に興味を持った。
奏ちゃんは落ち込んでいる人を見つけたときやお詫びするときには決まって麻婆豆腐をご馳走してきた。
いつもならお気に入りのお店でテイクアウトしたものに辛味成分を足すだけ。
でも今日は手作り。奏ちゃんとは数年来の付き合いがあるけど手作りなんてはじめてのこと。
あたしの前でしか見せることのなかった笑顔も出てたし……ちょっと悔しいわね。
そんな嫉妬がいつもなら言わない一言をゆりから引き出した。

奏ちゃんは頷いて食べていいよと許可を出してくれた。
表情は崩してないけどわかる。この麻婆豆腐はかなりの自信作みたいね。
さっそく、麻婆豆腐戦に備えていつも用意してある皿とレンゲを食器棚から取り出した。
「じゃ、頂くわね」
寸胴から直接レンゲですくうと皿を下にしてこぼさないように注

意しながら口に運んだ。
……。
「お、おいひい」
それからは滝のような汗を流し、ひりつく唇に耐え続け、笑顔を作ることに専念するしかなかった。

そろそろ部屋を出ても麻婆豆腐を食べたせいとは勘ぐられないぐらいは経ったわよね。
十分ほど経っていよいよ我慢の限界に達したから脱出することにした。
「隣の部屋の連中をちょっと見てくるわね」
「どうして？」
「へっ？　あーあいつらにしちゃ静か過ぎると思わない？」
奏ちゃんの返しに一瞬焦ったけれど納得してくれたみたい。
奏ちゃんは音無君にまた淡々と麻婆豆腐を食べさせはじめた。
……音無君も順応しすぎじゃない？

「音無君は奏ちゃんに任せるけど大丈夫よね」
奏ちゃんが頷くの確認してからまずは扉を蹴った。
聞き耳を立てているメンバーが部屋になだれ込んでくると色々と面倒になるからね。
「もうゆりったら、扉を蹴るのはいけないことだわ」
「ごめんね。でもお化けが出てきたら怖いじゃない」
「それでもだめよ」
「はーい。じゃ、また後でね」

諭すような口調の天使にゆりはイタズラっぽい笑顔を見せてから退室した。

こうして音無と天使は二人きりになった。

それからたいした会話もなく、というよりも天使が絶え間なく麻婆豆腐を口に運んでくるので喋る暇もなかった。

無言でもあまり気まずくないし、いいか。

しかし、音無の限界は徐々に迫ってきていた。

「あ、あのさ」

皿に入れた麻婆豆腐がなくなり何度目かの追加しようと立ち上がった天使に音無は声をかけた。

天使は振り返って首を少し傾け視線で返事をした。

「もう満腹で食べらんないかな……」

自分の腹を叩いて膨れ具合をアピールした。

あの大きな寸胴の中身は八割ほどになっていた。

全部食べないとショックを受けるかもしれないな。

しかし、いくらおいしくても今の音無の腹には入る隙間は残されていなかった。

「よかった」

「そうだよな。一生懸命つくってくれたのにごめんな……え？」

天使の言葉は音無が想定していたものとは違った。

「味見をしているうちに少なくなったから足りるかなって心配だったの」

「だからこんなに？」

天使は頷いた。こんな純粋な天使にあの量を食べられる人は早々いないだろとは口が裂けてもいえなかった。

「そうか、でもやっぱり全部食べられなくてごめんな」

「ううん、いいの。余った分は戦線のみんなが食べてくれるわ」

チラッとみんなの反応が浮かんだが天使が言葉を続けたのですぐ

に頭の中から消えた。
「それにね、音無君が食べてる姿を見てたらつくったかいがあったなって思えたの」
天使の率直な感想に音無は顔を赤らめた。
ずっと立っていた天使は皿とレンゲを机の上におくと丸イスに座った。
そして手を膝の上に置いてスッと姿勢を正す。
「お腹いっぱいになるまでおいしそうに食べてくれてありがとう」
微笑みながら真っ直ぐ目があった状態でのありがとう。
音無の頭は一瞬で沸騰した。
「あ、えと、お、俺のほうこそあんなにうまい料理を食わせてくれてありがとう」
しどろもどろになりながらもなんとか礼を言えた。
しかし、しばらくの間、急上昇した心拍数が戻ることはなかった。
「ところでどうしてあたしの手作りだってわかったの?」
「えっ!? ゆ、いや、それは、その、割烹着と寸胴を見てそうなのかなって勝手に」
一瞬、ゆり達がと言いそうになったが踏みとどまれた。
というか結局、エンジェルズなんとかってなんだったんだ?
「そうだった……割烹着だったわね……忘れてた」
天使は割烹着をつまみながら納得していた。
「俺も質問なんだけどさ、なんで俺の名前を知ってるんだ?」
一段落ついた感じだったので目覚めてからずっと気になっていたことを質問してみた。
「ゆりが音無君の荷物から学生帳を発見して、そこから」

そう言うと机に置かれていた財布を指差した。
たしかにその財布は見覚えのあるものだった。

「そうなのか。……えっいつの間に！？」
ただしあれは荷物の中に入れておいたものじゃない。
あれはお尻についているポケットの中に入れていたものだ。
音無がポケットを探ると見事に空っぽになっていた。

「中身は減ってないから安心して。藤巻君はちゃんと説得したから」
説得してくれなければ中身は減ってたということか。
「それは手間をかけたな」
「おかしなことを言うのね。悪いのはハンドソニックで気絶させたあたしなのに」
「ハンドソニック？」
聞きなれない単語を耳にした音無はそれを聞き返した。
そういえば殴られる直前にも聞いたような……。

「ハンドソニックはゆりから借りたゲームのヒロインが使う技よ」
天使は少し楽しそうに教えてくれた。
「それをえっと……」
音無は天使の名前を言おうとして詰まった。
たちばなかなで。ゆりたちの会話から見当はついたけれど間違ってたら失礼だ。

「よくよく考えるとお互いまだちゃんとした自己紹介をしてなかったな」
だから音無はあらためて自己紹介することにした。
「俺は音無結弦。音が無いって書いておとなし、結ぶに弦でゆづるだ」
「あたしは立つに華道の華で立華。下は奏でるで奏」

「よろしくな立華」
音無は手を差し出した。
立華は少しの間その手を眺めてから手をとって握手した。

「あさはかなりいいいいいいいい！」
握手をした瞬間にベットの下から椎名が飛び出してきた。
そういえば下にいるのを忘れてた。でも急になんで出てきたんだ？
椎名は出てくるなり二人を指差した。
「あさはかなり！」
やはり意味がわからない。

「椎名さんどうしたの！？」
椎名の声を聞きつけたゆりも部屋に戻ってきた。
心なしか唇が少しはれているゆりは心配そうな顔で立華と音無と椎名をそれぞれ見た。
「握手してるだけ？」
すぐにきちんと状況を把握してくれた。

「てめぇ！　立華に手をだそぉとはいいご身分じゃねぇか！」
しかし、後から入ってきた藤巻はあらぬ方向へ勘違いしたようだった。
しかも手には木刀を握り締めており、それで音無に殴りかかってくる。

「ガードスキル――ハンドソニックｖｅｒ．５」
次の瞬間、二人の間に立華が入ってきた。
禍々しい音と衝撃が走ると藤巻は泡を吹きながら前のめりに倒れる。
「木刀で人を殴ったら危ないわ」
立華の言葉は藤巻には届いていなかった。

「藤巻君が立華さんにやられてる！？」
「口頭注意を後回しにするなんてよっぽど音無君を気に入ったのね」
続いて入ってきた大山が驚きの声をあげ、その横でゆりは冷静に分析していた。

「ゆり、ちょうどよかった」
ゆりの存在に気づいた立華が表情も変えず声をかけた。
「ん？　なに？」
「麻婆豆腐が少し余ったけどあたしも音無君ももう食べられないからみんなで食べて」

こうしてＳＳＳは全滅した。

隣室（前書き）

退室したゆりと隣の部屋にいるＳＳＳの話

「ゆりっぺさん、中の様子はどうでしたか？」
あたしが水を求めて休憩室からでてくると高松君がいつものポーズをしながら聞いてきた。
答えてあげたいのは山々なんだけど今は水が欲しい。
「みふくれる？」
「あっもう麻婆豆腐を食べてきたんだね！？　はいこれ」
舌が回りきらなかったから口を指差すと大山が水を持ってきてくれた。
あたしは待望の水を一気に飲み干してからお礼を言う。

口の中が正常化したあたしは次に、皆が一番気になってるはずのところを最初に報告した。
「今日の麻婆豆腐はいつもよりおいしいけど、いつもより強敵だったわ」
「手作りでもそれかよ」
「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ」
「もう今日は肉うどんは諦めるしかなかろう……」
これを聞いたみんなはそれぞれがこの世の終わりを迎えたような反応を示した。
一名、本当にこの世の終わりを迎えそうなやつもいるけど。

「竹山君、野田君はどう？」
「命に別状はありません。じきに目を覚ますかと。それと僕のことはク……」
「ところでゆりっぺさん。立華さんと彼を二人っきりにしたのは少々まずいのでは？」
中にいる奏ちゃんが普通の子で音無君がそういう人だったら高松

君の言うとおり問題だけど……
「奏ちゃんは強いし大丈夫よ。念のために椎名さんが隠れてるしね」
「たしかに立華のパンチの威力と精度は一般人のものじゃなかったぜ」
藤巻君は少し青ざめながら右のわき腹を押さえた。
「僕は味わったことなかったから知らなかったけどそんなになんだ」
「大山ぁ、次はてめぇが受ける番だぜ」
「ひっ」
藤巻君が脅すと大山君は縮こまる。
「奏ちゃんは危険が迫らない限り手はださないわ」
冗談だとはわかっているけど奏ちゃんの名誉の為に言っておいた。

「話変わるがゆりっぺ」
めずらしく松下君が質問をしてきた。
「彼をベットに戻す必要はなかったのではなかろーか？」
松下君の言葉にみんなもどよめく。
「言われてみればそうですね。彼がベットにいなくても麻婆豆腐は食べれます。つまりエンジェルズ・ティアーを決行することは可能だったはずです」
「そーだよ！　僕は告白までしたのに！」
大山君の抗議はすごく切実なものだった。
「仕方がないわね。一から説明してあげる」

「まず、音無君が起きてるのを奏ちゃんに発見されたらどうなるかしら？」
「大山がやられる」
「えぇ！？」

「それもあるかもしれないわね」
「ゆりっぺまで！？」
藤巻君の言葉を肯定してみると大山君は面白い反応を見せてくれた。
もちろん、奏ちゃんはそんなことはしないわ。

「それで結局、どうなるんですか？」
高松君があたしに答えを急かした。
少しは自分の頭で考えなさいよ。なんのためにメガネに指をそえているのかしら。
「まず、音無君をベットに戻そうとするわね」
「だから立華さんの労力を減らそうってわけ？」
「ちがうわ」
大山君の的外れな言葉をすぐに否定した。

「あたしは奏ちゃんがいない間、音無君を見ておくって約束してるの」
「やつに『もう体は癒えた』とでも言わせればいいんじゃねぇか」
多分、あたしは顔をしかめた。
「それが想定しうる中で最悪のパターンよ」
「ん？　それのどこが最悪なんだ？」
「Ｔｏｏ　ｄｉｆｆｉｃｕｌｔ　ｆｏｒ　ｍｅ」

「体が癒えたと言い張っても奏ちゃんの手には麻婆豆腐があるのよ？」
「持っておるな」
「そうなればどっちに転んでも音無君が麻婆豆腐を食べるのは避けられないじゃない」
ここまで言っても誰一人として理解した顔をしていなかった。
これには思わずため息が出る。

「元気って言っている人が口にしたものを噴き出したらどう思う？
音無君はなにも知らないのよ？」
「そういうことかゆりっぺ。話は聞いてた」
ずっと気絶していた野田君が起き上がってきた。
「つまり床がよごっ……」
あたしは最後まで言いきる前に再び寝かしつけてあげた。
床が赤いもので汚れちゃったけどそれは後で本人に掃除をさせるわ。

「音無君の怪我を疑うか自分の料理の味を疑うじゃない」
「なるほど、それはいけませんね」
「Ｉｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｎｏｗ」
ここまで言ってようやくわかってもらえたようね。

前者なら音無君を再び無理やりベットに入れて休ませる上に奏ちゃんが自身を責める。
後者だったら麻婆豆腐に対する自信を失う。
どっちにしたっていい結果じゃない。
だったらベットで食べてもらったほうがいい。
噴出したら体調が万全じゃないって誤魔化しもきくし音無君が帰るのも少しは早くなるはず。
結果として音無君は麻婆豆腐をおいしそうに食べてくれたけどあれはあくまでも結果。
あの時点では想像できてなかった。

「もう、立華さんを傷つけないって決めたんだよね」
大山君の呟きにみんなが小さく頷いた。
「このＳＳＳを立ち上げる時には大分メーワクをかけたしな」
「だったら顔を上げなさい。暗い顔してたら奏ちゃんが心配するじ

ゃない」
あたしは沈んでる皆をなんとかいつもの調子に戻そうとした。
「あさはかなりぃぃぃぃぃぃ！」
ちょうどそのとき、椎名さんの声が隣から聞こえてきた。
まさか人畜無害そうな音無君が！？
「あさはかなり！」
再び聞こえてくる椎名さんの声を聞き慌てて扉を開く。
そこにいた奏ちゃんと音無君は手をつないでいた。
そう、手をつないでいるだけだった。
「握手してるだけ？」
口に出してみてもやっぱりそれ以上でもそれ以下でもない。
「てめぇ！　立華に手をだそぉとはいいご身分じゃねぇか！」
でも藤巻君にはそれ以上に見えたらしく手にした木刀で殴りかかる。
「ガードスキル――ハンドソニックｖｅｒ．５」
久しぶりにみたｖｅｒ．５を前に藤巻君は前のめりに倒れた。
「木刀で人を殴ったら危ないわ」
もっともな意見だけど奏ちゃんの方が木刀よりもすごい凶器だと思うわ。
「藤巻君が立華さんにやられてる！？」
後から入ってきた大山君は驚きを隠せていない。
「口頭注意を後回しにするなんてよっぽど音無君を気に入ったのね」
気に入ってるとはうすうす感じていたけどここまでなんてね。
あたしも口調こそ冷静を装っているけど表情は装えてないはずだわ。

「ゆり、ちょうどよかった」
そんなあたしに奏ちゃんが声をかけてきた。
「ん？　なに？」
藤巻君を片付けろかしら。
「麻婆豆腐が少し余ったけどあたしも音無君ももう食べられないからみんなで食べて」

こうしてあたし達は全滅した。

ライブ

結局あの日はそのまま帰った。
正直、次々とＳＳＳの面々がぐったりしている中で長居はしづらかったからだ。
ちなみに立華は皆が食べたらすぐに眠くなる体質だと勘違いしているらしい。
そんな立華は帰り際まで俺の体の心配をしてくれた。
帰り際、もう元気になったこと麻婆豆腐がおいしかったこと、そしてお礼をあらためて伝えた。
音無は立華が頷くのを見てから、ゆっくりと少し変形している部室の扉を閉めた。

あれから一週間、音無は日向に呼ばれてある場所で待ち合わせをしていた。
ガルデモのライブのチケットが手に入ったから先週の埋め合わせとして連れて行ってくれるらしい。
ただ、俺はガルデモの熱烈なファンというわけじゃない。
それどころか、ほとんど知らない。知っているのはＭｙ　Ｓｏｎｇぐらいだ。

だったらなんで日向がそれを選んだのか、その理由は簡単だ。
日向はユイをガルデモのライブに連れて行きたくなった。
でも、ユイは車椅子だからライブの中で自分一人だけではカバーしきれないのではと心配にもなった。
だから埋め合わせと称して俺を保護者二号として呼んだわけだ。
まぁ、ユイのためじゃなきゃ断りたくなる理由だな。

「よぉ音無、なににやけてんだ」
「おぉ。ちょっと考え事をな」
そこに件の日向と車椅子に乗ったピンクの髪が目立つユイがやってきた。
どうやら日向のユイへの小さな優しさに口元が弛んでいたところを見られたみたいだ。
どう言い訳をするか考える前にユイが勘違いをしてくれた。

「先輩もライブが楽しみなんですねっ！」
「も？」
「はいっ、一週間前から今日まで着る服を悩んでました！」
たしかに、ユイのファッションは腕に鎖をつけていたりと三人の中で一番気合が入っている。

「で、もう一人はまだか？」
「まだ誰か来るんですか？」
周囲を見回しはじめた日向に向かってユイが質問した。
「チケットは四枚あるからな。音無に知り合いを連れて来いって言ったんだ」
「もうすぐ来ると思うけど……」
周囲を探す日向や音無にならってユイも探し始めた。

「あの人？　それともあの白のワンピを着た人？　じゃあ、あの人っ！」
次々と指差すユイ。指差されたほうはいい迷惑だ。そそくさと逃げるようにして歩く人が続出した。
恥ずかしすぎる。日向も耐え切れなかったようでとうとうキレた。
「だあああ！　恥ずかしいからやめろおまえ！」
「なにすんだコラァッ！」

日向が顔を手で挟んで強制的に正面で固定するとユイは逆ギレして暴れた。
手の間で顔を無理やり上に動かし日向の顔を確認すると逆に掴みかかろうとする。
日向はそれを阻止するべく上体をそらしながらも手は放さなかった。

一年前、日向が気が狂ったのか突然民家にボールを投げ込んだときはこんな風になるとは思わなかった。
だけど今となってはこんな言葉が疑問なく出てくる。
「二人とも相変わらず仲いいな」
「「だれがこんなやつと！」」
日向とユイは音無に対してタイミングもセリフもシンクロさせて否定する。

こうしてさらに目立つことになった二人と一緒にいる音無の元へ一人が近づいてきた。
「よぉ、久しぶりだな」
それに気づいた音無がその人物に声をかけると足を止めて帽子をとり笑顔を見せた。
「はい、お久しぶりです、音無さん」

その声でやっと気づいたのか日向とユイは喧嘩をやめた。
そして日向は音無に向かって嬉しそうにしている人物を見て驚きの声をあげる。
「な、直井……。なんでおまえがいるんだ？　しかも制服って……」
「それはこちらのセリフだ。それに神である僕がどこにいようとどんな服装であろうと貴様が知る必要はない」
直井は視線すらも向けずに言い放った。

「それよりも音無さん、今日はお誘いありがとうございます」
「だれがてめぇなんかを連れてくっつったんだよ！　帰れ帰れ！」
日向を無視して音無と会話を再会しようとする直井に食って掛かった。
そんな日向を不愉快そうに見つめると顔を近づけた。
「うるさいやつだな。僕の目を見るんだ」
「なっ！？」
少し目の色が変わったような気がする。
「さあ、ペットボトルのキャップの有能さに気づくんだ……」
そしてその状態から直井は日向に催眠術をかけ始めた。

そんな日向の大ピンチをよそにユイは自力で車椅子を動かし音無の隣にやってきた。
「先輩は彼女つくらないんですか？」
「――！？」
脈絡もない、あまりに突然な質問に一時的に言葉を失った。
「つくらないとかじゃなくて……」
我に返った音無がなにか言おうとしたところにユイがさらに突っ込んできた。
「じゃあ、気になる人はいないんですか？」
音無の頭の中に立華が浮かび上がった。

実はあれからすることがなくなるたびに立華のことを考えていた。
別にハンドソニックを気に入ったとか限界まで麻婆豆腐を延々と食べさせられたいわけではない。
ただ、ことあるごとに立華を思いだしてしまうのだ。
少し仲良くなったから連絡先を交換しておけばよかったと後悔しているのかもしれない。

ユイは悩む音無を見て気になる人がいないと判断したのか最後の

質問をしてきた。
「じゃあやっぱり先輩はあっちの人なんですね！？」
右手の親指を立てて左手で直井を指差し、好奇心で目をきらめかせる。
これが本命の質問だったのか。

音無はその質問には答えずに日向をユイの背後に配置した。
すると虚ろな目をした日向はユイの頭に手を置く。
「このキャップは俺よりも百倍も有能だ……頭も回る……」
「イタタタッ！　ひなっち先輩！　あたしの頭はこれ以上は回らないですよっ！」
そのまま頭を鷲づかみにして首を七十度以上、回そうとしていた。

「よし、行こうか」
「はい、音無さん。チケットも抜き取っておきました」
じゃれあう二人を置いといて音無たちは歩き出す。
「ひなっち先輩！　正気に戻ってください！　置いていかれちゃいますよっ！」
「キャップ……」
「さっさと目を覚ませコルアァッッ！」

ちなみに直井の催眠術が日向以外を相手にして成功したのを見たことがない。

抱っこ

「たしか、ガルデモのライブって言ってたよな？」
会場に入った音無は洗脳からなんとか抜け出してきた日向に聞いた。
「あぁ、ネットで応募したら当たったんだ」

オーケストラでも余裕そうな広いステージ。
そのステージから扇状に広がる客席。開けた天井から雲ひとつない青い空。
「ライブってさ、もっと暗くて閉鎖的なところでやるもんだと想像してたよ」
「同感です、音無さん」
直井が音無に同調する。
「ライブっても色々あるしな」
「もっとガイコツとか紫色のモンスターとかいるもんですよね。あっちょっと！」
ユイをスルーして音無達は席を探し始めた。

「ここら辺か」
入り口で切り取られたチケットの半券に書かれている座席番号を頼りに、先頭で探していた音無が足を止めた。
席は中央の列の真ん中、つまりど真ん中だった。その上、席の間の通路は広くない。
「こっから先は車椅子は無理そーだな……。音無、車椅子は頼むわ」

頼んだ後の日向の行動は早かった。
「よっと」
「ひゃっ！？」

まず、ユイの右手をとって首にかけさせる。それから車椅子とユイの体との隙間に手を入れると持ち上げた。
俗に言うお姫様抱っこ。素振りで鍛えているためか、それとも日ごろから抱っこしているためか涼しい顔だ。
逆にユイは驚いた表情のまま凍っていた。

そんなユイに日向はからかうような口調にで話しかける。
「かわいい悲鳴が出たなー？」
「なっなっなんしどりょしゅあぁっ！！！」
その一言で一瞬で解凍されたユイは、さっき首を固定されたとき以上に暴れはじめた。
そんな二人を見てため息をついた直井はさっさと先に行ってしまった。

「おっ落ち着けって」
「そうだぜ！　パンツ見えちまってもいーのか！？」
こんな狭い場所じゃユイが怪我をしかねないし他人にも迷惑がかかる。
今回ばかりは音無も日向と一緒にユイを治めようとした。

しかし、顔を真っ赤にしたユイは聞く耳を持たなかった。
「いったん降ろそう！」
「そ、それがよさげだな。痛いっ痛いっ！」
日向がユイの顔へのパンチに耐えながらもそっと車椅子に戻すとようやく止まった。

「こんな辱めを受けたのは初ですよ」
ユイは潤んだ目で恨めしそうに日向を見上げた。
「じゃあ、どうやって席まで行くんだよ」
「このくらい、ちょちょいと行けますから」

ユイは手早く方向転換して車椅子を進める。

「あれ？　あれ？」

車椅子の幅のほうが狭いので席と前の席の間に引っかかった。

それでもなおユイはチャレンジを続ける。

まだ、頭に血がのぼっていて視野がせまいのかもな。

日向はそんなユイを見て笑いをこらえていた。

しばらくしてやっと理解したのか振り向いたユイがばつが悪そうに笑った。

「後ろがつっかえているんで早くちょちょいと行っちゃって下さいよ」

ニヤつく日向はそんなユイをここぞとばかりに意地の悪い言葉をかける。

一瞬で悲しそうな表情に変わったユイは前へ向き直ると車椅子から降りようとした。

「だぁあ！　意地はってんじゃねぇよ！　ほらっ手をだせ」

突拍子もない行動に慌てたのか日向が大声を出し、肩を掴んで動きを止める。そして自分の手を差し出した。

しかし、ユイはそれを取ろうとはせず、顔だけ動かして日向を見た。

しばらくその状態で見つめ合う二人。

先に目を逸らしたのはユイだった。そして観念したのかそっと手を差し出す。

日向がその手を取ろうとするとユイは一言呟いた。

「……中腰になってあたしが目立たないようにお願いします」

「俺が足を持つから音無は手を持ってくれ。ぶら下げて運ぶぞ」

「酷くないですかっ！？」

ユイは日向の首に掴みかかった。

変な空気からいつもの二人に戻ったところで後ろから声をかけられた。

「あの、すみません。あたし達の席がこの列なので通らせてもらえませんか？」

「あっすみません」

音無は反射的に頭を下げて謝った。

「って音無君じゃない」

「えっ？」

その言葉で頭を上げるとゆりがいた。そしてその後ろには椎名、そして立華がいた。

今日も麦わら帽子をかぶった立華はなぜか制服を着ていた。でも、似合ってる。

視線が合った音無は軽く会釈をすると立華も返してくれた。

「音無君達もこのイベントの抽選に当たったのね。しかも席まで近いなんて作為的なものを感じちゃうわね」

「なになに音無、知り合いか？　ってかゆりっぺじゃん！　久しぶりだなー！」

驚くことに日向も知り合いだったようでユイの攻撃を防ぎながら嬉しそうにした。

「だれだっけ？　奏ちゃんは知ってる？」

「知らないわ。ゆりのストーカー？」

そんな日向に立華とゆりと椎名が日向に冷たい視線を送る。

「違いますよ！」

そこへユイが助け舟を出す。

「ひなっち先輩はあたしのストーカーです。さっきなんてスカート

の中に手を……」
「ガードスキル――ハンド……」
「立華待ってくれ！　日向はまだ犯罪に手を染めていない！」
ユイのすすり泣く大根すぎる演技を立華は信じたようで音無は慌てて止めに入った。
白目をむいて倒れる日向をユイが見たらトラウマになる。
「お前ら俺をなんだと思ってんだ」
「あさはかなり……」

「そんなことよりも早く席に着きましょ。後ろがつっかえているわ」
ゆりの言うとおりで、後ろには数人が迷惑そうな顔で待っていた。
「ところでなんで、もたついてたの？」
「車椅子が通れなくってな」
音無は座席と座席の間の通路の幅とユイの車椅子を見せた。

「たしかに狭いわね。だったら抱っこしてあげればいいじゃない」
「日向が抱っこしたら暴れて……」
「女の子だしそれは恥ずかしいわよね」
「そうなんですよ！　なのにひなっち先輩と来たら……」
「俺が悪いのかよ」
いきいきと悪口を言い始めたユイに日向は不服そうにする。

そこに立華が前に出た。
「ここは私に任せて」
「わぉっ！？」
立華はユイをらくらくと持ち上げた。そんな立華をユイが褒めた。
「いくらユイにゃんが軽いからってすごいですね！」
立華の背が低いのでさっきよりも目線が気にならなくなったからか女の子同士だからなのかわからないが今度のユイは満足そうだった。

そのままスタスタと歩いていく立華に音無達も続いて席に向かう。

「ちょっ待ってくれよ！」

車椅子を折りたたむ日向だけが取り残された。

座席

「遅かったですね音無さん！　――愚民共が増えたからですか？」
「かわいい顔してなかなか口が悪いのね」
席に着いて早々、なぜか直井とゆりの間で火花が散る。
「まあ、神である僕としては音無さんが隣に座ってくだされば文句はないですがね」
「あら、それは残念。音無君の隣は奏ちゃんよ」

徐々にヒートアップする二人を見かねた音無が止めに入ろうとすると、車椅子を脇に抱えた日向が開いている手で制した。
音無に目と頷きで自分が行くと合図を送ると一歩前に出る。
日向もやるときはやるんだよな。ここは任せるか。
「ユイをよく知らないやつのとなりに座らすわけにはいかねぇな！」
日向は音無の期待を裏切り、ただ参戦しただけだった。

三人の意見を取り入れた結果、日向と車椅子、ユイ、ゆり、立華、音無、直井、椎名という順番に落ち着いた。
ユイの隣にゆりがきたのは、日向がゆりと小学校のときの同級生で知らない仲じゃない、だからだそうだ。
ゆりは信用できるやつだと言う日向の言葉に、ゆりは少し耳を赤らめる。そして、ユイが顔をしかめた。
……それよりも、椎名の席がおかしくないか？　普通は一緒に来た立華とゆりの間に座るもんじゃないのか？
そう思った音無が横目で直井越しに椎名の顔を盗み見る。すると驚くことに彼女はどこか満足げだった。
「あさはかなり……」

「椎名さん達は後ろにいたんだね」

突如、椎名の前の席から大山が顔を出してきた。続いて少しげっそりした藤巻と高松も大山の左から顔を出す。
「意外と固まるもんだな。つかてめぇ！　なんで当然のようにここにいんだよ！」
途中で音無の存在に気づいた藤巻は背もたれに足をかけ人差し指を向けた。

「下賤な……」
「靴でイスに登るのはマナー違反よ」
直井が立ち上がるのに被せたように立華も立ち上がり藤巻に注意する。
ただ、立華から漂ってくる空気はマナー違反を正そうとかそういうものではなかった。
もっとこう怒気をはらんでいるというかなんというか。

「へーい、すいませんしたー」
藤巻は毒気が抜かれたかのように前を向いて座った。
平静を装ってはいるがイスの上から覗く頭は小刻みに震えている。
藤巻もしっかり立華のそれを感じ取っていたんだな。

「そういえば残りのメンバーはどこにいるんだ？」
ゆりがトランシーバーで話していた子、体格のいいやつ、謎なやつ、竹山、斧を持った危ないやつがいたはずだ。
一人の姿は知らないが、残りの連中はＳＳＳの中でも特に目立つはずなのに、会場にはそれらしい集団はいなかった。
「当選したのは六名分でしたし用事もあったようですので今日は来ていません」
「野田君はハルバードを持っているから入れなかっただけだけどね。今も外でうろついているよ」
「そんなことより音無さん……」

たしかにあれは入れない。というか外にいるだけでもすぐに捕まるな。

……ん？　ここで音無はあることに気づいた。

「でもしっかり六人いるんだな」

「それはゆりが椎名さんを呼んだの」

立華が即座に教えてくれた。

ふとその時、ユイや日向と話しているゆりに見られているような気がした。

しかし、音無がゆりを見たときには普通にユイ達と会話しているだけだった。

「じゃあ、椎名は用事とかはなかったんだ」

すると椎名は自慢げに懐から犬のぬいぐるみをとりだし、音無に見せつける。

この行動や犬にどんな意味があるのか音無にはわからなかった。

犬のぬいぐるみを手に入れることが用事？　やはり、わからない。

なので、素直に聞いてみることにした。

「それはどういうことなんだ？」

「その柴犬のぬいぐるみは今日のゆりっぺさんがＵＦＯキャッチャーで取ったものです」

高松はメガネから手を離し説明し終えた感を出した。

今日とったのか……聞きたいのはそこじゃないんだけどな。……今日？

「もしかしてさ、そのぬいぐるみに釣られて今日の用事をキャンセ……」

「あさはかなり……」

音無が言い切る前に椎名はそっぽ向いた。

「音無さん、ぼ……」
「それにしてもよく六人分も当たったな」
音無は隣に座る立華に話しかけた。
「ＳＳＳのメンバーでそれぞれ一通ずつ送ったらあたしと遊佐さんが当選したの」
「へぇガルデモは今、人気急上昇してるから倍率高そうなのに意外と当たるんだな」

「……音無君はこの番組をよく見るの？」
「この番組かぁ……この番組？　ここでやるのはガルデモのライブじゃないのか？」
音無の反応に立華は首をかしげる。
「今日はガルデモの出演する番組のイベントよ」

「ひなっち先輩！　どういうことですか！」
立華の向こうで和気藹々と話していたユイが急にキレだした。
「いやな、俺もライブって勘違いしてたんだよ」
「ゾンビもミイラもいないから変だと思いましたよ！　あたしのカッコが浮きまくりじゃないですか！」
どうやらあちらも、今日がガルデモのライブじゃない、って知ったようだ。
ユイの頭の中のライブが仮装パーティーなのは置いとくとして、怒るのも無理はない。
カレンダーに汚い字でライブと書くぐらい楽しみにしてたんだ。
落胆は大きいはず。

「ガルデモの演奏もあるから安心しなさい」
「ゆりっぺ先輩！　本当ですか！？」

「本当よ」
「っしゃー！」
その落胆はゆりの言葉であっさりと消し飛んだ。
「ゆり、手馴れてるな」
「ゆりはお姉ちゃんだから子供の扱いはうまいわ」
立華の目にはユイが子供として映っているみたいだ。

その時、会場がざわついた。
「音無さん、だれか出てきました。はじま……」
『こちら前座です。そろそろ頃合いなので今日のイベントの説明をします』
会場に淡々とした口調の女性の声がスピーカーを通して響いた。
ステージに立っているのは金色の髪を後ろのほうで縛ってツインテールにした少女だ。
見たこともないし、ガルデモのメンバーじゃなさそうだな。スタッフか。
「ゆり」
その子を見た立華が小さく意味ありげに声をかけた。
「ええそうね。あの子は……」

前説

ゆりの口からステージの上にいる少女の正体が明かされた。
「あの子は遊佐さんね」
「ゆりっぺ先輩！　ゆささんってだれですか？　知り合いなんですか！？　ガルデモと交流があるんですか！？」
ユイはそれにものすごい勢いで食いつき、ゆりを質問攻めにする。
ユイはファンクラブに入っているぐらいガルデモが好きで、すぐに熱くなるんだよな。……日向が絡んでもすぐに熱くなるけど。
今回もガルデモと近づくチャンスがあるのかもと興奮しているみたいだ。
立華に子供の扱いに慣れていると言わしめたゆりでさえ、この猛攻にはたじろいでいた。

そんな二人をよそに音無は立華に話しかけた。
「遊佐ってもう一人のチケットが当たった子だよな」
「……気になる？」
まさかの切り返しに音無はうろたえた。
これはどう答えたら正解なんだ。変に答えて誤解されたら嫌だし。
……いや違うよな。立華にどう思ってもらいたいかじゃなくて俺がどう思っているかが大切なんだ。
今、持っている素直な気持ちを伝えよう。
「俺は立華のことのほうが気になる」
「……そう」
立華は視線をはずし俯いてしまった。

『そこのお二組さん、イチャイチャしてないで私の話を聞いてもらえませんか』

遊佐が音無達を手で指すと会場の視線がいっせいにそこに集まった。
それとほぼ同時に日向と直井が立ち上がり、叫んだ。
「ユイは俺の彼女だ！　ゆりっぺとはイチャイチャしてねぇ！」
「音無さんに相応しいのは神である僕だけだ！」
音無とユイ、そしてゆりまでもがいっせいに身を屈めて隠れようとした。
なにをかんがえてんだこいつらは！　発作か？　余計に目立ってんじゃないか！
ユイは恥ずかしさとうれしさからか茹でたタコのようになっていた。
多分、俺も真っ赤だ。俺の場合は恥ずかしさと怒りが理由なんだが。
ゆりはぶつぶつと呪いの言葉を呟いていた。
日向も自分のしでかしたことを理解したようで叫んだ状態のまま硬直していた。
「ふん、愚民どももしっかりと理解したようだな」
対して直井は満足そうに笑うと、悠然と席に座った。
『ではあらためて今日のイベントの流れを説明します』
放心状態の日向が腰が抜けかのように座ったのを確認した遊佐はなにごともなかったかのように進行を再開した。
『まずはガルデモの皆さんが出てきたら拍手をしてください』
するとまばらに拍手が起こった。
『私はガルデモのメンバーではありませんので拍手はいりません。

でも、ありがとうございます」
遊佐はお辞儀をする。
最後の礼はガルデモのメンバーと間違われて光栄ってことなのか？
それとも、さっきの拍手が拍手をすることを了承してくれたと、受け取ったのか？
よくわからないまま、遊佐の次の言葉が耳に入ってきた。

『拍手以外にも名前を呼んだりかわいいやカッコいいと声援を送ると皆さん喜びます。特に関根さんが』
『遊佐ぁ！　客に贔屓させんなよ！』
スピーカーから遊佐ではない声が出てきた。
それを聞いたユイのテンションが一気に上がる。
「今の声、ひさ子さんですよ！　ひさ子さんがきたっ！」

『失礼しました。ところで前説を聞くのはやめたほうがいいかと』
『どうしてー？　なんでー？』
また別の声がスピーカーからした。
「今度は関根さんですっ！」
鼻息を荒くしたユイは周囲にいるだれかしらに説明する。

『皆さんが私が拍手や声援を強制しなくてはいけないにわかファンだらけだって勘違いする恐れが』
遊佐は相変わらず淡々とした調子で、とんでもないことを言ってしまった。
これはさすがに会場が騒然とする。
ある者は立ち上がって叫び、ある者はガルデモのロゴが入ったタオルを振り回し、自分がにわかでないとアピールした。
そしてユイはというと、いかに自分がガルデモのファンであるかを日向に力説していた。
その横ではゆりが目をつぶって立華に寄りかかっている。たぶん、

ゆりが最初のユイの犠牲者なんだろうな。

「これだから下々の……」
「まずいんじゃないか？」
音無が自分はにわかじゃないと声を荒げるファンを見渡しながら呟くと立華が立ち上がった。
ゆりは急に支えがなくなったことでイスから落ちかける。でも、とっさに前の席に手をついてそれを免れた。

「立華？」
「騒いでいる人を鎮める」
「無茶だっ！　立華が危ないだろっ！」
音無は立華の手を掴んだ。ゆりも音無に同調する。
「そうよ！　それに遊佐さんもすぐに皆さんわかじゃないですねって認めてこの騒ぎもすぐに収まるはずよ」
それに続いて大山たちも後ろを向いて次々とたしなめる言葉を投げかけた。
「でも……」
それでも立華は渋り、自分で行こうとする。

そこで、ゆりから妥協案が出した。
「じゃあ、高松君と藤巻君――それに大山君が奏ちゃんの代わりにこの騒ぎを鎮めるわ」
「よっしゃ！　任せろ……はぁーーーーっ！？」
「僕達がこれを鎮めるの！？」
「無謀ですね」
「あさはかなり……」
「やっぱりあたしが……」
大山たちの反応を見た立華は再び動こうとした。その時――

会場に二小節ぐらいのギターの短い演奏が鳴り響いた。
するとあれだけ騒がしかった場内は静けさを取り戻し始める。
そして、スピーカーから声が聞こえてきた。

『もしも、ここにわかファンって奴らがいても構わない。ちゃんと聴いてくれるならね』

ユイの説明がなくても、遊佐の言うにわかな俺でも、この声の持ち主が誰なのかすぐにわかった。

ボーカルの岩沢だ。今、岩沢が喋ってるんだ。

『そしたらさ……』

静かになった会場全体は岩沢の次の言葉を固唾を呑んで待つ。そして――

『音楽の虜にして――みせるぜっ！』

岩沢の宣言で一気に会場が沸いた。まだ、本人達の姿さえも見えないのに。

ユイはぐったりとした日向に抱きつき岩沢を褒め称えていた。

そして遊佐が自分の発言で会場を混乱させたこと謝罪をすると温かい言葉がからかけられる。

こうして、遊佐の失言事件は終了した。

ようやく会場が静かになり始めたかと思ったら、再び大きな拍手と声援が沸き起こった。

ユイも手にした日向を振り回しながらステージに声を送っている。

これは遊佐に対しての拍手でも、また岩沢がなにかしたわけでもない。

この拍手はステージ上に出てきたガルデモのメンバーである入江

へ送られたものだ。
入江は元気にステージ中央までやってきた。
『さっ、今日もいい演奏しようねっ』
入江は嬉しそうに自分が入ってきた方を向いて他のメンバーに声をかけた。
でも、誰もいない。待っても出て来ない。
『あれ？』

『入江さん』
『なぁに？』
不思議がっている入江に遊佐が声をかけた。
『言い難いのですが、まだ説明は終わっていません。ですから、出番はまだです』
遊佐が淀みなく言い切ると入江は固まった。
『え……えぇーーーーーっ！？』
ようやく耳と頭が繋がった入江は慌てて裏に戻っていった。

『ねぇ、しおりん、どこが出番なのかなぁ？』
『みゆきち？　目が笑ってないよ？』
『関根ぇー？　また入江をたぶらかしたんでしょ？』
『いや、ひさ子さんこれはあの……その……』
しばらくすると、スピーカーからステージ裏にいる関根の悲痛な叫びが届いた。

登場

『そろそろ次に進みます』
関根の悲痛な声が突然途切れてから遊佐が喋り始めた。
突然途切れたのは、おそらく音響さんがガルデモのマイクをオフにしたからだろう。
それにしてもなにごともなかったように進行するとは、すごいプロ根性だな。
表情一つ変えない遊佐に音無は感心した。

『ここにいるファンの方達なら知っているとは思いますが通常の回であればガルデモの皆さんが揃うと次にゲストを紹介します』
「へー。じゃあ今日はガルデモ以外の有名人も見られるってわけだ」
日向が嬉しそうに言うとユイ……ではなく遊佐がそれを打ち砕いた。
『ですが今回はオーディションと称して一般の女性がゲストの代わりとなります。その一般の女性とガルデモがセッションをしていただくわけです』
「今回はこねぇのかよ！」
「アホですね」
打ちひしがれる日向の顔をユイは嬉しそうに覗き込んだ。

『続いて皆さんが気になっているオーディション方法を説明します』
遊佐の言葉を前に再び会場がざわつく。しかし、それはすぐに収まった。
そして今度は異様な緊張感に包まる。
今日のオーディションに出たがっている人がそんなにいるのか。

音無は隣の三人の女子を見てみた。

立華は真っ直ぐ座って正面を見ている。ゆりは興味なさげに枝毛を探していた。

そしてユイはというと日向を見るのを止め、手を祈るように組んで遊佐の言葉を待っていた。

ユイみたいなのがこの会場に大量にいるって考えるとひどくシュールだな。

『その方法はと言いますと……』

音無が会場がユイだらけになった光景を想像していたのを遊佐が引き戻す。

それと共に会場のいたるところから、近いところではユイから、つばを飲み込む音が聞こえてきた。

『……運です』

長いタメの後から来た言葉は、盛り上がろうと待ち構えていた人々の出鼻を挫いた。

「先輩、運ってどういうことですか？」

「俺が知るかよ」

ユイと日向の会話。会場中で似た会話が繰り広げられたに違いない。

それを示すかのように小声でささやいている人とかがちらほらいた。

もちろん遊佐の説明はこれで終わりじゃない。

『正確にはガルデモの皆さんが会場内を練り歩いて適当に選ぶだけです。そこで選びだす方は一人だけではありませんが選ばれた全員が満足にセッションできるわけでもありませんので。次に選ばれた方々はステージに上がって歌唱力を見せてもらいます。演奏はガルデモの皆さんがしてくれる上に歌う曲は自分で選んで構わないそう

です。贅沢です。ただ、岩沢さんが原石ではないと判断したら即鐘が鳴るのでそこで強制終了されます。岩沢さんは音楽に関しては厳しいですが頑張ってください』

さっきまでのように場内の反応をうかがいながらではなく、駆け足ぎみな説明だった。

「ひなっち先輩……結局どういうことなんですか？」

だからユイには早すぎて理解できなかったようだ。

「お、俺に聞くな」

日向も無理だったのか。

「僕にもわからなかったよ」

「難解ですね」

「あさはかなり……」

……うすうす感じてたんだがアホ多くないか。

「理解力の乏しいクズどもが……あっ音無さんは……」

「ガルデモに選ばれたら一緒に好きな歌を歌えってことよ」

頭を抱えている一同をゆりはたった一言で開放した。

ユイや高松達は口々にゆりを褒め称える。

「遊佐の長ったらしくてつまらない説明をものともしてねぇ。さすが、ゆりっぺだぜ！」

藤巻がゆりを褒めていると遊佐がこちらを見たような気がした。

聞こえてたとか？　……まさかな。

『……いい忘れてましたが携帯電話の電源はお切りください』

遊佐は急に喋りだしたかと思えば、次になぜか懐から携帯電話を出す。

そして今自分で注意していたのにひとしきり操作すると耳に押し当てた。

すると音無の右斜め前にいる藤巻が携帯電話を取り出す。

「ん？　なんだ？　遊佐からじゃねぇか。おーう、どうしたんだ。」
電話に出てしまった藤巻の顔色はみるみるうちに悪くなっていった。
遊佐の方はというとマイクに声が入っていないが、明らかに口が動いている。
最終的に藤巻は泡を吹いて音無の視界から消えてった。
それに気付いた大山が必死に声をかける。しかし、起きる気配はなかった。

『電源を切らないと泡を吹いて倒れることになります』
音無はそっと自分の携帯電話の電源をオフにした。
『それと会場内での飲食も禁止です。こちらは血を吐いて救急車で運ばれることになります。あとは撮影や録音や録画も禁止です。こちらは社会的にどうにかなります』
食べ物に関しては大丈夫。アメの一つも持っていない。カメラも携帯についているものだけだ。

「プロテインは飲食物に入ると思いますか？」
「入るわ」
立華が答えると高松は残念そうにメガネの位置を直した。

それから音無は遊佐のことを一番把握してそうなゆりに小声で質問してみた。
「俺達の声が遊佐に届いているなんてことはないよな？」
一瞬、怪訝そうな表情を見せたゆりはすぐさま否定する。
「あるわけないじゃない」
「遊佐さんはエスパーじゃないわ」
「そうか、それならいいんだ」
立華も否定くれたし安心……

『そうです、考えすぎです』
音無はスピーカーから出た声は聞こえなかったことにした。

遊佐もなにごともなかったようにしていたが突然、手を耳に当てた。
それから小さく頷くと喋りはじめる。
『準備も整ったようです』
ステージを見てみるといつの間にかドラムやマイクのスタンドや鐘の搬入が終わっていた。
『では待望のガルデモの皆さんの登場です。盛大な拍手でお迎えください』
遊佐が拍手を始めると一気に会場中で拍手の嵐が起きる。

『やっほー！』
まずステージ脇から出てきたのは関根。元気に会場に向かって手を振って入ってきた。
続いてひさ子が声援にこたえながら、最後に岩沢がギターを大事そうに持ってのんびりと出てきた。
三人はステージ中央の証明が当たっている場所まで来ると立ち止まる。

ここで、会場にいるほぼ全員があることに気づいた。
「一人足りなくねぇか？」
「トイレですかね」
「そのうち出てくるでしょ」
「心配……」
「さっき元気にしてたんだから大丈夫さ」
「音無さん、これ食べますか？」

「あさはかなり……」
「事件の可能性がありますね」
「……」
「藤巻君がまだ目を覚まさないよ」
そう、入江だけ出て来ない。

突然、岩沢たちに当たっていたスポットライトがステージの少し奥に移動した。
そこには、ぽっかりと穴が開いていて白い煙のようなものが湧き出している。
その穴から煙をかき分け、ゆっくりと顔を真っ赤にした入江があがってきた。
『しおりん！　どうしてあたしだけここからなのっ！』

選出

ひさ子が入江をどうにかしてなだめてからイベントが始まった。

『ガルデモ・ビィート・セッション・スペッシャール！』

関根が元気よく番組タイトルを叫ぶと、多くのファンが歓声を上げる。

『さあ、派手にやろうぜ！』

あたしはそれに負けないぐらいに声を張って、演奏を始めろと入江に視線で合図を送る。

すると入江は関根のイタズラに引っかかった直後のような困っている時の表情を返してきた。

どういうつもり？　あたしはそんな表情をされるいわれはない。

聞きに来てくれている客を前にして演奏を始めようとしない入江のほうが変だ。

あたしは関根とひさ子にも視線を送った。

しかし、彼女らも演奏前とは思えない表情をしている。器材の故障？

「さっきの話……聞いてなかった？」

近づいてきたひさ子が戸惑った表情のままマイクに音が入らないようにして問いかけてきた。

「なんか言ってた？」

あたしの答えを聞いたひさ子は手のひらをこめかみの少し上にあてて、「やっぱりか」と呟く。

やっと話が見えてきた。とゆうか、またなにか聞き逃したんだなと悟った。

音楽に熱が入りすぎると、すぐ自分の世界に入り込む。
その時のあたしには外からの雑音なんて微塵も聞こえない。
便利ではあるけど今回のような失敗もよくある癖だった。

「あー悪かったよ。で、あたしはなにをすればいい？」
「新曲の歌詞を書く子を……」
「よさそうな子がいれば連れてくるアレか」
あたしはやっと思い出せた。

タイトルも決まっていない新曲の歌詞を他人に任せるといった企画。
ちょっとした音楽に対する冒とく。でも――
「そ、ちょっと楽しみにしてたでしょ」
「まぁね」
あたしはステージ上から会場中を見回した。
「……でも、パッと見はいない」
目に入った観客は全員、演奏する側のそれじゃない。

「集まってるのはガルデモと競演できるかもぐらいにしか思ってないからね」
そう、今日のイベントの告知では新曲のことは触れられてない。
これも、駄目なサプライズ好きプロデューサーの仕向けたことだった。

岩沢が『中途半端なやつしか来なかったら任せられない』と宣言したことも一因となっているのだが、本人は気づいていない。
とにかく告知が【ガルデモと夢の競演が！？】ぐらいだったので、憧れだけで来る人が多かった。

「じゃ、探しに行こうか」

あたしは今まで場をトークでつないでくれていた関根と入江に声をかけた。
「いってきまーす！」
すると関根が猛然とスタートダッシュを決め、いち早く客席に入ってく。
その後、あたし達もそれぞれステージから降りて客席へと向かった。

『お触りした人には強制退場に加えて恐ろしい罰ゲームがあるのでご注意してください』
遊佐さんの遅い忠告の後、入江を触ろうとした男が柔道着を着た男と目元までターバンを巻いた男に連行されていった。
いい音楽を持っている奴がいるといいんだけど。

「岩沢さんがこっちに来ましたっ！」
一番憧れている岩沢が近づいてくるとユイはそわそわしだす。
それを見た日向はにやにやしながらチャチャを入れた。
「岩沢は音楽に厳しいって有名だしだれも選ばないと思うぜ」
「ユイにゃんのかわいさをもってすれば……」
「スルー確定だな」
「あんだとコルァ！」
ユイは毎度のごとく日向に掴みかかる。

「ユイ、岩沢さん来たわよ」
「はっこんなことをしてる場合じゃなかったですね」
ゆりの言葉で我に返ったユイは姿勢を整えた。

そして、岩沢に熱い視線を送る。

気だるそうに歩く岩沢がふとユイの辺りで視線を止めた。
ユイはチャンスとばかりにさらに力を目に込める。
意外と眼力はあるんだよな。
驚くことに視線に続いて足までもが止まった。

岩沢は明らかにユイを観察している。
ユイもそれに負けず大きな瞳で岩沢を迎え撃った。
この光景に気づいた他の人たちの視線も集まりはじめる。
「まさかあの岩沢さんが？」
そう囁く声もちらほら聞こえてきた。

そういいたくなる気持ちもわかる。
音楽に対してストイックすぎるがゆえに大人気アイドルへ問題発言をしたこともある岩沢だ。
まぁ、ファンの間ではあれは司会者がそんな話題を岩沢にふったのが悪いと言われてる。
そんな岩沢が今、一緒に音楽をやる候補として一見変哲もないただの少女を見ているんだ。それは驚くだろう。
仮にユイが腕が動くようになってから歌やギターを猛練習しはじめたと知っても驚いたはずだ。

ここら一帯の注目を一手に集める中、とうとう岩沢が口を開いた。
「……歌ってみる？」
「ハイッ！」
ユイは待っていましたとばかりに、すぐさま元気よく返事をした。
それと同時に拍手と歓声が沸き起こる。

下手したらガルデモの入場のときよりも大きかったかもしれない。

俺や立華も拍手をして、ゆりはユイの頭を撫でまわした。
それらをユイは満面の笑みで受け取る。
「まだ、喜ぶのは早いって」
岩沢のツッコミもかき消されてしまった。

「ま、まさかそんな……」
「ひなっち先輩、早くしてください」
歓声が収まってからも呆然としている日向をユイはせっついた。
車椅子を預かっているのは日向なので、あの岩沢を待たせているのも日向ってことになる。
自然と日向に向かって待たせるとは何様のつもりだという視線が集まりだす。

ユイに揺さぶられてようやく日向の目に光が戻ってきた。
「あぁ、すまんすまん。驚きのあまり三途の川が見えてた」
「先輩……ユイにゃんを置いて先に行っちゃわれるんですか？」
不安げなユイに日向は微笑みかける。
「俺がそう簡単に死ぬわけねぇだろ？」
「よかった先輩っ！」
ユイは腕を開いて待つ日向の胸元に飛び込んだ。

「なんだこの三文芝居」
二人には完全に冷たい視線が送られ、舌打ちまで聞こえてきた。
その中で立華だけが白いハンカチを用意していた。

「やっぱ他を当たっていい？」
「すみませんっ！　ひなっち先輩なんてもうどうでもいいですから一緒に歌わせてくださいっ！」
「おい」
岩沢が立ち去ろうとしたことでユイは日向を突き離して演技をや

めた。

するとハンカチをしまった立華が立ち上がる。
「わたしが一緒に行くわ。ゆり、前を通るね」
「えっ！？　う、うん」
ゆりは伸ばしていた足を引っ込めて立華が通れるようにした。

「手を出して」
「は、はい」
ユイは素直に立華に従って手を差し出す。
それを手に取った立華は軽々とユイを持ち上げた。
「しっかりつかまってて」
そう言ってから日向の足元にある車椅子にも手を伸ばそうとしたので日向は慌てた。

「いや、俺も行くって！」
日向は車椅子を掴むと急いで座席の間を座っている人に謝りながら通り、通路に出る。
立華もユイをお姫様抱っこ体勢にしっかりと持ち直してから日向の後に続いた。
そのまま三人は岩沢に先導されて、ステージ脇から裏に入っていった。

「奏ちゃんの正義感に火がついちゃったみたいね。それよりも、せっかく隣だったのになに行かせちゃってんのよっ！」
ゆりは苦笑いしながら呆気にとられたままの音無の太ももを叩いた。

連行

しばらくすると大山の右手のほうから関根がやってきた。
意外なことに彼女はまだ、だれもステージ裏に連れていっていない。
すでにひさ子はもちろん岩沢や入江までも、一人は選んでいるのにだ。
目に付いたら手をむりやり引いてステージ裏に連れ込み困らせる。
そんなイメージがあるのに。

今の関根は吟味するように一人一人の顔を覗き込んでは首を横に振っていた。
「案外、真面目なのね」
「みたいだな」
「僕も真面目に音無さん一筋ですよ」
ゆりも全く同じ感想だったみたいだ。

ゆっくりゆっくり一人ずつ一人ずつ。関根のペースは乱れることはない。
その関根が大山たちの座る列に差し掛かった。
一人を見て首を振る。また一人見ては首を振る。そして、またまた首を横に振る。
とうとう大山に差し掛かったその時、はじめて首を横に振る続けるだけの関根に変化が訪れた。
当たりくじを手にしたときのように顔がほころんだのだ。しかし、それは一瞬で元に戻った。

今度は背伸びをしてここら一帯を探り始める。
まるで、あら捜しでもされているようだった。

すると気絶したままの藤巻のことを指差す。
「えっと、そこに倒れている男の子はどうかした？」
泡はふき取られてきれいにされてても、ぐったりした人が目に入れば気になるよな。
関根も例外ではなく好奇心の目を大山へ向け、説明を求めた。

しかし、それに応じたのは大山ではなかった。
「藤巻君は電話をしている最中、急に泡を吹いて倒れました」
高松は状況説明するのは自分の役目だと主張するかのように、はっきりとした口調だ。
こころなしかメガネを持ち上げる指にも力がこもっている。
関根は一瞬、君には聞いてないんだけどなと言った表情を浮かべたがすぐに戻した。
さっきから表情の変化を一瞬だけにとどめているのはプロ根性ってところか。

「じゃあ、あたしが医務室へ案内してあげる。君と君、運んでくれるかな？」
関根はなにごともなかったかのように大山と直井を指名する。
大山は素直に指示に従ったが直井は腕を組んだまま関根をにらみつけた。
「神である僕に指図をするな。あっ音無さんはじゃんじゃん僕にお申し付け……」
「わかった俺が行くよ」
別にどうでもいいやつだとはいえ、気絶した人をずっと放っておくのはさすがにかわいそうだ。

そんな思いで立ち上がった音無に関根と直井がひどく慌てだした。
「いやいやっ、そこの女の子を一人にしちゃかわいそーだよ」
「そうです、そこの女は知ったことではないが、音無さんは座って

てください！」
二人とも必死に音無を座らせようとする。直井はわかるんだが関根まで……？
引き合い出されたゆりは興味なさそうにステージを見ていた。

説得を続ける二人を前に救世主が現れる。
「ここは私が行きましょう。藤巻君とは知らない仲ではありませんしね」
「よく言った、庶民。ほらっ音無さん、あの無駄にある筋肉を使わないのはもったいないですって」
いつの間にか服を脱ぎ上半身裸になった高松は鍛え上げられた筋肉を見せ付けていた。
てか、その格好でそのセリフは勘違いされるぞ。音無の心配はすでに手遅れだった。

「えっ？　うーん、そういう仲なら仕方がないなぁ……」
関根は一歩下がって高松の顔と藤巻を見比べる。
関根は明らかにアレだって勘違いしているな。……勘違いだよな？
音無は一抹の不安を覚えつつも藤巻のことは高松に任せることにした。

その時、関根が大声を出した。それと同時に音無はそよ風を肌に感じた。
「って君それっ！　飲食物は禁止だよ。ゆさゆさの話を聞いてなかった？　火を噴きたいの！？」
その大声は直井が持っているお菓子を発見した関根が上げたものだった。
なぜかその顔は鬼の首をとったかのような笑みを浮かべている。
一瞬で戻らないってことはよほど嬉しいんだな。

「ふん、バカらしい。神である僕が意味もなく火を噴くわけないじゃないか」
しかし、直井はそれに動じなかった。むしろ完全に見下している。
対する関根も簡単にめげたりしなかった。
「彼だって、ゆさゆさの忠告を聞かなかったから泡を吹いて倒れたんだよ！？　君もああなりたいの！？」
関根の迫力に直井はすぐに白旗をあげた。というか、めんどくさくなったのかもしれない。
「わかった。これは持っていって構わない」
直井はあくまで上から目線だ。

関根は突き出されたお菓子を受け取りに行こうとはしなかった。
「あたしが手にしたら他のみんなに示しがつかないよー」
まぁ、落ち度があるのは直井だし、袋は開いてるから下手すれば楽器が汚れる。当然といえば当然だな。
「だったら貴様らのどちらかがもっていけ」
直井の矛先は、既に藤巻を関根のいる通路まで運んでいた大山と高松に向かった。

「ダメダメッ！　二人は彼を運ぶ役目があるんだから」
それも関根によって却下されてしまった。
これにはさすがの直井もどうしたらいいのかわからなくなったようだ。
しきりに音無に助けを求める視線を出す。
そんな直井の背中を押すために音無は最善の一言を与えた。
「行って来い」

「で、でもっ……」
音無の最善の一言を持ってしても直井はまだ迷っていた。

どうしても離れたくないのか。これが立華や初音だったら嬉しかったんだけどな。

「早く来ないとその音無さんが君のことを見捨てるかもよ！？」

しびれをきらした関根がかけた一言でとうとう直井は陥落した。

「音無さん！　絶対、僕は戻ってくるので待っててください！」

直井はお菓子を抱え通路に向かう。

でも未練があるのか、たびたび振り返っては手を振り、座っている人を困らせた。

「ではご一行様をご案内しまーす」

直井が揃うと関根はツアーガイドの真似をして先導し、会場の外へ四人を連れて行った。

関根が残りを連れて行ってしまったので音無とゆりは二人っきりになった。

「って、椎名はどこへ消えた！？」

音無の二つ隣の席に座っていたはずの椎名が忽然と姿を消していた。

「椎名さんなら関根さんが直井君のお菓子を注意したあたりで消えたわよ」

「消えたって……」

ゆりは消えたことに驚かないのか。

「おおかた、ぬいぐるみを没収されるかもって不安になって逃げたのよ」

「そ、そうなのか。ははは……」

音無は消えた理由のしょうもなさに苦笑いした。

大物

ガルデモのメンバーは、それぞれが客席をあらかたまわり終えると、ステージ裏に戻っていった。
最終的に、ひさ子と後半スパートをかけた関根が多く選んでいた。
入江は控えめに二人。
一番注目されていた岩沢が選んだのはユイだけだった。

そういえば、関根に連れて行かれた四人は誰も戻ってこないな。
連れて行った本人は戻ってきているのに。
藤巻や付き添いの二人は仕方ないにしても、直井が戻ってこないのはらしくない。
らしくはないけど……まぁいいか。

音無が興味をステージに戻すと、ガルデモが再び出てくるまでの繋ぎとして二人の男が踊っていた。
一人はいかにもダンサーらしい衣装に身を包んでいる。
目とひたいを隠しているバンダナがダンサーらしいかどうかは賛否両論かもしれないが。
踊っているのは多分ブレイクダンスだな。ダンスのことはよくわからないが滑らかでキレのある動きだ。
もう一方はというと、こっちもブレイクダンスのようだが、どこかぎこちなかった。
その動きよりもさらに不自然なのは衣装。その男は柔道着で身を包んでいた。

というかあの二人、見覚えがある。
「なぁゆり……」
「ＴＫと松下君よ。さっきもいたじゃない」

音無の質問を見越していたようにゆりは答えた。
さっきもいたのか。気付かなかった。

「それに遊佐さんがいたんだしもう驚く理由もないわ」
「そういうものなのか」
「そういうものなのよ」
わかるようなわからないような理論で納得させられた。

「そんなことよりも――」
「ん？」
ステージを見ていたゆりがこちらを向く。その目はどこか真剣だった。
「来週の水曜日か木曜日あいてる？」

「……は？」
質問が想像よりもあさっての方向だったために反応がワンテンポ遅れた。
ゆりから見たらマヌケ面だったはずだ。
「だから、水曜か木曜が暇かって聞いてんの」
そんな顔にイライラしたのか、ゆりは表情を強張らせ語気を強めた。

音無は急いで生徒手帳を取り出し、自分の予定を調べ始める。
夏休みで部活もやってないから予定はほとんど入っていない。
時たま初音の買い物に付き合う約束があるぐらいだ。
後は大学受験が控えているから勉強しなくてはいけないぐらいか。
でも、日向と違って日ごろからきとんと勉強をしているので多少は問題はない。

「両方とも特に用事はないな」

この答えに、ゆりは満足そうな表情をみせる。
「じゃあ、来週の水曜日をあけといてね。詳細は後でメールを送るわ」
そう言うやいなや、ゆりは正面を向いてしまった。
これ以上話すことは今はないってことか。ゆりは頑固そうだし詮索はやめておこう。

音無も正面に向きなおすと、ちょうどＴＫと松下が退場していくところだった。
その二人と入れ替わりで逆の入口からガルデモの四人が入場してくる。
『ただいまーーーーっ！』
関根が元気よく叫べば、その後ろで入江が小さく手を振る。
ひさ子が片手でガッツポーズすれば、岩沢が興味なさそうにギターをいじる。
どの行動に対しても歓声と拍手が送られた。

四人がそれぞれの位置につくと遊佐もなぜか出てきた。
右手にはマイク、左手には木槌を持った彼女は小走りで鐘の後ろに回りこむ。
『スタンバイが完了しました』
『わたしもっ！』
遊佐が報告すると関根も同調した。
岩沢が後ろを振りかえると、入江とひさ子が小さく頷いて、自分も準備万端だとアピールする。
しかし、岩沢が振り向いたのはそれを確認するためではなかった。
『次、なにするんだっけ？』

岩沢の大物っぷりに会場中は静まり返る。
『うん、なんとなくそう来ると思ってた。じゃあ、一人目！　出て

きなっ！』

すぐさまひさ子が岩沢の代わりに選び出されたゲストを呼び込んだ。

『神である僕をどれだけ待たせれば気が済むんだ』

出てきたのは、またもや見覚えのある人物だった。

「なんで直井があそこに立っているんだ……？」

「ここにいないんだからあそこにいたって不思議じゃないわ。少しは順応性を高めなさい。あるがままを受け入れるの」

驚く音無とは対照的にゆりは冷静だ。

順応性を高めろと言われても……ゆりが高すぎるんじゃないか？

と、思ったが口には出さなかった。

「それに関根さんのお菓子を発見したときの表情を見たらアホでもわかるでしょ」

「アホでも……」

音無が客席で落ち込む一方、ステージ上では関根が直井に軽く謝っていた。

『ごめん、ごめん。で、なんの曲で音無さんへ思いを伝える？』

直井の尊大な態度を前に冷たい視線が送られていたが、本人にはどこ吹く風のようだ。

しかも、直井は更なる問題発言をぶちかます。

『歌なんて必要ない』

その瞬間、岩沢が鐘の影から様子をうかがっていた遊佐に向かって目で合図を送った。

遊佐はそれに対して頷くと左手を振り上げる。

『ぼ……』

直井の言葉をさえぎるようにきれいな鐘の音が鳴り響いた。

それに少し遅れて客席からまばらに拍手があがる。

よくもまぁ、この短い間に嫌われたものだ。

『……音無さんへの送る言葉をすでにここにしたためてある』

しかし、直井は意に介さず、手に持った真っ黒な紙を会場に見せ付けた。

こいつもこいつでかなりの大物だ。自称神なだけのことはある。

ガルデモの面々も呆れ顔を見せていたが関根だけは『見込み以上に面白いよっ！』と、喜んでいた。

『なかなか厄介な相手ですので、お願いします』

遊佐がどこかに連絡をするとすぐさまＴＫと松下が出てきた。

『貴様ら神である僕になにをするっ！』

『Ｇａｍｅ　ｓｅｔ．』

『大人しくしておれ』

二人はそれぞれ直井を腕を掴む。

直井はどうにかしてそれを解こうと暴れるも、二人の男の腕力には敵わない。

そのまま、ずるずると引きずられながらステージ裏まで運ばれていった。

期待

関根に連れられていった直井が出てきたんだから、次は他の三人がでてくるんだろうな。

直井がつまみだされた後、音無は次の展開をそう読んでいた。

しかし、そんなことは今のところ起きていない。

むしろ、イベントは順調そのものだった。

ただ、この順調という言葉がかなりの曲者だ。

もっと具体的に言うと、岩沢が絶好調過ぎて出てくる人たちの多くが曲の半分もいかずに鐘を鳴らされてしまっていた。

おかげで先ほどまで後ろの席でわが社の命運がなんたらとブツブツ呟いていた男も、今は真っ白になっている。

『あっ……』

今もまた、岩沢から合図を受けた遊佐が鐘を鳴らした。

ちょうどサビでいいところだったのに止められてしまった少女は悲しそうにしている。

岩沢はそんな少女に近づくといくつかの歌に関するアドバイスをし始めた。

これはなにも彼女に対してだけではない。今日、共演した全員にしている。

一人一人、細かくアドバイスをする一方で一つだけ直井を除いた全員に共通してあるアドバイスをしていた。

『後は、もっと音楽を好きになって、もっと楽しめ』

そして軽く肩をはたかれると、さっきとは打って変わって気合の入った表情になる。

「演奏前と演奏後に聞くと違って聞こえるのかもしれないわね」
なんども同じアドバイスを繰り返す理由をゆりはそう推測していた。
「たしかに、そうかもな」
来たときよりも元気に戻っていく少女を見ると音無にもそう思えた。

『岩沢。ボーっとすんな』
ひさ子は進行を完全に忘れている岩沢に声をかける。
『ああ、うん。じゃ、次の人』
岩沢が投げやりに呼ぶと日向の押す車椅子に乗ってユイが登場した。

「ようやく、ユイの番がまわってきたのね」
ゆりがようやくと言いたくなる気持ちもわかるな。
いくら岩沢が早めに鐘を鳴らさしても十数人もいれば時間はかかる。
それにアドバイス等の時間も加わるので、すでに三時間近くは経過しているはずだ。
ちなみに直井はすでに席に戻っていて、腕を組みふんぞり返っている。

そんなに待たされ、生ガルデモを見るのもお預けされていたのに、ユイは笑顔を見せていた。
客席にアイドルでも引くぐらいウインクをしながら、マイクスタンドのある中央まで日向に運ばれる。
岩沢が唯一選んだ人なだけあって注目度は高い。
ユイには期待に満ちた視線が、日向には負の感情が詰まった視線

が集まった。
なぜ、ユイは大きな段差がなければ車椅子を自在に操れるのに、日向に連れられてきたのか。
その理由はユイがあるものを抱えているからだった。

それに気がついたひさ子が岩沢に質問を投げかけた。
『岩沢ー、あの子にギターも弾かせる気か？』
『本人が出来るって自信満々だったんだ』
『そうは見えないんだけど』
ひさ子がの視線の先にいるユイはさっきまでの余裕は消えうせて緊張でガチガチになっている。

『おい、大丈夫か？』
まだそこにいた日向が心配そうに声をかけた。
『ひんひょうはんはひへはいえすお』
明らかに大丈夫じゃない。

それを見た日向はおもむろにユイの左肩に左手をかけ少し前かがみにさせた。
『はにふんえすは？』
ユイの謎の質問を無視し残る右手を振り上げる。
そして今度は背中に向かっておもいっきり振り下ろした。
大きな音と共にユイは声にならない悲鳴をあげる。

少しして吹き飛ばされた声帯が戻ってくると、ユイは日向に噛みつかんばかりの勢いで抗議した。
『……ユイにゃんのか弱い心臓が爆発したらどうすんだコルァッッッ！』
日向はそんなユイを手の届かない位置でニヤニヤしながら見ている。

そしてユイにとって屈辱的な言葉を投げかけた。
『言葉が戻ったじゃねぇか。ちゃんと緊張はほぐれたみたいだな』
ユイはさっきとは別の衝撃で、またも声を失った。

『き、緊張なんかしてませんでした！』
一瞬の間の後、悔しそうに反論したが説得力はない。
『ま、そういうことにしておいてやるよ』
日向はそこには触れず、きびすを返し裏に戻ろうとした。

『ひなっち先輩』
しかし、ユイがそれを引きとめる。
『礼なら……』
『頭打ちましたか？』
だれもが礼を言うと思った場面でユイは見事に裏切った。

『このっ……』
『そろそろいいか？』
日向が言い返そうとした時、ずっと静観していた岩沢がそれを止めた。
『あっすいません』
日向はガルデモをずっと待たせるなんて失礼なことをしていたことに気付き、すぐに頭を下げる。
そして、急いで戻ろうとしたがユイが再び引きとめた。
『ひなっち先輩、まだ問題が残っています』

『問題？　なんだよ、早く言え』
日向が急かすとユイは上を向いた。
『マイクに届かないです！』
スタンドマイクの位置は立っている人に合わせているためにユイの頭上にある。

『よし、こんなもん軽く……こりゃどうなってんだ？』
日向はマイクスタンドに駆け寄っていじり始めたが、勝手がよくわからないようだ。

『ちょいあんた！』
ぐらつくマイクスタンドに慌てたひさ子が急いで飛び出す。
『それバカ高いんだから素人は触んな！』
日向の手から奪うとユイに合わせた高さに調節した。

『ありがとうございます』
『いいって。それより、あれ百万ぐらいするから壊すなよ』
『ひゃくまっ……。ユイぜってぇ壊すなよ！』
値段に驚いた日向は念押しをした。
『ひなっち先輩、ごめんなさい』
『謝るんじゃねーよ！　保険かけんなっ！』

二人を見て声を殺して大笑いしていた関根は入江に近づいてこっそりと話しかける。
「岩沢さんもなかなか面白い人材を連れてきたよね」
しかし、入江は真っ赤な顔をしたままユイ達を見ているだけで関根の言葉に反応しない。
「みゆきちー？　おーい」
関根が声をかけても手をかざしても入江は全く反応しない。
ここで関根は入江の口が少し動いているのに気づいた。

なので耳を近づけてみる。すると入江が声が耳に入ってきた。
「大観衆の前であんな……」
「あー、みゆきちにあの二人は刺激が強かったみたいだね。でも…

…あれが？」

この時の入江の目があの二人をどんな風に捉えていたのか永遠に謎のままだった。

大切

『それで曲は？』
日向が戻ると岩沢はユイにセッションする曲を聞いた。
その質問にユイは目を輝かせ迷うことなく答える。
『Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇをお願いします！』
『わかった。よしっ、いくぜっ！』
岩沢の掛け声で曲は始まった。

「Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇってこんな曲だったか」
実はガルデモを知ったのは最近発売されたＭｙ　Ｓｏｎｇがきっかけで他の曲をあまり知らない。
ただ、そんな音無の耳でもユイの歌声が参加者の中でも下のほうだと感じ取っていた。
「別物ね」
だからゆりや他のファンはもっと下手だと感じ取っていたはずだ。

でも、岩沢は遊佐に鐘を鳴らさせようとはしない。
どんなにギターの音がぶれようとも歌声が乱れようとも、ギターでサポートし続けた。

――彼女が一生懸命だから止めるに止められない。
この場にいない人にこの状況を説明したらそう考えるかもしれない。
でも、それは違う。一生懸命に歌う子は他にもいた。
――岩沢が自分で選んだ子からムキになっている。
これも違う。岩沢はそんな小さい器じゃないはずだ。

――ユイが車イ……

そんなことを考えるやつは日向と俺がぶっ飛ばす。

上のようなことを考えた人でも歌っている姿を見れば考えは変わるはずだ。

独特の歌いかたで味がある、というわけではない。

いやまぁ、たしかにあのヨレっぷりはかなり独特なんだけど……。

とにかく、ユイはどの参加者とは違ってあるものを持っていた。

だから、会場はだんだんと熱くなってきているんだ。

「そろそろサビよ」

ゆりが小さく呟いた瞬間、一気に曲調が変わる。

すると会場にいる人はいっせいに立ち上がった。音無も少し遅れて立ち上がる。

今、この会場でユイの歌に聞き入っていないのは前の座席に足をかけて寝ている直井ぐらいだ。

このユイの不思議な魅力の正体は岩沢が今日ずっといい続けていたあの言葉の中にあった。

『もっと音楽を好きになって、もっと楽しめ』

そう、ユイは音楽が大好きなんだ。

そしてその大好きが歌って弾いてる姿にも表れている。

ユイは珠のような汗を浮かべ、まぶしすぎる笑顔を見せてＣｒｏｗ　Ｓｏｎｇを――音楽を楽しんでいた。

その楽しむ心がこっちにも伝わってきている。今まさに、会場は一体感で包まれていた。

いつの間にか直井まで……さすがに、それはないか。

さっきの体勢から微動だにしていない。

歌も佳境に入りユイの歌にますます熱がこもる。
もちろん、こもればこもるほどだけギターの奏でる音はあさっての方向に飛んでいく。
それでも今日、最大の盛り上がりを見せた。
横にいるゆりも小刻みに飛びながらユイを応援している。
多分、ステージ袖で見ているだろう日向や立華も同じなはずだ。
俺もそれに負けないようにユイを応援した。

そしてついに、最後の最後まで安定しない歌声と演奏だったが、ユイはＣｒｏｗ　Ｓｏｎｇをやりきった。
鐘が鳴らされなかったのは今日はじめての快挙だ。
観客は称賛を浴びせユイも右手を大きく振ってそれに応える。

ただ、このまま終わらないのがユイだった。
ギターをあらためて持ち直すと耳を疑いたくなるような言葉を発する。
『歯ギターいきますっ！』
岩沢から借りたギターなのに遠慮や躊躇は微塵もなかった。

『遊佐っ！』
それを察知した岩沢は遊佐に指示を出すとユイに駆け寄り、後ろから口を塞いだ。
その瞬間に遊佐の持つ木槌がきれいな鐘の音を響かせた。

『楽器はもっと大切にしろ』
『す、すみませんでした……』
興奮状態が一気にさめたのかユイはしゅんとしながら岩沢の説教

を受けていた。
ユイを擁護する声も少しはあったが岩沢がひと睨みするとすぐに消えうせた。
その後ろでは関根が腹を抱えて笑らい、入江が怯えている。
この説教はひさ子が止めるまで続いた。

説教が終わったあと、ユイはうなだれたまま再び出てきた日向に回収された。
ただ、ファン根性だけは失わないのがユイだ。
帰る前にしっかり全員と握手をしていった。

『次の人』
珍しく進行を忘れていなかった岩沢が次の人を呼んだ。

……。

しかし、どれだけ待ってもだれも出てこない。

『もしかして全員終わった？　あたしが呼んだ子はもういないはずだけど』
『あたしも全員出ました』
ひさ子の言葉に入江も同調した。

『いや……』
『スタッフさんお願いしまーす！』
関根が突然叫ぶとステージの証明が一気に落ちて一箇所にスポットライトが集まった。
位置はちょうどど真ん中。たしかあそこは入江が登場したところ

だ。
『しおりんまた……』
入江は自分のときの恥ずかしさがぶり返したのか顔を真っ赤にしている。
光が集まる中、入江の時と同じようにスモークが湧き出しその中から人影がせりあがってきた。
ただ、恥ずかしいのかそれともスモークが怖かったのか両手で顔を完全に覆っている。
おかげでどんな人かはわからず、わかるのは体型と服装だけ。
ちょっと話がずれるが今まで出てきた参加者の服装の多くはごく普通の私服だった。
例外は学ランの直井とパンクファッションに身を包んだユイぐらいなものだ。
しかし、その人もまたユイ達と同じ例外だった。
ファッションはよくわからないが言うなればガルデモのような服装。
ユイの服装もそれに近かったがガルデモとは少しタイプが違う。
『似てる……』
ガルデモのメンバーである入江にもそう映ったようだ。
いや、似てるっていうことはガルデモの衣装を再現した服なのか。
ひさ子もあの音楽以外には興味を示すことが少ない岩沢さえも目を見開いていた。
『怖くないから顔を出して、ね？』
関根の言葉を聞いてようやく、徐々にではあるが手を顔からどけていく。
そして現れた顔に会場中――特に音無とゆり――の度肝を抜いた。

そこから現れたのは
『あれ……？　どうして僕がステージに立っているの！？』
大山だった。

仕込み（前書き）

関根が大山達を連れて行った後の話。

仕込み

「ここが医務室だよ」
あたしはお目当ての二人とおまけ二人を連れて医務室の目の前に立っていた。
ここに来た表向きの理由は気絶している子をここに案内すること、でも本当の目的はおまけ二人をここに置き去りにすること。
みゆきちのためにも、うまくやるから！

「失礼しまーって竹山君がいるよ！？」
お目当ての一人が扉を開けると中にいたマッシュルームに似た男に驚いていた。
あれってたしか、ゆさゆさが連れてきた一人だったよね。

「お知り合いかな？」
「仲間……ですかね」
上半身裸のおまけがポーズをとりながらあたしの疑問に答えた。
ずっと思ってたけど、これってセクハラだよー？

だからって、彼を追放するわけにはいかないのがツライところ。
もし仮に彼を追放しちゃったら、お目当ての一人が気絶しているおまけを看病することになる。
そうなるとあたしの計画は台無し。
なので、あたしは笑顔を崩さないようにしつつ我慢するしかなかった。

「それで、竹山君はどうしてここにいるの？」
「頼まれたのでここにいます。それと僕のことはクライストとお呼び下さい」

「へーそうなんだ」
「竹山さんが医師免許をお持ちとは初耳ですね」
「いえ、持っていません。年齢的にも取得は不可能です。それと僕のことはクライ……」
「じゃあさ竹山君、怪我した人が来たらどうするの？」
「それはネットで適切な治療法を見つけて処置します。それと僕のことはクラ……」
「では手に負えないほど重病の場合はどうしますか？」

あたしは彼らの会話には加わらず『そんなに竹山って人はクラなんたらって呼ばれたいんだー』とか考えながら傍観していた。
「おい、どこへ捨てればいいんだ」
そこに、お目当てその2がまだ中身の入ったポテチの袋を突き出しながら話しかけてきた。

おいしそう……いけない、いけない。あたしは一瞬ポテチの魅力に負けそうになった。
袋の中に吸い込まれそうになる右手を頑張って動かし、なんとか竹山君を指差す。
「もったいないから竹山君に預けて後で返してもらえばいいよ」

あたしの言葉を聞いたお目当てその2は竹山君にポテチを突きつけた。
「神は物惜しみしない。やる」
そう言ってから押し付けるように渡す。
それを気絶した子をベットに乗せようとしていたお目当てその1がうらやましそうな表情で盗み見していた。
ポテチ……好きなんだね。わかるよ、その気持ち。

「あっ、ちょっと待って！」

あたしが余所見をしている内に、お目当てその2が戻ろうとしてた。
「もう用事は済んだはずだが」
無視はされなかったけど足を止めてくれない。
あーこれは女装させるのはムリそーかなー。
なにを隠そう、あたしが彼をお目当てその2としてたのは女装に適した顔と体つきだったから。
そうだ！　女装はムリでもその制服ままで出てくれれば面白いかも。
あたしはお目当てその2のほうは妥協することにした。
プライドの高い彼の弱点はすでに知っている。
「ね、ね、いい話があるんだ。音無さんも喜ぶかもよ？」
ほらっ、【音無さん】ってキーワードを出せばすぐに足が止まる。
「……話してみろ」
食いついてもきたっ！
喜びを表情に出さないようするのは大変だった。
この後はどう説明しようかなー。うん、彼が興味なくす前に一気に畳み掛けるべきだよね。
あたしは真っ向勝負を仕掛けた。
「ステージ上で音無さんへの想いを伝える場を提供します！」
「ほっ、本当なのか！？」
あたしはあっさりと勝利した。
「あたしをだれだと思ってるの？」
「ま、まあ庶民にしてはなかなか見込みがあるじゃないか」
彼はそう言うなりパッと腕を組み、横を向いた。
冷静を装ってるみたいだけど口元は明らかにほころんでるよ。

もしかしたら、あたしもほころんじゃってるかもしれないけどね。

「じゃあ、これを首にかけて」
あたしはポケットにしまってあったあるものを取り出す。
「これはなんだ？」
彼はそれについているひもをつかんで重力に任せて手からぶら提げた。

「スタッフに不法侵入だと間違われないためのゲストパスだよ」
「これを首からさげればいいのか」
答えを聞く前に首にかけた。
ＧＵＥＳＴと大きく書かれた方を前にするとこちらに視線でこれでいいよなとアピールする。
「そうそうオッケーオッケー、後はスタッフさんに道を聞いて」
道を聞いて、と聞くやいな、ちょっと不機嫌そうな態度を見せた。

「貴様が案内するんじゃないのか」
「ちょっと用事があってね」
用事とはもちろんその１に女装させること。これは譲れないよねー。
今度はあたしが視線でムリだよとアピールした。

「まぁ、いいだろう」
幸いにも彼はすぐに諦めてくれた。
そして、すぐにそこら辺にいたスタッフさんを捕まえる。
スタッフさんがこちらを見たのであたしはお辞儀して彼のことをお願いした。

ふっふっふっ。うまくいった。
立ち去る彼を見てあたしは心の中でガッツポーズを決める。

でも結構、時間がかかっちゃったな。
まだ、当初の計画だった女装は達成してないのに……。

なんでこんなにあたしが女装にこだわるのかというと、これには浅い訳がある。
簡単に言っちゃえば、みんなの驚く顔が見たい。それだけなんだっ。

女装で着せる服はみゆきちのライブ用の衣装。
それを着て出てくればみんなの驚く顔が見れる。
それがみゆきちのものだってなれば、もーっと面白い顔が見れる。

そしてイベントが終わったあとにみゆきちにこっそりと彼が男の子だって教えてあげれば……。
これでさらにさらに驚く顔が見れる。三度おいしい。
みゆきちの驚く顔はたまらないんだよね。
これがあたしが昨日思いついたイタズラの全容。

あと、さっき思いついたんだけど彼にはリフトで出てってもらおうかな。
テストはすでにみゆきちがやってくれてるし、そのほうが他の皆も驚いてくれるはずだからね。
ただ、三度目を驚かせるためにはすぐ男とばれる様な男じゃダメ。
だから、あんなに吟味しながら探しに探した。そしてやっと見つけたのが彼らってわけ。

こうしちゃいられない。早く彼を女装させないとっ！
あたしは急いで医務室に戻った。

「関根さんどうしましたか？」

「どこか怪我でも？」
部屋に入って早々、二人の眼鏡君に質問された。
「えっとねー……」
戻ってきたはいいけどノープランだったな。
ポテチ好きしか知らないし……うーん、どうしたらいいんだろ……。
「関根さん、具合でも悪いの？」
あたしが悩んでいるとお目当てが心配そうに声をかけてきた。
気が弱そうな顔してるなー。……ムリヤリ連れて行けるかも？
あたしは彼の顔を見て漠然とそう思ってしまった。
そうとなればあたしの行動は早い。
「あ、そうそう！　あたし、君に用事があったんだ！　ついてきて！」
「えっ？　えっ？　藤巻君が……」
あたしはお目当てその１の手を掴むと医務室から連れ出した。
そのまま有無を言わさず連れていくとすぐに抵抗はなくなる。
やっぱり流されやすい性格なんだね。
だったら『女装して』って説得する必要もないよね。
あたしはリフトの近くまでくると、あらかじめ話をつけていた数人のスタッフさんに目で合図をした。
もうこれで彼は逃げられない。
流されに流されて女装してステージに立つことになる。
楽しみだなぁ……。
おっと、いけない。そろそろ戻らないとひさ子さんに怪しまれち

やう。
後のことは息のかかったスタッフさんに任せることにした。
「あ、ちょっとごめんね。ここで待ってて」
「え？　どこへ行くのっ！？」
知らない場所に置き去りにされそうになった彼はあたしを引きとめようとする。

「い、言わせないで……」
勘違いさせるためにわざと恥ずかしがってみると効果覿面だった。
「あっ！　ご、ごめんなさい」
彼は素直にあたしを放してくれた。

これで仕込みは完璧だねっ！

魔術

大山が出てくることは予測していたけど、まさか女装してくるとは思わなかった。

衣装だけじゃなくて化粧までしてるって、大山もノリノリだったのか？

でも、不安そうに周囲を見回す姿は、関根のイタズラの片棒を担いだ人のものだとは到底思えなかった。

そんな大山に岩沢が言葉を投げかける。

『どうした？』

『えっあのっ関根さんにここで待ってって言われてしばらく待ってたらぞろぞろと怪しい人たちがやってきて抵抗するまもなく服を脱がされてこれを着させられて顔になにか塗られてそしたら急に足元が上昇してきてそれでそれで……』

慌てて喋るもんだからよくわからなかったけど。関根のイタズラってことはよくわかった。

ひさ子も即座に理解したようだ。

『関根ー？』

『な、なんでしょうか？』

すでに怒られることが決定していて、そしてそれをちゃんと理解しているかのように、関根の声は震えていた。

『あれって誰のだ？』

『あのーそれはー……みゆきちのです』

ひさ子の抽象的な質問に初めは唸って答え辛そうにしていたが、ひさ子の顔をチラッと覗き見た瞬間に観念したのか答えた。

これに一番驚いたのは入江だった。
『え、えぇーーーっ!?　もしかしてあれ本物なの!?　しかもあたしの!?』
動揺が手にも伝わったようでばちが滑り落ちる。
『許せ、みゆきち。ときには犠牲も……』
それを見た関根は神妙な面持ちで合掌する。
ただ、ステージ後ろの大型モニターには口元がぴくぴく動いているのがはっきりと映っていた。
『へぇー、じゃあ今度は関根に犠牲になってもらおうか』
そんな関根の後ろに尋常じゃない笑顔を隠そうとしていないひさ子が現れた。
『あの、ひさ子先輩?』
腰から上を動かしその笑顔を確認した関根はさっきまでとは違う種類の汗を大量に流す。
『しおりんをよろしくお願いします』
立ち上がった入江は丁寧にお辞儀をしてひさ子に関根を託した。
『なぁっ!?　みゆきちまでっ!!』
もはや、関根の退路はどこにもない。
『じゃ、どの曲にする?』
そんな関根を尻目に岩沢は大山に歌う歌を選ばせようとしていた。
最初は驚いていたはずだが、今はもう興味をなくしたらしい。
さすがは音楽に貪欲な岩沢だ。
ただ大山の中での音楽は優先順位が低かった。

『う、歌うにしてもせめて男の格好でさせてよ！　だって僕は男なんだからぁぁぁぁっ！』
錯乱したかのように叫ぶと、その場から走り去る。
でもスカートはしっかりと手で押さえていた。

『あっ、待って！　それじゃ、出オチになっちゃうよー！』
関根はひさ子にこめかみを攻められながらも大山を引きとめようとした。
もちろん、それで大山が止まるはずがない。

大山が裏へと消えたのを確認した関根が力尽きると同時に入江が変な声をあげた。
『お、男の子だったのぉっ！？』
あまりにショックで頭にその情報が届くのが遅かったみたいだ。
力尽きたはずの関根はそれを見るためにちょこっと復活していた。

『ちょっと、変な空気になったな』
関根になおも罰を与えながらひさ子が冷静に状況を分析していた。
たしかに、ひさ子がそんなことを言いたくなるのはわかる。
今の会場からはさっきの一体感は完全に失われていた。
『さっきの彼が歌ってくれれば一気にッ痛いですっ！』
ひさ子は関根の案は却下だとさらに力を込めることで伝える。

すると、ずっと鐘の後ろで隠れていた遊佐が前に出てきた。
岩沢はそれを微笑みながら受け入れる。
『やるかい？』
岩沢の言葉に遊佐は肯定も否定もせずかわりに目をじっと見つめた。

『Ａｌｃｈｅｍｙを』
しばらくすると遊佐がぽつりと呟いた。
『わかった』
それにうなずいた岩沢はすぐにギターを構える。

アルケミー。たしか、ガルデモの曲の中で一位二位を争うほど人気のある曲だ。
それを選ぶのは、俺みたくあまりガルデモを知らないか、よほど自信がある人ぐらいなもんだろう。
知らないってことはないだろうし遊佐は意外と自信家だったんだな。
だけど、ステージ中央にぽつんと立つ遊佐からはそんな気配は感じられない。
ポーカーフェイスだから自信が顔に出ていないだけか？

ギターを構えた岩沢は自分の後ろでだれも演奏する体勢に入っていないことに気付いた。
まずは入江に声をかけて落ちているばちを拾わせる。次にひさ子の肩を叩いて声をかけた。
『ひさ子、それはあとでやればいいから』
『おう、それもそうだな』
岩沢が声をかけるとひさ子はあっさりと関根を解放した。
関根は両手でこめかみを押さえながらしゃがみこんだ。

『あとでって、もう罪は償えたと思いますよ？』
そこから恨めしげにひさ子を見上げながら主張するがそれを入江が却下した。
『しおりんの場合は発覚してない罪もあるじゃん』
関根は『どのイタズラがばれたの！？』といった顔をみせる。

『それも後でな』
また、あの笑顔を見せるひさ子を前に関根は青ざめた。

全員が位置についたのを確認すると岩沢が声を張りあげる。
『さっき以上に盛り上げんぞ！　Ａｌｃｈｅｍｙ！』
岩沢が言った曲の名前に三人は驚いて顔を見合わせた。
しかし、岩沢が演奏を始めたので、慌ててそれに合流する。
遊佐はリズムにあわせて体を上下に小さく揺らした。

そして注目の歌いだし。
岩沢のギターに魅了されていた人も、ひさ子のリフさばきに見惚れていた人も、遊佐へ視線が移る。
『――――――！』
遊佐が口を開くと違和感なく歌声が流れている音に乗り込んだ。
その瞬間に音無は一気に心拍数が上がり熱いものが体中を廻り暴れる。
そしてその勢いで席から立たされた。周りにいる人も同じように立っている。
あの直井でさえも目を覚ましていた。足は前の席に乗ったままだけど……。
椎名までもいつの間にか戻ってきていて、イスの上で腕を組み足をそろえて立ちながら、目をつぶって聴き入っていた。

遊佐の歌声に会場が沸き立つ。音無はそう錯覚した。しかし、実際は違った。それにゆりが気づく。
「遊佐さん口パクね」
ゆりに言われてはじめて気付いたが、たしかにこの歌声は遊佐の声とはぜんぜん違う。

よくよく見れば歌声と遊佐の口も少しずれている。
じゃあ、だれが歌ってるのか。それは探したり推理したりする必要もなく、すぐにわかった。

こんなにもアルケミーを歌えて、こんなにも心をわしづかみにするのはこの会場に岩沢しかいない。
彼女は今日歌えなかった分を取り戻すかのように全身全霊を込めて歌っていた。

歌声

気付けば曲も終盤、音無は完全にガルデモの音楽に引き込まれている。
ユイもそうだったようでフラフラと出てきては日向か立華に引き戻されていた。

岩沢の歌う歌詞の一つ一つは入り込むように脳に突き刺さる。
バックスクリーンに映る遊佐の無表情さもそれを助長しているのかもしれない。
読めない表情の奥にある葛藤。勝手に考えるだけで胸が熱くなった。

その葛藤を自分で断ち切るような最後のサビではもっと熱くさせられる。
歌詞にこもった想い。それがストレートに心を揺さぶる。
曲が終わっていても気付かないぐらいに熱され、いつの間にか絶賛の声を出していた。

後でゆりから聞いた話だと曲が終わり余韻を少し楽しでいた瞬間に大歓声があがったらしい。
「音無君も急に声を出すから別の意味で驚いちゃった」
こう言われたときはさすがに近くに穴がないか探してしまった。

結局、遊佐は最後まで口パクしながら体を揺らすだけで歌うことはなかった。
でも、あれはあれで一種のプロモーションビデオのようでよかったと思う。
そして、遊佐はなにごともなかったかのように鐘の後ろの定位置

へ戻っていた。

『さてと、続けていくよ』
『いや……』
『待ってください！』
ひさ子が本格的なライブに移行させようとすると関根がそれを止めた。

『しおりんが選んだ子がまだいるの？』
『さっきのあの子』
さっきのあの子とは十中八九大山のことだろう。まだ諦めていなかったのか。
『それは酷じゃないか？』
ひさ子も呆れ顔だった。

『ほら、呼んでんぞ』
『うわっ！』
そのとき、さっき裏に消えたはずの大山がよろけながらステージに戻ってきた。
その体勢からうまく立て直せず、両手両膝を突いて転んだ。
『ちょっと日向君、久しぶりに会ったっていうのに押すなんて酷くない？』
大山は転んだ状態のまますぐに後ろを向いて文句を言った。

そんな大山に魔の手が迫る。
『やっぱり、戻ってきてくれたんだ』
関根は嬉しそうに手をふっていた。

声に気付いた大山はまず関根を、次に客席を、そして自分のいる場所を見る。

『あれぇぇぇっ！？』

ようやく自分の置かれた状況に気付いたようだった。

『男の子のカッコなら歌ってくれるんだよねぇ』

語尾に音符がつきそうなほど上機嫌な関根が、まだ四つんばいのままの大山に近づいていく。

『それは岩沢さんが歌う前の話なんだぁぁぁっっ！』

大山は急いで立ちあがると、よろけながらもステージ裏へと逃げ去った。

『あーもー意気地なし』

関根が不満げな声を出したが大山が戻ってくることはなかった。

『まぁそう言うなって。岩沢の後じゃだれだって嫌だろ』

そんな大山をひさ子がフォローする。入江も頷いてひさ子の意見を肯定していた。

『それもそうですね』

関根も納得したのか元の位置に戻った。

『そうかな』

でも岩沢だけはそうは思っていないようだった。

大山がいなくなったほうに首を向けると呼びかける。

『立華さん、あんたも嫌かい？』

「立華！？」

予想外の名前に勝手にのどから声が出る。

「落ち着きなさい。出てくるわけ――奏ちゃん！？」

本当に立華がステージに出てきた。

岩沢は立華に微笑みかけると恒例となっている質問をする。
『なにがいい？』
『Ｍｙ　Ｓｏｎｇ』
その問いかけに立華は即座に答えた。
あらかじめ決めていたのかもしれないな。

『わかった』
岩沢は頷くと持っていたギターを近くにあるスタンドに置いてから、ステージ奥に向かって歩く。
岩沢が向かった先にはアコースティックギターが置いてあった。

「あんなとこにギター置いてたんだ」
「思い入れがあるアコギらしくていつもステージに置いてあるって有名な話よ。それに最初はあのアコギを持って入ってきたじゃない」
「ぜんぜん気付かなかった」
それに対してなにも言わなかったが、なんだかゆりの視線が少しだけ痛かった。

その視線から逃げるように岩沢を見ると、アコギの調子を確かめていた。ただ、音はここまで届いてきていない。
その間にひさ子はアコギの音を拾うためのマイクを持ってくるなどスタッフがやるようなことをやっている。
関根は繋ぎなのか入江の恥ずかしい過去を入江に妨害されつつも暴露していた。

ようやく準備が整ったのか岩沢が前に戻ってきた。
『待たせた。ひさ子も関根も入江も立華さんも悪かったね』
『気にすんなって』
『もっと時間かけても問題ありません！　話のネタはありますから！』

『そんな……あたしなにもしてません』
岩沢の感謝の言葉に三者三様の反応する。
立華だけは特になにもいわず、じっと持っていた。

『準備はいい？』
立華が首を縦に小さく動かすのを確認してから静かに岩沢が演奏を始めた。
柔らかい伴奏に乗って立華が歌い始める。――口を開かずに。

「鼻歌！？」
会場中のいたるところで同じツッコミをする人が続出した。
それでも立華はひさ子が止めるまでそのまま歌い続けた。

『ごめんなさい。いつも鼻歌だったから……』
立華は申し訳なさそうに岩沢に謝る。
でも謝られてる本人は全く気にしていないようだった。
『いいって。それより歌える？　なんだったら歌詞を好きに変えてもいいけど』
立華は歌えると聞かれたときには首を縦に、好きに変えていいと言われたときには首を横に振った。
歌詞を変えようなんて大それたことを提案されても――ユイのようなタイプじゃなければ――恐縮して当然だ。
それにしても自分が作った歌詞を変えていいって言うなんて器がでかいな。

立華が前に向き直ると岩沢もギターを構える。

『楽しんでね』
岩沢は一言いってから先ほどと同じように、静かで柔らかい音で演奏を始めた。
立華は真っ直ぐ音無達のいるあたりを見つめながらその音にあわせて歌い始める。
――天使のような歌声。
音無は立華をはじめて見つけたあの雑踏で感じたことを再び感じていた。
それもあのとき以上にはっきりと立華が本物の天使だと錯覚してしまうほどに。
ただ、他の観客の反応はいまいちだった。
バラードだからか？　いや、それだけじゃない気がする。
そういえばＭｙ　Ｓｏｎｇを聞いてガルデモにほんの少しだけ興味を持って、ネットで調べたことがあった。
そのときのＭｙ　Ｓｏｎｇに対する評判は
――バラードなんてガルデモらしくない。
――岩沢さんがソロ活動を狙っている。
こんなのばかりだった。
だからこの会場にはＭｙ　Ｓｏｎｇが好きじゃない人が多いのかもしれない。
さらにそれを歌っているのが赤の他人のしかも素人だ。
反応がいまいちなのは当然のことなのかもしれない。
でも、それでもいいか。音無はそう思った。
なぜって――
「立華の歌……すごい好きだな」

「奇遇ね、あたしもよ」
少なくとも俺とゆりが立華の歌を大好きだからそれでいい。

一度目のサビが終わると岩沢は急に演奏をやめた。
遊佐はまだ鐘を鳴らしてないし本人も合図は送っていない。
イレギュラーな事態にひさ子が声をかける。
『岩沢、どうしたんだ?』
岩沢の返答は意外なものだった。

『彼女の歌はあたしらが聞いていいもんじゃない』
『どうして?』
歌った本人も岩沢の真意は汲み取れないようだ。
でも、うぬぼれかもしれないが俺にはなんとなく岩沢の言っていることがわかるような気がした。
だから俺やゆりは好きになれて他の人には届かなかったんだ。

『立華さんの歌はたった数人の大切なだれかに向かってる気がする』
『そうなの?』
自分が歌に込めた気持ちのことを言っているのに立華は聞き返した。
これにはさすがに岩沢も苦笑いを見せる。
『たぶんね』

終了

立華が最後の一人だったのでイベントはそこで終了し、その後はユイが待ち望んだライブが行われた。

その前にガルデモは衣装チェンジで裏に戻ったけれど、関根だけはその場に残った。

おそらく、入江の分を大山に着せたからだ。

だから罰として関根の分を入江が着ることになったんだろう。

ただ、転んでもただでは起きないのが関根だ。

一人で舞台に残った関根は、途中で中断した入江の恥ずかしい話の続きを喋り始めた。

入江が急いで戻ってくるまでの数分間は完全に彼女の独壇場だった。

肝心のライブはというと、時間の都合かそれとも元々イベントのおまけだったからか五曲だけ。

しかし、それを感じさせない盛り上がりをみせて、あらためてガルデモのパワーを感じさせられた。

いや、分けてもらったと言ったほうがいいのかもしれないな。それぐらい元気になった。

席に戻ってきたユイなんか、最後の曲で日向に肩車してもらいながら声援を上げていた。

数時間前のお姫様抱っこのくだりはなんだったんだ。絶対に肩車のほうが恥ずかしいだろ。

あと変わったことといえば立華だけが座ったままで行儀よくライ

ブを楽しんでいた。
たしかに、こういう場所で立つのはマナーが悪いことだと思う。
でも、ここまで皆が立って楽しんでいる中で一人だけマナーを守っているなんてもったいない。
余計なお世話かもしれなかったが放っておけなかった。

耳元に顔を近づけ立華に聞こえる程度の声をだした。
「座ったままじゃ見えなくないか？」
立華は少しこちらを向いて頷いた。
「でも、迷惑がかかるから……」
「後ろの人も立ってるし立華が立っても迷惑にはならない」
音無の言葉を聞いて立華はチラッと視線を後ろの席へ向けた。
「な？」
音無が同意を求めると立華はまた頷いた。

それからは立華も立ってガルデモのライブを楽しんだ。

あんなに盛り上がったライブも終わり人もいなくなって、会場内は寂しくなっていた。
ただ音無達は訳あって、まだその会場に残っていた。

「藤巻君待ってたら大分遅くなっちゃったね」
それを聞いた藤巻は後ろから腕を大山の首に巻きつける。
そして顔を近づけるとどすの利いた声をだした。
「大山ぁ……それはあれか、俺への文句かよ」
「ち、違うって！」

慌てて否定して拘束から逃れようとしたが大山の力では藤巻の腕はびくともしなかった。

すると、なぜか直井が藤巻の前に立つ。

「神の施しがなければ貴様はまだ寝たままだった。感謝しろ」

「はぁ？　てめぇなに言ってんだ」

当惑の色を隠せない藤巻の質問には答えず直井は顔を指差す。

「俺の顔がどうした」

藤巻はますます顔にしわを寄せる。

そこへゆりが口を挟んだ。

「ほおにポテトチップスのかけらついてるわよ」

「かけら？」

藤巻は大山から離れて手を自分の頬に伸ばし、ついていたお菓子のかけらをとると納得した。

「あぁ、これは医務室で竹山からもらったんだ」

これを聞いて、直井の態度はますます大きくなり、ますます見下していた。

「それは神である僕が竹山と名乗る愚民に与えたものだ。それを貴様が食べたということは神である僕が与えたことになる」

すごい論理だ。そもそも、そのお菓子は没収されたんじゃないのか。

あれ、でもどうして竹山が話に？　医務室での出来事を知らない音無は少し困惑した。

藤巻も気絶していたために音無と同じく、なにが起きたかは知らない。

「高松、本当か。ずっと看てたんだったら知ってんだろ」

だから、ずっと起きててずっと医務室にいた高松に聞くしかなか

った。

その高松は眼鏡に手を当てたままタメをつくる。

「……事実ですね」

散々もったいぶった後に悲劇を語るような口調で直井の話が真実であると告げた。

「ふっ」

「くそっ」

それを聞き直井が勝ち誇ると藤巻は悔しそうに手にしていたかけらを口に放り込んだ。

その光景を見ていて音無はあることを思い出した。

「そういえば遊佐が会場内でものを食べたら血を吐いてどうたらって言ってたよな」

「なんだおめぇ、びびってんのか」

表情を一変させ薄ら笑いを浮かべた藤巻は今度は音無の首に腕を回そうとした。

「貴様！　神に恩がある身分で音……」

「いや、そういうんじゃないけど」

遊佐の言葉を現実のものにしてくれたのは藤巻なんだけどな。

藤巻の腕を避けながらそう思ったが口には出さなかった。

「あるわけねぇだろ。みろ、まだ俺はピンピンしてんぜ」

藤巻は音無を捕らえ損ねた腕で力こぶをつくってアピールする。

そのアピールを見た高松が服を脱ごうとしたがそれは大山が止めてくれた。

しかし、藤巻がここまで自信満々だと逆に不安だな。

会場を出るまでは油断しないほうがよさそうだ。

「あさはかなり……」

椎名の声がした方へ視線を移すと立華が携帯電話を取り出していた。

音無はとっさに立華の指と携帯の間に差し込んだ。
立華は不思議そうに首をかしげる。
「立華、電源は会場に出てからのほうがいいと思う」
「どうして？」
当然の質問だが音無は困った。あくまで感覚的なものだったからだ。
「えーと……なんとなくな」
「わかった。音無君がそういうなら」
だから音無はぼやかしてしまったが立華はそれで納得してくれたようだった。

携帯をそのまましまうと、さっきの立華のように携帯を取り出していたゆりに声をかける。
「ゆり、会場から出るまで携帯電話は電源を切っておきなさいって音無君が」
「なんでよ」
ゆりは立華にではなく音無に直接理由を聞いてきた。
「念のためかな」
音無が一瞬だけ藤巻を見るとゆりもその視線を追う。
「念のため――ね」
ゆりはそれだけで音無の懸念していることがわかったようだった。

「……ゆり、まきびしの入った竹筒は見なかったか」
ゆりの背後にいた椎名が声をかけた。
「見てないわ。落としたの？」
「うむ……」
椎名は音無と立華にも視線で聞いてきたが二人とも首を横に振る。

ゆりも立華も普通の落し物のような反応をしているけどまきびしって……。
ただそれを言ったら浮きそうなので心の中に留めておいた。
「そうか……少し捜索してくる。先に帰っててていいぞ……」
そう言うと椎名はどこかへ行ってしまった。

「椎名って喋れたんだな」
「あたりまえじゃない。」
ゆりは音無の感想を一蹴すると手を叩いた。
「さっ、帰りましょっ」

「俺達は用事があるから、じゃあな」
「またね」
「失礼します」
会場から出ると藤巻と大山と高松は駅とは逆方向へと歩き始めた。

「これって待つ必要なかったんじゃね？」
「アホですね」
「音無さんと過ごす時間を長くしたことは評価する」
「奏ちゃん楽しかった？」
「うんっ」
「いいライブだったよな」
それぞれが思い思いの会話をしていると背中に気配を感じた。

「……なかった」
「うわっどこから沸いた」
「ひなっち先輩！　揺らさないでくださいよ！」
急に現れた椎名に驚いて日向は転びそうになった。

「戻ってくるの早かったわね椎名さん」
「うむ……」
「神である僕の後ろを……」
この平和な時間。それは突然打ち破られる。
「それを返せぇぇぇぇぇッ！」
聞き覚えのある声にいっせいに七人は振りかえった。

別れたばかりの三人の向こうに、左手にはギターケースを右手には光るものを持った男がこちらに走ってきている。
そして、その奥には男を追いかけるひさ子と、息も絶え絶えなのに男を追いかけようとする岩沢の姿があった。

演奏後

ライブが終わり楽屋までの通路をひさ子たちは歩いていた。

「いやー、いい汗かいた」

首にかけたタオルで汗を拭くあたしの前で、入江と関根が和気藹々と今日のライブのことを話していた。

本当は関根に説教をくれてやらなきゃいけないんだけど後で――だな。

演奏後の余韻に浸っているところに水をさすような野暮な真似はさすがにしない。

視線を隣で歩いている岩沢に移すと、また考えごとをしていた。

岩沢のことだから音楽のことだとは思うけど……。一応聞いてみる。

「いい曲でも浮かんできた？」

「ん？　それもあるけど」

「じゃ、ユイちゃんだっけ、あの子だ」

あたしは軽い冗談のつもりで言ったのに、岩沢は否定しなかった。

「あの子に書かせたら面白いんじゃないかってね」

岩沢がそこまであの子をかっていたとは知らなかった。

「それに……」

「それに？」

そこで岩沢は無言になった。

ズバッとものを言う岩沢が言いにくそうにしている。

それであたしはピンときた。

「もしかして新曲の方じゃなくてあっちか？」

岩沢は無言で頷いた。

最近のガルデモはＡｌｃｈｅｍｙでブレイクしたことでテレビ出演がすごい増えている。

最初は岩沢も演奏する場所が増えたと喜んでいた。

でも、実際は違った。

移動時間やバラエティー番組とかで場所は増えたとしても演奏する時間は目に見えて減っていた。

ガールズバンドというより、アイドルのような扱い。

あたしや関根や入江はそれでも大丈夫だった。

それはそれで楽しめるし、苦にはならない。

でも、岩沢はそうもいかなかった。

岩沢にとって音楽は生きている証そのもの。

演奏する時間が減れば食事を削り、作詞作曲する時間がなければ睡眠を削る。

疲れやストレス、フラストレーションが日に日に溜まっていっているのは明らかだった。

ガルデモは言うなれば岩沢にほれ込んだ最初のファンのあたし達で結成したバンドだ。

だから岩沢には音楽をしてて欲しい。音楽を楽しんでて欲しい。

そこで、あたしが考えついたのが昔のように岩沢にソロ活動をしてもらうってことだった。

とは言っても、岩沢にガルデモをやめてもらうわけじゃない。

岩沢にやめてもらうのは音楽に関しない仕事だけだ。

その間に岩沢にソロ活動をしてもらうそんな話だった。

ただ、岩沢が抜けると言うことはボーカルって華が抜けるってことになる。

そうすればテレビ出演等は減ってしまうはずだ。

音楽を岩沢にやらせたいという面で、それはいいことなのかもしれない。

でも信用を一気になくし音楽をする場までも減ってしまう危険性もあった。

そこであたしと岩沢が考え付いたのが、岩沢に匹敵する魅力のある人をガルデモに迎え入れることだった。

要するにガルデモをツインボーカルにするって話だ。

これで音楽の幅は広がるし岩沢も音楽に専念できるようになる。

一石二鳥だ。

でも、これには大きな問題があった。

そう、岩沢に匹敵する魅力を持つ人なんてそういない。

だから、まだ関根や入江にすらも話していなかったし夢物語だと思っていた。

そこへ現れたユイって女の子。たしかに音楽への愛は伝わってきたけども……

「あの子は演奏も歌も未熟すぎやしない？」

「まぁね。でも……」

「なんの話をしてるんですか？」

でも……の先は入江に遮られてから聞けなかった。

このことは時期尚早ということで、ごまかそうとしたらタイミン

グよく関根が別の話題を振ってくれた。

「それよりも聞きましたっ？　水曜日を休みにしてくれるみたいですよっ」

関根のテンションはライブのときと同じぐらいあがっていた。

まぁ久々の休みだし気持ちはわかるけど。

「本当に？」

岩沢は聞いていなかったようで半信半疑だ。

「あたしもさっきマネージャーさんに聞きました」

「なら本当だ」

でも入江の証言を得ると、すぐに疑うことをやめた。

これに対して関根は不服そうにする。

「それどういう意味ですかー。あたしが嘘つきみたいじゃないですか」

「悪かった、悪かった」

「嘘もダメだけどイタズラもダメだよな関根？」

ちょうど思い出したので、あたしはさっき切り出し損ねた話題を出した。

「ひ、ひさ子さん……今、それですかっ？」

関根は不意をつかれて焦った顔になった。入江もこの時ばかりは鬼になっている。

「しおりん、楽になろう」

「みゆきちまでっ」

いつものように関根には逃げ道はなかった。

さてどんな罰を与えようか。ブログ更新は当然として別になにか……。

関根が堪えそうなことを考えるといいものを思いついた。

「一週間毎日ブログ更新と新曲の歌詞を提出なんてどうだ」
「ひいいいいっ！」
関根はこの世の終わりを告げられたかのような声を出した。
「もちろん、ブログは毎日チェックするし歌詞は岩沢に提出ね」

止めをさしにかかると関根は岩沢にすがる。
「岩沢さん助けてくださいっ」
「楽しみにしてる」
関根はしっかりと駄目押しされた。

「あっ取材の人を待たせるといけないから早く行きましょう。みゆきちも早く早くっ」
「ちょっとしおりん！　そんなに引っ張らないでよ」
関根は入江の手を引いて現実逃避に走る。

「取材？」
岩沢がハトが豆鉄砲をくらったような顔をしてあたしを見た。
いつものように話を聞いていなかったんだな。
「雑誌の取材。打ち合わせのときに言ってたじゃん」
「そうだっけ」
「そうだった」

控え室に戻り汗を吸った服を着替えると記者が待っている部屋に向かった。
さすがの岩沢もこのときばかりはアコギは楽屋に置いている。
でも無人だと不安だからということで遊佐の連れてきた二人に扉を見張ってもらうことにした。

こいつらは何度か会ってるが本当に人畜無害だ。
しかも片方の男は高校生にして柔道五段の腕前らしい。
年齢制限で段位はもらえてないって話しだけど強いことに変わりない。
だから安心して任せられた。居眠りをするから長時間は向かないけどな……。

岩沢と部屋に入ると、すでに関根と入江が記者と楽しげに話していた。
「あっひさ子さん」
関根が気付くと記者もこちらに気付く。
「今日はよろしくおねがいします」
挨拶を済ませると取材は始まった。

「じゃ、あたしは戻るから」
取材が始まって十分ほど経つと、岩沢にいつもの禁断症状が現れた。
おそらく、なにか浮かんできてそれを試すか書きとめたくなったってところ。
記者も苦笑いだったが止めはしなかった。
十分間は岩沢に質問を集中させていたし、禁断症状があることを知っていたんじゃないかな。

岩沢が部屋を出てってからすぐ、怒鳴り声が聞こえた。
「それに触るなーーーッ！」
「岩沢！？」
それに驚いたあたし達は急いで声のした控え室に方へ行った。

すろと驚きの光景が広がっていた。
扉の横で腕をおさえしゃがみこむバンダナ。それを介抱している柔道着。
その向こうには走る岩沢。そしてさらに向こうにはギターケースを持った男が走っていた。

一瞬で状況を把握できた。
楽屋泥棒だ。アコギを盗ったんだ。それを岩沢が追っているんだ。
あたしも男を追いかけようと駆け出すと柔道着が叫ぶ。
「あいつは刃物を持っておる！　追うのはよせっ！」
「なっ！？」
見ればたしかにケースとは逆の手にナイフを持っている。

でも、それを聞いていたはずの岩沢は止まらなかった。
それどころか、どんどん加速して泥棒男に迫っている。
「岩沢、よせっ」
やっぱり、あたしが叫んでも止まらない。
「くそっ」
あたしも再び二人を追いかけた。

逃げる男が少し後ろを見る。追いかけているのがあたしと岩沢だと気づいたみたいだ。
すると男はナイフを持った手を胸元に持っていった。
背中側からではよく見えないけど、なにかしら行動を起そうとしているのはわかる。
「岩沢、気をつけろ！　あいつなにか企っ！？」

男は緑の筒のようなもの――おそらくは竹筒――をバトンを受け

取るときのように後ろに突き出した。
そしてそのまま中身を後ろへばら撒く。
ビー球かなにかか？　いやあれはまきびしっ？

でも、岩沢の目にはまきびしなんて映っていないみたいだ。
「足元っ！」
当然あたしの声も届かず、岩沢はまきびし群に突っ込んで、そのまま走り抜けた。
あたしはまきびし群を飛び越えて回避する。
岩沢の靴はそんなに厚手ものじゃなかったから怪我をしているはずだ。
その証拠に追うスピードが落ちている。

あたしが岩沢に追いつく頃にはもうすでに泥棒は建物から出てしまっていた。
入り口には警備員がいるはず。そこで捕まえられるか？　いや、刃物を持ってるし……。
あたしの頭の中は妙に冷静だ。
逆に岩沢は完全に頭に血が上っているようだった。

岩沢を追い抜いて外に出ると、二人の警備員さんはすでに倒れていた。
入るときにやられてたんだ！
追ってるのはあたしら二人しかいないし、もう追うのをやめて岩沢を止めるべきか？
でも、あれは岩沢にとって大切な……。

答えが出ないまま、とうとう敷地内からも出てしまった。
そこには男の他に普通の通行人もいる。
まずいっ！　警告しないとっ！

肺の酸素を使いきる覚悟を決め、大声を出そうとすると先に後にいた岩沢が叫んだ。

「それを返せぇぇぇぇぇッ！」

「なにがあったんですか？　今の声って岩沢さんですよね？」
振り返っても、みんなが壁になって見えないのかユイは後ろから日向に説明を求めていた。
「あれは……たぶん泥棒だな。それをひさ子と岩沢が追いかけてるっぽいな」
「あの泥棒、岩沢さんのアコギを盗んだみたいね」
日向に続いてゆりが状況を説明する。

それを聞いた途端にユイはぶちぎれた。
「そいつ何様のつもりだオラァァッ！」
その直後に鈍い音が鳴り、日向がよろけながら一歩前に出た。
背中を押さえながら顔をしかめている感じからして、ユイにやつあたりされて叩かれたんだな。
「いってぇ……なにす……」
「すぐに捕まえてきてくださいっ」
文句を言おうとした日向にユイは強い口調でお願いした。

ユイと数秒見つめあうと日向は小さく頷く。
「わあったわあった。それにちょうど見逃せる気分じゃなかったしなっ」
体を反転させて走りだそうとしたが急にピタリと止まった。

そして顔だけをこちらへ向ける。
「音無、ユイを頼むな」
「あ、ああ……」
音無は走り出した日向を見て藤巻に続いて嫌な予感を覚えた。

嫌な予感を覚えたもう一人はというと、立ち止まった泥棒と睨みあっていた。
「へへっ、ここは通行止めだぜ」
意外なことに隙がない。ちなみに大山はその後ろで座り込み震えている。

そこに泥棒の後ろからはひさ子が追いついてきた。ただ、かなり疲れた表情をしている。
その隣には、いつの間にか回りこんだ高松がいた。
それに気付いた泥棒はどうにか突破口はないかと探っているようだった。

「しゃーっいけーっそこだーっ！」
ユイが謎の応援をしていると、徐々ににじり寄っていた藤巻が飛びかかろうとした。その時――
「やめろっ！　そいつは刃物を持ってるっ！」

ひさ子の言葉で全員に――特にユイと日向と大山、そしてなぜか泥棒にも――激震が走る。

「な、なんだってっ」
「先輩！　今すぐにユイを連れ去ってください！」
日向は足を止め、ユイはすぐさま逃がしてもらおうとした。
「さっきまでの勢いはどうした」

すると立華が前に出る。
「だったら、あたしが行く」
「立華！？」
「奏ちゃん！？」
無意識に音無は立華を追いかけようとした。

しかし、だれかが腰に抱きついていて動けない。

回された腕を見ると制服だ。それですぐにだれの腕なのかわかった。

「直井、放してくれ」

「音無さんを危険な目に会わせる訳には行きません。僕に任せてください」

「は？」

直井に気を取られていると、立華はすでに立ち尽くす日向を追い越していた。

「あの子は俺に任せろ。音無はユイたちを頼む」

日向は音無にそう言い残してから再び走り出そうとする。

が、落ちていた石を踏んだことで体勢を崩し、盛大にこけた。

「ひなっち先輩、ダサいです」

ユイは切なそうに目を逸らし、直井はそれを見て嘲笑を浮かべながらふんぞり返って歩き出した。

音無は日向がこけたことで、なおさら立華を追いたくなる衝動が強まった。

でも、たしかにユイの周りに男がいないと心配になるのも事実だ。

腕組みをして目を瞑り微動だにしない椎名や携帯電話でどこかに連絡を取ろうとしているゆりを見るとさらに不安になった。

それに立華はそこら辺の男よりも強いのは藤巻の体を持って証明されている。

さらに言えばさすがの立華もナイフ持った相手に無茶はしないはずだ。

万が一、しようとしても他のＳＳＳの面子が止めるだろう。

だから音無は立華と一応は日向と藤巻と高松も信じて待つことにした。

その一方、向こうでは笑顔を取り戻した泥棒がナイフを振り回していて、だれも近づけなくなっていた。

「あーもう繋がんないわね。野田君、いるんでしょっ！」

突然、ゆりが大声をあげた。

「呼んだかゆりっぺ！」

するとすぐさま――足を引きずりながら歩いている岩沢よりも向こうから――大きな音を立て現れた。

「うおっ、あいつどっから現れた!?」

日向が驚くのもわかる。野田は三階建てぐらいの建物の屋上から飛び降りて登場した。

普通の人間だったら入院、下手すればあの世行きだ。

でもゆりはそんなこと無視して指示を飛ばす。

「あの男を捕まえて！」

「了解だ。くらえぇぇぇぇぇぇっ」

野田はゆりが指差した泥棒に向かってハルバードをおもいっきり投げつけた。

「ハルバードを投げたっ!?」

「あいつ捕まえる気ぜってぇねぇっ。真っ二つにする気だろっ」

「後ろから来てるぞ！　よけろっ！」

音無たちの物騒な発言のおかげで岩沢以外がそれに気付く。

ただ、幸いなことに岩沢とひさ子のいる位置をハルバードは通らなかった。

高松が地面に伏せるとハルバードはその上を通って泥棒に迫る。

その危機を前に泥棒は情けない声を出して命からがら避けた。

その際に慌てすぎたのか――ギターはしっかりと抱えていたが――ナイフを落としていた。

「ひっ」

目標を見失ったハルバードは腰を抜かしていた大山の目の前に突き刺さった。

ナイフを手の届かないところまで蹴っ飛ばしたひさ子は怒り心頭といった表情で野田をにらみつける。

「ちっ、よけられたか」

野田はそれを気にするそぶりも見せず、ただ悔しそうにしていた。

「あいつアホだろ。もしもギターに当たったらどうしてたんだ……。――ん？　なんだ直井」

手前では脱力して膝をついている日向を直井が見下ろしていた。

「さあ僕の……」

「いたぞ！　あの男だ！」

突如、声と共に二人の警察官が野田の近くに現れた。

これでやっと泥棒が捕まると思ったのもつかの間、警察官は野田を指差している。

「追っ手か」

野田はこともなげに言うと、出てきた警察官とは逆に路地へ入って行った。

「逃がすな！　追え！」

警察官は泥棒には目もくれず、音無たちがなにか言う間すらもなく野田を追っていってしまった。

「あいつ、なにしに来たんだ」

「そのまま牢屋にでもぶち込まれてくれ」

音無とゆりは肩を落とし大きなため息をついた。

泥棒は野田のせいで大きく乱れたこの合間に体勢を立て直し、ギターを抱えたまま包囲網から逃げ出そうとする。
「そぉはいかねぇぞ」
しかし、藤巻ともう一人がそれに反応した。
藤巻は横をすり抜けようとする泥棒のわき腹めがけてタックルする。
「これでてめぇの人生も終わりだっ」
ちょうどその時、後ろでもう一人も泥棒を狙っていた。
「藤巻うしろっ！」
「あ？」
音無が叫んだときには既に手遅れだった。
「ガードスキル――ハンドソニックｖｅｒ．２」
「――――っ！」
攻撃態勢に入った立華と泥棒の間に入ってしまったがために藤巻は背中にもろに一撃をくらった。
泥棒はその隙に腕から脱出してこっちの方へ再び走り出す。
泥棒がいなくなったことで体を支えがなくなった藤巻は顔から地面に崩れ落ちた。
そこに高松が駆けつけ、大山も這って近づいく。
「大丈夫ですか？」
高松がうつぶせの藤巻を抱え上げあおむけにするが藤巻はぴくりとも動かない。
「藤巻君が鼻から血を吐いて気絶してるよ！」
それを見た大山は変な表現で藤巻の状況を誰かに説明していた。
立華はというと――
「救急車をお願いします。場所は……」

その近くの電柱の前で救急車を呼んでいる。

「やっぱり、そうなるよな」

「ボーっとしてないで音無君、来るわよ」

遊佐の忠告が的中したことを哀れんでいると、ゆりに意識を引き戻された。

泥棒の方を見るとギターを抱え、真っ直ぐこちらに向かってきていた。

決着

泥棒はギターを抱え、こちらに向かって走ってきていた。
今、近くにいるのはゆりとユイと椎名。とにかく今はこの三人の安全を確保しないといけない。
野田の暴走と藤巻の犠牲のおかげでナイフは持ってないからそこは安心だ。
もしも人質にとろうとしてきたら、俺が取っ組み合ってその間に逃げてもらうしかない。

ただ、岩沢のギターはまだ相手の手の中にある。
大切なものらしいから下手なことはしたくない。
理想は泥棒をうまく足止めして、ちゃんとした警察官の到着を待つことだ。
これだけ騒ぎになってるんだからすぐに来るはずだ。それまで持たせられれば……。
音無は気を引き締めた。そこへ泥棒の手前にいる二人が目に入る。

「そういえば、まだ日向が――」
日向がかもし出す異様な雰囲気に、音無は途中で言葉を失った。
「ひなっち先輩はなにかにとりつかれたんですか」
ユイの言葉通り、今の日向はそんな感じだ。

顔はこちらからではうかがえないが、直立不動のまま下を向いてぶつぶつと喋っている。
「ふん、間に合わなかったか」
たぶん、その横にいる直井がなにかしたんだとは思うが本人に悪びれた様子はなかった。
泥棒に気付いた直井は日向から離れて進路を塞いだ。

「仕方ない。神である僕が少し揉んでやろう。さぁ、僕の目を見るんだ」
泥棒は直井を無視して脇を通り過ぎた。

「……」
元から期待していなかったので特にコメントはない。
ユイたちの近くで取っ組み合うわけにも行かないので、音無はこちらから距離を詰めようとした。
すると、ずっと沈黙を守ってきた椎名がそれを手で制した。

「椎名？」
「……わたしが出よう」
椎名の有無を言わせないに迫力に音無は気圧された。
まきびしとか持っているぐらいだから椎名もかなりの腕前なのかもしれない。
音無は大人しく引き下がって椎名に任せることにした。

「椎名さん、油断しないでね」
手を合わせて、でたらめな念仏を唱えているユイの車椅子を押すゆりの言葉に椎名はうなずいた。
それから、どこからともなく犬のぬいぐるみをとり出すとゆりに突き出した。
「……預かっていてくれ」

突然、念仏を唱えていたユイが両手を突き出した。
「ゆりっぺ先輩はユイのせいで両手が塞がっているのでユイがその子を守りますっ」
「……たのんだ」
椎名はユイの小さな手に犬のぬいぐるみを優しく置く。
「たのまれましたっ」

ユイはすぐさまそれを胸に抱え込んだ。

悠長なことをしていたので泥棒はすぐそこまで来ていた。
「よくぞ、たどり着いた……かかってこい……」
椎名は一人だけ前に出ると泥棒に向かって手招きする。

しかし、泥棒は直井に続いて椎名も無視しようとした。
そんな泥棒に椎名は素早く足元へくないを投げ込んだ。
それに遮られて泥棒の足が止まる。
「……あさはかなり」
……くないを持っていることもつっこんじゃいけないのか？

泥棒は椎名が自分を逃す気はないと悟ったようで素早く足元に刺さっているくないを拾う。
次の瞬間、そのくないは椎名の投げた別のくないによって音を響かせ弾き飛ばされた。
それにはさすがの泥棒も驚愕の表情を浮かべ、来た道を慌てて引き返そうとする。

「楽屋泥棒を発見しました」
ちょうどそこに、音無たちが出てきた入り口から数人の警備員が出てきた。
さっきの警察官とは違って野田を追っているってことはなさそうだ。

前に警備員、後ろに椎名。泥棒の退路は完全になくなったかに思われた。
「な、なにがどうなっている？」
しかし瞬きをすると、いつの間にか警備員が地面にはりつけにされていた。

こんなことができそうなのはこの場に一人しかいない。
ゆりがその犯人の名を静かに呼んだ。

「椎名さん？」
「……あやつを捕まえれば文句はない。そうだろう……？」
椎名に悪びれる様子はなかった。
「そうだけど」

「あの人、逃げようとしていますっ！」
ゆりと椎名がもめている間に泥棒は全力疾走で路地に逃げ込もうとしていた。
「……逃さんっ」
しかし、椎名はあっという間に回り込んで泥棒の進路を塞いだ。

被害者が数人でたけど、これでやっと片がつくな。
武器を失い、戦闘力は負けて、逃げ足でも敵わない。
音無の目から見て泥棒は完全に終わっていた。
……いや、待てよ。まだあいつの手には岩沢のギターがある。
もしあれを盾にされたら？

音無の考えとシンクロしていたかのように泥棒が動いた。
「あんなところに子犬が！」
泥棒は椎名の背中にある路地の向こう側を指差している。
「……あの泥棒もアホですね」
ユイにすらこの言われよう。音無もゆりも呆れた顔を浮かべていた。

もちろん椎名もそれに動じな……いや、少しだけ動じていた。
見ようか見まいか葛藤しているようで目の動きが怪しい。
泥棒は椎名がよそ見する瞬間を狙ってるんだ。

だれにでもわかるようなことだけれども音無は忠告しようとした。

しかし、その必要はなかった。

椎名は後ろを振り向くと同時に泥棒の足元へ再度くないを投げてけん制し、すぐに前に向き直る。

泥棒は一ミリたりとも動くことはできなかった。

「すごいな」

「目で追えませんでした」

「とうぜんよ」

驚く二人に対し眉一つ動かさないゆりにさえ想定外のことが起きた。

「本当に子犬が閉じ込められてるぅぅぅーーーー！」

急に叫んだかと思うと椎名はものすごい勢いで再び振り返り、そしてそのままどこかへ向かって疾走する。

取り残された俺たちや泥棒はあまりのことに呆気にとられた。

椎名の行く先はどうやらゲームセンターみたいだ。

そこには一台のＵＦＯキャッチャーが置いてあった。

もしかして、あの中に子犬がいると勘違いしたのか？

「……不覚。ぬいぐるみだった……」

まさにその通りだった。

「音無君！　来てるわ！」

「うわっ」

椎名に気を取られている間に、本当にすぐそこまで泥棒が来ていた。

向うには立華、路地には椎名がいるからこちらに来たんだろう。

音無は咄嗟に手を伸ばしたが空を切った。

椎名ほどじゃないけどこの泥棒も身のこなしが軽い。
泥棒はそのままゆりたちの横を走りぬけた。そこから先は坂道。
音無が追いかけようとすると、すぐ後ろから奇妙な鳴き声が聞こえてきた。

「ヴァー」
「なんだっ？」
音無が振り返る前にユイがその正体を教えてくれた。
「ひなっち先輩！？」
「ヴァー」
日向は解読不能な言語を操り、四足歩行で坂に突っ込んでいった。

音無は日向をそんな風にした張本人に視線を向ける。
「さぁ、ギターを奪って好きなだけ高く上げてくるがいい」
直井は満足そうにしていた。

「直井、なにしたんだ？」
「催眠術でギターを大事にしながら高くかかげることが趣味の熊にしました」
「なんで熊なんだ？」
「僕の趣味です」
「あの鳴き声は？」
「それも僕の趣味です」
「おまえ……」

音無が脱力していると坂の下で争う声が聞こえてきた。
二人はギターケースを引っ張り合っている。
でも、力は熊の暗示パワーもあってか日向のほうが優勢だ。

それを見たユイが自分の膝の上に置いていたバッグとぬいぐるみ

を手に取った。
「ゆりっぺ先輩、ちょっとこれを持っててもらえますか？」
「いいけど、どうしたの？」
ゆりは不思議がりながらもユイから手荷物とぬいぐるみを預かる。
無事にゆりに荷物が渡ったのを確認した後、一気にユイが噴火した。

「岩沢さんのアコギは大切に扱えやぁぁぁぁぁっっッ！」

叫びと共にユイが一人で坂に突入する。
「えっ、ちょっと！」
「なにやってんだっ！」
音無とゆりは慌ててそれを追った。
しかし、坂でスピードをどんどんと増していくユイには追いつけない。

下では力比べは続いていたが、とうとう日向が泥棒から奪いとった。
そして高々とギターケースをかかげると雄叫びを上げる。
「ヴァーッ！　あれっ？　俺なにしてんだ？」
満足したからか日向の暗示がいきなりとけた。

そこにキャラの変わったユイの怒号が飛ぶ。
「気を緩めんなぁぁっ！　敵はまだ生きてるっ！」
たしかに、まだ泥棒はギターを諦めていなかった。

「うぉりゃぁぁぁーーーっ！」
「ぐぁふっ」
ユイはそれを阻止するべく車椅子から飛び降り、その勢いのままに日向へタックルをかました。

日向を下敷きにして少し滑ったユイは空に舞ったギターを見事キャッチして腕の中へ収める。

なおも諦めない泥棒がユイに襲い掛かろうとしたそのとき、坂の上からくないが飛んできた。

「……あさはかなり」

椎名の登場でさすがに諦めたのか泥棒は逃げようとする。

しかし、そこへ飛び込んできたゆりの膝蹴りが泥棒のあごにクリーンヒットした。

音無はゆりが椎名の持っていたヒモで泥棒をふん縛るのを確認してから、ユイたちのもとへ行った。

ユイはまだ仰向けの日向の上に座りこんでギターを抱え、うっとりとしている。

「それ生きているのか？」

「生きてます」

ユイはケースに頬擦りをしながら即答した。

たぶん今のはギターについてだよな。

「ギターじゃなくてさ、日向はどうなんだ？」

「ひなっち先輩ですかぁ」

音無の問いかけでようやくユイは日向に目を向けた。

体をねじってから顔を覗き込み、頬をはたいたり親指と人差し指で目を開いたりして安否の確認。

それが終わると音無に向き直った。

「えーと、ダメかもしれません」

「そっか」

「勝手に殺すなぁっ！」

日向は飛び上がるように上半身だけを起しながら叫んだ。

その直後にユイは喜びの声をあげた。

「あっ岩沢さんだっ」

ユイの視線を追うと、たしかに坂の上に岩沢がいた。

彼女はひさ子と立華にそれぞれ肩を支えられ、苦悶の表情を浮かべている。

「おい無視すんな」
日向が不満げな声を出し顔をユイに近づけたとき悲劇は起こった。
「無事に取り返しましたっ」
ユイはまるで自分だけの手柄のように誇らしげにギターケースを高々と掲げる。
その際に肩が日向のあごに入った。その勢いのまま、頭はきれいな円弧を描きそのまま後頭部を強打する。
うめき声をあげながら悶える日向は気の毒だった。
「日向……」
「岩沢！」
音無がそんな日向を労わろうとしたところ、ひさ子が大きな声をあげた。
「どうした！？」
日向のことなんかすぐに忘れて坂の上を見ると岩沢が地面にへたり込んでいた。
でも、さっきとは打って変わって心底安堵したよう表情だ。
張り詰めていた緊張の糸が途切れて腰が抜けたんだな。
「音無先輩」
「ん？」
また新たな問題が発生したわけではないとわかって安心したところ、ユイが声をかけてきた。
「これを岩沢さんに届けてくれませんか」
掲げていたギターを音無に差し出す。
「自分で渡さなくていいのか」
ユイが岩沢に合法的に近づけるチャンスを自ら捨てるなんてらし

くない。
しかも、テンションがガタ落ちしている。なにか訳があるはずだ。
「はい。やらなくちゃいけないことがありますから」
「やらなくちゃいけないこと？」
音無はユイの顔が赤いことに気がついた。
……もしかして、人――特に異性――には言いにくいアレか？
でも、ユイは日向の前ではいつもストレートに『トイレ！』って言ってたよな。
憧れの岩沢にひさ子、会ったばかりの立華やゆりや椎名、それに泥棒までいるとさすがに恥ずかしいのか。
「とりあえず受け取ってください」
「あ、ああ」
ユイは押し付けるように、でも扱いは丁重にギターを音無に渡した。
トイレに行くとしたら車椅子が必要だよな。
音無は辺りを見回してみると車椅子のそばにゆりがいた。
「これ、壊れてるわね」
たしかに車輪やフレームが遠くから見てもわかるぐらい歪んでいた。
となると、だれかがユイをトイレまで連れて行くしかない。
でも、立華は岩沢についてるし日向は瀕死だし俺はギターを頼まれている。
他にだれか……ゆりか椎名……。ユイなら運べるか？　いやでも……。
音無は横目でユイを見た。

ユイは体をひねって自分の肩越しに日向を見つめている。
顔はさらに赤みを増し眼光は鋭くなっていた。それに少し震えている。

もう耐えられそうにないから日向を起して頼むんだな。
日向だったら『ここでしても構わん』とはじめは言うかもしれないが、なんだかんだ言って連れて行ってくれる。
音無は安心して立華たちのところへ行こうと一歩踏み出したとき、ユイが顔を赤くしていた本当の理由がわかった。

「いつまで変なとこ触ってんだコルァァーッ！」
「き、急になんだよっ？」
驚いて振り返るとユイは日向の首を絞めにかかっていた。
日向はそれを右手だけで必死に防いでいる。左手はユイの下敷きになって動かせないようだ。

「騒がしいけどなにかあった？」
いちゃつく二人のところにゆりがやってきた。
「それが……」
「ひなっち先輩があたしのふとももを触ってご満悦なんです」
「人聞きの悪いこと言ってんじゃねーよっ」
日向はすぐに否定したが、ゆりはユイのほうを信用したようで冷たい視線を浴びせる。
「それは日向君が悪いわね。大人しく首を絞められなさい」

「鵜呑みにすんなっ。なぁ、音無もなにか言って……あれ？」
ここで日向がなにかに気付いたように言葉を止めた。
「どうしたんですか？　やっとセクハラを認める気になりましたー？」
ユイは味方ができたのでご機嫌で首をなお狙う。

まだ、日向の左手が下敷きで、ふとももを触られたままなんだけどな。

日向は右手でガードしながらも真面目な顔でユイの顔を見つめた。
「お前、ふとももを触られている感触がわかるのか？」
「ごまかそうしたって……あれ？　変ですね」
ユイは手を止め、不思議そうに自分の足を見つめた。

「どういうこと？」
ゆりは状況が把握できないようで音無にこっそりと聞いてきた。
「ユイは昔あった事故で首から下が動かなくなったんだ。それで今も腰から下は痛みすら感じないはずだったんだけど……」

視線をゆりから二人に戻すと、ユイの体の下にもぐりこんだままな日向の左腕に力が入ったのがわかった。
その瞬間、ユイが歯を食いしばり目が大きく開き背筋を伸ばして空を見上げる。
数秒のその体勢で耐えると、勢いよく視線を落とし日向を捉え怒りをあらわにした。
「つねんなーーーっ！　痛いんだボケェーーーーっ！」

「これはいいこと――よね？」
腕の力だけで方向転換して飛び掛るユイを見ながら、ゆりは音無に問いかけた。
「そうだな。腕のときも痛みを感じるようになってから頑張って、あんなに動かせるようになったし」
音無は日向が学校帰りにユイの所へ毎日のように通い、リハビリを応援していたことを思い出した。

「じゃあ、そのうち車椅子も要らなくなるのね」

「楽観的過ぎるかもしれないけどな」
「夢があっていいじゃない。あっ、やっときた」
ゆりがパトカーや救急車がサイレンを鳴らしながら近づいてきていることに気づいた。

「音無先輩」
日向に返り討ちにあって髪の毛をぐしゃぐしゃにされたユイが音無に声をかけた。
ギターのこととはわかっていたが一応、話を聞いてみる。
「どうした？」
案の定、ユイはギターを指差した。
「やっぱりそれはあたしが責任を持って岩沢さんに届けます」
「それがいい」
音無は岩沢のギターをユイに返した。

「あたしが岩沢さんのところまで連れて行ってあげる」
「ありがとうございます」
ゆりはユイに近づき――軽々とまではいかないが――普通にお姫様抱っこした。
そしてそのままゆっくりと坂の上へ歩いていく。
すでに坂の上にいた岩沢の姿は見えなくなっている。
おそらく治療を受けているんだろう。

「ユイのやつ好き放題に殴りやがって……。――っ！」
日向は文句を言いながら立ち上がろうとしたが、顔をしかめて足を両手で押さえた。
「大丈夫か？」
それに気づいた音無は即座に日向の手をどけジーンズをめくった。
その足は真っ赤にはれ上がっていた。これは骨折かもしれない。

「ユイと一緒にリハビリできるな」
音無の皮肉に日向は苦笑いを見せた。
「怪我してなくてもユイと一緒にリハビリする予定だったさ」

数年後、ユイは日向に付き合ってもらいながらのリハビリを終え、本当に歩けるようになる。
そして今度は、岩沢やひさ子の厳しいレッスンを経てガルデモの新メンバーとして大舞台に立つ。
こんな夢物語のような未来を岩沢とひさ子、そしてユイ以外の全員がこのときは想像すらもしていなかった。

帰路

日向はユイと、岩沢はひさ子と、藤巻は高松と、それぞれ救急車で運ばれていった。

ＴＫも怪我を負っていたが「Ｌｅｓｓ　ｐａｉｎｆｕｌ！」と乗車を拒否したので、今は軽い治療だけを受けている。

警備員さんは殴って気絶させられたり貼り付けにされただけで大きな外傷はなかったので、こちらも乗らなかった。

それで俺達はというと警察署で事情聴取を受けた。

犯人が捕まっていることもあってそこまで時間はかかっていない。

ただ、直井だけは自分が神であることをアピールしすぎて今だ中にいる。自業自得だな。

あとは大山が野田のハルバードと椎名のくないを回収していたことで危うく前科が付きそうになったぐらいか。

「あー疲れた」

伸びをしながら歩くゆりを先頭に音無たちは警察署の敷地内から出る。

本当は車で送っていくと言われたが、ゆりが断固拒否して徒歩で帰ることになった。

「僕は藤巻君のお見舞いに行くからここで」

大山は警察官にもらった地図を頼りに駅とは逆方向へと歩いていく。

「椎名さん、あたし達も行きましょ」

ゆりたちも駅に続く道とは別の道へ歩いていこうとした。

「ど、どこへ行くんだ？」
大山はともかく、ゆり達はあまりに不自然だったので音無は呼び止めた。
「ちょっとね。音無君は奏ちゃんをよろしく。さ、椎名さん行こ」
なぜか、ゆりは素っ気ない。
怒らせるようなことをした覚えはないんだけどな。

「ゆり？」
立華もゆりの異変を感じ取ったらしく、心配そうな声を出した。
「奏ちゃんも音無君をよろしくね」
「わかった」
しかし、あっさりと引き下がった。
二人の間で聞こえない会話があったのかもしれない。

結局そのまま、ゆりと椎名はどこかへ行ってしまい立華と二人っきりになった。

そして今は立華の歩幅にあわせてゆっくりと駅に向かって歩いている。
このまま無言で歩いてても気まずくない――むしろ安らぐ――が立華は違うかもしれない。
だから音無は話をふってみることにした。

「あのさ」
声をかけると横で歩いていた立華がこちらを見上げる。
見上げたことでずれそうになったのかトンと手を帽子の上に置いた。

――かわいい。

彼女の何気ない仕草に思わず声が出そうになる。

こっちを見るなんて、今日も前回会ったときにも何度かあったはずだ。

でも、今日はずっとゆり達がいたし、前回は混乱の渦中にいた。

状況は似ているようでぜんぜん違う。

それよりも、立華は俺がなにか言うのを待ってくれている。早くしないと。

「立華ってガルデモの中でだれが一番好きなんだ？」

音無が咄嗟に選んだ話題はガルデモだった。

イベントに応募して来てるぐらいだから好きじゃないはずがない。

ただ、焦っていたので曲ではなくどのメンバーが好みかを聞いてしまった。

「あたし……あまりガルデモのことは知らないの」

しかも、返ってきた答えが衝撃的だった。

ガルデモのファンじゃなかったのか。

自分のことは棚に上げて音無は普通に驚いた。

そんな音無を見て立華は申し訳なさそうに付け加える。

「あまり派手な曲は得意じゃなくて……」

ふとライブのときの立華の様子を思い出した。

「もしかして、座ってたのは遠慮してたわけじゃないのか？」

立華は首をたてに振る。

「そうだったのか……」

音無には罪悪感が生まれた。あの行動は善意の押し付けだったんだ。

「無理やり立たせてごめんな」
「ううん、いいの」
音無が謝罪すると立華は少し下を向き細かく首を横に振った。
「――それに一緒に立って同じものを見るのは楽しかった」
立華は再び音無を見上げ、微笑んだ。
この一言とその表情で音無は心が少し軽くなったような気がした。

「あと、あの曲が好き。えっと……」
立華は自分の手のひらを見た。
音無も覗き込んでみると黒のマジックで曲名が書かれている。
それを立華は読み上げた。
「Ｍｙ　Ｓｏｎｇ」
「たしかにいい歌だよな。俺もＭｙ　Ｓｏｎｇがきっかけでガルデモを知ったんだ」

「うん、心に残るいい歌。……音無君」
ここで立華は不安そうに音無の名前を呼んだ。
「なにかあったのか？」
音無の言葉を立華は肯定も否定もしない。
少し無言のまま歩いていると、意を決したかのように口を開いた。

「……あたしはしっかりと歌えていた？」

そういうことか。好きな歌だからこそ気になるんだろう。
でも、気を使って嘘やお世辞をいう必要はなかった。
あの時に感じたそのままでいい。
「聞きほれるぐらい、きれいな歌声だった」
「……ありがとう」
立華は少しはにかみながら嬉しそうにした。

「ところでそれ、自分で書いたのか？」
音無はずっと気になっていた立華の手のひらのメモを指差した。
「これ？　これは岩沢さんが書いてくれたの」
「岩沢が？」
意外な人物の名前に音無は耳を疑う。

「うん、裏でもどの曲にするか聞かれたけれど名前がわからなくて。だから鼻歌で歌いたい歌を伝えたの」
「それで岩沢が書いてくれたのか」
「そう、また忘れないようにって」
岩沢が立華の手にＭｙ　Ｓｏｎｇと書く姿を想像してみると少しおかしかった。

「ユイがそれ見たら『岩沢さんのサイン！』って、うるさそうだ」
立華はそれを聞いた途端、かばんをあさり始める。
「ユイちゃんに後で写メをとって送るって約束してたの忘れてた」
携帯電話を取り出すと自分の手のひらを写真に収めた。

普通はユイが自分の携帯電話で撮らないか？
そういえば立華とユイがメアドを交換している光景は目にしてない。
ステージ裏でってことは立華の真面目さからしてないはず。

「いつの間にユイとメアド交換してたんだ？」
「……それも忘れてた」
音無はあまりの忘れっぷりにずっこけかけたが、なんとか耐えきった。
「俺が知ってるから教えるよ」
「ありがとう」

帰りの電車の中で二人並んで座席に座り、音無と立華は今日のイベントの話をしていた。
あれだけ濃い一日だったから話が尽きるなんてことはない。
「歌詞を変えていいなんて岩沢って器がでかいよな」
「うん」
「でもさ、そう言われても困らなかったか？」
「どうして？」
立華は本当に不思議そうしている。
「本人が作詞したものを目の前で変えるって恐れ多くて俺だったら出来ない」
これを聞いて今度はすまなそうな顔になった。
「……もしかして変えたかった？」
「咄嗟にはいい歌詞が思い浮かばなくて……」
気まずい空気が流れる。
「あ、あれだ！　岩沢がいいって言ったんだし変えることが悪いわけじゃないんだ！　あっ！　今度、岩沢に会ったらときのために歌詞を考えて紙に書いておくといいかもしれない！　それを持ってれば次は困らないぞ！」
音無は必死にフォローすると立華は感心したように頷いた。
「そうする。あ……」
立華が電車の外をちらりと見た。
「もうすぐ最寄り駅？」
立華はすごい小さく頷いた。
「家まで送っていこうか？」

「ううん、大丈夫。あたしの方こそ送る？」
「いやいや、俺は襲われないよ」
「そう」
ちょっと残念そうだった。ゆりに頼まれていたからか？
次第に電車のスピードが落ちていき、ついには止まった。
立華はスッと立ち上がると扉に歩いていく。
「またな」
音無が別れの挨拶をすると電車から降りた立華が振り返った。
「またね」

誘い

音無は自宅のマンションの自室で英語の長文読解を解いていた。
そこへ扉をノックする音が耳に入ってくる。
親は仕事だからノックするのはあいつしかいない。
問題から目を離し、その人物に声をかけた。
「初音か？」
「うん。お昼にしよ」
初音は部屋には入ってこずに用事だけ言ってリビングに戻っていった。

「もうそんな時間か」
伸びをしながら時間を見るために携帯電話を目だけで探す。
それがある場所なんて大体決まっているのですぐに見つかった。
ベッドの上だ。
手に取って開くと一通のメールが来ていた。
日向からかと思ったが知らないアドレスからだ。

『あさっては十時集合ね。あ、待ち合わせ場所も決めないと。どこがいい？』
まるで元から約束をしていたような内容。当然、心当たりはなかった。
いくらおっちょこちょいな人でもメールを赤の他人に送るなんて神業はほぼない。
となるとイタズラメールってことになるんだけどメールアドレスがどうにも気になった。
偏見かもしれないが変哲もない普通のメールアドレスで業者には見えない。

じゃあだれなんだ、と悩んでいるとふいにゆりとした約束を思い出した。

「じゃあ、来週の水曜日をあけといてね。詳細は後でメールを送るわ」

今日は月曜日。日付は一致している。

メールアドレスはたぶん初めて会って俺が気絶している間に抜き取ったんだ。

パスワードを突破したのは……竹山か？

見た目からしてあいつか高松ならそのくらいできそうだ。

ただ、変な業者だったら嫌なので念のために確認をとってみることにした。

『失礼ですがどちら様でしょうか？』

こちらからは名乗らず、相手の名前を尋ねるだけのシンプルな内容だ。

送信して返信を待っていると再び初音がノックをして声をかけてきた。

「お兄ちゃん食べないの？」

「わるいわるい。今いくよ」

音無は携帯電話を机に置いてから部屋から出る。

リビングに着くと、すでに料理は並べられていた。

そうめんと氷が入ったざる。具として錦糸卵、細切りのハム、細切りのきゅうりが大皿に乗せられている。

後はツナ缶に薬味のねぎとチューブのわさびも用意されていた。

日向にこれを話したときは『冷やし中華か？』って言われた。失礼だよな。

食べ方は簡単だ。まずはねぎやわさびはお好みでつゆに入れる。

それからそうめんを入れて具をのせて食べる。それの繰り返しだ。

あと、そうめんの具や薬味とは別にもう一品あった。
「またこれか……」
「焼きねぎ嫌い？」
今、初音は焼きねぎにはまっていて、比ゆじゃなく本当に毎日つくっている。

「嫌いじゃないけど毎日はさすがにな。それに……」
「それに？」
音無は皿ごと焼きねぎを持ち上げて初音がよく見える位置にもってきた。
「一本丸々焼くのはどうかと思うぞ」
「おいしいのにー」

食事を終えた音無は部屋に戻ってすぐメールの確認をすると、さっき送ったメールの返事がきていた。
開くと件名には仲村ゆりと書かれている。
やっぱり、ゆりだったか。
音無は業者や竹山や高松や遊佐じゃなくて安心した。

しかしその安心もメールの内容を読んだことで吹っ飛んだ。
『そんなことより、デートなんだから変な服を着てこないでよね』
「デート！？　嘘だろっ！？」
驚いた音無は急いで文字を打ち込む。
『他の皆は来ないのか！？』

送ってすぐにメールが返ってきた。
『デートってちゃんと書いたでしょ。二人っきりに決まってるじゃ

ない』
どうやら冗談なんかじゃなくてゆりは本気みたいだ。
「服って……」
音無は半分パニックになりながらも変じゃなさそうな服を探し始める。
でも、見れば見るほどどれが変でどれが変じゃないか、わからなくなっていった。
「デートなんてどの服選べばいいんだ……」
「お兄ちゃん、デートするの？」
「んなっ！？」

独り言のつもりだったのに反応が返ってきたことに驚いて後ろを振り向くと初音がいた。
「あ、ノックはしたよ。でも、反応がないから入ってきちゃった」
集中しすぎて気付かない、なんてベタな行動を素でやってたのか。
音無は精神的に打ちのめされた。

「でも、お兄ちゃんがデートかー」
初音は落ち込む音無の隣までくるとしゃがみ込んで顔を覗き込んだ。
「じゃ、行こっか」
「どこへ？」
意表をついた提案に音無の頭は追いつかなかった。

「今日は買い物に付き合ってくれるって約束してたよね」
そういえばそうだったかもしれない。
よくよく見ると初音はいつものピンク色の部屋着ではなかった。
青と緑とピンクで花をあしらった白いワンピースを着ている。
肩は丸出しで丈も膝上までの完全に外へ行くような服だ。

「ついでにお兄ちゃんのデート服も選んであげる」
「初音……」
学年が五つも下の初音をこの時ほど頼もしいと感じたことはない。
音無は急いで身支度を整えた。

「ところで、どこでデートするの？」
家を出て二人並んで歩いていると初音が聞いてきた。
たしかに場所によってベストな服装は変わるのかもしれない。ただ――
「あー……聞いてない……」
「えー、それは困るよー」

するとタイミングよく携帯電話が震えた。
とり出すとゆりからのメールだ。
『待ち合わせ場所は○○駅でいい？　そこからなら遊園地まで歩いていけるしね』
「遊園地かー。任せて！」
初音は勝手に画面をのぞいて内容を読むと、いっそう張り切りだした。

それはいいんだけどこんなに都合いいメールが来るなんて監視されてんじゃないか？
音無は周りを見回してみたが人影も気配さえもなかった。

初音に連れられて普段入らないようなお店に入っていって

「男の人はダサいのはもちろんオシャレすぎるのもダメだよ！」
「ワンポイントで決めるの！」
「足元も大事だよね」
などという初音のアドバイスを元に――むしろ初音の言いなりで――服を買っていった。

お礼として初音の買い物の分もほとんど音無が払ったので財布は大打撃だ。
普段から節制して溜め込んでいたお小遣いがなければ、学校や家に内緒でバイトをしないといけなくなるところだった。
「服は完璧！　後はお兄ちゃん次第！」
まぁでも、初音にお墨付きをもらったし――お金のことはともかくとして――これで服装に心配はない。

でも、デートなんてゆりはどういうつもりなんだ？
あの時は俺のことが好きで誘ったようには感じられなかったし……。

こうして音無は心はもやもやのまま、服だけが準備万端でデート当日を迎えた。

待ち人

「まだ、九時か」

初めて行く場所だからと時間に余裕を持った結果、一時間も早くついてしまった。

近くで三十分くらい時間をつぶすか。

そう考えて歩き出したところ、後ろから声をかけられた。

「音無君？」

聞き覚えのある声に振り返るとそこには――

「立華！？」

立華がいた。

今日はトップスにはすそと袖口に控えめのフリルをあしらった白のチュニックブラウスを着ていて胸元からは紐のリボンがおへその辺りまで降りて先端にピンクのアクセントがついている。

ボトムスはちょっとだけブラウンの入っている白のショートパンツで足元は濃い茶色のサンダルで手には白のハンドバッグを持っていた。

そして今日も麦わら……じゃなくてカンカン帽をかぶっていた。

ここまでファッションが詳しくなったのは、おとといの初音のファンション講座のおかげだ。

でも、あれだけ勉強したにも関わらず抱いた感想は「天使のようにかわいい」だけ。

しかも、それすら口には出させなかった。

――これが一目ぼれってやつだったりして。

音無が冗談めいたことを考えていると立華が首をかしげながら質

問をしてきた。
「音無君の家はこの近くなの？」
「いや、待ち合わせで来たんだ」
ゆりの名前はあえて出さなかった。……出せなかったのか？
そこも深く考えるのを止め、立華に質問を返した。

「立華もだれかと待ち合わせか？」
「うん、ゆりと」
「ゆ……り……？」
音無は耳を疑った。ゆりは俺とデートするはずじゃ？
「音無君もゆりとは会ってるわ」
立華の目にはゆりがだれなのか悩んでいる風に映っていたようだ。
「そうじゃなくて――」

それを訂正しようとしたとき、Ｍｙ　Ｓｏｎｇの着うたが流れた。
それに気付いた立華は自分のハンドバッグから水色の携帯を取り出す。
「ゆりから？」
「うん、ちょっとごめんね」
そう言って立華は少し離れてから、ゆりと通話し始める。

音無も自分の携帯を確認してみると一通のメールが届いていた。
『あたしは今日行かないから。奏ちゃんをよろしくね』
ゆりからのドタキャンメールだ。
しかも立華をよろしくって、もはや意味不明すぎる。
……はじめからそのつもりで誘ったのか？

ゆりの不自然極まりない行動に動揺していると通話を終えた立華が戻ってきた。
ただ、さっきまでと違ってどこか雰囲気が違う。

なんかこう……気持ちが沈んでいるような感じだ。
動揺が一瞬で吹き飛んだ音無はそのわけを確かめるべく直接聞いてみることにした。

「……なにかあった？」
「ゆりが妹さんたちの面倒を見ることになって来れなくなったって……」
迂闊だ。ゆりが『奏ちゃんをよろしくね』ってメールしてきたんだから、よくよく考えればわかることだったのに。

「だから、あたしは帰るね。じゃあ、また……」
立華は浮かない顔をしたまま帰ろうとする。
「立華っ！」
そんな立華の真っ白な腕を音無は咄嗟に掴んだ。
「音無君？」
引き止められた立華は首をかしげながらその行動の意味を尋ねた。

本当に咄嗟で、なにか考えがあったわけじゃなかった。
それでも元からそうしようとしていたかのように自然と口から言葉が出てくる。
「あ、あのさ、一緒に行かないか？」
「それは音無君の友達に悪いわ」
しかし、速答でやんわりと断られる。

でも、このぐらいで音無はめげなかった。諦めないのはゆりに頼まれたからじゃない。
さっき見た立華の寂しげな背中。音無はどうしても放っておけなかった。
「実は俺もちょうど友達にドタキャンされててさ、このまま一人で帰ろうかと思ってたんだよ」

「……」
「立華もここまで来たんだしもったいなくないか？」
「……」
ただ、やっていることはナンパとなんら変わりない行為のように思えてきた。
それに、この前のイベントのときのようにこれも善意の押し付けでただ迷惑だったら……。
音無は自分のしている行為に段々と自信がなくなってくる。
そしてとうとう心が折れた。
「……ごめん」
無言で話を聞いていた立華は不思議そうに小首をかしげた。
「どうして謝るの？」
「それは……」
音無が口ごもっていると立華は別の質問を投げかけてくる。
「あたしと一緒に行くの、嫌になった？」
「それはない！」
それには即座に――しかも先ほどの音無とは別人のように――力強く答えた。
「あたしと一緒でいいの？」
「一緒に行けたら俺は嬉しい」
音無が気持ちを真っ直ぐな言葉で伝えると立華は小さく頷いた。
「わかった。音無君が……」
「オイオイオイオイオイオイ！」
突然、立華の言葉を遮って二人組みの男が割り込んできた。
片方は態度が大きくてガラも悪い。もう片方は背が低くて少しオドオドしていた。

そして二人とも顔にタオルを巻いていて、よく顔が見えない。
だけど、どっかで見たことがあるような。
「なかなか可愛いじゃねぇか。なぁ大山？」
ガラの悪いほうがオドオドしている方に同意を求める。
「そうだね、藤ま――じゃなくてマイブラザー」
顔がわからなくてもすぐに自分たちから正体をばらしてくれた。

なんで、こいつらがいるんだ。って、考えるまでもないか。ゆりだな。
今日は全員召集をかけていたのか。でも、なんのために？
全員で一緒に行ったほうが立華も喜ぶってゆりもわかるはずだ。
なにか別の狙いがある――とか？

音無がゆりの思惑に気をとられていると大山がナンパを始めた。
「たちば――可愛いお嬢さん。僕らと一緒に遊びに行かない？」
「あたしよりあなたのほうが可愛いわ」
「そんなぁ……」
大山は撃沈した。大山どころか男とも立華は気付いていなかったのか。
「大山、大丈夫か！　くそっ、覚えてやがれっ！」

「行きましょ」
「あ、あぁ」
大山を気遣いながらこちらに毒づく藤巻を尻目に、立華は音無の右手をとると遊園地のほうへ歩き出した。
突然、手を握られた音無は一気に心拍数が上がる。
立華の手……どうしてこんなに柔らかいんだ？

いつの間に一緒に行ってくれることになったかもわからないまま、

二人並んで歩いた。

目的（前書き）

ゆりの謎の行動の話

目的

「みんな集まったわね」
朝早くからＳＳＳのみんなが駅に集合していた。まぁ、朝早く呼びつけたのはあたしなんだけど。
後、遊佐さんには別行動で音無君を見張ってもらっているし、椎名さんにも別のことを頼んでいるからここにはいない。
その遊佐さんによると、音無君はもう家を出たらしい。
待ち合わせは十時って伝えたのに……あまり時間はないわね。

「こんな朝早くにどうしたんですか？」
「そうだよ、ゆりっぺ。まだ朝八時だよ？」
「Ｉ'ｍ　ｓｌｅｅｐｉｎｇ」
高松君や大山君をはじめとしてこの場にいる――遊佐さんと椎名さん以外――みんなにはなんの話もしていなかった。
だからか藤巻君が特に不服そうにしていた。

「んなことより、どうして部外者のこいつがいやがんだ！」
「ふっ……神である僕がどこでなにをしていようが貴様には関係ない」
藤巻君の指差す先にはガクランを着た直井君が偉そうに立っていた。
不服そうにしていたのは他に理由があったのね。

「保険よ」
まずは簡潔に答えておいた。
「今日することに関わってくるのだな」
「松下君、ものわかりがいいわね。じゃあ竹山君、お願い」

「僕もなにも聞かされていませんが？　それと僕のことはクライストとお呼びください」
……そうだった。今回は事前に奏ちゃんにばれるのを防ぐ可能性を少しでも減らすために秘密裏に進めてたんだわ。
「じゃあ、あたしが説明する。今日のオペレーションは――」
あたしはいつもの白いベレー帽をかぶってから言い放った。
「サイレントチェックよ！」
「サ、サイレントチェックッ！？」
「Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｐｌｅａｓｅ」
「これは嫌な響きですね」
「内容が全く想像できねぇぜ」
「なんであろうと俺はゆりっぺに従うだけだ」
「神は驚かない」
作戦名を告げただけなのによくそこまでリアクションがとれるわね。
直井君なんか腕を組もうとして失敗してるし。
「して、どんな作戦なんだ？」
唯一、冷静だった松下君があたしに続きを促す。
「奏ちゃんと音無君のデートを見守るのよ」
アホでもわかるように単刀直入に言ってあげた。
「――――――――っ！」
みんな、声にならないぐらい驚いてるわね。
「どうして音無さんが僕意外とデートをする必要があるんだっ。神に説明しろっ！」
半泣きの直井君の訴えなんて、かなり切実だわ。
野田君だけが動じた様子も見せず素振りをはじめてた。

「私も腑に落ちませんね。どうして立華さんと音無さんのデートなんです？」
「そうだよ！　僕と椎名さんのデートでもいいんじゃないっ？」
高松君が直井君の肩を持つと大山君も便乗してきた。
「どうして大山君と椎名さんがデートする必要があるのよ」
バッサリと切り捨てると大山君は残念そうに俯く。

「そうだ！　俺とゆりっぺがデートすれっ……」
急に叫んだ野田君は最後まで言い切る前にアスファルトに抱きついた。
ほんと、お熱くてやけちゃうわ。
あたしはハルバードを静かに野田君の横に置いてからみんなに向き直る。

「あの二人にデートさせるのはね――奏ちゃんが音無君に惚れかけてるからよ。まだ奏ちゃん自身は気付いてないみたいだけどね」
あたしの言葉を聞いたみんなの時間が止まった。驚きすぎて声も出ないってわけね。
でも、一人だけデートの話しをしたときよりも驚いていない人がいた。
「なにを今さら、華麗な貴族である音無さんに心が惹かれない人などいない」
それは誇らしげに胸をはっている直井君。音無君の魅力によほどの自信があるようね。

そこへ藤巻君が噛み付く。
「へっ、そうは思えねぇがな」
「それはどういう意味だ？」
ムッとする直井君を見て藤巻君は悪役のようにほくそえんでいた。

「どういう意味って、そのまんまの意味だよ。なぁ？」

同意を求められた大山君は少し悩んでから口を開いた。

「うーん、僕にも音無君を前にしても立華さんはいつもと変わらなかったように見えたよ」

「やはり、早とちりではないかと」

高松君もそれに続いた。三人とも奏ちゃんのどこを見ていたのかしら。

残る三人は奏ちゃんと音無君が一緒にいるところを目にしたことはないからかノーコメントだった。

「ほらゆりっぺ、立華が惚れるなんてあるわけねーぜ」

三人の節穴の意見だけで藤巻君は決め付けたみたいね。あたしよりも奏ちゃんを知っているつもりなのかしら。

「ふーん。……聞くけど奏ちゃんのハンドソニックをはじめて身をもって体験したとき、麻婆豆腐は手作りだった？」

「いや、お店のに豆板醤を一瓶を丸々だ。……音無のときは赤の他人だったからだろっ」

「そのとき、あーんはしてもらった？　赤の他人だからってあーんはないわよね？」

「それは……立華が変な知識を持ってたとかだな」

「なっ……まぁいいわ」

すごい失礼なことを言う藤巻君への怒りをあたしはなんとか抑える。

「じゃあ、事務的なこと意外で奏ちゃんから話しかけられたことはある？　ちょっとやきもちを妬かれたことは？　真面目すぎる奏ちゃんを説得して行動を変えさせたことは？　二人っきり話が弾んだことは？　ないでしょ？」

ここまで矢継ぎ早に言うとさすがの藤巻君も自分が間違っていた

とわかってくれた。
「すまんゆりっぺ。俺が間違っ――」
「大体、藤巻君にいたってはまだちゃんと名前も覚えられてないじゃない」
でも、やっぱりさっきの失礼な一言が許せなくてあたしも余計な一言を言っちゃった。
藤巻君はあまりのショックで石化したわ。わ、悪気はなかったのよ？

「それはわかりました。でもどうして後をつける必要があるのですか？」
「竹山君、いい質問ね。それは……」
あたしはそこでいったん言葉を切り、深呼吸する。
そしてみんなを見回して全員が五人の目があたしを見ている確認してから言い放った。

「音無君が奏ちゃんに相応しくない人じゃないかを確かめるためよ！」

「ふざけるなぁっ！」
それを聞いた途端、直井君が怒りをあらわにした。
あまりの噴火っぷりに大山君なんかは酷く怯えてる。
「まるで音無さんがろくでなしかもしれないと疑っているようじゃないか！」
「直井君は音無君をよく知っててもあたし達は知らない」
あたしは直井君を真っ直ぐ見据えながら毅然と対応した。

それで少し落ち着いてくれた直井君はとんでもないことを言い出す。
「いいだろう。音無さんが偉大さを知らしめるために僕と音無さん

の出会いを話してやる」
「Ｎｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」
「あれは去年の秋の終わり、僕がイヤイヤながらも父の代わりに凡人達のための陶芸教室を開いたときのことだった。世間はまだ……」
ＴＫがみんなの気持ちを代弁してくれたけど直井君の耳には入っていなかった。
直井君は音無君との出会いを話したいだけじゃない？

「とにかく、音無君がくずだったら直井君を投入して奏ちゃんから引き離し、金輪際かかわりを持たせない」
「では、くずではなかったらどうするんですか？」
「そこから先は奏ちゃん次第よ。じゃあ、そろそろ持ち場を割り振るわね」

役割を割り振ってみんなにそれぞれの地点に行ってもらった。
今、駅前に残っているのはあたしと大山君と藤巻君と直井君だけ。
大山君と藤巻君の役目は音無君が奏ちゃんを見逃したら気付かせるために奏ちゃんに絡んで目立つこと。
だから、顔にタオルを巻いてもらって奏ちゃんにはばれないようにした。
「音無君が奏ちゃんに気付いたら出て行かないでいいから」
「わかってるぜ」
簡単な仕事だけど念押しはしておいた。

緊張してるのか大山君がなぜかそわそわしている。
「どうしたの？」
「遊佐さんはいつものこととして椎名さんも姿がないね」
「椎名さんならゲストを迎えにいってもらってるわ」

「ゲスト？」
「あっ来たわ。じゃあ、ここはよろしくね」
あたしが奏ちゃんに電話をする予定なのと、遅れて来た椎名さんたちに説明するために、この場を離れて静かな場所へと移動することにした。

音無は立華と並んで歩いていた。しかも右手はまだ立華とつないだままだ。

いいのか、これ？　心の中ではそう思っていたが自分から離そうとはしなかった。

柔らかい手を堪能していると立華のほうから話しかけてきた。

「音無君はチャーギルズに行くのはじめて？」

「あ、あぁ、はじめて。た、立華は？」

手に意識がいっているところに話しかけられ、驚いた音無は言葉がつっかえた。

「あたしもはじめて」

「じ、じゃあ、楽しみだな」

「うん」

でも立華はそんなことは微塵も気にしてない。

そんな純粋な立華を前にしているとすぐに音無も自然体に戻っていった。

「乗ってみたいアトラクションとかはあるのか？」

「ライフピーアンコースターに乗ってみたい」

「あの、乗ったら人生観が変わると言われるほど激しいジェットコースターか」

「そう、ライフピーアンコースター」

「立華は絶叫マシーンは大丈夫なんだ？」

「体験したことがないからわからないわ。でもライフピーアンコースターには挑戦したい」

音無は立華の言葉に少し違和感を感じた。嘘をついているとかそういう類の違和感ではない。
ただ、乗りたいよりもライフピーアンコースターって言いたい気持ちのほうが先行しているような……。
「着いたら絶対に乗ろうな」
「うん、ライフピーアンコースターを楽しみにしてるわ」
「……俺も楽しみだ」

「あたしもライフピーアンコースターに乗ってみたいなぁ……」
音無が突っ込まないでいると背後からもの欲しそうな声が聞こえてきた。
ゆっくりと振り返るとそこにはだれもいな……くなかった。
本人は隠れているつもりかもしれないが電柱の太さでは車椅子は隠しきれない。
それどころか目立つピンクの髪の毛もしっかりと電柱から生えているようにはみ出していた。

音無が呆れていると立華も彼女に気付いた。
立華は音無の手を軽く引っ張って電柱を回り込むと声をかけた。
「こんにちは。一人でどうしたの？」
「ユ、ユ、ユイってだれですか？」
まだだれもユイの名前を呼んでいないのにいきなりとぼけてきた。
いくらなんでも動揺しすぎだ。
もしかして、ばれるとか頭の片隅にもなかったのか？

「ユイちゃん――じゃない？」
でも、立華はしっかりと騙されていた。
「ぜんぜん、別人ですよ。でもユイって可愛い名前ですね。きっと本人も可愛いんでしょうね」
それに気を良くしたユイは調子に乗り始めた。

だから音無は少し意地悪な質問をしてみることにした。
「それよりも日向の足はどうなったんだ？」
「あっ、ひなっち先輩の足は骨折じゃなくてひびでした」
ユイは普通に答える。ユイじゃないって設定はどこへ行ったんだ？
「じゃあもう退院したのか」
「ギブスでぐるぐる巻きにされてますが今日も松葉杖で元気に……」
「日向のことは知っているんだな」
音無の一言でユイの口も表情もきれいに固まった。
その顔のまま、さび付いたブリキのおもちゃのようにギギギと首だけを動かして音無から視線をはずす。
変な汗をだらだら垂れ流しながら必死にいいわけを考えはじめたようだった。

そんなユイの様子から立華はなにかを感じ取った。
「……あなたも日向君にストーカーされているの？」
「そ、それです！　もう、そりゃーひなっち先輩は可愛い子には見境がないですからねー。それに……」
立華の話に乗っかったユイは次々と日向の悪口を言ってった。
それに伴って立華の中で日向の好感度は急降下していく。

「なんかすっきりしました」
ユイは日ごろ溜まっていたものを全て吐き出したことで元気になっていた。
「ところでユイ、今日はなんでこんなとこにいるんだ？」
気分よくなっているところを悪いとも思ったが疑問をぶつけてみた。
「えっ？　いやーあのーそのー……」

明らかに大ピンチを迎えているユイへ立華が助け舟を出す。
「音無君、この子はユイちゃんじゃないわ」
「そうですよ、あたしはユイの双子の妹です」
いつの間にかユイの中での設定が変わっていた。
「さっき『ユイってだれですか？』って言わなかったか？」
音無の指摘でユイの表情が再び固まった。

「……あっ、あそこに麻婆豆腐の出店がっ！」
突然、ユイは音無の後ろのほうを指差した。
もちろんさっきはそんな店はなかったからとっさについたユイの嘘だ。
「ごまかしたって――立華？」
ふいに手をぐいと引かれた。

「なにしてるの？　早くしないと売り切れるわ」
すでに立華の心は麻婆豆腐へと向いていた。
その目はライフピーアンコースターを語っていたさっきよりも期待に満ち溢れている。
「わかった」
音無はすぐにユイから聞き出すことを諦めた。
どっちにしろユイからまともな情報が出てくることもないか。

「あれは尻に敷かれるタイプですね」
後ろでユイは勝手なことを言っていた。
「あさはかなり……」
ちらりと視線だけ後ろにやると椎名が電柱の裏から出てきていた。
……いたのか。気配すら感じ取れなかったよ。

気をとりなおして普通に前を向くと本当に店があった。
茶色いのぼりに赤く麻婆豆腐と書いてある屋台だった。

さっきまではそんなのなかったんだが……。

近づくと真紅のバンダナで目から上、もう一つの真紅のバンダナで目から下を隠している金髪の外人がいた。

たしかＴＫってやつだよな。横目で立華を見てみると特に気付いた様子はない。

……逆にこのＴＫと初対面だとしたら怖すぎないか？

「麻婆豆腐を一つください」

でも立華は恐れることなく果敢に、いや淡々と注文した。

「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌｕｃｋｙ！　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｌａｓｔ　ｏｎｅ」

ＴＫは英語でなにか言いながらプラスチックの容器に入った麻婆豆腐とスプーンを渡す。

それを受け取った立華が急に英語で喋り始めた。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　Ｂｕｔ……」

ここから先は音無の耳では全く聞き取れなかった。

ＴＫも立華の流暢な英語を前に呆然としている。ってあれだけ話しておいて英語ダメなのか？

立華が口を閉じてもなおＴＫは動き出さなかった。

「今、ティ――店員さんになんて言ったんだ？」

「スプーンはいらないってことと麻婆豆腐に関するちょっとした世間話よ」

腕章

ＴＫから麻婆豆腐を受け取ってからチャーギルズに向かって歩いていた。
ユイ達は麻婆豆腐を買っている間に姿を消してしまったのでまた二人きり。
でも、さっきまでと違って立華の手は麻婆豆腐に占領されてしまったので手は繋げなかった。

それどころか、このままじゃアトラクションにも乗れないよな。
「チャーギルズに着いたらまずはお昼にしないか」
「わかった」
そう考えた音無が提案すると立華はあっさりと受け入れた。
「じゃあ、入ったらなにか買わないとな」
「どうして？」
「……え？」
まさか、ここで疑問が生まれるなんて予想外だ。

「お昼を買わないと俺の分もないし立華も足りな……」
「あるわ。ゆりと一緒に食べるつもりでつくってきたの」
そう言うと、ハンドバッグを開いて中を見せてくれた。
期待して覗き込むとそこには――

「おかし？」
赤い箱に入っている、棒状の小麦を焼いたものにチョコをコーティングした定番のお菓子だった。
他に化粧品等の小物類ばかりでそれらしいものは見当たらない。
そもそも、このハンドバッグに大きな弁当箱が入るわけないよな。
顔を上げると立華が困ったような表情を見せていた。

「かばん……間違えた」

落ち込む立華とどう声をかけるべきか迷っている音無の前方から帽子を深くかぶった怪しい人物が近づいてきた。

宅配業者のような服を着て松葉杖を突きながら白のトートバッグを抱えているその男は迷わずに立華に話しかけた。

「ゆりっぺからお届けものでーす」

日向と似た声を持つ男というか日向は白のトートバッグを立華に差し出した。

道端で荷物の受け渡し――しかも持ってきたのが怪我人――なんて型破りにもほどがある。

でも、立華は麻婆豆腐を音無に預けると普通にそれを受け取った。

「ではここにハンコかサインをください」

今度はそれっぽい紙となぜか下敷きも差し出してきた。

「ごめんなさい、今は印鑑を持ち合わせてません」

「あっはい、サインですね」

立華の少し困った顔を見て日向は素早くボールペンをとり出すと手渡した。

「ありがとうございます」

立華はそれを受け取ると音無から少し離れて塀に向かった。多分そこで下敷きをしいて書くんだろう。

その隙をついて日向がこっそりと話しかけてきた。

「ゆりっぺからの伝言だ」

「ゆりから？」

「あぁ。『奏ちゃんに集中しなさい』だとよ」

――立華に集中させてくれないのはどっちだ。

心の中で強く思ったが口には出さなかった。

「さっき――なに話してたの？」
日向と別れてまた歩いていると立華が質問してきた。
しっかりと見られてことは、もしかしてばれたか？
「ちょっとした世間話だよ」
軽くはぐらかしてみるとそれ以上の追求はしてこなかった。
いつの間にかゆりたちが来ていることを悟られないように気をつかい始めた音無はホッと息をついた。

「でも、なんだか怪しい宅配さんだった」
「そうだな……」
ただそれとは別に立華の深層心理にはユイのおかげで日向の悪い印象がしっかりと根付いていた。
日向の評価がさらに下がってしまう前に話題を変えないと……。

「ところでそのかばんには何が入ってるんだ？」
「サンドイッチ」
「さっき作ってきたって言ったやつか」
立華は頷いた。まぁ、ゆりがあのタイミングで別なものを持ってくるはずはないよな。

でも、どっから持ってきたんだ？
立華がつくったってことは当然、立華の家に置いてあったんだよな。
それを持ってこれたって事は――
「ゆりは勝手に立華の家に入って送ってきたのか？」
「勝手にじゃないわ。あたしとゆりは同じ部屋に住んでるから」
「寮住まいってやつか」

「どっちかっていうと下宿ね」
合点がいった。同じ部屋に住んでるなら鍵を持ってないほうがおかしい。
でもそうなると今度は別の疑問が生まれた。
「ならなんで待ち合わせなんてしてたんだ？」
「ゆりが『今日はデートでしょ』って。だからあたしが先に家を出たわ」
なるほど。ゆりはそうやって立華を送り出していたのか。
それからしばらく雑談しながら歩いているとチャーギルズの大きな入り口が見えてきた。
「夏休みだから人がいるな」
洞窟と学校と異世界を織り交ぜたような非日常的で独特のセンスをした入り口には親子連れやカップルなどで賑わっている。
道中ではゆりたち以外の人影はなかったのにどうしてこんなにいるんだ？
……バスだ。そういえば駅からここら辺までバスが出てたんだ。
「音無君、これ」
バスの存在を失念していたことを後悔していると立華が何かを差し出してきた。
「腕章？」
「フリーパスの代わりらしいわ」
立華の手に置かれたそれにはレンガ色でかたどられた右上と左上が少し凹んでいる盾が描かれている。
その盾の中の中央部分は凹んでない盾の形で残りの部分はカーキ

色で囲まれていた。
　カーキ色の部分の下のほうからはレンガ色のつるが左右対象に生えていてこれまたレンガ色の葉っぱそれぞれのつるの途中に互い違いで沢山ついている。
　その盾の白とカーキ色の部分を左下から右上に黒で縁取られた白いタスキが横切っていてそのタスキにはレンガ色で雷のようにシャープなＳ字が三つ大きく描かれていた。
　この大きな盾の外の下方にレンガ色のリボンが盾にそって左右対称に展開していて両端は二段の折り目がついている。
　そのリボンの中央部分には【ｒｅｂｅｌｓ　ａｇａｉｎｓｔ　ｔｈｅ　ｇｏｄ】と書かれていた。

　オシャレな腕章がフリーパスの代わりなんて変わったところだな。
　それにしてもこのマークを目にしたのは初めてなはずなのに懐かしく感じるのはどうしてだ？
　どこかで見たことがある？　中央に書かれた文字……もしかしてこれはＳＳＳって読むとか？　……まさかな。

「音無君？」
　受け取ろうとしないで腕章をじっと見つめ続ける音無の顔を立華が覗き込んだ。
　突然、腕章が天使のような立華に切り替わったから危うく麻婆豆腐を落としそうになった。
「そ、それはさ、ゆりの分だろ？　俺の分は自分で買うよ」
　音無は瞬間的に上がった心拍数を落ち着けようとしながら腕章を受け取るのを断った。

　でも、立華も引き下がらない。
「これ期限は今日までだからもったいないわ」
「そうなのか――わかった。いくらだった？」

音無は片手でしっかりと麻婆豆腐を掴みながらもう片手で財布を取り出そうとした。

「ゆりも知り合いからタダで譲ってもらったものだからお金は受け取れない」

話はこれで終わりとばかりに立華は素早く音無の左の二の腕に腕章をつける。

これ以上、拒否しても逆に悪いし時間ももったいないので音無は受け入れることにした。

……関係ないけど、なんだかこの位置にこのマークがくるとしっくりするな。

「どうしたの？　早く行きましょ」

「あ、あぁ」

立華に促されて音無は人が溢れている入り口へと向かった。

門番

入り口に近づくと人の流れがおかしいことに気付いた。
入るのを躊躇している人、帰ろうとする人で混雑している。
盛況だから人で溢れてたわけじゃなかったのか。
ちなみにチャーギルズは朝九時からの営業。
今は朝の十時前で帰るのも入らないのも不自然な時間帯だった。

その混雑を麻婆豆腐を返した音無が先頭で縫うように進んでみると――

「待ってたぜ」
音無と立華の前には茶色い馬のきぐるみを着た野田が立っていた。
しかも、しっかりとハルバードを手に持っている。
馬の首に当たるところから茶色く塗りつぶした顔を出している野田はハルバードを音無に向けた。

――仲村ゆり様
拝啓　もう夏だというのにハルバードを持った馬のきぐるみがいます。
しかも、手にしたその物騒なものをこちらへと向けてきます。
こんな状況でどうやったら立華に集中できますか？

「門番としての仕事――果たさせてもらうぞっ」
音無の頭の中の手紙にゆりからの返答がくるはずもなく、かわりに野田が襲い掛かってきた。
突然のことに野田の周りを囲っている人達の一部からは悲鳴が上がる。

野田の振り下ろすハルバードは躊躇なくかつ正確に音無を狙う。

「ひゃっぺん、死ねぇ！」
「うわっ」
ギリギリのところで音無はそれをかわして距離をとった。
目標を失ったハルバードは直角にアスファルトへと突き刺さった。

「ふんっ。素直にこいつのサビになればいいものを」
「こいつムチャクチャだ！」
「音無君、下がって」
こんな危険な相手と立華は勇敢にも戦おうとしていた。

だからって戦わせるわけにはいかない。
「だめだ、立華！」
音無は手首をつかんで立華を引きとめようとした。
しかし立華は踏ん張る音無をものともせずに野田に近づいていく。

「貴様も邪魔だてをするなら、容赦はしない！」
野田は立華に対して宣言通り容赦なくハルバードを振るった。
「立華！」
気付けば勝手に体が動き、音無は二人の間に割り込んだ。
そして覆いかぶさるようにして立華を守ろうとした。

腕の中でこちらを見上げる立華は目を大きく開いて驚いている。
しかし、すぐに鋭い目つきに戻ると手を音無の腰に回した。
そこから立華は音無を少し持ち上げると小さく二度バックステップをして野田の一撃を避けた。
「背中ががら空きだ！」
でも、野田は空振りをした勢いを利用してさらなる追撃を仕掛けてきている。

「ごめんなさい」

立華は音無に聞こえるぐらいの小声で急に謝まると、音無を囲っているギャラリーの方へ力強く押しやった。
音無はよろけながらギャラリーにつっこむとすごいあごヒゲの人に受け止められた。
「大丈夫か？」
「あっはい。大丈夫です。すみません。――って、たちばなぁっ！」

立華は迫り来る野田を素手で迎え撃とうとしていた。
「ガードスキル――ハンドソニック」
「ふっ」
野田が振り回したハルバードは鈍い音をたてて横に弾かれた。
たぶん斧の腹部分を的確に殴って弾いたんだ。

「なにっ！？」
野田は驚いてはいるもののハルバードからは手を離さない。
握力もすごいんだな。立華の腕力の方がすご過ぎるけど……。
少し体勢が崩れた野田との距離を縮めようと立華が足に力を込めるのがわかった。
その瞬間――

「撃て！」
囲んでいるギャラリーの奥から矢が五方向ぐらいから飛んできた。
本体には白い紙がついていてひらひらとなびく。安全のためか矢の先端は吸盤だ。
矢は放物線を描きながら戦っている二人ほうへと飛んでいった。

背後から飛んできたそれを立華は察知し、当たらない位置に一瞬で移動した。
対して野田は動かずにその矢を迎撃する。
「うぉらっ！」

飛んできた矢のほとんどはハルバードに叩き落とされるか風圧で落ちた。なんてやつだ。

しかし一本の矢がそれを潜り抜け、きぐるみから出ている野田のおでこに命中した。

「なんだ、これは」

野田は矢についた紙に気付き、手に取った。

紙にはなにか書いてあるらしくそれを読み始めた。

野田の顔色は茶色に塗りたくられているために変化は見て取れない。

でも表情は確実に曇っていた。むしろ苦しんでいるようにも見える。

いつの間にか眉間には深いしわが刻まれていて矢も自然と落ちていた。

「文字なんて……女々しいやつのためのものだ……」

終いには意味不明なことを呟きながら静かにその場で倒れた。

倒れたままの野田は起きてくる気配はない。

「おねーちゃんすごーい！」

この子供の称賛の声を皮切りに、ギャラリーから拍手喝采が送られた。

「怪しいやつを園内に入れるなって言っただけなのにあのアホッ！」

それに混じって怒りの声も聞こえてきたが音無は聞こえなかったことにした。

そんな中で音無は近くに矢が落ちていることに気付いた。射損じか？

その矢にも野田に当たったものと同じように紙がついている。

それをとって広げると簡単な数式が書いてあった。

「この汚い字はユイだ」
そこには小学校の低学年で習う九九の七の段が書かれていた。
しかも六番目の答えが地味に間違えている。
「四十四って……」
野田はこのレベルの問題で気絶した……のか？
いや、さすがに他のにはもっと難しいのが書いてあるだろうな。

「預かってくれてありがとうございます」
ふと立華の声がしたほうを見るとギャラリーの一人の女性と話していた。
手元には麻婆豆腐。ちゃんと預けてたんだな。

音無はアゴヒゲの人に再度お礼を言ってから立華の元へと行こうとした。
でも、野田が倒されたことによってチャーギルズに入れるようになったことで人の流れができていて音無はなかなか近づけなかった。

立華のところに着いたころには女性の姿はなく、一人だった。
「手、怪我はないか？」
「少しひりひりする」
見てみると少し赤くなっている。
腫れているわけではないし触っても痛いとは言わなかった。

「念のために医者に診てもらおう」
音無が提案すると立華は首を横に振った。
「骨に異常はないわ」
「でも一応は……」
「いい」
目から伝わってくる立華の意思は固い。

音無には自分が折れるという選択肢しかなかった。
「……わかった。それじゃ俺達も入ろうか」
「うん」
立華は嬉しそうに頷いた。
そして、二人は人の流れに乗り、入り口へと歩き始めた。

お昼ご飯

「っと、こっちか」
音無と立華は今、食品ギルドに向かっていた。
理由は簡単で、持ち込んだものは食品ギルドにあるピクニックフィールド以外では食べてはいけないらしい。

ここで補足しておくと、チャーギルズは大きくわけて商業ギルド、食品ギルド、絶叫ギルド、趣味ギルドとなっている。
名前で大体わかるだろうけど商業ギルドはショッピングモール、食品ギルドにはフードモールがある。
絶叫ギルドにはライフピーアンコースターやお化け屋敷等があってここが一番遊園地らしい。
趣味ギルドには子供にも優しいアトラクションやゲームセンターなどがあってだれでも楽しめるのがウリだ。
ちなみにこれら全て、昨日ネットで調べた。

「お、けっこう広い」
ピクニックフィールドは小さな公園よりは広さがあった。
地面は適度な長さにそろえられた芝生で埋め尽くされているし所々に木も生えていて遊園地なのに自然でいっぱいといった眺めだった。
他には頑丈そうなつくりのウッドテーブルやウッドチェアもある。
こちらにもきちんと手入れが届いていてすごく芝生とマッチしていた。

「先客がいるわね」

「混む前に腹ごしらえでもって考えている人で……も……」
立華の視線の先には見た覚えのある二人組みの男が座っていた。
あれはたしか竹山と松下だ。
竹山はパソコンをいじり、松下は肉うどんを豪快に食べていた。

もちろん他のＳＳＳメンバーと同じように竹山は立華にばれないように工夫している。
おかっぱだった髪の毛をタケノコのように逆立てて固めていて、眼鏡はグラサンになっていた。
顔もすごいメイクをしていて完全に別人だった。
凄い状態になっている竹山に対して松下は、いつものように柔道着だ。
なんの変装もしなくていいのか？　でも、どこか違和感があるような……。
立華もあれが松下だとは気付いていないようだった。

「どこの席にする？　それともシート敷いて座る？」
立華はトートバッグに入っている銀色のレジャーシートを片手で引き上げて音無に見せる。
そうだ、今は立華と一緒にいるんだ。音無は頭の中から松下達を追い払った。

「せっかくだからシートで」
「わかった。これ持ってて」
立華は音無に麻婆豆腐を預けるとシートを取り出した。
そして木陰にそれを敷くと履いていたサンダルを脱いで上に乗る。
音無も続いて乗った。

でも、ここでシートにありがちな問題が発生した。
「このままじゃ風で飛びそうだな」

シートの端が風ではためいて裏返る可能性がある。でも立華は抜かりがなかった。
「これがあるから心配しないで」
バッグから銀色で真ん中に穴の開いたおもりを取り出すと四隅に置いていった。
表面には五キログラムと書いてある。って、これを四つもずっと持っていたのか。

シートがめくれる心配がなくなると今度は竹製の大きなお弁当箱を取り出した。
それを開くと色とりどりの具の入ったサンドイッチが敷き詰められている。
「おいしそうだな」
「いっぱい食べてね」
ただ、隅っこに少し毛色が違うものが入っていた。
「あれ？　タコさんウインナー好きなんだ」
音無がそれを指摘すると立華は首をかしげた。

「別に好きじゃないわ」
「えっ――なら、どうして入ってるんだ？」
「お弁当には絶対タコさんだってゆりが」
「ってことは、ゆりがこれを好きだってことか」
「そうなの？　……知らなかった」
立華はタコさんウインナーを取ると、しげしげと眺めた。

ゆりの好きな食べ物が勝手に決まったところで食べ始めることにした。
用意のいい立華から受け取ったおしぼりで手を拭いてから手を合わせる。
「いただきます」

サンドイッチを手に取った音無はあることに気付いた。
立華は麻婆豆腐をどうやって食べるつもりなんだ。そのまま飲む？
サンドイッチを頬張りながら立華の動きを観察した。
まず懐からレンゲを取り出す。次に麻婆豆腐の容器に手をかける
と慎重にふたを開けた。
最後にレンゲで麻婆豆腐をすくって口の中へ持っていく――と。
「マイレンゲ！？」
一連の流れが滑らか過ぎて見逃すところだった。

「音無君は持ってないの？」
「家にはあるけど持ち歩かないな」
音無の答えに立華は意外そうな顔をする。
「エコで持ったほうがいいわ」
「えっと……そんなに使う機会が無くて」
立華は意外そうどころか、近くで雷が落ちたぐらい驚いていた。

「レンゲはあると便利よ。麻婆豆腐とかスープとかチャーハンとか
麻婆豆腐とか……後は武器にもなるわ。他には麻婆豆腐も」
一箇所、明らかに用途外の使い方もあったがそこは触れないこと
にした。
「立華は麻婆豆腐が大好きなんだな」
「違うわ」
まさか、ここで否定されるなんて……。

「麻婆豆腐は食べると元気になったり緊張がほぐれたりするものよ。
後はただ……」
「ただ？」
「旨いわ」
「……それが好きってことじゃないのか」

それを聞いた立華は地球が砕けたと聞いて驚愕するぐらいの衝撃を受けていた。

「初めて知った……」

立華はすくった麻婆豆腐をさっきのタコさんウインナー以上に熱心に眺めた。

昔の関係

会話をしながら食事を続けているとゆりが話題に出てきた。
「でもさ、立華とゆりってタイプがぜんぜん違うのに仲いいよな」
「そうね、昔は仲がいいとは言えなかったわね」
「へぇー。昔の二人はどんな関係だったんだ？」
「気になる？」
「かなりな」

「あたしとゆりが出会ったのは中学校一年生のときだった」
音無の答えを受けて立華は昔話を始めた。

入学したで間もない頃、あたしが教室に向かって歩いていると廊下で三人の女子が噂話をしていた。
「知ってるー？　一組の仲村さんが荒れている訳」
「なになになに」
「なんでも好きな人と学校が別々になったから荒れてるんだってー」
「あー私も聞いたー」
当時のゆりは態度が悪いことで有名でよく噂話になっていたの。

そこに一つの足音。
「なに、あたしの話？」
そう、それがちょうど噂話のネタにされていたゆりだった。
噂話をしていた三人の女子は何も言い返さずにそそくさと退散したわ。

「あなたもなにか？」
一人残ったあたしにゆりは話しかけてくれた。だから、あたしも質問をしてみたの。
「今の話、ホント？」
「関係ないでしょ」
変なことを聞いちゃったから、ゆりは怒ってどこかへ行っちゃったわ。
でも、あたしには一瞬だけ悲しそうな顔をしたゆりが見えた。

その日、あたしの頭の中がゆりでいっぱいで授業にも身が入らなかった。
だから放課後、あたしはゆりを探し出してもう一回話そうと思ったの。
少し探すとゆりを下駄箱で見つけた。相変わらず不機嫌そう。
「一緒に帰らない？」
あたしが少し勇気を出して話しかけるとゆりは無視をした。
あたしはこれを肯定だと捉えてついて行ったの。

あたしがゆりに並ぶとゆりは歩くスピードを少し上げた。
あたしもそれに習ってスピードを上げて追いつくとゆりはさらにスピードをあげる。
面白い歩き方だなと思いつつもあたしはそれについていった。
最終的には全力疾走に近くなっていたわ。

でも突然、ゆりが足を止めた。
「なんなのよ、あんた！」
ゆりは初めてあたしに名前を聞いてくれた。
「あたしは立華奏」

それを聞いたゆりは顔を真っ赤にしてあたしになにか言おうとして口を開きかけた。
「あ、ゆりねぇちゃんだ」
そのとき、小さな女の子がゆりに話しかけたの。
「ひな」
その少女に気付いたゆりの表情は優しいものになっていたわ。

でも、あたしの視線に気付いたゆりはまた表情を強張らせた。
「どぉしたの？」
ひなちゃんと呼ばれた少女も不安そうにゆりを見上げてる。
そんなひなちゃんの頭をゆりは優しく撫でていた。

ここであたしはゆりは家族水入らずで帰りたいんだと悟った。
「仲村さん、またね」
一言挨拶を済ませたあたしはその場を離れたの。

それから一週間、あたしとゆりはすれ違うときに目を合わせる間柄になっていた。
ゆりの凛とした眼差しはあたしの中で密かな楽しみ。
あたしは会釈もしていたけれど、ゆりにはそういった習慣はないみたいだったわ。

ある日はあたしは日直で、少し早くに学校へ来ていた。
あたしが日直の仕事で職員室に向かおうとしているとゆりも登校してきた。
今日もいつものように目だけで挨拶をしてすれ違う。

その直後、すぐ後ろで軽くて硬いものが落ちたような音がしたの。
振り向くとそこには長方形のものが落ちていた。
「Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ？」

手に取ってみるとどうやらゲームみたいだった。
位置からしてこれがゆりのものなのは間違いない。

「仲村さん」
あたしが声をかけるとゆりは振り返った。
疲れているのか浮かない表情をしていたわね。
「これ、落としたわ」
それであたしが差し出すとゆりは一瞬だけ驚いた顔をした。

でもすぐにいつもの表情に戻った。
「また、はなきのやつ……」
ゆりはため息とつくとあたしからゲームを受け取った。
「仲村さん、ゲームを学校に持ってくるのは禁止よ」
今回はご家族――弟さんかな――のイタズラのようだけど一応注意したの。

「だったら、あなたが処理していいわよっ」
それを聞いたゆりはゲームをあたしに押し付け、そしてそのまま早足で自分の教室へと消えていったわ。

ゆりからゲームを預かったあたしはそれを家に持ち帰った。
本当は返しに行こうと思った。けど、まだあたしはゆりの家を知らなかったの。
明日また、ゆりと一緒に帰ろう。あたしはそう決めた。

でもその前に、このＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒがどんなゲームなのか少し気になったのでやってみたの。
「死後の世界が舞台なのね。えっと、どう操作するのかしら」
結果、あたしはそのゲームにはまってしまった。特にヒロイン子がいい。

だからいつもは八時間の睡眠だったのに五時間になってしまったわ。

学校に行ってからあたしは休み時間の合間にゆりを探した。
もちろん、放課後に一緒に帰る約束をするためよ。
でも、教室にはいつもいなくてなかなか会えなかった。
教室には休み時間が終わる直前になって戻ってくるので話す時間もなかったの。

あたしは最後の手段として前回と同じように放課後の下駄箱でアタックすることにした。
「仲村さん」
早速ゆりを見つけたあたしはすぐに声をかけたわ。
ゆりは前回と同じようにあたしを無視して歩いていった。

オーケーをもらったあたしはすぐに小走りでゆりに追いつく。
並ぶとゆりの方から話を振ってきたの。
「なんか用？」
「預かっていたゲームを返そうと思って」

それを聞いたゆりは手を差し出した。
「だったら早くして」
「学校の中じゃ返せないわ」
「そっ」

学校が見えなくなってから、あたしはかばんからゲームをとりだした。
「これ、面白いゲームね」
「プレイしたんだ」
「……ごめんなさい」

勝手にゲームをしたから気分を害してしまったと思って、あたしは謝った。

「謝らなくていいわ。あとそれ、貸してあげる」
「え、でも……」
「じゃ、あたし急ぐから」
そう言うとゆりはゲームを受け取らずに帰っていた。

「それから急に仲良くなることもなくて中学生の間は顔見知り程度だったの」
「な、なんか不思議な距離感だったんだな」
「そうね。でも――あ……」
そこで言葉を途切らせた。

「どうした？」
異変に気付いた音無が心配そうに声をかけたが立華は一点を見つめたまま喋らない。
その視線の先には麻婆豆腐の乗ったレンゲがあった。

短い沈黙の後、意を決したように立華が口を開いた。
「……あたし、音無君に謝らなくちゃいけないことがあるわ」
「ど、どうしたいきなり」
謝られるようなことはなんにもされてないのに。

「ほとんど一人で食べちゃった。ごめんなさい」
立華は持っている麻婆豆腐が入っていた容器を見せた。
どうやったらそうなるのかプラスチックの容器は新品のようにきれいになっている。

それはいいとして、立華は麻婆豆腐を独り占めしたことに負い目を感じたのか。

音無が納得していると立華はレンゲを口元に持ってきた。

「だから最後の一口は音無君が食べて」

立華は初めて会ったあの日のように食べさせようとしている？

しかも、このレンゲってさっきまで立華が……。

「お、俺は大丈夫だ。ほらっ今日の朝ごはんは麻婆豆腐だったし」

一瞬、煩悩に負けそうになったがなんとか押しとどめた。

「わかった。音無君がそう言うのなら」

そして意外にも立華はあっさりと引き下がった。それだけ麻婆豆腐が好きってことか。

立華は最後の一口を嬉しそうに口に運ぶと幸せそうに味わっていた。

移行

「ごちそうさまでした」
「これからどうするの？」
「まずはライフピーアンコースターじゃないのか？」
「ライフピーアンコースターは外せないものね」
「よしっ早く片付けて早く行こうぜ」
立華は頷くとシートの端に置いてあるおもりを回収し始めた。

片づけをしてから立ち上がると視界にまだいる松下達が映った。
ただ、さっきよりも一人増えている。
「Ｏｈ！　Ｗｅ　ａｒｅ　ｌａｃｋｉｎｇ　ａ　ｍｅｍｂｅｒ！」
ＴＫだ。格好はさっきの屋台のときと全く同じものだった。あれで前が見えているのか？
とはいえ、特に用事もないので横を素通りしようとした。

「ちょっと待ってくれ」
でも、あちらの方から呼び止めてきた。松下は立ち上がるとこちらに近づいてきた。
それを見た音無はさっきの違和感の正体がようやく掴めた。
松下の着ている柔道着の帯。それが白帯になっていた。たしか松下は黒帯だったはずだ。
……もしかしてこれだけで立華は欺かれているのか？

音無がまさかなと思っていると松下は呼び止めたわけを喋りはじめた。
「今から麻雀で勝負をしよう」
「は？」
机の上には本当に麻雀牌が用意されていた。

「そちらが勝てばこの五千円分の商品券をプレゼントだ」
松下は懐から商品券を出して音無の前にちらつかせた。

「時間がもったいないんでいいです」
あまりに不自然だったので音無はすぐさま敬語を使って突き放す感じで断った。
「ならばパターゴルフでどうだ」
でも、品を変え、松下は食い下がってくる。
「それもやりません。立華、行こう」
妙な流れになりそうだったので立華の手をとって、この場から離れようとした。

その時――
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！」
ＴＫを合図に三人はいっせいにクラッカーを鳴らした。
「こんぐらちゅれいしょんず？　クラッカー？」
音無が混乱しているとクラッカーを机に置いた竹山が近づいてきた。

目の前まで来るとポケットに手を突っ込んで赤いカバーのようなものを取り出した。
「それは大切に持っててください」
そう言ってこっそりとそれを音無に手渡した。
「これは？」
竹山は音無の問いには答えず、二人を引き連れて去っていった。

「本当になにが目的だったんだ」
当惑する音無の手を今度は立華が握った。
「ライフピーアンコースターが待ってるから行きましょ」
「そうだな」

立華のこの上目使いを見たら竹山たちなんてどうでもよくなった。
こんなもん、後でゆりに聞けばいいんだ。

上機嫌の音無と期待に満ち溢れる立華はライフピーアンコースターのある絶叫ギルドへと向かった。

「麻雀班、終了しました」
音無たちがいなくなったピクニックフィールドで小さな声がした。
その持ち主は木の枝に座って、ある人とインカムで通話をしていた。
『ありがとう遊佐さん。音無君はクリアできた？』
「はい、特に悩む様子もありませんでした。ギャンブル好きの可能性は低そうです。まだゼロではありませんが」
『パチンコや競馬も試しとくべきだったかしらね』

「ところで――」
『ん』
「今日は見張るだけだったのでは」
『皆、すぐ見つかるわ音無君に正体もバレるわで見張れてないじゃない』
「いつものことです」
『だから少し方向性を変えたのよ。ま、良い事を思いついたって部分もあるけど』
「でも少し幼稚過ぎませんか？」

『……』
「……」
『んじゃ、引き続き監視をお願いするわ』

「その前にゆりっぺさんに一つお願いがあります」
『遊佐さんがお願いなんて珍しいわね』
「だれか木に登れて私を降ろせる人を派遣してください」
『……わかった。椎名さんが近くにいるから頼んどく』
「助かります」

「すごい並んでんなぁ」
音無と立華はライフピーアンコースター前に到着した。
入り口からはスタッフによって横に四人に並ばされた人達が列を成していた。ここからだと最後尾も見えない。
「音無君、あれ……」
立華が指差す先にあった看板には二時間待ちと書いてあった。
「二時間か。でも並ばないと乗れないし、早く並んじゃおう」
「そうね」
「いえ、そうとも限りませんよ」
二人の前にいたチャーギルズのスタッフ衣装のブレザー――ここのスタッフ衣装は全て学校のものっぽい――を着た男が話しかけてきた。
なぜスタッフ衣装がそうなのかは謎だが音無はこの男を知っていた。

「高松君どうしてここにいるの？」
それどころか立華にもバレた。まぁ服装以外はなんの変装もしていなかったから当然か。
「この制服を見てもらえばわかると思いますがアルバイトです」
高松はバレても見た感じでは動揺していなかった。
メガネの位置を直す指も震えてない。これはあえて姿を見せたっ

てことだ。

となれば――

「さっき言った『そうとも限らない』って、別の入り口にでも案内しようって話か？」

「さすがは音無さん。察しがいいですね」

高松の言葉を聞いて、立華の目がわずかに厳しくなった。

「知り合いだからってえこひいきやずるはよくないわ」

音無はもっともだと思った。これはまさに横入りじゃないか。

「俺たちは……」

「ただでとは言っていません。ちゃんと条件があります」

俺たちはちゃんと並ぶから遠慮しとくと言おうとした所を高松が被せてきた。

「お金がかかるならなおさら遠慮するわ」

立華はただでの部分をそのまんま受け取ったみたいだ。

「いえ、お金はいただきません」

高松は冷静に立華の勘違いを正した。

「で、その条件てのは？」

「まずはあちらに乗っていただきます」

高松はライフピーアンコースターの反対側にそびえ立つ、一つのアトラクションを示した。

「あれはなに？」

「高さ約九十八メートル、最高落下速度は約百キロメートルを誇る――」

高松は大げさなアクションでメガネのずれを直しながら重々しく言葉をためた。

その雰囲気に音無もつばを飲み込み、立華はライフピーアンコー

スターに視線が釘付けだった。

「エンジェルフリーです」

歌詞

「近くで見るとすげぇ高い」
「うん、ビル三十階ぐらいはありそう」
音無と立華は高松が促されたままにエンジェルフリーの入り口に来ていた。
ここは乗る場所の裏側で時速百キロがどのぐらいのものかは見れない。
でも、降りてくる人は二人に一人以上の割合で気分が悪そうだった。

列に並ぶと十分もしないうちに乗る番がまわってきた。
二人はセーラー服を着たスタッフに案内されるがままに表へまわる。
スタッフはそのまま一番右端に立華、その隣に音無を座らせた。
「くつは脱いでください」
音無達は言われるがままに靴を脱いで足元のコンクリートの上に置いた。
次に上から体を押さえつけるバーを降ろすと、きちんと機能しているかを確認した。
それから舌を噛まないようになど、いくつかの注意事項を乗客に伝えてからスタッフは下がった。

そろそろ勝負の時間だ。
さっき高松が提示してきた条件とは簡単なものだった。
エンジェルフリーの頂上では眺めがよく海が見渡せる。
その海に島が一つあって日替わりで内容が変わるパネルが設置してある。
それを読んだらライフピーアンコースターの受付の人に言うと中

に入れるというものだった。

……楽勝じゃないか？　上がっていって落ちるまでに時間がある。

高所恐怖症でも視力が悪くもない音無には不安要素はなかった。

「音無さん油断しないでくださいね」

そんな心を読んだかのように忠告してきた。――なぜか左側から。

少し顔を動かすと左隣には遊佐が座っていた。

「なんで堂々と乗ってんだ？」

冷静を装いつつも立華に聞こえないように注意しながら聞いた。

「ここは遊園地ですから。１０、９、８、――」

「音無さん、僕もいま……」

「――５、４」

遊佐の謎のカウントが４を迎えたその時、エンジェルフリーは動き出した。

「ぬぉぉおおお！？」

体を座席に力いっぱい押し込んで音無を空高くへ――しかもかなりのスピードで――連れて行く。

フリーフォールって普通は上昇のときはこんなにスピードは出さないだろ！

というか立華は大丈夫なのか！？　右を向くと立華は涼しい表情でこちらを向いて目で「なに？」と聞いてきた。

それに答える前に頂上に着くと景色を堪能する暇も与えずにすぐさま下降し始めた。

強烈な浮遊感と共に肩がバーにめり込む感触がする。

「神は落ちなぁぁぁいいいいっ！」

前方に青い海が見えたがそこからパネルを探すなんて芸当はできるはずもない。

上昇のときよりもスピードを出して――これが約百キロか――地上に戻ってきた。
たぶん、動き始めてから三分と経っていないはずだ。
靴を履いて立ち上がると足の感覚が変だった。なんかこうフワフワする感じ。
対して立華は悠然としていた。さすがとしか言いようがないな。
これだったら島に設置してあるパネルも見つけられたかもしれない。

「立華、どうだった？　俺は見る暇もなかったよ」
「海がきれいだった。……音無君も見た方がいい。もう一度乗りましょ」
「えっ？　ライフピーアンコースターは？」
「ライフピーアンコースターは逃げないわ」

立華はエンジェルフリーを気に入ったようでもう一度――遊佐も今度は一人で――乗った。
心の準備ができていた二回目は海を堪能できたが島とパネルはやはり見えない。
実は立華も見つけられなかったらしくチャレンジは失敗に終わった。
でも、それを抜きにすれば楽しかったのでよかった。
ただ、二連続や三連続は体にダメージがあるからオススメはできない。
あと、急発進すると前もって知っておくべきだな。

音無と立華はエンジェルフリーを離れライフピーアンコースター

に戻ることにした。
その道中、エンジェルフリーの話をしていると歌声が聞こえてきた。しかも最近聞いた声。
「立華、この歌声って……」
立華は音無よりも先に気付いていたようでハンドバッグに手を突っ込んでなにかを探していた。
もしかしてこの前のライブの帰りに話したあれを本当にやってきたのか？

まさかとは思ったが、その間に音無は歌声の持ち主を探すことにした。
とは言っても探すのに時間はそんなにいらなかった。
ベンチに座ってアコースティックギターを弾く彼女は惹きつけるものがある。
岩沢はそういった魅力も持つガルデモのボーカルだった。

音無が見つけると、ちょうど岩沢は弾いている手を止めた。
少し休憩するのか？　いや、アコギをなんか弄ってるし、あれは調律？
音楽や楽器に疎いからよくわからないが――
「今がチャンスじゃないか」
音無が小声で教えると立華は取り出した紙を開こうと格闘しながら岩沢に近づいた。

「こんにちは岩沢さん」
無事に開き終えた立華は気後れする様子も見せずに岩沢に話しかけた。
でも、岩沢はアコギに夢中で気付かない。
立華はめげずに今度はしゃがんで顔を覗きこんだ。
それでも岩沢の目は立華に向かなかった。

「すごい集中力。邪魔しちゃ悪いわね」
「じゃあ、いくか」
「歌詞はまた次……」
「待って」
さっきまで関根が顔に落書きしても集中は途切れそうにもなかったのに呼び止めてきた。

振り返ると岩沢の顔の右の頬には赤の丸いシールが張られていた。
うん、実際もう手遅れだったな。でもそれに本人はその状態のまま話を続ける。
「今、歌詞がどうたらって言わなかった？」
そんな岩沢は立華が口にした音楽に関するワードに反応していた。

それを受けて立華はさっきの紙を差し出した。
「歌詞を書いてきました」
岩沢は黙ってそれを受け取るとこの場で読み始めた。
本当に紙に歌詞を書いて持ち歩いていたのか。……立華はどんなのを書いたんだ。
興味がわいた音無は立華に許可を取ってから岩沢の横から覗き込んだ。

麻婆豆腐　君こそ　辛くて　うまいわ
死ぬまでに　食っとけ　麻婆豆腐
落とした　ほっぺが　お気楽に　もう一口
願うよ　ひとすくい　レンゲで　麻婆豆腐　ありがとう

サビの部分だけを抜き取ったが立華が書いてきた歌は完全に麻婆豆腐の歌だ。
うん、なんだか麻婆豆腐への愛を感じる。

岩沢から離れて戻ると立華は視線で「どうだった？」と聞いてきた。
「立華らしさが出ていて良い歌だった」
音無が褒めると立華は嬉しそうに頷いた。

岩沢を待っていると、なぜか立華が音を立てずに近づき始めた。
一歩一歩、距離を詰めると今度は岩沢に手を伸ばす。
岩沢はここまで近づかれても立華の書いた歌詞の吟味に没頭していた。
そして、立華はついに――

ぴっ……。

岩沢の頬についたシールをはがした。
……ずっと、はがしたかったんだな。
立華はその指につけたシールをすぐそばにあるゴミ箱に捨てようとした。
それとほぼ同時にどこからか切ない声があがった。
「あっ、捨てないで！」

その声に立華は捨てようとする手を止めた。
そこから首だけを動かして探しはじめたが姿を見つけられないようだ。
まぁ、たしかにここからでも何処にいるかはわからない。
でも、音無はユイが隠れていると、さっきの声から確信していた。
岩沢の顔についていたシールを欲しがっていることも。
後は近くに椎名もいるはずだ。じゃないとユイがこんな風に隠れられない。
そうだ、それなら……。

「立華」
音無はある考えが浮かんできたので声をかけると、まだ捨てないでと言ったユイを探している立華は振り返った。
「今、声がしなかった？」
「した。だからさ、シールを高く掲げてあげるって言ってくれるか」
自分ながら強引な「だからさ」だと思う。
でも立華は疑問を持たずにシールを高く掲げてくれた。

「あげる」
立華がその一言を発したと同時に一陣の風が通り抜ける。
その風が収まると既に立華の指に赤いシールはついていなかった。
「は、はやっ」
椎名が結いのお願いを聞いて死角から取りにくるとは予想してたけど目に映らないなんて……。
立華も不思議そうに自分の指を見つめていた。

「立華さん」
呆気にとられていると岩沢が顔を上げていた。
立華は急いで岩沢の正面へ行き、姿勢を正してピシッとした。
そんな立華を前に岩沢は口を開いた。

「この歌詞……なかなか心がこもってるよ」
下した評価は音楽に関しては妥協しない彼女にしては高評価だった。
とは言え、この歌詞の悪い点もちゃんと見抜いていた。
「でもこれさ、型にはめようとしてない？」
指摘された立華は目を丸くした。まさに図星だったんだな。
「言葉の枠やリズムの枠なんて常識と一緒に叩き壊していい。音楽はもっと自由で……」

この後もしばらく岩沢の音楽談義が続いた。
立華は熱心にそれを聞き、わからないところは質問もしていた。

音楽談議を終えると二人は岩沢をそこに残しライフピーアンコースターへ向かった。
後ろをちらりと振り返ると創作活動を再開した岩沢にユイがアタックを仕掛けていた。
「なにかあった？」
立華に後ろを見ていたのを見られていた。ここでユイが見つかるのはまずい。
ユイが変な言い訳すれば三つ子設定になったりして絶対に話がこじれる。

音無は誤魔化すため、咄嗟に目に入ったものを急いで拾った。
「あ、空き缶が落ちてたのを発見してさ」
音無はその空き缶を自販機の横にあるゴミ箱に入れた。
これで立華は納得してくれたみたいだ。

それから数分ほど歩いてライフピーアンコースター前まで戻ってきた。
列はちょうどお昼時だからかさっき来た時と違って横二人で列をつくっていた。
最後尾にある看板も今は一時間待ちと書いてある。
短くなったから列の整理をしなくていいのか高松の姿もなかった。

最後尾に並ぶと音無はさっきの出来事を話題に出した。
「それにしても岩沢がいてビックリしたな」
「そうね、ビックリしたわ」
「でも、なんでいたんだろうな」
一瞬、ゆりの顔が出てきたが振り払った。さすがにそこまではな

いよな。

「休日だったのかもしれないわね」

「だとしたらすごい偶然だ。ガルデモはほとんど休み――って立華どうした？」

急に立華は浮かない顔をした。

「……もしかしてあたし、せっかくの休みを邪魔した？」

そっか、そういう心配をしたのか。立華は優しいな。でも――

「岩沢はたぶん気にしてないんじゃないか」

「でも、休日に邪魔されたらいやじゃない？」

「場合によるって。立華は寝ているところを麻婆豆腐に起されたらどうだ？」

立華は目をつぶって想像し始めた。……さすがにこの例えは無理があるか。

そもそも麻婆豆腐に起されるシチュエーションってどんなんだ？

「……いい」

でも、立華にはしっかりとイメージが浮かんだみたいだった。

「だ、だろ？　立華にとっての麻婆豆腐が岩沢にとって音楽なんだよ」

「そう……なの？」

立華は首をかしげた。

「あぁ、きっとそうだ」

「よかった」

音無が曖昧さを残しつつも肯定すると立華は安堵した表情を見せた。

ここで思わぬ切り返しがきた。

「なら音無君は？」

「……え？」
出し抜けな質問に音無は聞き返してしまった。
いや、そうじゃない。
「あたしは麻婆豆腐で岩沢さんは音楽、なら音無君は？」
この質問を返してくることは十分に想定できたし質問されたときもきちんと聞き取れた。
「お、俺は……」
ただ、質問が来たとき、頭の中に浮かんできたものに驚いてしまったんだ。
――立華
そう、真っ先に出てきたのは初めて会ったあの日の割烹着を着た立華のあの笑顔だった。
さすがにこれを正面きっては言えない。言ったら自分でも引く。
だから、なにか別なものを早く……そう、俺が好きなもの好きなもの……。
焦った音無は目をつぶりながら必死に頭の中を探した。
その音無が出した答えは――
「こ、」
「こ？」
「コーヒー！」
無機物だった。
「こおひい！？」
言った直後に驚くような声と共に笑い声が上がった。
音無はあまりの恥ずかしさに目を開けられなかった。
でもまぁ、笑われても仕方ない。それに、引かれるよりはマシだ。

「あひゃひゃひゃひゃっ！　コーヒーって、コーヒーって！」
「し……ん……笑っ……だめ……だよ……」
笑われた方がマシ、笑われた方が。
「ムリだよぉ！　たっ耐えられないっひっひっひっ」
「も……しおりん……笑い……変……」
笑われ……なんだか笑い声が二つないか？　しかもどちらも立華の声に聞こえない。

少し頭が冷えてきた音無はようやく状況がおかしいことに気付いた。
ゆっくりと目を開けるとやはり立華は笑っていない。それどころか目をつぶっている。
たぶん、コーヒーに起されるイメージを描こうとしてるんだ。
じゃあ今、笑ってるのは？

「二人とも笑いすぎだっ」
音無が振り向くと同時に、笑っている二人の少女に拳が落とされた。
しかし、明らかに左右の拳で威力の差がある。
重い右を受けた関根は頭を押さえて座り込み、軽い左だった入江はひさ子に謝っていた。

勢いよく立ち上がった関根はそれに対して抗議した。
「ちょっとひさ子さん！　不公平じゃないですか！」
「しおりん、日ごろの行いは大切だよね」
「あれぇっ!?　あたしと同じ立場なはずのみゆきちが上から目線に!?」

「おいおい二人とも、騒ぎすぎると見つか……」

ちょうどここで、ひさ子がこちらに視線に気がついた。
「遅かったみたいですね」
入江もひさ子の態度で状況を理解すると、こちらに軽く頭を下げた。
「いやだなぁ二人とも。そんなわけなぁっ！？」
そして関根は前フリをしてから驚くというベタな反応を見せてくれた。

ただ、音無も音無でこの上なく驚いていた。
それは単に後ろでガルデモの三人が会話を盗み聞きしていたからじゃない。
その後ろで藤巻が三人の盾になっていたからだ。
まさか本当にガルデモがチャーギルズに来ているのにもゆりが絡んでいるのか！？

「今日はオフなんで撮影はやめてくだせえ！」
「あんた誰よ！」
「マネージャーだす！」
「じゃあ、サインもらってきて！」
「困りますぜ！」
藤巻はファンのパワーに圧倒されたのか、それとも元々苦手なのか、敬語がおかしくなっていた。

「彼女達は音無君のお友達？」
立華がいつの間にかイメージの世界から戻ってきていた。
「えっとそれは……」
「そう、友達なの！　ここで会うなんて偶然だねー」
音無がどうするか迷っていると関根が先手を打った。

「あたしは立華奏です。よろしくおねがいします」

「こちらこそよろしくね。あたしは関根しおり、こっちの小悪魔が入江みゆき、最後に容姿端麗スタイル抜群の麗しいこのお姉さまがひさ子さんです！」

お辞儀をする立華に関根も自分達の自己紹介をした。

これに二人が怒った。

「しおりん！　変なイメージを植えつけないでよ！」

「ちゃんと小はつけたよ！？」

「今の紹介はあたしに対する嫌味だよな？」

「褒めたんですよ！？」

関根の返答に二人はますます怒りを深めた。

「つまり悪魔って言いたかったの！？　ひさ子さん、お願いします」

「ん、任せときな」

「この流れ、何度目ですかーーー！？」

立華はじゃれているように見えているのか悲鳴をあげる関根を助けなかった。

「音無君の友達っていろんな人がいるのね」

「ま、まぁな」

立華は彼女らがガルデモって本気で気付いてないのか？

ライフピーアンコースター

ガルデモの三人とも少し会話しながら――藤巻はずっとファンの対応――並んでいると順番がまわってきた。
ちょうど前の人で区切られていたので音無たちが先頭だった。
「では前から六人の方は順番についてきてください」
スタッフの高松の案内でコースター横まで連れてこられた。

この車体はいかにもジェットコースターらしい外見で特徴らしい特徴はなかった。
その分、コースに特徴があるんだな。なんせ人生観が変わるって口コミだし。
そういえばこのコースター、席が十人分あるような……。

「やっとライフピーアンコースターに乗れるわ」
立華はスキップしそうなほど、うきうきしている。
「ずっと楽しみにしてたもんな」
「うんっ」
立華は嬉しそうにうなずいた。

「じゃあ、マネージャーとみゆきちが一番前ねー」
突然、関根が入江と藤巻の背中を押して前に出した。
それに入江は困惑の表情を見せ、藤巻は燃えつきかけていた。
藤巻はファンのパワーで疲れ果てたのか？　変装もしてないのに別人みたいだ。

「立華さんも音無さんも、いいですよね？」
関根はいいですよねの部分を強調して半分強制のお願いしてきた。
「俺はいいけど立華は？」

「あたしも構わないわ」
「ありがとっ。さぁ、みゆきち、どうぞどうぞー」
了解を得た関根はさらに強く二人の背中を押した。

「あ、あたしは知らない人よりもしおりんの隣がいい……」
でも、入江は目を潤ませやんわりと反発した。
「ここで寂しげにして保護欲を掻き立てる。みゆきちも、なかなかやるじゃん」
関根も軽口を叩いてはいるけれども入江のいじらしさに動揺を隠せていない。

そこにひさ子が口を挟んだ。
「わかった。じゃあ、あたしがマネージャーの隣に座る」
「えっ！　ひさ子さんが！？」
なぜか焦り始める関根にひさ子は眉をひそめた。
「また、なんか企んでんの？」
「いいえっ、滅相もございませんっ」

両腕を振って否定する関根にひさ子は疑いも眼差しを向けた。
「汗すごいよ」
入江の指摘通り、関根の額からは変な汗が流れていた。
それでもひさ子は無言のまま睨み続けた。

「みゆきち、ちょっとごめんねー」
「しおりん？」
とうとう観念したのか関根は入江が肩にかけていたトートバッグに手をかける。
そして、そこからあるものを取り出すとひさ子に手渡した。

「レインコート？」

受け取ったひさ子とバッグに勝手に入れられていた入江が揃えて疑問の声をあげた。
「そうです。大きさは合わないかもしれませんが着てください」
合わないの部分で関根がひさ子の胸元に視線をやったのを音無は見逃さなかった。

「あたし達は先に乗ってましょ？」
待ちきれなくなったのか立華は音無の袖を引っ張ってきた。
「そうだな」
音無は三人から目を離して立華と一緒にコースターに向かった。

二人は前から三番目に座った。立華が右で音無が左だ。
「帽子はお預かりします。他の荷物は足元に置いてください」
スタッフの高松の指示で立華は帽子を預け、二つのバッグは足元に置いた。
片方が小さいとはいえ、二つもあると少し邪魔そうだな。

「片方、俺の足元に置くか？」
音無が聞くと立華は少し悩みだした。
遠慮？　それとも靴で汚れるのを気にして？
「音無君は女性もののバッグが足元にあっても恥ずかしくない？」
立華が心配していたことは音無の予想と方向性からして違っていた。

「あぁ、ぜんぜん恥ずかしくない」
「なら、これをお願いしていい？」
音無が立華が心配していたことを否定するとおずおずとトートバッグを差し出した。
「もちろん」
音無はバッグを受け取ると丁寧に足元へ置いた。

「では安全バーを閉めます」
「ハーイ！」
高松が宣言するといつの間にか二列目に座っていた関根が元気よく入江の左手をあげた。
「恥ずかしいからやめてよー」

高松はバーを降ろすと、ちゃんと閉まっているか手で押してチェックした。
「異常ありませんね」
そう呟くと手をあげてどこかに合図を送った。多分、発車の合図だ。
それを証明するかのようにブザーのような音が鳴ると少しずつ動き出した。

コースターは段々と傾斜を登っていく。
特有の振動と少しずつ近くなる空と雲に音無の緊張も高まっていった。
「いよいよだな」
音無が声をかけると立華はこちらを向いて頷いた。
それから前を向くと入江の席の後ろについている手すりを掴んだ。
さすがに初めて乗るジェットコースターで手は離せないか。

コースターもついに頂上付近、すなわち本当のスタートライン間近まできている。
すると突然、立華が左手を手すりから離し、音無の右手の近くに持ってきた。
まるで握ってと言っているような位置だ。
「たちば――のぉっ！？」
立華に手を出してきた理由を聞こうとしたその時――まだ頂上で

はないのに――ライフピーアンコースターが急に加速した。
音無はその弾みで、ついその手を握ってしまった。

でも、それを考える間もなく頂上を通過した。
そこからさらに加速しながら一気に傾斜を下っていく。
前の席に座っている入江以外の三人は両手をあげ叫んでいた。
そのままコースターは暗い洞窟のようなトンネルに突入していった。
しかし次の瞬間、元気になった藤巻を中心に悲劇が降りかかった。

トンネル内には水を流していて線路もそれに浸かっているらしく、突入すると大きな水の音が響いた。
顔へ水飛沫がかかる感触がする。
前にいる四人、特にひさ子と藤巻にはもっとかかっているはずだ。
その証拠に、トンネルを出るとひさ子の着ているレインコートは日の光を浴びて輝いていた。

関根は初めからこれを知ってたんだな。
それで入江をびしょ濡れにさせるべく前に座らせようとした。
でも企みがバレて自分が前に座らせられることになる可能性がある。
だからその時は用意しておいたレインコートを着ようと考えていたんだ。
……関根のイタズラに対する情熱は尊敬に値する。

それからは順調だった。
「いやっほーーー！」
「止めてーーー！」
右に左に上がったり下がったりする度に関根と入江が声をあげ、時たまひさ子が拳を突き上げていた。

藤巻はトンネル以来、静かに揺さぶられているだけだがどうでもいい。

激しいな。おかげで横を見る余裕がほとんどない。
下手に首を動かしたら痛めそうだ。
それでも音無は右に曲がる勢いを利用して立華を見た。
横顔しか見えなかったが目が輝いていた。
声こそ出してないけどしっかり楽しんでるんだな。

「いやぁーーー！」
入江の絞り出した悲鳴に、視線を戻すと一回転ループがやってきていた。
「みっんな、おっち、ちゃっう、ぞーーー！」
関根が適当な嘘をつくとずっと繋いでいる手に少し力が入った。
あれを信じて不安になったのか？

まさかとは思ったが一応言ってみることにした。
「計算されているから落ちるなんて絶対ないのにな」
風を切る音に負けないぐらいの声で立華に言うとスッと手から力が抜けた。
そしてループに突入すると無事に円を描いた。
「なっ？」
立華は短く二度手を軽く握って返事をした。

それから左右に振られながら少し走ると自分達が出発したスタートでもあるゴール地点が見えてきた。
でもその前には二度目で最後の大きな山なりの傾斜が待っていた。
あれを勢いよく登って降りたらあとはゴールまで一直線だ。

……正直に言えばこれで終わりなんて少し物足りないような気が

する。
決してつまらなかったってことじゃない。
なんかこう、最初に驚かされただけで後は普通のジェットコースターだ。
もしかしたら前評判が乗ったら人生観が変わるだなんて言ってたから期待しすぎていたのかもしれない。

そんなことを考えながら二度目の大きな山を勢いよく登って頂上に着いた。
これから最後の浮遊感を楽しもうとしたところで関根が大声で叫んだ。
「あ、あそこっ！　レールが折れてるっ！」
「えええぇ！？」
入江がいち早く驚きの声をあげる。

しかもこれはさっきのような関根のついた嘘じゃなかった。
本当に山のふもとにあたりにあるレールが折れて向こう側にぶら下がっていた。
位置が位置だけにこのまま突っ込んだら地面に衝突だ。

とは言え、席から立つには安全バーがしっかりし過ぎていて無理だ。
もちろん、このコースターを止める手段もない。
このままじゃ本当にやばい。

しかし、無情にもコースターはすでに最後の下り坂に突入していた。
「くそっ！　どうにかして止めらんねぇのかっ！？　マネージャーも起きろよっ！」
ひさ子も足掻いているがどうにもならなそうだった。

関根や入江なんかはもうなにを言っているのかわからない。

立華も手を痛いぐらいに強く握ってきた。

どうしたらいいんだっ！

考えている間にも地面は近くなっていく。

でも浮かんでくるのは立華や初音、後は親にユイやゆりや日向とかとの思い出ばかりだった。

奇襲

立華と出会った日、家族での旅行、立華と麻婆豆腐、ユイのリハビリ、ゆりとSSS、立華と手を繋いだこと、ガルデモのライブ、日向がウイニングボールをユイん家に投げ込もうとしたこと、そして立華の天使のような笑顔。

思い出が時系列を無視して次々と浮かんできては次々と消えていった。

走馬灯なんてシャレになってねぇっ！

でも、今の音無には立華の手を強く握り返すことだけしかできない。

あまりに無力な自分が情けなかった。

レールの終わりはすぐそこまで迫ってきている。

「もうダメぇーーー！」

入江が絶叫した次の瞬間――

「は？」

コースターはそのまま空中を通り過ぎた。

そこから減速しながら高松が待つ乗り場まで戻ってきた。

「お疲れ様でした。どうでしたか？」

高松が声をかけても誰も返事をしない。

安全バーが上がっても動き出そうともしない。

乗っていたほぼ全員が呆然としていた。

そんな中でいち早く意識が現実に戻ってきたのは立華だった。

「音無君、大丈夫？」

「……」

声をかけるも反応はない。まだ音無は放心状態だった。

「ゆり直伝のあの技を使うしかないわね。……ガードスキル――ハウリング」
立華はおもむろに音無の耳元に自分の手と口元を近づけると――
ふー。
「ふおっ!?」
ある意味でハンドソニック以上の攻撃を受けた音無は一気に意識が覚醒した。
「い、今なにが起きたんだ!?」
奇襲で混乱している音無に立華はさっきと同じ質問をした。
「大丈夫だった?」
「え? あ、あぁ、俺はなんともない。立華は?」
「あたしも問題ないわ」
「そうか……よかった」
一時的な混乱をなんとか鎮めた音無は立華が無事だとわかって一安心した。
すると突然、関根が笑い出した。
「な、なに?」
「し、しおりんの気が触れた!?」
関根のあまりの笑いっぷりにひさ子が驚き、入江が心配をしだした。
そんな二人をよそに関根は立ち上がるとコースターから降りた。
なおも笑い続けながら高松に近づくと右手をあげた。
「イエーイ!」
関根がハイタッチをすると高松も応じた。

「なぁ、最後のアレを説明してくれないか？」
音無は二人が事情を知っていそうなので聞いてみた。
高松が待っていましたとばかりに手をメガネに持ってくると口を開いた。

「最後のあそこはレールを下と同じ模様にして擬態させてあるんです」
「スピードがスピードだけによっぽど動体視力がよくないと気付かないんだよね」
やっと笑いが止まった関根が高松の説明を補足した。
「はい、その通りです。後、折れたレールが本当のレールにかぶらないようにぶら下がっているのも演出です」
それに負けじと高松も付け加えた。
……客に対抗心を燃やすなよ。

それを聞いたひさ子がコースターから立ち上がった。
「まさか、初めっから知ってたのか？」
「だっ、だからあれはライフピーアンコースターの演出であたしのイタズラじゃありませんよ？」
関根は更なる付け足し、もとい言い訳をした。

「でも、真っ先に声を出して皆に気付かせたのはしおりんだよね？」
「入江を水浸しにしようともしたよな」
「ちょ、ちょっと」
雲行きが怪しくなってきたのを感じ取ったのか関根はじりじりと出口へ近づいていった。

「あと、なんだかムシャクシャするから責任を取れ」
「それって八つ当たりじゃないですか！？」
「あたしの分もお願いします」

「なぁっ！？　みゆきちまでっ！！」

追い詰められる関根。でも、いつものように逃げ場がないわけじゃなかった。

「あたし、岩沢さんのとこに行ってきます！」

関根は素早く方向転換すると出口から逃げ出した。

「あっ待て！」

「こ、これで失礼します。待ってー」

それをひさ子が追うと、入江も挨拶をしてから、さらにそれを追っていった。

「……俺達も行こうか」

「そうね」

音無と立華は高松に別れを告げるとライフピーアンコースターを後にしようとした。

でも、なにか忘れているような……。

「そうだ。帽子は返してもらったのか？」

「あ……預けたままだった」

高松にカンカン帽を返してもらった二人は絶叫ギルド内を話しながら歩いていた。

話題は自然というか当然、ライフピーアンコースターだ。

「前評判どおり、すごかったな」

「そうね、特に最後の見えないレールのところが特に」

「あれは本当に死ぬかと思った。初めて走馬灯を体験したぐらいだ」

情けないことに、今思い出すだけでも身震いする。

「そんなに怖かった？」

「えっ？」
立華の返しに音無は驚いた。
「た、立華は怖くなかったのか？」
「最初はビックリしたけど、目を凝らしたらレールが見えたから…
…それに遊園地が安全管理を怠っているわけないわ」
「たしかに」
もっともな意見に音無は納得した。あとさっきの自分が恥ずかしくもなってきた。

「つ、次はどこ行こうか」
だから音無は話題を変えた。
「音無君は行きたいところある？」
「俺は……あんまり激しくないやつがいいかな」
「じゃあ、あれはどう？」
立華が指差した先にはブラストーブギルドの表看板があった。
音無は何のアトラクションか知らなかったが入ってみることにした。

少し並ぶとすぐに案内された。少人数用のアトラクションらしく二人だけだ。
通路を進むとガスマスクをした小柄なスタッフが待っていた。
「こんにちは。立華さ――同士よ！」
訂正、大山だ。高松と一緒にチャーギルズでバイトしているのか。

「えーと、我らがギルドが敵に襲われ爆破することとなったが同士の一部が取り残された。それを見捨てることなど到底できない。よって諸君らに救出してきてもらう。まずはあのトロッコに乗って…
…」
大山は手に持った紙を棒読みしながらアトラクションの説明をしてくれた。

「これで罠や敵を打破してくれたまえ」
説明が終わってトロッコに乗り込むと拳銃のようなものを手渡された。
シューティングゲームみたいなアトラクションなんだな。
「では、良い報告を期待している」
敬礼する大山のこの一言でトロッコは動き出した。

巨大なハンマー、巨大鉄球、レーザー攻撃、天井降下、巨大落とし穴、水攻め、ぬいぐるみ。
ほとんど銃じゃ対処できなさそうな罠をご都合主義的な演出で突破していく。
最後は敵のボスとの対決になって適当に撃っていたら終了した。
部屋を出ると点数も出てきたが二人ともDランク判定だった。

「Dランクかー。ちょっとショックだ」
「ぬいぐるみで手間取らなければCランクだったかも知れないわね」
「たしかにあれは難しかった」
二人は感想をアレコレ話しながら建物から出た。

すると出口付近の不自然な位置で二人の知った顔の女性が立ち話をしていた。
立華もそれに気付くとその二人に近づいていき声をかけた。
「こんにちは、遊佐さんと……入江さん?」

同行

遊佐と入江。奇妙な組み合わせに音無は戸惑っていた。
しかも気まずいのか入江は少しソワソワしている。
そもそも、さっき関根とひさ子を追っていたはず。
なのになんでここにいるんだ？
遊佐も遊佐でずっと姿を隠していたのに急にどうしたんだ？
考えてもらちが明かないので聞いてみることにした。

「関根たちはどうしたんだ？」
「入江さんは関根さん達とはぐれてしまったんです。その上、電話も繋がりません」
音無の問いに入江ではなく遊佐が答えた。
「なら、あたし達も一緒に探すわ」
「いえ、せっかくの遊園地ですのにそれは時間がもったいないです」
立華の提案も遊佐は断った。

「そう。でも、困ったら言ってね。あたし達ができる範囲であれば手伝うから」
「でしたら、私と入江さんだけではナンパなどが不安ですので連絡がつくまでご一緒していただけませんか？」
「あ、あの、嫌だったら断ってくださいね？」
遊佐の頼みだが入江は断って欲しそうにしていた。
そもそもＳＳＳのメンバーやユイ達がいるんだから探し出すのは難しくないだろ。
でも立華の手前、そんなことは口には出せなかった。

「音無君、いい？」
それに、こんな風に立華が上目使いでお願いしてきたら

「もちろん」
口に出せる状況でもノーとは絶対に言えないよな。
音無が了承すると二人ともお礼を述べた。
「ありがとうございます」
「あ、ありがとう」
でも、遊佐とは対照的に入江は複雑そうな表情をしていた。

「それで恐縮なんですがもう一つお願いがあります」
「お願い？」
音無が入江の表情の理由を少し考えていると遊佐がさらなるお願いをしてきた。
「是非、行ってみたいアトラクションがあるのです」
……姿を見せたのはこれが目的だからか？
遊佐の雰囲気から音無はそう感じとった。

「も、もちろん、二人が行きたい場所を優先してくださいね！」
逆に入江からは行きたくないオーラを感じる。
「遠慮しないでいいわ」
「そう……ありがとう」
立華の言葉に入江は肩を落とした。

「それで、どこに行きたいんだ？」
音無が聞くと遊佐は即答した。
「シャドーズ・スクールです」

遊佐の提案を受け入れた二人は遊佐と入江と一緒に絶叫ギルド内にあるシャドーズ・スクール前に来ていた。

スクールと名前に入ってある通り外観は学校だった。
しかし、窓ガラスが割れていたり壁の一部が剥がれていたりと廃墟のようでもあった。

「見た目は完璧にお化け屋敷だな」
「はい、お化け屋敷ですから」
音無や遊佐がお化け屋敷と発言するたびに入江はつばを飲み込み、一人だけすごい緊張感をかもし出していた。
お化け屋敷が苦手なんだな。

「気分、悪いの？」
立華も入江の様子が変なことに気付くと声をかけた。
「う、うん。ちょっとだけ疲れちゃいました」
ここぞとばかりに入江は逃げの一手を打つも――
「それなら、ここが終わったらどこかで休憩しましょう」
遊佐には通用しない。
「じゃあ、並ぶか」
本当は入江を逃がしてあげたいが遊佐に勝てる気が全くしなかった。

列に並んで約二十分、四人は中に案内された。
内装もお化け屋敷らしくボロボロで石ころが落ちてたりもする。
「ほ、ほ、ほ、本格的ですね……」
立華と遊佐は普通にしてるが入江は完全に怯えきっていた。

「こんばんはー」
「ひゃあっ」
暗がりから突然出てきたスタッフに入江は飛び上がった。

「安心して。彼女は人間よ」
「驚いたのはそこじゃないと思うぞ」
スタッフは苦笑いを浮かべ入江が落ち着くのを待ってくれた。
「えーでは説明を始めますね。ここ、シャドーズ・スクールは……」
「現在、校舎では影のような未確認生物が徘徊しています」
スタッフを押しのけ、なぜか遊佐が語りだした。
「その影の目的は体。自らが無くした体の変わりにあなた方の体を狙っているのです」
遊佐は入江から視線を外さずに説明し続ける。
「くれぐれも一人にはならないでください。一人になれば身の安全の保障は出来ません。何度も言いますが、くれぐれも……一人にならないように」
入江は遊佐が脅すように一人を強調して言うたびに身をすくめていた。

全て語り終えた遊佐はスタッフのほうに向き直った。
「間違っていることはありましたか？」
「……いいえ、ございません。それでは、ご無事をお祈りします」
役目をほとんど奪われたスタッフの笑顔は引きつっていた。

そんな彼女に見送られて次の部屋に足を踏み入れるとそこは薄暗い廊下だった。
「いきなり廊下なんだな」
「それは違うわ」
「違う？」
「さっきの部屋の壁紙が下駄箱でした」
否定した立華の変わりに遊佐が答えた。
「それよりも、早くこんなところ抜けちゃいませんか」

のん気に会話していると入江が急かしてきた。
入江は絶えず左右前後を警戒していて余裕は全く無さそうだ。
「わかりました。では、先頭をお願いします」
そんな入江に遊佐は悪魔のような言葉をかけた。
「うん、任せぇえええ!?」

「恥ずかしながら私達は恐怖で足がすくんで動けません。なのでお願いします」
無表情のままそう告げると入江の背中を押して前に出そうとした。
しかし入江も必死な抵抗を見せる。
「あ、あたしも怖いよっ?」
足を突っ張って前に出されまいと耐え続けた。

入江の頑張りに根負けしたのか遊佐は押すのをやめた。
「仕方がありません。じゃんけんで決めましょう」
でも、諦めたわけじゃなかった。

「いや、俺が前に出るよ」
「あたしが前を歩くわ」
これ以上は入江が可哀想なので音無が立候補すると同時に立華も立候補した。
「その言葉を待っていました」

というわけで音無と立華が前、その後ろを遊佐と入江が歩くことになった。

月明かりぐらい明るさしかない静かな廊下に四人の足音だけが響く。

少し進むと左手に閉まっている教室の扉があった。
それを見た入江が不安を口にする。
「これって絶対になにか出ますよね」

それにはあえて答えず、音無はその扉に手をかけゆっくりと力を入れた。
自分の体を盾にして入江の視界に入らないように……開かない。
もう一度、力を込めてみたが扉はビクともしなかった。
「こっちじゃないみたいだな」
音無の言葉に入江は安堵の息を漏らした。

次の瞬間、天井から冷たい煙だかミストのようなものが大きな音を立て噴射してきた。
「おわっ」
「なっなにこれぇっ？」
視界を一瞬で奪われると今度は背中からタックルされるように押された。
体勢が崩れかけた音無は近くにあるなにかに抱きついた。
しかし、抱きついたそれもぐらつき、ついには倒れてしまう。
――備品を壊したらやばい！
倒れ行く中でそう考えた音無は腕の中にあるそれを自分の体に押し付けた。
そして地面にぶつかるのは自分腕と足だけにして衝撃が加わらな

いようにガードした。

噴射がようやく止んで視界が戻ってくると腕の中にあるものが見えてきた。

「腕、怪我してない？」

立華だ。立華の顔が超至近距離にあった。

「ご、ごめん！」

音無は慌てて立ち上がろうとした。しかし、うまく立ち上がれない。

骨折したか？　でも、そんな感じじゃないような……。

「どさくさに紛れてサンドイッチなんて、音無さんは大胆ですね」

「サンドイッチ？　……い、入江っ？」

折りたたみ傘を差して立っている遊佐に言われて背中の方を見ると入江が抱きついていた。

「あたしは一人じゃないので体は許して……」

入江は目をつぶり、ぶつぶつと呟いている。

「あの、入江？」

「助けて……助けて……」

声をかけたが耳に届いていない。だから音無は遊佐に助けを求めた。

「遊佐、どうにかしてくれないか？」

「わかりました」

遊佐は傘を折りたたんでから入江の耳元に口を持っていった。

「それって……」

急に立華が驚いたような声を出す。

「ガードスキル――ハウリング」

ふっ。

「ひゃあっ！」

遊佐の一吹きで入江は飛び上がった。

「影！？　影！？　……影は？」

入江はようやく影が去った――噴射が収まった――ことに気付いてくれた。

それにしても凄まじい一撃だ。

受けたことはないはずなのに体に震えが走る。

音無はなんとか立ち上がると立華に手を差し出した。

「俺のせいで転ばせちゃってごめん」

「気にしないでいいわ」

音無の手をとって立ち上がった立華は遊佐に話しかけた。

「あたしとゆり以外にハウリング使いがいるとは思わなかったわ」

「私も今日、初めて使いました」

「そう。なら、ハウリングの弱点は知ってる？」

「いいえ、あるのですか？」

「耳栓よ。耳栓を使われると効果がないから注意して」

「なるほど……勉強になります」

また歩き始めるとすぐに別の教室の扉が見えてきた。

「あ……」

「そこは違います」

「そ、そうか」

遊佐の一言でその扉の前を素通りした。

すると廊下を突き当たった。
「行き止まりか？」
「左に曲がれそうよ」
「でも、のれんで先を見えなくしてて怖いですね」
「向こう側には影も仕掛けもないので安心していいです」
「……」
「……行こうか」

「そこの……一……二……三……四……三人、止まれ」
のれんをくぐって向こう側に行こうとしたところ、後ろから呼び止められた。
「今の声って……音無さん？」
「いや、俺じゃない」
「あの扉から聞こえてきましたね」
遊佐はさっき素通りした扉を指差す。

閉まっていたはずのその扉は少しだけ開いていた。
しかも、その隙間から二つ光るものが覗いている。
「だれ……？」
入江が怯えた声を出すと、勢いよく扉が開いた。

「おれだ。さっきの借りを返させてもらうぞ」
そこから現れたのは野田だった。
ハルバードを担いで出てきた野田は扉の枠に背をもたれかけると、こちらを睨みつけた。
格好をつけているつもりかもしれないが、まだ着ている馬のきぐるみで台無しだ。

ただ、薄暗いこの場所では馬のきぐるみとまでは知らなければわからないはずだ。

「影のお化け！？」
だから、いつの間にか音無の右腕に抱きついている入江にはお化けに見えたらしい。
「みんな下がって」
そして遊園地が安全管理を怠るはずがないと言っていた立華は危険人物だと感じたようだった。
相変わらず、野田とは気付いてないのか。

それはいいとして、こんな狭い場所でハルバードを振るわれたら立華といえど危ない。
どうにかして止めさせないと。
……そうだ、遊佐ならゆりと連絡を取って野田を止めるように頼んでくれるかもしれない。
「なぁ」
「もうやってます」
頼む前から遊佐は耳につけたインカムで――多分ゆりと――通信していた。
「さ、さすがだな」

視線を戻すと野田はヤル気満々のようで扉の枠から離れハルバードを構えていた。
ゆりは間に合いそうもないか。
「立華、ここは逃げよう」
「音無君は二人をお願い。あたしはここで足止めするわ」
「でも、危な――」
「大丈夫よ。後で必ず追いつくわ」
立華はてこでも動かなさそうだった。

「そろそろ、準備はできたか」
なぜか野田は律儀に待っていてくれた。

これだったらもっと時間稼ぎが出来るか？
「いや、まだ――」
「しねぇっ！」
野田は音無の言葉を最後まで聞かず、立華に襲い掛かった。

次の瞬間、野田が出てきた部屋から現れた巨大なハンマーが勢いよく野田を押しつぶす。
「お化けさん！？」
轟音の後、壁とハンマーの間から落ちてきた野田は見事にノックアウトされていた。
「このハンマーはブラストブギルドの予備ですね。ここに仕舞われていたようです」
遊佐は説明しながら音無の腕にゆっくりと抱きついた。

「えーと、遊佐？」
「……なにしてるの？」
警戒態勢を解いて振り返った立華もそれに気付いた。心なしか表情が硬いような……。
「あの影が怖かったので抱きついてました。それにしても今度は両手に花ですか。やりますね」
そんな立華に、遊佐は堂々と嘘をついた。

「……ひとまず離れてくれないか」
「あっごめんねー」
入江が先にパッと離れた。
続いて遊佐も腕から離れると少し不機嫌そうな立華に近づいていく。なにをするつもりだ？
「耳を少し貸してください」
そう言うと耳打ちをし始めた。ハウリング――なわけはないか。

しばらくして遊佐が離れると立華の表情はさっきより幾分か和らいで……むしろ意気込んでいた。
遊佐は立華になにを吹き込んだんだ？

あれから野田を放置してのれんを潜り、先に進んでいた。
お化け屋敷なので仕掛けや真っ黒な衣装で影に扮したスタッフも脅かしてくる。
そのたびに入江が――時々遊佐も――抱きついてきた。
正直、そのたびに立華が視線を送ってきて気まずい。

なんどか二人に抱きつかないでくれとお願いしたが
「なるべく頑張りゃぁっ影っお化けっ！」
「あの曲がり角で出るので腕の用意をしておいてください」
ダメだった。

諦めてしばらく歩いていると周囲をずっと警戒している入江が異変に気付いた。
「なにか変な音がしませんか？」
「音？」
足を止めて聞き耳を立てるとたしかに革靴で歩いているような音がする。
「後ろから？」
立華の言葉で音無は振り向いたが姿はなかった。しかし、音はまだしている。

すると突然、建物に備え付けてある防災ベルの下にある屋内消火

栓の扉が開く。
そして中からホースではなく黒い布をかぶったものが出てたかと思うとこちらに迫ってきた。
「……は？」
でも、ぜんぜん怖くない。入江でさえ扉が開いた瞬間に少し反応したぐらいだ。

「あれって松葉杖にギブスだよね……」
「そうですね」
布が短すぎて隠すべきアイテムが完全に露出していた。
しかも、杖のせいでこっちに迫ってくるスピードも遅い。

さすがにあれで怖がるやつはいないだろ。
そう思った矢先、誰かがゆっくりと腰に手を回して横から抱きついてきた。
また遊佐が抱きついてきたのか？　いや、遊佐は入江と並んで目の前にいる。
となると残るは？　そう、立華しかいない。
視線を落とすとやはり立華だった。

らしくない立華の行動。もしかして……
「体調が悪いのか？」
「違うわ」
「じゃあ、どうして抱きついてきたんだ？」
「お化け屋敷で女性は仲の良い男性に怖がったフリをして抱きつくのがマナーだって」
「マナー！？」
「遊佐さんが教えてくれた」
さっき遊佐が耳打ちしていたのはこれだったのか。

遊佐に視線を向けると、こちらをじっと観察するように見ていた。
視線があうと無表情は崩さずに口を開く。
「仲が良いのはわかりました。ですからそろそろ行きましょう」
入江も大賛成とばかりに頷いた。

裏で（前書き）

裏で動くゆり達

裏で

あたし達は今、遊佐さんからの要請を受けてシャドーズ・スクールに来ている。

列に並んでたわけじゃないから裏技を使って横入りさせてもらったわ。緊急事態だからしかたないことよね。

とは言っても、ハンマーを作動してもらうように頼んだから解決しているはず。大きな音もさっきしたし。

ハンマーはちょっとやりすぎな気もするけど野田君なら大丈夫でしょ。

むしろ、他のやつじゃなくて感謝して欲しいぐらい。もうちょっと先だったり、別の場所だったりしたら……。

「ゆりっぺ先輩、なんか怖いです」

ユイちゃんがこわごわと呟いた。いけない。表情に出ちゃったかしら。

「気のせいよ」

あたしは素早く表情を取り繕った。

「そんなことはどうでもいい」

そこへ待ちきれない様子の直井君が口を挟んできた。

「それより、早く音無さんに会いに行くぞ」

あたし達を急かすと直井君はさっさと入っていこうとする。

どうやら勘違いしているようね。訂正してあげないと。

「会わないわよ」

「今、なんて言った?」

振り返った直井君は絶望に満ちた顔をしていた。

でも聞き返してきたってことは、まだ聞き違いを期待しているのよね。

あたしはその希望をかき消すためにもう一度言おうとした。
「だから――」
「あさはかなり……」
椎名さんに邪魔されたけれど直井君にはしっかり伝わったみたい。
「そ、そんなことが……」
直井君は足をガクガク震わせ、近くにあったポールでなんとか体を支えている状態だった。

「あの」
すると後ろからあたしの肩を誰かが叩いた。
「スタッフのお姉さんが呼んでます」
振り返ると影で協力してくている女の子がいた。この子がいなかったら今日はもっと大変だったわ。大変なのは音無君だけどね。
「教えてくれてありがと。あと、あたしのことはゆり、もしくはゆりっぺと呼んでくれていいわ」
「は、はいっ」
どう呼んだらいいか迷ってたみたいだから付け加えておいた。

そこへユイちゃんも便乗してくる。
「ユイはユイ先輩か神様で！」
「愚民が神を名乗るなっ」
ユイちゃんが手をあげてアピールすると復活した直井君がその手の甲を平手で叩いた。
なかなか、いい音がしたわ。

手を叩き落されたユイちゃんは当然怒った。
「なにするんですか。痛いじゃないですか！」
「貴様の彼氏に『神様、ユイが調子に乗ったら俺の代わりに頼みます』と土下座されたんだ。神である僕はそれを聞き入れただけのこ

と」
直井君は絶対に都合がいいように解釈してるわね。
「先輩め、あとでシメてやる」

日向君への復讐を誓うユイちゃんを放って置いてあたしは松下君とＴＫにガードされている岩沢さんに近づいた。
今、岩沢さんは寄ってきたファンに即興で短い歌をプレゼントしている。
サインは書かない代わりにいつもそうしているんだって。
横入りしても文句を言われなかったのは彼女の存在が大きいわね。

あたしは歌い終わるのを待ってから声をかけた。
「岩沢さん、行きましょ」
「ん、わかった」
ファンの子は名残惜しそうにしてたけど引きとめはしなかった。
あたしもホントはもう少し聞いていたかったんだけど、そうも言ってられない。
早く野田君を回収して別の指示を与えないとまた奏ちゃんを襲いかねないわ。

「あとは直井君と椎名さんね。松下五段とＴＫは残りの二人をお願い」
「ふん、当然だ」
「あさはかなり……」
「承知した」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」
「えっ？　ユイにゃんを連れて行ってくれないんですか」
岩沢さんと引き離されることなったユイちゃんがショックそうな声をあげた。

「一度には入れるのは四人までだからごめんね」
「だったらっ……」
「まぁ、理性を失って野獣と化した音無君かハルバードを振り回す野田君のどちらかを止められるなら話は別よ」
「あたしはここで順番を待ちますっ！」
ユイちゃんは敬礼してあたし達を見送った。

ちなみにだけど、ひさ子さんと関根さんはここにはいない。どこかで説教をしたりされたりしているはずよ。
もちろん二人きりにはせず、藤巻君を回収して竹山君と一緒に置いてきたわ。
あと、岩沢さんが大事にしているアコースティックギターはひさ子さんが預かっている。よっぽど信頼されているのね。

あたし達はアトラクション説明がある部屋のスタッフには見向きもしないで通り過ぎる。
そのまま、先に進むとハンマーが見えてきた。想像よりも大きいわね。
ハンマーの近くにいた野田君は気絶したままだった。

椎名さんの出番はなさそうと一安心したあたしは野田君を起すことにした。
「野田君、起きなさい」
揺すっても頬を叩いても幸せそうに眠ったまま起きやしない。
こうなったらアレをやるしか？

「し、仕方ないわね」
あたしは覚悟を決めて野田君の耳に口を近づけようとした。でも、

きぐるみが邪魔をする。
だからあたしは手を突っ込んでうまく耳を露出させた。これでよし。
あたしはその耳へそっと技名を呟く。
「がーどすきる……はうりんぐ……」
そして――

ふーっ。

「……」

ふーっ、ふーっ、ふーっ！

「……」
「これだと、あたしが変態みたいじゃないっ！　さっさと起きろっ！」
「イテッ！　くそっ敵襲かっ？　……ゆりっぺ？」
立ち上がる勢いを利用して力いっぱい頭を蹴るとようやく目を覚ました。
でもまだなんかムカついたからもう一発入れといた。

顔の横からきぐるみの中に手を突っ込んで首をさすりながら起き上がった野田君にあたしはさっさと指示を出す。
「野田君は一人でこのハンマーを片しといて」
「了解だ、ゆりっぺ」
「それが終わったら別の指示を出すからあたしのところに来きなさい」
「あぁ……終わったらすぐ行くぜ」
あたしは野田君の言葉から別の意味合いを感じ取ったけれどスルーした。

あたし達は野田君をそこに置いていき、先に進んだ。
途中で影役のスタッフを一人、椎名さんが倒しちゃったけれど
「案ずるな。峰打ちだ……」
と、見事に解決してくれたわ。ところでクナイの峰ってどこにあるのかしら。

「神は怖がらない……神は怖がらない……」
「あさはかなり……」
「夜の学校に化物か。曲にするなら……」
思い思いに楽しみながら進んでいると、あたしはあることを思い出した。

「そうそう、岩沢さんはあのこと考えてくれた？」
「出だしは……ん？　あのこと？　……あぁ、あのこと」
いきなり話を切り出したから一瞬戸惑ったみたいだけど、すぐにわかってくれた。
今日、遊佐さん経由で会ってすぐにお願いしたあの話。

「あたしは音楽が出来るならなんでも構わない」
「嬉しい答えだわ。なら――」
「けど多分、上が許さない」
岩沢さんはきっぱりと断言した。しかも少し嫌気がさしているような表情。
音楽がしたいのにする時間が減らされてうんざりしているって噂は本当みたいね。

でも、あたしはある裏技を持っている。

「ふふーん。それなら大丈夫よ。あたしに任せて」
それを使えば簡単に事は進むわ。
「……よくわからないけど任せる」
「決定ね」

話がついたところで遊佐さんから通信が入ってきた。
『シャドーズ・スクール、終了しました』
いつものように淡々とあたしに報告した。
「早かったじゃない。もう奏ちゃん達とはもう別れたの？」
『いえ、今はお手洗いから通信しています。長くいると色々と迷惑がかかるので手短に報告します』
「わかったわ。それでどうだった？」
遊佐さんの声からじゃあ結果がわからないから、いつも少しドキドキするわ。

『音無さんは立華さんが抱きついた時は顔を真っ赤にしていました』
奏ちゃんに抱きつかれたらそうなるのは当然よね。あたしも油断してたら……。
『逆に私や入江さんが抱きついた時には抵抗などはしませんでしたが喜んだりする様子も見受けられませんでした』
「なるほど。情報通り、“女の子にだらしない”って事もなさそうなのね」
『それに加えて“無表情な女の子が好きなだけ”ってこともなさそうです』

「それじゃあ二つ目もクリアってことで。あれを渡していいわ」
『了解しました』

渡される

シャドーズ・スクールを抜けた音無たちは遊佐を待ちながら次に行く場所を相談していた。
「俺はアトラクション自体をあまり知らないんだよなぁ……」
「あたしはドキドキしないものなら、なんでもいいです」
入江はさっきの恐怖を思い出してか体を震わせた。

「それなら、趣味ギルドに行ってみるのはどう？」
「趣味ギルドか。たしかにあそこなら入江も安心できるな」
「なんかあたしのために……色々とすみません」
「いやいや」
「さっきも言ったけれど気しないでいいわ」

入江が申し訳なさそうに頭を下げているところに遊佐が戻ってきた。
「お待たせしました」
すると入江は素早く頭をあげて遊佐に近寄る。
「お帰りなさい、遊佐さん！　次は趣味ギルドに行くことになったけどいいよねっ」
「いいですよ」
入江が今決まったことを嬉しそうに勢いよく告げると遊佐はそれをあっさりと了承した。ちょっと意外だ。

「じゃ、行くか」
「はい、それでは先にエンジェルフリーへ行きましょう」
「え」
遊佐の言葉で入江の笑顔が一瞬で凍りつく。
「どうしても乗ってみたかったのです。そんなに時間はとりません

のでお願いします」

「きゅうにはっしゃしないでぇぇぇーーーーー！」

というわけで四人はエンジェルフリーに乗った。

三度目の音無は最初に比べて大分余裕だった。立華も遊佐も涼しい顔のままだ。

「落ちるのもダメェェェェェッ！」

対して入江はライフピーアンコースターよりも大ダメージを受けたようだ。

「あたしの体はくっ付いてますか……」

「大丈夫よ。どこも外れてないわ」

入江は降りてからもしばらくフラフラしていた。

入江が回復するのを少し待ってから趣味ギルドへ向かうことになった。

その道中、立華が不思議な質問をしてきた。

「音無君は見えた？」

「見えたってなにが？」

また、ＳＳＳの誰かが見つかったのか？

「高松君が教えてくれたライフピーアンコースターに早く乗れるようになる合言葉よ」

「あぁ、そういえばあったな。忘れてたよ」

見つかったわけじゃないのか。音無は苦しいフォローをする必要がなくて少しホッとした。

「立華は見えたのか？」
「見えたわ」
「あの速さでどこにあるかもわからないパネルから文字を読み取ったのか。すごいな」
音無が感心すると立華はほんの少しだけ胸を張った。

そこへ遊佐が食いついてきた。
「どのような合言葉なのですか」
もしかしてライフピーアンコースターに乗ろうとしているのか？
入江も音無と同じことを考えたようで話題を変えようとした。
「合言葉といえばガルデモでは――」

「【神も仏も天使もなし】よ」
しかし遅かった。立華から合言葉を得た遊佐の目に怪しい明かりが灯る。

「あっ、みゆきちじゃーん」
「しおりん！」
ちょうどその時、関根が現れた。その後ろのベンチにはひさ子がアコギと一緒に座っている。
よく見ればここはさっき岩沢がいたベンチのところだ。
岩沢はどこかへ行ってるの姿はなかった。

「会いたかったよー」
「ち、ちょっと？　……あたしも」
関根は駆け寄ってくると、勢いをそのままに入江に抱きついた。
入江は戸惑った様子を一瞬見せたが、すぐに関根を抱き返した。

関根が熱烈にハグしていると遊佐が普通に話しかけた。
「関根さん、これが頼まれていたものです」

携帯電話よりも少し小さい機器を関根に差し出す。
「ゆさゆさ、ありがとー」
入江を抱きしめたまま関根はそれを受け取るとポケットに入れた。
そしてまた入江を力強く抱きしめなおした。

「今、関根になにを渡したんだ?」
音無はこっそり遊佐に聞いてみた。
「関根さんに頼まれたものです。主にはシャドーズ・スクールやエンジェルフリーで入手した入江さんの悲鳴ですね」
入手ってＩＣレコーダーかそれに類するもので録音していたのか。
少し入江にいじわるをしていたのはそのため?

ひさ子達と再会した入江と遊佐とはここで別れることになった。
入江にはまた頭を下げられ、関根にはなぜか褒められ、ひさ子には感謝され、遊佐は相変わらず無表情のままお辞儀をされた。
一通り挨拶を済ませた後、音無と立華はライフピーアンコースター方面へ歩き出した。
「あ、忘れていました。ちょっと待ってください」
すると突然、遊佐に呼び止められた。振り返ると遊佐が小走りで近づいてきている。

「これをどうぞ」
二人に追いついた遊佐は一冊の小冊子を音無に手渡した。
そしてすぐさま、ひさ子たちのところへ戻っていった。
あっという間の出来事に質問する暇もなかった。
いやたぶん、質問させないようにあえてすぐに戻っていったんだ。
「なにを受け取ったの?」

「わからない」
音無は小冊子を開いてみた。
中には文字がびっしりと書かれている。その中で目に付いた箇所を音無は読み上げた。

「第九条、本学に学長を置く。……これって生徒手帳？」
立華がそれに少し反応をみせた。
「もしかして……」
「なにか知ってるのか？」
立華は質問に答えずに音無が開いている手帳を横から覗き込んだ。

しばらくして立華は手帳から視線を外すと音無を見上げた。
「これはあたしの学校の生徒手帳よ」
「立華の学校？　このページを見ただけでわかるものなのか？」
「全ページを暗記してるから」
「それはまたすごいな」

「それでその手帳は誰のものかわかる？」
「俺のじゃないことだけはたしかだけど……」
全く見当がつかない。そもそも遊佐はどうして俺に渡したんだ？
ゆりがなにか企んでる？
「最初のページに持ち主の情報が書いてあるから開いてみて」
立華に促された音無は最初のページを開いた。

そこに書いてあった名前は――
「音無結弦……」
自分の名前だった。そこに記されている他の情報も全て間違っていない。……なんか怖いな。
「音無君は転校してくるの？」
「だとしたら俺も初耳だ」

「あ……」
また、立華がなにかに気付いた。
「どうした？　なにかあったのか？」
「写真とハンコがないわ」
「写真とハンコがない？」
たしかに開いているページに四角い枠があるが何も貼られていなかった。ハンコもどこにも押されていない。
「えぇ。だからこの生徒手帳は無効よ」

釣り

あの手帳の謎を解明することを諦めた音無と立華は――自然に手を繋ぎ――趣味ギルドに来ていた。

入江はもういないから絶叫ギルドでもよかったがせっかくなのでこちらに、というわけだ。

今、二人は趣味ギルドの案内板を見てどこに行こうか話し合っていた。

「メリーゴーランドに観覧車、ゴーカート、ゲームセンター、パターゴルフ、釣堀……こっちにもいろいろあるんだな」

「そうね。行きたいところはある？」

「うーん……」

「やっぱ、釣堀だよな」

「そうだな。この中で――ってあんたは誰だ！？」

後ろに頭には麦わら帽子、首にはタオルを巻き、手には木製の手作りっぽい釣竿を持った男が立っていた。

「おいらは斉藤。人呼んでフィッシュ斉藤さ！」

「立華の知り合いか？」

立華は首を横に振る。

ＳＳＳの一員じゃなくて、ただの変な人なのか。なら、深く関わらない方がよさそうだ。

「そうだ、絶叫ギルドにあったトルネードなんたらってやつはどうだ？」

音無は来る途中で見かけた名前がうろおぼえの絶叫マシンの名前を出した。もちろん、この場から早く立ち去るためだけに。

「音無君が乗りたいならそれに乗りましょ」

「じゃあ、あっちだな」
立華も受け入れてくれたのですぐに歩き出したがフィッシュ斉藤がその前に立ちはだかった。

釣竿を水平に両手で持ち、なにかに乗っているように腰を屈めて、フィッシュ斉藤が言い放つ。
「ヘイ、来ないのかい！」
「行かないわ」
立華が間髪を入れずに断ったが、フィッシュ斉藤はまだ諦めない。
「デートの定番といえば釣堀、来ないのかい！」
「行く」
またも立華は間髪いれずに断――ってない！？
「定番なら行くしかないじゃない」

最終的には音無も説得され、フィッシュ斉藤に連れられるがまま釣堀までやってきた。
外観はいたって普通の建物だが中に入ると、まず滝が目を引いた。
「釣堀には滝があるのね。初めて入ったから知らなかった」
「外ならまだしも中に滝って、かなり珍しい方じゃないか？」
音無も釣堀は初めてだったが、さすがにそれはわかる。

「お兄さん、なかなか見る目があるな。この滝はおいらのこだわりなのさ」
「おいらのこだわり？」
「あぁ、一番のこだわりだ」
フィッシュ斉藤はいつのまにか入口の近くにあるカウンターの中へと入っていた。
「さて、ここのシステムの説明をするからよーく聞いてくれ」

「ちょっと待て、もしかしてあんたはここのスタッフなのか？」
「そうさ、ここのスタッフだ。でも、間違えないでくれよ。おいらはスタッフ斉藤じゃない、ブッシュ斉藤でもない、フィッシュ斉藤さっ」
二人はこの熱い主張を無視した。
「えーと、まずはこれ、生餌とバケツだ。」
フィッシュ斉藤はそれぞれをカウンターの上に置いた。それを両方とも音無が持った。
「ちなみに客がぜんぜん来ないから全てタダだ！　で、あそこにおいらのお手製の釣竿があるから自由につかってくんな」
フィッシュ斉藤が示した先に、彼がさっき持っていたものと同じような竿がずらりと並んでいた。
あんなに手作りしたのか。あまり使われてないようだけど……。
音無と立華が釣竿を取りに行こうとしたところ、フィッシュ斉藤に引き止められた。
「おーとっ、まだ説明は終わっちゃいない！　釣りは危険もあるから話しは全部聞いてくれ！」
そして長々と語り始めた。
「この釣堀はおいらが尽力して、川釣りを完全に再現しているのさ。一部、流れが速い場所があるから注意してくれ。魚には適度に餌を与えているから、入れ食い状態なんてこともない。むしろ少しスレているぐらいだ。だからここは初心者には少しばかり、きついかもしれないな。それと一人で同時に二本使って釣りをするのは禁止だ。あぁ、言い忘れてたけど滝つぼとか所々で深くなっている箇所があるから、くれぐれも落ちないように注意してくれ。あと最後に一つ。ここには主がいるんだ。その主を釣り上げたらあのマスクを進呈しよう！」
フィッシュ斉藤が指差した先には、マネキンに白・黒・黄の羽や

緑の長い葉っぱをイメージしたような装飾品であしらわれた仰々しい赤い仮面が被せてあった。
あれを被るどころか持っているだけで注目の的になりそうだな。

「あんなの欲しい人なんていないよな」
音無がこっそり言うと、立華は驚いた顔をした。……まさか？
「やっぱ前言撤回する。あれは――欲しくなるよな」
立華は勢いよく頷く。それと同時に音無は主とやらがヒットしないで欲しいと心の中で祈った。

適当に釣竿を一本ずつ選んだ二人は釣りを開始しようとした。
「音無君は釣りの経験あるの？」
「何度かある。立華は初めてなのか？」
「初めてよ。まず、なにをすればいいの？」
「まずは餌をこんな風に針の先に付けるんだ」
音無はお手本として針の先に餌をつけて見せた。

それを見た立華も臆することなく生きの良い餌を掴むと同じように針の先に付ける。
「初めてなのに上手いな」
立華の度胸と器用さに音無は感心した。
「あ……」
ふと自分の付けた餌の方を見ると、すでにぐったりとしていた。

「次はどうすればいいの？」
「よっ！　こうやって投げ込むんだ」
別の餌に付け替えた音無は、またお手本として釣竿を振って川に投げ入れた。

立華もそれに習って投げ入れようと振りかぶる。
次の瞬間――

「釣れたわ」
破けるような音と共に立華は後ろに立っていた誰かの服を手に入れていた。
慌てて謝ろうと後ろを振り返ると、上半身裸の高松がボディービルダーのようなポーズをとっている。
あいつ、ライフピーアンコースターで仕事してたんじゃないのかよ！

音無が呆気にとられていると立華がそれに気付く。
「どうしたの？」
「いやー、ゴミが釣れるなんてツイてないな。早くそれを外して、もう一回だ！」
「わかったわ」
我に返った音無は急いで誤魔化した。

続いて立華の二投目。
「あぁっ！」
高松の切なげな声と共にメガネが日の光を浴びて光る。
ここって天井がないんだなぁ……。

「これもゴミ？」
針から取り外したメガネを手にした立華が聞いてきた。
「あぁ、それもゴミだ。ゴミを捨てておくなんて、ここはマナーが悪い奴が多いな」

二人はようやく落ち着いて釣りを開始した。ちなみにメガネは立

華の隙を突いて高松に返しておいた。
あらためて見渡してみて思ったけど、ここって遊園地としては異質な空間だよな。
滝があるし、少し傾いてきている太陽が上から覗いてるし、足元は座りやすいようにはされているが岩だし、壁にもしっかりと森が描かれている。趣味にもほどがある。
だからか客もほとんどいない。少し近くにおじさんが一人、後ろにスタッフの高松、そして――

「おっしゃあああぁぁぁぁぁぁッ！」
フィッシュ斉藤が元気よく魚を釣り上げる。
「って、なんであんたが釣ってんだ！？」
それにはさすがの音無も突っ込んでしまった。

「フィッシュしない斉藤はただの斉藤だよ……」
と、カウンターのほうから聞こえてきた。
横目で見てみると大山がカウンターに立っている。
あいつもブラストーブギルドから抜け出して……。
こうもスタッフが抜け出したり遊んでたりしていて、チャーギルズは大丈夫なのか？

少し心配する音無の横で立華が静かに魚を釣り上げた。

進路

「うーん、釣れないなぁ」
「もっと肩の力を抜いて。心を静めたほうがいいわ」
立華が三匹で音無は坊主。完全に立場は逆転していた。

「じゃあ、深呼吸でもするか」
音無は立ち上がった。それから少し腕を開いて――深呼吸。
あくまでここは遊園地の一角だから近くに滝があっても空気がおいしい、なんてことはない。
だけど、立華が近くにいるだけで……。

音無が不思議な感覚を味わっていると、ポケットの中で携帯電話が振動しだした。
せっかく人が浸っているときに台無しするなんて、だれだ？
と、少しばかり不満を覚えつつも、一応は取り出して確認する。
ディスプレイには日向の名前が表示されていた。なんで急に？
立華に「ちょっと電話」と断ってから通話ボタンを押した。

「ど……」
『助けてくれっ！』
第一声から日向は助けを求めてきた。
でも同時に、ユイの笑い声も届いてきていた。
日向がピンチでユイが喜ぶ。緊急事態ではなさそうだ。

『ア、アホッ！　足を狙うのはやめろっ』
『先輩、罪には罰ですよー！』
『俺がなにをしたって！？』
『ユイにゃんの将来有望な手を間接的に痛めつけました』

『だからそれは俺じゃないって！　音無もなん――』
ここで音無は電源ボタンを押した。

携帯電話を手に持ったまま戻ると立華が首を傾げた。
「もう、いいの？」
「あぁ、ただののろけだった」
音無は携帯電話をポケットに入れようとして、途中で手を止める。
そして、その手を顔の前まで持ってきて携帯電話を見つめた。

そういえば、まだ立華の電話番号もメールアドレスも交換してない。
ユイのメアドを教えたときも自分のメアドを教えてなかった。というか忘れてた。
――今、このタイミングで聞くのは変か？
――でも、そしたらいつ聞けばいいんだ？
この二つが音無を悩ませる。
携帯電話に仲良くなったら自動的にメアドを交換する機能がついてればいいのに。
それかもういっそのこと、交換なんて概念が消し飛んでくれればいいんだ。

そんな現実逃避を始めた音無に立華が心配そうに声をかけた。
「やっぱり、なにかあった？」
電話が終わった後、携帯電話を見つめていたから勘違いされたみたいだ。
「いや、そうじゃなくて……俺の携帯に立華のデータが入ってないなーって」
音無は勇気を出して言ってみた。軽い感じになったのは現実逃避が尾を引いたからだ。

で、立華の反応はというと目をまん丸にしていた。
その状態のままゆっくりと脇に置いていたトートバッグに手を伸ばす。
中に入っているハンドバッグを取り出すとさらに中に入っている携帯電話を取り出した。
そして勢いよく操作し始める。

「あたしの携帯にも入ってない……」
少しして立華は驚きとショックが入り混じる声を出した。
立華は交換済みだと思ってたのか。
「じゃあまず、俺が送るから立華は受信してくれ」
お互いの携帯の赤外線ポートを確認しながら二人は電話番号とメールアドレスを交換した。

音無は登録された立華の情報を見て少しニヤついていた。
なんで、こう……嬉しいんだろな。立華のだからか？
立華もこういうのが嬉しかったりすんのかな。
音無は横目で立華を見た。

立華は音無のようにニヤついて見てはいなかった。
携帯の画面とにらめっこ。
まさにさっき音無が悩んでいたときと同じような表情をしていた。
まさか交換したくなかった？　嫌々させちまったのか？
立華のそんな表情を見て音無は不安がこみ上げてきた。

「音無君……」
「えっ、な、なんだ？」
急に話しかけられた音無は動揺を隠せなかった。

でも、立華はそれを気にするそぶりを見せない。いや、そんな余裕もないのかもしれない。
「音無君は……」
立華はとても喋りにくそうにしていた。

数秒の静寂の後、ようやく立華は口を動かした。
「……進路は決まった？」
「進路？」
あれだけ溜めておいてこの質問。
もしかして、本当に立華が切り出そうとしていた話題とは違う？
確証はなかったがそんな気がした。

「まだ……かな。立華はどうなんだ？」
「あたしは天上大学の教育学部を推薦で狙っているわ」
「へぇ、立華は先生になりたいのか」
立華は頷いた。

「でも、ＳＳＳのメンバーみたいな生徒を受け持ったら大変そうだな」
「そうね、絶対に大変ね。だけど、あたしが先生を目指すきっかけを作ってくれたのは、ゆりや皆なのよ」
「あいつらが？」
「ええ、ゆり達とは同じ高校になったけど最初はみんなバラバラだった。それと同時に寂しそうにもしていたの」
立華は昔話を始めた。

「一年生で生徒会長に抜擢されたあたしはそれをどうにかしようとしたわ。でも出来なかった。ゆりが死んだ世界戦線を立ち上げようとするまではね」
「やっぱり、あれはゆりが立ち上げたのか」

「校長先生に直談判してつくろうとしたの。すごい行動力よね」
「でも、普通は許してくれないだろ」
「えぇ、初めは校長先生も拒否したそうよ。それでも、ゆりは毎日のように通い続けたの」
校長室に通うゆりの姿は想像がついた。

「ある日、校長先生がゆりに死んだ世界戦線をつくるための条件を一つ出したらしいわ」
「それはどんなやつだったんだ？」
「実は聞いてないの。内容は別として、ゆりは仲間を集め始めた」
「とんとん拍子には……集まらなさそうだな」
あの個性豊かで一癖二癖三癖までありそうなやつらがすぐに団結するわけがない。

「そうね、集まらなかった。彼らの心の壁はゆりでも、そう簡単は乗り越えられなかったわ。でも、最終的にはやり遂げた」
「それで死んだ世界戦線は出来たのか」
「まだよ。ゆりは次にあたしを仲間に引き入れようとしたの」
「最後が立華？　少し意外だ」
「それは……」
ここで少し立華が言葉を詰まらせた。まさか地雷を踏んだ？

「いや、その、意外だってのは――」
「……あたしは死んだ世界戦線には反対してたから」
「反対？」
「死んだ世界戦線って生きることを放棄しているみたいじゃない」
「たしかにな」
少し熱のこもった立華の主張に音無は納得した。たしかに捨て身の集団みたいだ。

「紆余曲折あったけれど最後に気付いたわ、あたしもゆり達と同じなんだって。だから、あたしも死んだ世界戦線に入隊したの」
「同じ？　寂しかったやつか？」
「それもあるけど違うわ。なにか縁とか絆のようなものを感じたの。ゆりも言ってた、『最初はただ仲間を集めているだけのつもりだったのに最後は目的が変わってた』って。多分だけど、ゆりも同じだったんだと思う」
「なんか、そういうのって良いな」
音無が本心から言った言葉に立華はまた驚いていた。
「あたしは音無君からも感じ取ったわ。音無君はない？」

言われてみれば立華やゆり達に最初に会ったときに、なにかそういうものがあった。
日向やユイや直井のときも感じた。それに今日やライブのときだって……。
考えれば考えるほどに思い当たることが沢山ある。

「立華の言うとおりだ、経験あるよ」
「音無君はあたしにもそういうものを感じ取った？」
「感じ取った」
「そう」
立華は嬉しそうに微笑んだ。

「立華はこういう気持ちを伝えたいから、教師になりたいんだな？」
若干なんの話をしていたのか忘れてたのか、立華はちょっと驚いた表情を見せ、素早く首を縦に振った。

引き

「ところで音無君は夢はないの？」
「昔はあったけど今はないなぁ」
「昔はあったの？」
「ああ、昔は……えっと俺に妹がいるって話したっけ？」
「初耳。妹さんがいたのね」
「そう、俺には五つ下の初音って妹がいて牛乳アレルギーだったんだ」

「牛乳を飲んじゃいけないわけね」
「ああ、それが初音が三才の時に発覚してさ。家族全員が慌ててた」
音無は当時のことを思い出した。

真っ青な顔をして呼吸困難でのどを押さえ苦しそうにしている初音。
そんな初音を横たわらせて軌道を確保しようとする母。急いで電話で救急車を呼ぶ父。
そして、なにも出来ずにオロオロするだけの自分。

「その時は事なきを得たんだけど、自分が情けなかった」
立華はまっすぐこちらを見たまま、なにも言わずに聞いている。
「で、子供ながらに思ったんだ。医者になって初音のアレルギーを治してやろうってな」
小学校の卒業文集でも書いた記憶がある。
「でもさ、初音が大きくなっていくうちに症状がどんどんと改善されていった。小四ぐらいには完全に治ってて、今じゃあ、がぶ飲みするぐらいだ」
がぶ飲みはちょっと大げさだが、昨日も風呂上りに牛乳をおいし

そうに飲んでいた。

「それで夢がなくなったの？」

「そうだな。安心して満足しちゃったのかもしれない。でも……」

「でも？」

音無の言いよどんだことに立華が踏み込んだその時、今までないぐらいに釣竿がたわんだ。

――近くで釣りをしていたおじさんの釣竿が。

「なにこれっ！？」

おじさんの男にしては少し甲高い悲鳴にも似た叫びに、音無と立華も異変に気付いた。

見れば近くにいるおじさんが必死に大きくたわむ釣竿を引いていた。でも、明らかに力負けしている。

あれは危ない！　助けないと！

そう判断した音無は立ち上がろうとした、その瞬間――

「ゆり！」

立華が先におじさんの元へと疾走する。

ゆり？　……いや、今はそれどころじゃない！

音無は立華の発言に一瞬だけ戸惑ったがすぐに切り替え、後に続いた。

まず、立華がおじさんの腰に抱きつき、支える。

音無はその立華の腰に抱きついて、踏ん張った。

それでも、音無と立華が加わって三人になってなお、事態は改善しなかった。

じりじりと川に引きずられていく三人。すごい力だ。

このままだと引きずり込まれるのも時間の問題だ。
「お前らも見てないで手伝ってくれ！」
そう考えた音無は高松や大山に助けを求めた。

「はいっ音無さん」
真っ先に飛びついてきたのは高松でも大山でもフィッシュ斉藤でもなかった。
「崇高な音無さんの匂い……」
背中に顔を埋められているような感触、聞き覚えのある声、こいつは――
「直井いたのか」
「はい、両手に枝を持って壁と同化してました」

「私を脱がせたのはこの複線のためだったのですね」
「わわっ、すごい引きだね！　僕も加勢するよ！」
少し遅れて高松と大山も列に加わったことで計六人になった。でも、まだまだ力負けしていた。
最初はまだ手加減されていたのかもしれない。

「どんな魚なんだよ、こいつは！」
音無が悪態をつくとフィッシュ斉藤がやってきた。
「そいつは川の主。あの強さの象徴であるマスクを手にするための相手としては申し分ないって訳さ」
どうやら手伝ってくれる気はないようだった。自分らだけで頑張れってことか。
音無は高みの見物を決め込んだフィッシュ斉藤から視線を外し前を向くと、あるものが目に入ってきた。

――先頭で釣竿を掴んでいるおじさんのカツラがずれていた。
普段なら笑ってしまう光景だがこの状況では笑えなかった。

でも、カツラは笑いを求めているのか徐々にずれていく。
そして、とうとうカツラが滑り落ちた。

それにはさすがの音無も噴き出してしまった。
ただ、噴き出したのは面白かったからではない。
カツラの下が想像していたような不毛の地ではなく肥沃の地だったことに驚いてしまったからだった。
さらに言えば、その地に生える紫っぽい赤色の髪の毛に見覚えがあったから驚いた。
要するにそこにいたのが――

「ゆり!?」
おじさんに完璧に変装していたゆりだった。
「あら、音無君。こんな場所で会って、しかも危機に瀕しているなんてお互いツイてないわね」
カツラをかぶるために髪の毛をまとめているゆりは首筋に汗を浮かべながら軽口を叩いた。
そういえばさっき、立華がゆりの名前を呼んでた。
立華はそれだけでゆりに気づいていたのか。

「ゆりっぺぇっ、片付け終わったぞ。次の指示を出してくれ」
ちょうどその時、入り口の方から野田の声がした。
とゆうか、指示待ちとかのん気すぎんだろ！　状況を見てくれ！
「さっさと手伝え！」
ゆりも音無と同じようにイラッときたらしく怒鳴りつけた。

「了解だ」
それに対し、普通に返事をした野田は最後尾にいる大山ではなく、ゆりに近づいた。
当然ゆりはその行動の真意を尋ねる。

「なにしてるの？」
「ゆりっぺ、俺が助けてやるからな」
「はぁぁぁ！？」
野田の突拍子もないセリフにゆりは声を裏返らせ耳を真っ赤にした。

それに満足したのか、ハンマーに潰されたはずなのにダメージを感じさせない野田は笑みを浮かべ、ゆりの持つ釣竿に手をかけた。
「おぅらぁぁぁぁぁっ！」
そして力いっぱい引っ張りあげようとした。

「な、なにが釣れているんだ、これは……」
でも、状況は好転しなかった。
まだ、主の方が優勢で音無達を川へとたぐり寄せていた。

「ゆり、腕は平気？」
立華はゆりの腕を気にかけた。
「まだ、平気よ。でも、そろそろ皆の限界が近いかもしれないわね」
「たしかに俺も足にだいぶキテるな」
「僕は音無さんがいれば、いつまででもいけます」

「私の肉体のカリウムイオンは、まだまだ少ないですよ」
「僕は力になれているのかなれていないのか、わからないよ」
「なれてるわ、大山君」
弱気になっている大山にゆりは優しい言葉をかけた。
「神である僕に比べれば微弱な――」

「ゆりっぺー？　って、なにやってんだっ！？」
また、誰かがやってきた。その誰かは野田とは違い、すぐに駆け寄ってきた。

「藤岡君」
そう、それは藤巻だった。
「どうなってんだ、その竿の曲がり具合は！？　俺も手を貸すぜ！」
立華に名前を間違えられた藤巻はすぐに状況を把握したらしく野田の後ろに付いた。

八人になったことでようやく、主と互角になった。
「ここまで主とやりあえる奴らをおいらは初めて見たさ！」
これにはフィッシュ斉藤も興奮を隠せていない。
でも音無達にとっては感動もへったくれもない。ただ、必死で戦っているだけだ。

ふとここで音無はあることに気づいた。
「なぁ、ゆり」
「な、なによっ」
「ゆりはあの仮面が欲しいのか？」
「はぁ？　いらないわよ、あんなの」
ゆりは『それどころじゃない！』といった感じで投げやりに答える。

「じゃあさ、手……離しちゃ駄目なのか？」
「あっ、そっか」
ゆりは迷うことなく、あっさりと釣竿から手を離した。

迷う時間が全くなかったがために野田と藤巻がとばっちりを受けた。
ゆりと一緒に釣竿を持っていた野田と、その野田を支えていた藤巻が短い悲鳴を上げ一気に川に引きずり込まれる。
たぶん、予告無しに手を離したもんだから対応し切れなかったんだ。

藤巻はすぐさま手を離したのか浮き上がってきた。
でも、野田が浮き上がってこない。まさか、まだ釣竿を離してない……なんてことはないよな？
音無達が野田の行方に注目していると大山が急に叫んだ。
「あぁ！　しまった、忘れてたよ！　藤巻君はカナヅチだった！」
急いで藤巻を見ると、浮かび上がってきた体勢のまま微動だにしてなかった。
「私が行きましょう」
上半身裸の高松が飛び込んで藤巻を救出した。

藤巻は高松の行動によって無事だったが野田は相変わらず浮かび上がってこない。
「俺が潜って探すか？」
「音無さんがそんなことをする必要はありません！」
「しなくていい。野田君はしぶといから死にやしないわ」
「ゆり、怪我してない？」
立華まで野田ではなくゆりの心配をしていた。
「はは……野田は信頼されているんだな」

音無が苦笑いを浮かべていると外から足音が聞こえてきた。
入り口に視線を向けると同じようなスーツを着て同じようなサングラスをした集団が大量に入ってきた。
十人やそこらではきかない人数で一気に釣堀の人口密度があがる。
音無達が唖然としているとその集団を割って一人の男が前に出てきた。
「お前らか。ここで騒いでる奴らってのは」

CEO

スーツの集団の中で一際いかつくて無骨であごヒゲもすごくて貫禄のある男が近づいてくる。
その男は真っ直ぐ音無のところへ向かってきた。
そう言えばこの人、どこかで見たような……？

音無が思い出そうとしていると男は足を止めた。
そして音無の顔を覗き込むと小さく呟いた。
「また、お前か」
やっぱり、会ったことがあるんだ。音無は確信した。
でも肝心のどこで会ったか、そしてこの男が誰なのかが思い出せない。
せめてあのサングラスさえなければ……。

「あぁっ、この人はっ！？」
すると突然、大山が大声をあげた。
「大山、知ってるのか？」
「知ってるもなにも、ここの経営者のチャーさんだよ！」
「経営者！？」
音無は驚いた。どう見たって経営者には見えない。

「そうだ。俺がチャーだ」
男が肯定したことで音無はますます疑いを深めた。
仮にここの経営者だとしても自分のことをチャーと名乗るはずがない。
ここがチャーギルズだということを差し引いてもだ。

「あの、本当に経営者なんでしょうか？」

音無は思い切って聞いてみた。
すると男は一枚の名詞を取り出し、音無に見せてきた。
【チャーギルズ　代表取締役ＣＥＯ　チャー】
「名詞にまでチャーって書いてあるのか……」

音無の呟きに横から覗き込んできた高松が反応した。
「そういえば、聞いたことがあります。ここの経営者は学校経営や病院経営や芸能関係と多方面に手を伸ばす、かなりのやり手です。ですが名前や素性は不明な上に、黒い噂も絶えない人で、その風貌とも相まってその筋の人だとも囁かれています」
「説明する手間が省けたな。これで信じたか？」
高松がだいぶ失礼なことを言っているのに男は余裕の笑みを浮かべていた。
「え、えぇ」
これで本当に信じたわけじゃなかった。
でも、入り口は押さえられているので話をあわせるしかない。

ここでふと、ゆりが静かなことに気づいた。
イメージの中では、食ってかかるまではいかないにしても毅然とした態度で立ち向かう姿が浮かんでくる。
でも現実でのゆりはチャーが現れてから一言も発してない。これは、変だ。
そう思った音無はチャーがまだ横たわっている藤巻に視線をやった一瞬の隙をついて後ろを盗み見た。

――いない。
ゆり、そして立華までもが姿を消していた。
逃げた……いや、ゆりはそんなことをしない。
ということは、立華を避難させたのか？

「それで、お前らはなんでここで暴れてたんだ？」
チャーが音無の注意を引き戻した。
「あいつらもお前らのお友達だろ？　おいっ！」
チャーが黒服軍団に合図すると外から見覚えのある顔ぶれが連れてこられた。
ガルデモの四人と遊佐と竹山だ。入江はなぜかひさ子におんぶされていた。
岩沢と遊佐と竹山の表情は相変わらずだったがひさ子と関根の表情は少し暗い。

「ガルデモを連れているなんて、ここでライブでもするつもりだったか？」
このチャーの言葉に岩沢が食いついた。
「してもいいの？」
「ダメだ」
「……」

「なぁ、じじい」
突然、今まで気絶していた藤巻が起き上がった。
そして、そのままチンピラのようにチャーに絡んだ。
「てめぇはそこの五人に手ぇ出したのか？」
「だとしたらどうするんだ？」
チャーは睨みつける藤巻を前にしても眉一つ動かさなかった。
後ろの黒服軍団も助けに来ようともしないなんて本当にこいつは代表取締役なのか？

逆に藤巻はチャーの態度に怒り心頭といった様子で、今にも爆発しそうだった。
これは止めた方がよさそうだな。下手すれば状況が悪くなる。
「藤……」

「で、どうするんだ？」
チャーが挑発するように繰り返すと、音無が止める前に藤巻の怒りが頂点に達した。
「今からそれを体に教えてやんぜっ！」
藤巻が殴りかかった瞬間、川から水飛沫を上げ野田が戻ってきた。
「やつめ！　どこへ隠れた！？」
着地して早々、野田はしきりになにかを探している。
……さっきの主とかか？　いや、さすがに魚を求めて陸を探す奴は――
「あの、釣竿の先にいた奴！　どこにいるっ！」
いました。

音無が野田に気をとられていると、藤巻が野田の足元まで吹っ飛んできた。
見事に藤巻は気絶している。
「藤巻君がたった三発でやられた！？」
大山のおかげですぐに結果がわかった。
色々と手遅れだったようだ。

「おい、貴様。どういうつもりだ？」
「なにがだ」
すると野田が先ほどの藤巻のように怒りの表情をチャーに向けた。
なんだかんだ言って、野田も仲間想い……
「ハルバードを踏むとは、貴様死にたいようだな」
……じゃないな。

「踏んでたか。すまなかった」
チャーは意外と素直にハルバードの上から降りた。
「許さん！」

でも、野田は飛び掛かった。

ハルバードを軽々扱う野田から放たれる右の一発。
「いいパンチだ」
それをチャーは片手でいとも簡単に受け止める。
ただ、さっきまでのような余裕の笑みは消えていた。
お返しとばかりにチャーが拳を振るうと野田は距離をとって避けた。
「貴様も少しはできるようだな」

それからはチャーと野田の一進一退の攻防が続いた。
殴る、避ける、蹴る、受け止める、また殴る。音無達が止めに入る隙さえなかった。
二人の実力は拮抗しているようでぜんぜん決着がつかない。
体力か集中力を切らした方が負ける。

この、ある意味でこう着状態の戦いに野田が痺れを切らした。
「ちまちま戦うのは性に合わん！」
叫ぶと同時に床に落ちているハルバードを拾い上げる。
その時、チャーの手が懐に滑り込んだ。
そして次の瞬間――

数発の乾いた音と共に野田が崩れ落ちた。
「つまらんもんを使わせんなよ」
チャーの手には拳銃。
「あぁ、安心しろ。ただのゴム弾だ」
こちらの視線に気づいたチャーは付け加えた。
「ゴム弾つったって至近距離で撃てば死ぬだろ！」

「俺は殺されかけたんだぞ？」
「そうだな、そこは全面的に野田が悪い。でも、だからって……」

「大丈夫です。野田君は生きてます」
上半身裸の高松が冷静に野田のきぐるみを脱がし、撃たれた箇所と心音を確認していた。
「でも念のために救急車を呼んだほうがいいよね」
「そうだな」
大山に同調した音無は携帯電話を取り出し開いたところ、チャーの拳銃から放たれたゴム弾によって破壊された。

「なにすんだ！」
音無はチャーを怒鳴りつけた。
「それよりも先にすべきことがあるだろ？」
「人命より優先するもんなんてねぇよ！　それに――」
「それに？」
――あの中には立華の電話番号も入ってたんだ！　これは完璧に私情だったので飲み込んだ。

「と、ともかく、救急車を呼ばせてくれ」
少し冷静に戻った音無はチャーに頭を下げた。
「それならチャンスをやる」
「チャンス？」

「あぁ、お前がそれをクリアしたら今回のこと全てを不問にしてやる。救急車を呼ぶのも止めない。ガルデモも解放する。トイレに逃げ込んだ二人にも手を出さない」
ゆり達はトイレに逃げ込んでいたのか。
でも、それをしっかり見ているって、やはり抜け目がないな。
「わかった、それでなにをするんだ？」

下手な小細工をしても通用しなさそうなので音無は受け入れた。

「俺と戦ってもらう」

「戦うってケンカってことか？」

「そうだ、素手でな」

野田と互角の人間とケンカをしろだなんて最悪の条件だ。

「これ以外のチャンスはやらん。あと、お前がここで受け入れなくても負けても結果は同じだ」

「負けたらどうなるんだ？」

チャーが提示した答えは小学生が考えたものと思えるほど理不尽なものだった。

「今日出た被害金額を全員で今すぐに払ってもらう。足りない分は……見たところお前らは義務教育は終えているな。なら、学校を辞めて明日からここで働いてもらおう。もちろんガルデモも解散だ」

学校を辞めて働く？　そんなの絶対にダメだっ！

立華の先生になる夢が遠のく。それどころか金額によっては叶わなくなる。

ガルデモだってこんなところで解散させられて音楽を奪われるなんておかしい。

他の皆にだって夢があるはずだ。

「待ってくれ。金を稼げばいいんだろ」

「アテでもあるのか？」

「ない。でも、俺が一人で一生かかってでも払う」

「本気か？」

「本気だ」

音無はサングラス越しにチャーをにらみつけた。

「……いいだろう。勝負の前に生徒手帳を出せ」
しばらく、にらみ合っているとチャーのほうが折れた。
「なんで生徒手帳を出すんだ？」
「逃げられたら困るだろ」

音無はポケットから生徒手帳を取り出す。
それをチャーに渡そうと一歩踏み出すと、異様に体が重く感じた。
やっぱ、緊張してんのか？

「……音無さぁん……」
違った。緊張なんて全く関係なかった。
「……はふぅ……」
今、音無の後ろでは直井が背中に顔を埋めて匂いや感触を存分に堪能している。
そう、体が重かったのは直井が抱きついていたからだった。
主をばらしてからもずっとこうして？

「直井」
音無はお腹辺りにある直井の手を少し強めに叩きながら名前を呼んだ。
直井は自分が呼ばれたことに気づいて顔を上げる。
「……なんでしょうかぁ……」
その顔はなんだか危ない雰囲気をかもし出していた。

「離してくれ」
直井は腑抜けた声で返事をするが離れない。
想定の範囲内だが離れてくれないと困る。だから音無は引き剥がしにかかった。
少し力を込めるとすぐに直井のホールドは弛んだ。
腕に込められた力が弱くなってきたらしく、そのまま簡単に剥がせた。

やっと解放された音無はずっと待ってくれていたチャーに近づく。
そして生徒手帳をチャーに差し出した。
チャーはそれを一瞥すると首を横に振る。
「そっちじゃない」
そう言って受け取ろうとしない。

音無にはチャーのこの行動の意味がわからなかった。
これは紛れもなく学校の生徒手帳で自分の身分を証明するのに十分なはずだ。
まだ自動車免許を持っていない音無からすれば今はこれ以外で証明する手立てはない。
音無が困惑していると後ろから声をかけてきた。

「遊佐さんが渡した方があるでしょ」
振り返るとそこにいたのは――おじさんメイクを落とし、まとめていた髪を降ろし、服を着替え――元に戻ったゆりだった。
しかも立華と一緒にトイレで隠れていたはずなのに、なにか知っていそうな口ぶりだ。
……もしかして、このチャーって人もＳＳＳの一員なのか？　後、なんで立華が戻ってきてないんだ？
「ゆ……」
音無がゆりに色々と聞こうとしたその時、音無の頭上を影が横切る。

見上げると、天井がない上から進入してきた椎名が空中でくないを構えていた。しかも、なぜかずぶ濡れだ。
「投げるなりッ！」
ちょっと口調がおかしくなっている椎名はチャーめがけて持っているくないを全て放った。
チャーはそれを少し後ろに下がることで回避する。

音無とチャーの間に椎名は着地すると、別のくないを取り出した。
そしてすぐさまチャーに突進する。

「椎名さん！　もういいのよっ！」
「やられたなりー」
後ろで慌てたようにゆりが叫ぶと椎名はわざとらしくその場に倒れた。
もちろんチャーは椎名に指一本触れていない。これにはチャーも苦笑いだ。
さっきまでの緊張は、一瞬でどっかへ吹っ飛んでしまった。

「椎名さん、起きて」
ゆりが声をかけると椎名はなにごともなかったかのように立ち上がる。
立ち上がった椎名の表情からはやりきった感がうかがえた。
「結局、椎名はなにがしたかったんだ？」
その表情は音無のこの一言を聞いて一瞬で崩れ去った。

なので音無の質問には心に傷を負った椎名の代わりにゆりが答えた。
「椎名さんにはおじチャーんの強さを引き立てる演技を頼んでいたのよ。あと、高松君達にもね」
だから、あの高松達は藤巻達を止めようとしなかったのか。
「ん？　ということは野田や藤巻や入江が気絶しているのも演技なのか？」
見た感じでは完全に気絶しているような気がする。

「野田君が演技なんて複雑なことできるわけないじゃない」
当たり前のこと聞かないでといった口ぶりだ。
「藤巻は？」

「……」
ゆりは顔を背け、押し黙る。それを見た音無はピンときた。
そうか、藤巻は知らされてないんじゃなくて忘れられてたんだな。

「じゃあ、入江はなんでひさ子におんぶされてんだ？」
あの時、岩沢がライブに食いついたり藤巻や野田が立て続けに暴走してなければ、キレてたかもしれない。
「さぁ？　あたしは知らないわ」
ゆりは首をかしげた。
「知らないって……」

「それは私が説明します」
「うおっ」
突如として死角から現れた遊佐に音無は驚いた。
さっきまでガルデモと一緒に黒服軍団のところにいたはずなのに。

「入江さんは関根さんと岩沢さんとひさ子さんと椎名さんと私の計六人で合言葉を使ってライフピーアンコースター乗りました」
遊佐の説明はここは関係なさそうなところから始まった。
「どうしてまた？」
「主に、岩沢さんの創作活動のためです」
たしかに、最後の見えないレールのところは新しい何かが生まれるかもしれないな。

「入江さんは一度乗っているので余裕しゃくしゃくでした。ですが最初の落下の後のトンネルで事件は起こったのです」
ここで遊佐は言葉を切った。そして、こちらを見つめ続けるだけで喋りださない。
……もったいぶってる？
「それで、どんな事件だったの？」

ゆりが続きを促すと遊佐は続きを喋りだした。

「トンネルを抜けると入江さんの隣に座っていた関根さんが世にも恐ろしいガイコツになってしまいました」

ガイコツって……あの暗闇に乗じてガイコツのマスクでも被ったってことか？

「そして親友に降りかかった悲劇があまりにもショックだったため、入江さんは気絶してしまいました。そして今に至るわけです」

「要するに関根さんのいつものイタズラってこと？」

「平たく言えば」

音無が入り口付近に視線を向けると、関根は誇らしげに胸を張る。そしてすぐに、ひさ子に小突かれた。

「ちなみに一番前の座席には岩沢さんと椎名さんが座り、関根さんが持ってきていたレインコートは岩沢さんが来ていました」

「じゃあ、椎名がずぶ濡れなのもそのせいで？」

「いいえ、椎名さんが濡れているのは修行が足りなかったからだそうです」

「あさはかなり……」

そこへチャーが声をかけてきた。

「そろそろ待ちくたびれてきたんだが」

「ごめんね、おじチャーん。ほらっ音無君もさっさと出して」

本当に疲れていそうなチャーを見たゆりは音無を急かす。

音無は言われるがまま遊佐から受け取った生徒手帳を探しながら、ゆりに少し気になっていることを聞いてみた。

「さっきからおじチャーんって言ってるけど……」

「そう、おじチャーん。ここの責任チャーのチャーさんはあたしのおじチャーんよ」

「そっか、あの人はゆりの身内の人だったのか」
そうだよな、さすがにあの外見で学生な訳ないよな。
それでここの代表取締役ってのもゆりがチャーに嘘を――

「でも、ここの偉い人なのはホントだから」
「……え？」
音無は驚きのあまりようやく見つけた遊佐からもらった生徒手帳を落としかけた。
「なんだ、信じてなかったのか？　まぁいい、早くそれをよこせ」
チャーな半ば強奪するように音無から生徒手帳を受け取った。

すると黒服軍団の三人とフィッシュ斉藤がチャーに近づいていく。
黒服のうちの二人は机を運んでいた。そして、残りの二人もそれぞれなにかを持っているようだ。
目を凝らしてみるとフィッシュ斉藤の方は小さすぎてわからないが黒服の方はハンコのようなものを持っている。
でも、これだけじゃなにをするのかわからない。
「今からなにをするんだ？」
だから小声でゆりに聞いてみたが「見てなさい」と言うだけで答えてくれなかった。

机をチャーの前に置き、そこにハンコとインクを置く。仕事を終えた黒服の三人は下がっていった。
「急いで現像してきました」
フィッシュ斉藤はチャーに何かを手渡す。そしてさっきの三人と同じように下がった。
左手に生徒手帳、右手に小さい何かを持ったチャーは大きく息を吸い込む。
そして次の瞬間――

「音無結弦の天上高等学校への転入を許可するッ！」
大きな声で宣言すると同時に両手が机の上で尋常じゃない速さで動いた。
まさに目にも留まらぬ早業だ。
「受け取れ」
手を止めたチャーは音無に生徒手帳を投げて返した。

「奏ちゃーん」
音無がキャッチするとゆりが立華の名前を呼んだ。
すると、さっきゆりが戻ってきた方からやってきた。
立華は両手でなにかを大事そうに抱えている。

「音無君、天上高等学校転入おめでとう。歓迎するわ」
音無の前までやってくるとお祝いの言葉と共にそれを差し出した。
「あ、ありがとう」
音無は立華からそれを受け取り、広げてみた。
「これは……ブレザー？」

解散

ブレザーを手にした音無は困惑していた。
転入って転校するってことだよな？　急に言われても……。
そもそも、チャーってここの偉い人じゃなかったのか？　なんでそんな権限持ってんだ。
そういえば、さっき高松が多方面に手を伸ばすやり手って言ってたな。
あれも本当だったってことか。それにしても転校って……。

あと、なんで立華がブレザーを持ってきたんだ？　まさか――
「立華は知ってたのか？」
音無は思い切って立華に聞いてみた。
「音無君が転入すること？　お手洗いでゆりに聞かされたばかりよ。音無君はどうして隠していたの？」
「俺も今、知ったんだ」
「え？　今？」
立華はビックリしたようにゆりの顔を見る。

「一緒の学校に通った方が楽しいでしょ」
ゆりは悪びれる様子を見せず、満面の笑みで言い放った。内容もかなり強引だ。
「そうね楽しそう」
しかも、立華はそれで納得したように頷いていた。
でも、流されるわけにはいかない。

「待ってくれ。俺は――」
「なに、音無君は奏ちゃんと一緒の学校は嫌なの？」
「なわけないだろ」

「なら、いいじゃない」
ゆりの甘い言葉に音無の心は揺れ動く。
「だけど、そうはいかないんだ」
「どうして？　親御さんが許してくれないの？」
頑なな音無に立華も不思議そうにする。
「親はたぶん説得できる」
「他に何の心配があるのよ！」

「それは音無先輩はひなっち先輩と違ってお心が優しいから、これからのユイの学生ライフのことを心配してくれているんですよねっ」
とうとうゆりがキレたその時、日向と松下とＴＫを引き連れたユイが入り口から入ってきていた。
「そうそう、音無は俺と違って……って俺も優しいだろっ！」
「自分でそういうこと言っちゃうんですかー」
日向のノリツッコミにユイは口元をニヤつかせながらおちょくる。

「あーそういやぁ俺、優しくなかったわ」
怒りが頂点に達したのか日向は片方の松葉杖をＴＫに押し付けた。
そして空いた手をゆっくりと背後からユイの頭上に持ってきた。
あれはチョップする気だな。
それを察知したユイは日向の方へ振り返ると、自分の両手を頭付近に配置する。こっちは白刃取りの構えだ。

にらみ合う二人。先に動いたのは日向だった。
日向が無言でチョップを繰り出すと
「オルァァッ！」
ユイは攻撃的な掛け声と共に手で挟みにかかる。

しかし、無情にも日向の手はユイの両手をすり抜けた。そして――

「なっ！？」
「Ｎｉｃｅ　ｃａｔｃｈ」
ユイに当たる直前で松下が日向の腕を掴んだ。
「松下肉うどん五段先輩ありがとうございます！」
ユイは松下にお礼を言うと、こちらに向き直る。
そして、アピールするように両手を広げた。
「音無先輩！　ご覧の通り心配には及びませんよ！」
「……え？」
話題を振られた音無には、どれが「ご覧の通り」で、なにが「心配には及ばない」のか、わからなかった。
さっき、松下は日向のチョップを受け止めきれてなかったのか？
「ユイちゃんも転入するのね」
でも、立華だけにはユイが伝えようとしたことをしっかりと捉えていた。
「はいっバリアフリーも無いあんな学校とはおさらばなんです！
あ、ひなっち先輩は元の学校に残りますよね？」
「残るはずないだろっ！」
それにゆりが驚いたような声を出す。
「日向君も来る気なの？」
「俺は別枠扱いなのかよっ！？」
「てっきり、一人残るもんだと思ってたわ」
立華もゆりの言葉に頷いた。
「ゆりっぺひでぇ！　立華さんまでもが頷いてる！？　てか、俺だけ扱い酷くね？」
ユイやゆりが日向をからかい、立華が日向に冷たい視線を送っていると、直井がチャーにゆっくりと近づいた。

「チャーとやら。神である僕も貴様の学校とやらに入ってやろう」
「通いたいのか？」
「……通ってやろう」
直井はあくまでも上から目線を崩さない。
チャーは少し考えるようなそぶりを見せた後、一つの条件を出した。
「戦線に入るならいいぞ」
「その戦線には音無さんも入っているのだろうな？」
「当然だ」
それを聞いた直井は嬉しそうに一瞬する。でも、すぐに咳払いをして取り繕った。
「それなら仕方ない。貴様の学校にも戦線にも神である僕が入ってやろう」
「手続きは色々あるから、詳しくは後でな」
「いいだろう。あと、神と話すときはグラサンを外せ」
「……それは悪かった」
チャーは謝ると、グラサンを外して胸ポケットにしまった。
再三にわたって直井が失礼な態度をとっているのに怒らないなんて大人だな……ん？
音無がチャーに感心していると、服のすそを立華が引っ張っているのに気づいた。
「どうした？」
「さっきの話は本当なの？」
「さっきの話？」
音無は立華の質問がよくわからなくて少し戸惑う。
「ユイちゃんの言ってたこと」

「あぁ、あれか」
ユイの名前が出てきたことで音無は理解した。
立華はうやむやになった、転校を渋っていたわけを聞きたがっているんだ。

「ユイが言ってたことは本当だ」
音無は正直に答えた。するとなぜか立華は少し俯く。
なんか変なことを言ったかな……。
「音無先輩、全部話さないと勘違いされちゃいますよ?」
そこに日向とさっきまでイチャついていたユイがやってきた。

そして急に思い出したくも無いはずの昔話を語りだした。
「あたしは先輩達と一緒の学校に今年から通っているんですけど、入ってすぐイジメにあったんです」
原因は意外とモテる野球部レギュラーだった日向と仲良くしていたから。ただ、それだけ。
「それに音無先輩が気づいてくれました。それからは、ひなっち先輩と一緒に守ってくれたんです」
ユイは細かい部分を全て端折った。

「これで全部ですが、ちょっといいですか?」
話し終えたユイは立華に近づき耳元に顔を寄せる。そして小声でなにかを囁きはじめた。
ユイはなにを? いや、詮索はよしておこう。

「音無さん」
そこへ直井がチャーのところから戻ってきた。そして嬉しそうに報告をする。
「学年は違いますが僕も同じ学校に通うことになりました」
「よかったな」

「はい、父や兄にも報告するので僕は一旦ここで失礼します」
直井は丁寧にお辞儀をすると釣堀から出て行った。

あー、転校することになったって親に電話した方がいいよな。
音無はいつも携帯電話を入れているポケットに手を入れた。
「あれ？　おかしいな」
でも、出てきたのは竹山からもらった赤いカバーのようなものだけ。
他にはなにも入っていない。

ふと、野田を介抱している高松の方に視線をやった。
その近くには見覚えのあるものの残骸が落ちている。
そうだ、携帯電話はチャーに破壊されたんだった。
……言えば後で新しいのを買ってくれるよな？

「日向、携帯を貸してくれないか？」
音無は自分の携帯電話を諦めて、ゆりと談笑している日向から借りることにした。
「あぁ、いいぜ。ほらっ」
日向はユイにデコられピンク色に輝く携帯を音無に差し出す。
「だれかに電話するの？」
「転校することを親に言わないとな」
一瞬だけ躊躇したが、ゆりの質問に答えながらなんとか手に取った。

「じゃ、ちょっと――」
「お父さんとお母さんとは、もう話が付いてるよ？」
「え？」
音無が直井と同様に電話するために外に出ようとしたところ、予想だにしてなかった言葉が耳に届く。

話が付いてるって……しかも今の声は？

声がしたほうを向くと松下の後ろに
「お兄ちゃんのお友達って面白い人ばっかだね」
妹の初音がいた。

「は、初音がなんでここにいるんだ？」
「あたしが呼んだからに決まってるじゃない」
初音の代わりにゆりがこともなげに答える。
「いや、なんでゆりが初音を知ってるんだよ」

「一昨日、偶然にも遊佐さんと椎名さんが音無君と初音ちゃんがデートをしているところを見つけたのよ」
「あさはかなり……」
ゆりは偶然の部分を強調した。あの日も尾行されていたのか。
「それで昨日、コンビニで遊佐さんに声をかけてもらったの」
たしかに、昨日は十分もかからない場所にあるコンビニから帰ってくるのが遅かった。

「初音ちゃんからは音無君のことを色々聞かせてもらったわ」
「俺のことを？」
「人となりを知らなきゃＳＳＳにスカウト出来ないじゃない。音無君はアホ共と違って単細胞じゃなさそうだし」
「ゆりっぺ、なんでチラッと俺を見たんだ？」
日向の質問は無視された。

「それだけのためにこんな大掛かりなことを？」
「悪い？」
「いや、初音から聞くだけで十分じゃないのか」
「……」

「ゆり？」

「さ、皆！　今日はご苦労様。あとは自由にしていいわ。解散！」

ゆりは皆を解散させることで音無の質問を無理やり回避した。

観覧車

ゆりが解散宣言をしたので、ほとんど釣堀から出て行った。
今、釣堀に残っているのは音無と立華と初音とユイと日向とゆりとチャーだけだ。
ガルデモや他のメンバーは自由行動をとっている。
ちなみに、野田と藤巻は黒服軍団が医務室に連れて行った。

「こんにちは、音無初音です。いつも兄がお世話になっています」
「こちらの方こそ音無君にはいつもお世話になってます」
初対面の初音と立華は自己紹介をし合っていた。

それを見ていたユイが呟く。
「先輩、あの二人の自己紹介は丁寧ですね」
「ユイもあれぐらい出来るようにならないとな」
日向が何気なく言った言葉でユイに火がついた。
「失礼なっ！　あたしだってあんぐらい一捻りですよ！」
「へー。じゃ、見せてみろよ」

日向に丁寧な自己紹介を見せることになったユイは考え込んだ。
ちょっとしてから考えがまとまったのかユイは自信満々な顔で日向を見上げる。
そして、渾身の自己紹介を繰り出した。

「ユイにゃんっ」

“ユイ”で人差し指と中指を立てた両手を顔の横に配置する。
そして、“にゃん”の部分でその指を丸めて更なる可愛さのアピール。

ユイのこの一撃で日向は凍りついた。

「ふふーん。あたしのあまりの愛らしさに言葉も出ないようですねぇ」

ユイが嬉しそうに勝利宣言すると日向は無言のまま、ユイの丸めた両手をおもむろに掴んだ。

そこから一気に、両手をユイのこめかみにめり込ませる。

「イタイです！　イタイです！」

「とりあえず、なんかイラッときた」

初音と立華の方を見てみると、まだ挨拶は終わっていなかった。

「あたしのことは初音って呼んでください」

「あたしは奏でいいわ。よろしくね、初音ちゃん」

「はい、奏さん。よろしくおねがいします」

初音と立華はお互いにお辞儀をした。

って、立華を名前で呼んで……。音無は初音が少し羨ましく感じた。

「皆、お待たせー」

そこへ、チャーと話しこんでいたゆりが戻ってきた。

「ところで、あの二人はなにしているの？」

ゆりはめり込ませ続ける日向と頭を逃がそうとするユイを指差す。

「あれは、いつものスキンシップだな」

それから、釣堀に残ったチャーを除いた六人と電話を終えて戻ってきた直井の計七人で観覧車に乗ることになった。

観覧車に決まったのはゆりの強い希望から。誰も反対意見を出さなかったのですんなりと決定した。

「ここの観覧車はすごいのよ」
だから、ゆりはご機嫌だった。
「どんな観覧車なんですか？」
「そ、れ、は、見てからの、おっ楽しみよっ」
本当に気味が悪いぐらい、ご機嫌だった。

ゆりにここまで言わせるからにはライフピーアンコースターに匹敵、もしくはそれ以上の観覧車なんだろうな。
音無はそんな観覧車を想像してみた。

まずはじめに、観覧車の固定概念を崩してくるはずだ。
となれば、ゆっくりと縦に回転なんかしてない。横たわった状態で停止しているんだ。
そして、乗り込むとシートベルトの着用が義務付けられている。
シートベルトを締めて、全員の乗客の準備が整ったら動き始める。
観覧車を横向きのまま高速で回転させることによって浮力を生じさせて、浮き上がるんだ。

その高速回転している中、景色を……
「楽しみね」
「えっ？　あれがっ？」
妄想中に話しかけられた音無は、立華が空飛ぶ観覧車に対して「楽しみ」と言ったように錯覚して、変なことを口走った。
「お兄ちゃんはどんな観覧車を想像してたの？」
それに初音が冷静に突っ込んだ。

「ハイハイハイ！　あたしはこんな観覧車だと思います！」
突然、手を上げてアピールしたユイは自分の妄想をジャスチャーを交えて説明し始めた。

「こう横向きで」
手を観覧車に見立てて横にする。
「超高速でぐるぐるまわって」
その手を水平に回す。
「空高く飛ぶんです！」
そして、ジャンプと共に手を高く上に伸ばした。

あれ……これって、さっき想像してたやつと……
「頭大丈夫か？」
「どんな観覧車よ」
「ユイ先輩、さすがにそれは……」
「くだらないな」
「なかなか、面白そう」
立華以外には大不評だった。その評価にユイは不満そうな声を出す。

「音無先輩も――あれ、気分でも悪いんですか？」
ユイは音無の顔色が悪いことに気がついた。
「いいんだ。気にしないでくれ」
音無はユイと同レベルの発想をしていた自分に失望していた。

「発想が幼稚すぎる。所詮は子供だな」
「なっ！」
なおも責め続ける直井にユイはカチンときたように食って掛かった。
「そーゆー……ええと、自称神様ならどんな観覧車で驚かせてくれるんですか？」
ただ、名前は思い出せなかったらしい。
「自称は余計だ。まぁ、いい聞かせてやる」

今度は直井が自分の妄想を披露しだした。

「まず当然のことだが、観覧車には神専用のゴンドラが用意されている。あっ、音無さん専用のゴンドラもありますよ」

「神専用と音無専用が仮にあるとしたら、別々に乗ることになるぞ？」

日向に指摘されて直井の顔から血の気が引く。

「アホですね」

「お、音無さんは神専用に乗っていいですからっ！」

「いや、それだったら俺専用のゴンドラに乗るよ」

直井の必死なフォローを音無は適当にあしらった。

「それよりゆりっぺ、観覧車なんてどこにも見当たらなくね」

日向に言われるまで気付かなかったが、たしかにそれらしいものが無い。

ゆりがすごいと太鼓判を押す観覧車なんだから、目立つもんじゃないのか？

「やっぱり、縦じゃなくて横なんですよ！」

ユイの主張は立華の耳以外には届かなかった。

「そりゃ、見えるわけないじゃない」

さも当然のように言うゆりに日向は困惑した。

「はぁ？　だったら、今どこへ向か……」

「だって観覧車は――」

「地下ぁ！？」
一同はゆりに連れられてチャーギルズの地下にやってきた。
長いはしごを使って命がけ――ではなく、看板に【観覧車はこちら】と矢印で示されていたエレベーターに乗って、だ。

「地下なのにけっこう広い……」
初音は目を輝かし、キョロキョロ辺りを見回していた。
「あぁ、かなりの広さだ。あの何本もある太い柱がこの空間を支えているんだな」
その柱と柱の間には観覧車といくつかの建物があった。

「あれもアトラクションの一つなのか？」
建物を指差し、ゆりに聞いてみた。
「あの建物群はおじチャーんの事業の出発点。通称、オールドギルドよ。今はここの管理とかをしてる。で、あの観覧車は元々、社員のために作られたもの。それが口コミで噂が広がって最終的にチャーギルズになったわ」
「へー、すごいな」
「普通の人間にしてはよくやったほうだ」

立華は観覧車よりも建物や足元の石畳に興味を持っていた。
「ここは柱が無ければ、夜のヨーロッパって雰囲気ね」
「おぉ！　いい例えだな。ヨーロッパへ行ったことねーけど」
日向に褒められた立華は、冷ややかな視線を返した。
そして、さり気なく初音を日向から遠ざける。

「ん？　俺、変なこと言った？」

「自覚が無いなんてたちが悪いですねー」
ユイは日向をなじった。
でも、ユイが立華に日向の悪い印象を植え付けた張本人なんだよな。知らぬが仏ってやつか。

「じゃ、ペアを決めるわよ！」
「ペアですか？」
いきなりすぎるゆりの発言に、初音だけじゃなく日向以外の全員がポカンとした。
それに気がついたゆりが付け加える。
「観覧車は二人乗りなのよ」

「そういや、そうだったな」
「おやおやー？　ひなっち先輩は知ってたんですか？　さっきは『観覧車はどこだー！』って喚いていたくせに」
「喚いてはねぇよ！　……まぁ、思い出したんだ」
日向は少し言いよどんだ際、チラッとゆりを見ていた。

「ペアにするとしても、俺たちは七人だから一人余るな」
音無は自然と日向の方を見る。
「そ。だから、あぶれた人には一人寂しく観覧車に乗ってもらうわ」
ゆり達も真っ先に日向の顔を見る。
「もっと公平に決めてくれ！」

「じゃあ、どうやって決めますか？　じゃんけん？」
「そうね、それが――」
「待ってください！」
初音の言葉にゆりが頷こうとした時、ユイがそれを止めた。

「それならちょうどここに、いいものがありますっ！」

ユイの手には――すでにきれいに割られている――割り箸の束が握られていた。
「これは？」
音無はその束から一本、取ってみる。
取った割り箸の先端にはユイの汚い字で王様と書いてあった。

「王様ゲーム用につくった割り箸です！」
「なんで、んなアホなもん持ってんだよ」
すぐさま日向が突っ込む。
「なんででもいいじゃない。あるんだから使いましょ」

「でも、これでどうやってペアを決めるの？」
立華の疑問にゆりは固まった。もちろん、ユイも「考えてなかった！」って顔をしている。
「素直に1番は2番と、3番は4番とで、よくねーか？」
日向が適当に言うと、直井も案を出してきた。
「若い数字を引いた順に一緒に乗るパートナーを指名するのはどうだ」
珍しいな。いつもなら「音無さんは僕と一緒に乗るんだっ！」と、主張してくるのに。

「少し変則的なドラフトみたいなもんか。いいな、それ」
「面白そうですね」
日向や初音が直井の案に乗っかった。
「んじゃ、それで決定ね」
他に意見も出なかったので直井の変則ドラフトが採用された。

「ユイにゃんが持っているので、さっさと引きやがれー！」
「王様は何番扱いにするんだ？」
引く前に音無は気になったことを聞いた。先に決めておかないと

揉めそうだしな。
「ちゃんと王様を抜いて、1から7までにしてあります」
「ユイにしては珍しく気がきくな」
あまり褒められていないのにユイは得意満面だった。

「選ばれた人は拒否権はなしだ。例え音無さんでも、ですよ?」
最後に直井が念押ししてきた。
「あぁ、わかってるって」
そうか、それだけ直井も本気なんだな。

そして、それぞれがユイから割り箸をとっていく。
「あー6番です……」
とってすぐ、初音が残念そうな声を出した。
「敵はあたしがとってあげるから」
ユイがそんな初音を慰めた。

敵ってなんだ? そんなこと考えつつ、音無は最後に残った二本のうちの一本をユイの手から引き抜く。
――立華と観覧車に乗りたい。
音無は少しドキドキしながら書いてある番号を確認した。
「3番か」
嬉しいのか嬉しくないのか、わかりにくいラインだ。
でも、直井が下の番号だったら望みはまだまだある。

「直井は何番だった?」
音無が聞くと直井はしおれた声で答えた。
「5番です……」
直井には少し悪いが心の中でガッツポーズをした。

「フッフッフ、みんな、だめですねー。ユイにゃんなんか1ですよ

！」

ユイは嬉しそうに自分の割り箸を皆に見せ付けた。

「これ、7だろ」

「え？」

日向が指摘するとユイの表情が困惑へと変わる。

「あたしも7に見えます」

「完璧に7ね」

「7だ」

「疲れているなら休んだ方がいいわ」

「え？　え？　え？　え？」

ユイはもう一度、自分の持っている割り箸の数字を確認する。

「……まさか、1と7を読み間違えたのか？」

ユイの手から先端に7と書かれた割り箸が滑り落ちた。

図星だったのか。いくら汚いとは言え、自分の字なのに。

これで残るは立華とゆりと日向の三人となった。数字は1と2と4。

最初に立華がゆっくりと自分の割り箸を皆に見せる。

「1」

今度こそ本物の1だった。

それを見た直井とユイが悔しそうにする。でも、口には出さなかった。

「それじゃ、次はあたしの番ね。いくわよっ！」

ゆりが勢いよく自分の割り箸を披露する。

「キャー、王様よー！　って、抜いてないじゃない！」

ゆりは割り箸を地面に叩きつけた。

王様の扱いが1より前なのか2扱いにするのか揉めたが、結局は失格になった。
ちなみに日向は4。なので、選ぶ順番は立華、音無、日向、直井、初音になった。
どうやっても、ユイとゆりには選択権はまわってこない。

「奏ちゃんは誰を指名する？」
ゆりが聞くと立華は少し困った表情をした。
……もしかして、迷ってる？
その証拠に立華は音無とゆりを交互に見ていた。

「遠慮しないで。今、奏ちゃんが一緒に乗りたい人を指名すればいいのよ。誰も、うらんだりしないから」
見かねたゆりが少しでも選びやすくなるように後押しをすると、立華が頷いた。
だれにするか決まったんだな。できれば――
「音無君」
そう、音無君って言ってほしい。さぁ、立華は誰を選ぶのか……。

「ま、当然よね」
ゆりはなにかに納得していた。逆に直井はこの世の終わりを見たような顔をしている。
日向とユイと初音は妙にニコニコしている。皆どうしたんだ？

「……奏ちゃんが選んだから少しは反応しなさいよっ！」
突然、ゆりが音無の背中をおもいっきりひっぱたいた。
そして、少し遅れてゆりの言葉が耳に入ってくる。

「え、選んだ？　立華が？　なにが？　いつ選んだ？　反応？」
わけがわからず思考は一瞬でショートした。

「いやだった？」
そこへ、立華が少し目を潤ませ、不安そうに聞いてくる。
更なる混乱に陥りそうになる音無に初音がこっそりと耳打ちした。
「奏さんはお兄ちゃんを指名したんだよ」
そうだったのか。立華が選んでくれてたんだ。ようやく音無は理解した。
なら早く、まだ不安げに見上げている立華に自分の気持ちを伝えないと！

「お、俺も1を引いてたら立華を選んでた。だから、選んでもらえて、すごく嬉しい」
少し片言っぽくなったが音無は素直な気持ちを伝えた。
すると立華は喜びと安堵の表情を同時に浮かべた。

音無は立華に指名されているので、次は日向の番だ。
「俺は――」
「ユイにゃんですね！」
「ちょっ――」
「次は神である僕か」
直井はゆりと初音を見比べる。
「考えるまでもなく、音無さんの高貴なる血が混じっている妹だ。エスコートしてやろう。感謝しろ」

「あれ？　あたしが一人？」
一番楽しみにしていたゆりは、まさかの事態に愕然とした。

密室

音無と立華はふてくされるゆりと他四人を残し、観覧車に乗り込んだ。
それから向かい合わせでゴンドラと一体化しているイスにそれぞれ座った。

元社員用で二人乗りとあって、中は広くはない。
横幅は荷物を置いたら体格のいい人がぎりぎり座れるぐらい。高さは立たなければ余裕はある。
立華との距離は膝が拳一つ分ぐらいと油断したら足を踏んづけてしまう。
そんな密室に立華と二人っきりだ。
手をつないでいた時よりも離れているのに、心拍数があがってきている気がした。

「音無君？」
立華はそんな音無の異変を感じ取ったようだ。
それに慌てた音無は、必要もないのに誤魔化そうとした。
「そ、外の眺めがいいな！」
「まだ、乗ったばかりなのに？」
そう言いつつも立華は窓から外を眺める。
「あ……」
すると、なにかを見つけた。

立華の視線を追ってみると、ゆり達の所に銃で撃たれて気絶していたはずの野田がやってきていた。
いつも持っているハルバードはチャーとかに没収でもされたのか持っていない。

一人で乗るのが嫌で、ゆりが呼んだのかもしれないな。
時間的に来るのが早すぎる気もするけども。

ゆり達から立華のほうへ視線を戻すのと同時に観覧車は動きを止めた。
理由はわかっているので二人とも驚いたりはしなかった。
「ユイちゃんが今乗り込んでるのね」
「そうだな」
日向の名前を言わないのは、たぶんわざとだろう。

観覧車が止まっている間や動き出してからも色々と話していると、ふと音無はあることを思い出した。
「話し変わるんだけどさ」
――ずっと気になっていたけれど、聞くタイミングを逃していたあのこと。
「立華と俺が出会ったあの時」
――いや、仲良くなったからこそ聞けるのかもしれない。
「どうして振り返るなり、ハンドソニックだったんだ？」

音無は聞いた瞬間に後悔した。
立華は申し訳なさそうな表情をしていたからだ。
責めたいわけじゃなく、単なる好奇心ぐらいのつもりだったのに。
「た、立華は悪くないぞ？　ほらっ、急に知らない男に肩を掴まれたらビックリするもんな。あれは俺が全面的に悪い。同情の余地なんかない。ハンドソニックで当然だよなっ！」

音無は自分を悪者に仕立てることで、立華が持っている罪悪感を軽減させようとした。

しかし、立華は表情を変えることなく首を横に振る。
「音無君はだれかに危害を加えようとはしてなかった。だから、悪いのはあたしよ」
このままだと、「俺が悪い」「あたしが悪い」と、堂々巡りしそうだったので音無は話の方向性を変えた。

「でも、あれがあったおかげで親しくなったんだよな」
「なった？」
「なったじゃないか。手作りの麻婆豆腐をご馳走してもらって、一緒にライブを見て、遊園地にまで来て……あれがなかったら、こうはなってなかったと思うんだ」
立華は考える様子を見せた後、小さく頷いた。

それを見た音無は付け加える。
「だから、あれはもういい思い出や笑い話にしてよくないか？」
「……音無君がそう言うのなら」
なんとか納得してくれたようだ。

「あの時、ハンドソニックを使ったのは……」
ちょっと間をおいてから、立華はあの時の心境をゆっくりと話しだしてくれた。
いよいよ、あの一発の理由が判明するのか。
音無はつばを飲み込む。
そして――

「なんでかしら？」
音無はイスからずり落ちかけた。
「お、覚えてないのか？」

「いいえ、しっかり覚えているわ。触られた瞬間、怒りと喜びがごっちゃ混ぜになって……」
「怒りと喜び？」
「うまく言葉には出来ないけど、『もっと早く来て欲しかった』ような怒り、そして『ずっと信じながら待っていたものがやっと来た』ような喜びよ。あとは『他にも色々文句はあるけれど来てくれたから、後はこの一発で全部許すわ』って感じで、体が勝手に動いたの」
「な、なんか、えらく具体的だな……。それは俺に対して抱いた気持ちだったのか？」
間髪いれずに立華は強く頷いた。
「俺が前世で立華に最低なことをしたのかな」
「かもしれないわね」
音無は自分で適当に言ったことなのに、なんだかそれが真実に近いような気がした。
「じゃあ、ちゃんと謝る。色々とすまなかった。この通りだ」
音無は深々と頭を下げる。
すると立華は音無の肩を軽く三回叩いた。
「あれはもういい思い出で笑い話よ？」
「そ、そうだったな」
頭を上げた音無は微笑む立華に照れ笑いを見せた。
「あたしも一つ聞いていい？」
「もちろん。いくつでも聞いてくれ」
「音無君はどうしてゆりやユイちゃんは下の名前で呼ぶの？」
「えっ？」
大口を叩いたにもかかわらず、想定外すぎる質問に音無は言葉を失った。

これはどう答えるべきなんだ？　――いや、なにもやましいことはしてない。普通でいいんだ。

「ゆりは自己紹介の段階で、ゆりとしか聞かされてなかったから自然と。ユイは最初らへんは苗字で呼んでたんだけど、ユイの母親とも交流があったりとかして、仲良くなっていくうちに、いつのまにかなってた」

音無が答えた後、立華は口を開かず、リアクションすらも見せなかった。

立華はあの二人の下の名前を呼んで欲しくないのか？

ユイはえーと……よし……、よし……なんだっけ？

ゆりはメールで送られてきたよな。……ダメだ！

携帯も無いというか破壊されたし、思い出せない。

すると立華がなんの前触れもなく口を開いた。

「奏」

「……え？」

「あたしの名前は“奏”よ」

音無がほとんど反応できてないでいると、もう一度立華は自分の名前を強調して口に出した。

ど、どうゆうことだ。なんで急に名前を……もしかして？

音無はピンと来た。あれしかない。

それを決定的なものにしようと音無は勝負に出る。

「唐突だけど、立華のこと下の名前で、奏って呼んでいいか？」

「いいわ」

立華はそれを待っていたかのように若干被せ気味で了承してくれた。

やっぱり、ゆりやユイと同じように下の名前で呼んで欲しかったんだ。
それにしても立華のことを奏って呼んでいいなんて、すごく光栄だな。
でも、せっかくだったら――

「じゃあさ、た――奏も俺のことは結弦って呼び捨ててくれないか」
奏には音無君じゃなくて結弦って呼んで欲しい。
「わかった。そうする」
そう考えた音無の申し出を奏は簡単に受け入れてくれた。

「あっ、結弦。外がすごいわ」
突然、奏は少し窓に顔を近づけて目をきらめかせながら外の景色を眺めだした。
奏に夢中で気づかなかったけど、ちょうど頂上付近まできてたんだな。
結弦も奏と同じように体を動かし、外を眺めてみる。

そこにはきれいな夜景が広がっていた。
真っ暗な空間にあるオールドギルドに灯る明かりが薄暗く周囲を照らす。
その明かりはいくつもいくつも灯っていて、石造りの町を柔らかな光で包んでいるようだった。
ここを支えているはずの柱は見えないように計算されているのか、どこにもない。

「おぉ、これは本当に感動しちまうな」
「ゆりがあそこまで楽しみにしていたのも納得するわね」
「あぁ、そうだな。あと、一人で乗ることになった時のショックも

わかった」
「どうして？」
「だって、この瞬間を分かち合える人がいないなんて寂しくないか？」
奏は少し考えた後、体を震わせた。
「野田君がいなかったら、あたしがゆりと一緒にもう一周する必要があったわね」
これだけ感動して褒め称えている最中、結弦はすでに外を見るのをやめていた。
あの景色より素晴らしいものを見つけ、見とれていたからだ。
『外を眺める奏の横顔。こっちの方があっちよりも断然きれいだな。』
こんなこと恥ずかしくて口には出来ないけど。
「結弦」
「ん？」
気づけば奏が少し赤い顔をしてこちらを見ていた。
「ありがとう」
急にお礼？　なにもお礼を言われるようなことなんて……まさか？
結弦は最悪の状況を想像してしまった。それを否定もらうべく、聞いてみた。
「……もしかして、声を出してた？」
「出てたわ」

初日

夏休みが終わり、結弦は今日から天上高等学校の生徒だ。
寝巻きから奏に手渡されたブレザーで身を包む。初音の協力があったのだろう。大きさはぴったりだ。
奏から聞いた話だと、男子はブレザーとガクラン、女子はブレザーとセーラーの二種類があって、どちらを選ぶのも自由。
奏やゆりは両方とも持っているとのことだ。ちなみに、男子は圧倒的にブレザーが多いらしい。

朝食をちゃんととった後、竹山から渡された赤いカバーをつけた生徒手帳をかばんに入れ、あらかじめ買っておいた定期を確認し、結弦は家をでた。
今までは徒歩で学校に通っていたのに今日からは電車で通学。少し変な気分だな。

慣れていない通学路だったが、一度だけ来た——正確には帰った——ことがあるので迷うことなく到着した。
チャーギルズとは打って変わってごく普通な外観。
ただ、やはりチャーがここの偉い人なだけあって全体的に校舎や校庭が広いような気がする。

結弦は校門を抜け、下駄箱を通って、教室ではなく職員室へと足を運んだ。
ここで担任を紹介されたりするらしい。
職員室の引き戸の前まで来た結弦は一応ノックを三回してみる。
「おう、入って来い」

すぐにチャーらしき声が応答した。

「失礼します」

中に入るとひさ子と入江と髪の毛が跳ねまくっている関根が中にいた。

ひさ子はブレザーで残りの二人はセーラー服を着ている。

彼女達も今日からこの学校の生徒なのか。

日向達ものこともあったので、そこまで驚かなかった。

「音無か。お前もこっちに来い」

書類に目を通しているチャーに手招きされて、結弦は挨拶をしながら横一列に並んでいる関根の隣に立った。

ひさ子と入江は挨拶を返してきたが、関根はまだ半分夢の中のようで返事の代わりに真横にいる結弦の肩へ頭突きをしてくる。

休みが少なくて疲れているんだろうな。

なおも続く関根のある意味で器用な頭突きを——肩だと痛いだろうから——手のひらで受けていると入江がそれに気付いた。

すぐさま関根の両肩を掴んで止めて、結弦に謝罪する。

「ごめんなさい。今日朝までゲームしていたらしくて……」

関根の寝不足は休みがどうこう以前の問題だった。

「いいって。それより、岩沢はどうしたんだ?」

あんな状態の関根も連れて来られているんだし、まだ来てないってことはないはずだ。

「岩沢さんは、その……」

なのに、なぜか入江は戸惑いの表情を浮かべて口ごもっている。

それを見て、急に心配になった。

「なにかあったのか?」

ステージから落ちたり、ファンに襲われたり、大量のまきびしを

踏んづけたなんてことが？

「いやいや、岩沢はあそこで音楽教師を捕まえてるよ」

入江の代わりに答えたひさ子が指差す先には、イキイキと喋るセーラー服を着た岩沢がいた。

対して、音楽教師は涙目だ。

「げ、元気そうでよかったよ……」

「ほう、主が釣られたか。……と、そういや待たせてたな」

チャーが目を通していた書類を机の上に置くと、視線をこちらに向ける。

「あと来てないのは……直井と日向と吉岡か。まぁいい。今から組み分けを発表していく」

そう言うとチャーはさっきとは別の書類を手に取り、読み上げはじめた。

「入江と関根と直井と吉岡が一年八組、音無と田淵が三年一組、岩沢と日向が三年二組だ」

その後、担任を紹介された。結弦とひさ子のクラスの担任は「俺が三年一組担任の五十嵐だ。よろしく」

茶色の短髪で人がよさそうな笑顔を見せる好青年だった。

その五十嵐先生に連れられ、結弦とひさ子は騒がしい教室の前にやってきた。

先生は「俺が呼ぶまでここで待っていてくれ」とお願いし、先に一人で中に入る。

すると、あれだけ騒がしかった教室が一瞬で静かになった。

ガルデモが転校生だって知ってて早く会いたいから……とかか？

五十嵐先生は転校生が来ることを話すとすぐに二人を呼んだ。
先にひさ子が入ると一気に歓声があがる。
まぁ、今話題のガルデモのメンバーが入ってきたらそうなるよな。

続いて結弦も中に入ったが、ほとんどの生徒が視線すらも向けなかった。
救いなのは、ＳＳＳメンバーの奏とゆりと松下とＴＫがいて、手を振ったりして合図を送ってきてくれたことだ。
あれがなければ、転校生ではなく、ただ遅刻してきた生徒のようにゆっくりと席に座っていただろう。

「じゃあ、二人とも自己紹介してくれるか。まずは音無から」
先生は不憫な結弦を気遣って、先に自己紹介させた。
結弦は簡単に挨拶を済ませると、先生に指定された後ろの廊下側にある奏の隣の席に座る。

それから奏に話しかけた。
「一緒のクラスになったな」
「まだ、ひさ子さんが自己紹介しているわ」
軽く注意された。
「そうだな。ごめん」

ひさ子は自己紹介が終わると、盛大な拍手を浴びながら窓側の端で一番後ろの席に座った。
その隣が松下で前がＴＫと完全にガードされている。

この分だと高松とか藤巻辺りが岩沢を守っているんだろうな。

……じゃあ、入江と関根は誰が守っているんだ？
たしかSSSの一年生は遊佐だけだったはず。大山辺りが潜入しているのか？
でも、大山だけだと心細いな。直井は期待できないし……。

「その二人に手を出すんじゃねぇッッッ！」
突然、廊下から怒号が結弦の耳に届いた。
この声は野田だな？

もちろん教室にいる他の人の耳にも届いているわけで、ざわざわと
「また、野田か」
「野田君だね」
「うるさいぞ、野田ー」
しなかった。完全に受け入れられている。
「どんな生活を普段からしてるんだ」

ガタッ

突然、隣に座っていた奏が立ち上がり、そのまま教室から出ていこうとした。
奏のブレザー姿、可愛いな。じゃなくて――
「奏、どこへ行くんだ？」
「野田君を止めー―」
「その必要はないわ」
そこに同じくブレザーを着たゆりが現れ、奏の左手首をつかんで引き止めた。

「どうして？」
「だって、あれはあたしが頼んだことだしね。入江さんと関根さんを一週間ほど全力で護衛してって。そうすれば、彼女らに手出しす

れば野田君が襲い掛かるって噂が広まって――」
ゆりは握りこぶしをつくり
「雑魚は一掃されるわ」
不適な笑みを浮かべた。

「後は、たまに近づいてくる奴を排除してけば素敵な学校生活が送れるはずよ」
「さすがはゆりね」
奏は手をパチパチと叩いた。
「手加減を知らなそうな野田だと、学校に来れなくなる奴も増えないか？」

「そんなことより」
ゆりの表情が一瞬で真面目に戻る。
「音無君は自分の心配をしたほうがいいわよ」
「自分の心配？」
「ゆっくりと教室を見回してみなさい」
意味がよくわからなかったが、ゆりに言われた通りに見回してみる。

四十人近くいるクラスメイトの約半分が、こちらを睨んでいた。
なんだ、この視線は？　さっきは見向きもしなかったのにどうしてだ？
余計に頭の中がこんがらがった結弦へ、ゆりは耳打ちした。
「奏ちゃんは可愛くて生徒会長だし、すごく人気があるのよ」
「……なるほど」
つまり、この視線は「あのヤロー！　なに会長になれなれしく話しかけてんだ！」ってことなのか。
この分だと、ファンクラブもありそうだな。

「よし、これでホームルームは終わりだ。次は体育館に移動するから廊下に並んでくれ」
「これからなんかあるのか？」
五十嵐先生の指示でぞろぞろと移動を始める生徒を見た結弦は奏に聞いた。
「始業式よ」

戦線活動

始業式は別段変わったこともなく執り行われ閉式した。
野田が入江たちの近くで普通に並んでいる生徒に襲い掛かったことはノーカウントだ。
教室に戻って早々に五十嵐先生は「今日は終わりだ。もう帰っていいぞ。気をつけて帰れよ」と、職員室へ戻っていった。

生徒が次々と教室から出て行く中、ゆりと大山がこっちにやってきた。
「こんにちは音無君！」
「大山か。久しぶりだな」
大山もこのクラスだったのか。溶け込みすぎてて気づかなかった。

「二人してどうしたんだ？」
「今日から戦線よ。早く行きましょ。奏ちゃんも来るわよね？」

というわけで、戦線を部活のようなノリで使うゆりに連れられて部室前に到着した。
転校組であるガルデモの四人や、同じく転校組で初日から遅刻してきたユイと日向も一緒だ。直井は知らん。
ちなみに、奏や他の面々はユイ達を待っている間に、先に行ってしまった。

「音無君は来たことがあるから知っているだろうけど、ここが戦線の本部よ」
「部室棟とか想像してたけどプレハブなんだなー」

「もう入っていいんですか？」
日向の感想を無視して、関根は少し歪んでいる扉の丸いドアノブに手をかける。

「もちろん」
「じゃあ、いっくよー」
ゆりの許しが出たので関根は勢いよく扉を開けた。次の瞬間――

「ようこそ。さば折、酢豚、戦線へ」

奏の歓迎の言葉と共に破裂音と紙くずとテープが飛んできた。
ただ位置の関係上、紙くずとテープは全て入口にいる関根に被弾する。
「大丈夫！？」
入江が駆け寄ると、色とりどりの装飾がなされた関根はわざとらしく倒れた。

抱きかかえられた関根は
「みゆきち……枕元に……ちゃんとでるから……あたしのこと……忘れないで……ガクリ……」
と言い残し、目をつぶったが
「しおりん、ここで寝ると邪魔になっちゃうよ。中に入ろ？」
入江には通用しなかった。

まぁ、自分でガクリって口に出してたんだから当然か。
だが、しっかりと騙されているメンバーもいた。

「せせせせ先輩！　早く！　はやく病院を呼んで！」
「呼べねぇよ！　落ち着けってユイ、あれは仮病だ！」
日向のブレザーの襟をつかんで揺さぶるユイに

「もしもし。救急車をお願いします。場所は――」
「立華さんが電話をかけているッ？」
「奏ちゃん！　関根さんはいたって健康よ！」
馴れた様子で救急車を呼ぶ奏。
こういう状況をカオスって言うんだろうな。

なんとか事態を収拾させ、本部に全員が納まった。クーラーがかかっていて少し涼しい。
素振りをはじめた野田以外が腰を落ち着けると、白のベレー帽をかぶったゆりが立ち上がる。
「さて、やっとみんな揃ったわね」
「ゆりっぺ、椎名さんがいないよ」
大山に指摘され、ゆりは部屋を見回した。
「ホントだ。あと松下君もいないじゃない」
「直井もな」
結弦も付け加える。
「高松君、なにか聞いてる？」
高松は待ってましたとばかりにメガネをいつものように持ち上げた。
「報告によりますと松下五段は部活、直井君は風邪らしき病気で欠席、だそうです」
「風邪らしきってなによ。らしきって」
ゆりは高松ではなく遊佐に視線を向ける。

「『神は風邪など引かない』と、電話で本人が言ってました」
「そう……」
ゆりはため息にも似た呆れ声を出した。

「なら椎名さんは？」
「……」
誰も知らないらしく、この問いに答えようとしない。
聞こえてくるのは部屋の隅で素振りを続けている野田の「フッ、フッ、フッ」と口から漏れる音だけだ。

「まぁ、後から来るだろうし先にはじめちゃいましょ」
ゆりが指を鳴らすとスクリーンが下りてきた。

「二学期早々、なにをやるんだ？」
「Ｄａｎｃｅ　Ｐａｒｔｙ」
藤巻の問いにＴＫがすかさず答える。
「そんな洒落たイベントはしないわ」
だが、すぐに否定された。

「この時期ならではアレよ。思いつかない？」
「お月見？」
ゆりのヒントから大山が無難そうな答えを出す。
「それもいいわね。竹山君、今年の中秋の名月を調べておいて」
これも違うらしい。
「わかりました。それと、僕のことはクライス――」

「もしかして合唱祭？」
岩沢は期待で胸がはちきれそうな表情をしている。
「おしい。もっと部活単位でも参加できる学校行事よ」
「そう……」

一気にテンションが下がった岩沢をひさ子が慰めた。
ところで、なんでクイズ大会みたくなっているんだ。

そこにずっと興味なさげにしていた野田が素振りをやめて、こちらにやってきた。
眉間には深いしわが刻まれている。
うるさいと文句でも言うつもりなのか？

「わかったぞ！　連歌だな！」
違った。野田もしっかりと考えていたらしい。でも、答えが意味不明だ。
「外で逆立ちしてなさい！」
「了解だ、ゆりっぺ」
めんどくさかったのか否定せずに本部から追い出す。
ただ、否定しなかったために大山たちが興味を持った。

「レンガってなんだろう？　家を建てるのに使う赤い石のことじゃないよね？　高松君は知ってる？」
「そこ、食いつかなくていい！」
「連歌とは連なる歌と書く、日本の伝統的な――」
「説明も始めるなッ！」
「ハイッ！　難しすぎて頭がパンクしそうです！」
「耳を塞ぎなさいっ」
「ゆり、お茶を入れてきたわ」
「いただこうかしら！」
「ゆりっぺ、なにごとだ！？」
「外周十五周してこい！」
「連歌か。面白い行事のある学校だね」
「岩沢さんもアホのたわ言を鵜呑みにしないでー！」

怒涛のツッコミを見せてくれたゆりの肩に、ユイに耳を塞がれている日向が手を置いた。
「ゆりっぺも大変そうだな」
「そう見えるのなら、少しは手伝いなさいよ！」
日向の顔面にゆりの裏拳がめり込んだ。

「結弦もどうぞ」
「ありがとう。それで結局、今日はなにをするんだ？」
いい加減話を進めて欲しくなったので、奏からお茶を受け取った結弦は話題を元に戻した。
「あぁ、ごめんね」
ゆりは気を取り直すためか、お茶を飲んだ。
「ふぅ。じゃあ、発表するわ。今日のオペレーションは――」

「天鼓祭参入作戦よ」

「……テンクサイって、なんですか？」
聞いてもピンとこない転校組を代表して、入江が質問した。
それに高松が答える。
「文化祭のようなもの……とでも言っておきましょうか」
「ようなものじゃなくて、ただの文化祭よ」

会議

「それじゃ、文化祭でしたいことはある？」
ゆりの漠然とした問いかけ岩沢が真っ先に手をあげる。
「はい、岩沢さん」
「ライブ」
部屋にいる奏以外の全員の表情から「やっぱり」と、読みとれた。

「それはもう決定よ。音楽する場を確保することが戦線に加入してくれる条件だったわけだしね」
「そうだっけ？」
「忘れたの？　……まぁ、ライブをやることに依存はないでしょ？」
「ない」
「じゃ、ライブとは別にもう一つ、なにかある人！」

突然、ＴＫが踊りだした。
「はい、ＴＫ」
名前を呼ばれた途端に踊りが激しくなる。
「ダンスパーティね」
「あれだけで意思疎通できてんのかよっ！？」
「Ｄａｎｃｅ　ｉｓ　ｌａｎｇｕａｇｅ」
日向が突っ込むとＴＫはポーズをキメた。

「じゃあ、他に――」
「その前にちょっといいか？」
ゆりがそれを無視して話を進めようとしたところで、結弦に遮られた。
「なにかしら？」
「忘れるといけないし、あそこにあるホワイトボードにでも書いと

いた方がよくないか？」
「それもそうね」
結弦の提案に同意すると、ゆりはお茶をひさ子に渡していた奏に声をかける。
「奏ちゃん、書記をお願いできる？」
「まかせて」
「じゃあ、お茶はあたしが配ります」
奏はお茶の乗っているおぼんを入江に渡してから、端にあるホワイトボードを動かそうとしたので、結弦も手伝った。
そういえば、ゆりの斜め後ろにあるスクリーンはなんのために下ろしたんだ？
ホワイトボードはみんなが見やすそうな位置――具体的にはスクリーンの前――に移動させた。
それから、奏はダンスパーティと書き込む。すごくきれいな字だな。
……ところで、なんでこんなにＴＫはダンスパーティをやりたがってるんだろう。
次に手をあげたのは大山。
「お化け屋敷なんてどうかな？」
普通だったので特にコメントはなし。奏も淡々と書き込む。
「ハイッハイッ！　ゆりっぺさん！　いいのを思いつきました！」
今度は関根だ。
「どんなのかしら？」
「みゆ喫茶（きっちゃ）！」
「あたしになにをさせるつもりっ？」
「いやー。みゆきちがお茶を運ぶ姿を見てね、グッときたんだよ」

奏は喫の字がでてこなかったらしく、ひらがなで『みゆきっちゃ』と書いた。
「ちなみに喫茶店は“きっさ”と“きっちゃ”、実はどちらの読み方でも正解なんです」
「高松君がどうでもいい情報をぶち込んできたよ！？」
他にも『ふじつ堀』『ボディビル』『僕のことはクライストとお呼びください』等、色々と出てきた。
あらかた出揃った感じがしたころ、「他にはない？」と、ゆりは最後の確認をとる。
すると、ずっとホワイトボードに書き込んでいた奏が手をあげた。
ただ、ゆりの後ろのいるので、このままだと気づかれない。
「奏はなにがやりたいんだ？」
だから結弦がゆりのかわりに指名した。
「屋台なんてどうかしら」
「屋台って食べ物をだすってこと？」
ゆりの質問に奏が頷くと、彼女の麻婆豆腐を知っている結弦以外の男子五人が身震いした。
高松なんて、いつものようにメガネを触って平静を保とうとしているようだが、手は鼻の上だ。竹山はカチャカチャうるさい。
……そんなに動揺しなくてもいいんじゃないか？　奏の麻婆豆腐は辛いけどおいしいぞ？
「た、立華さんは具体的には何屋さんがやりたいの？　やっぱり、マ――」
「Ｏｈ　Ｓｔｏｐ！」
ＴＫは大山の麻婆豆腐と言おうとした口を押さえた。

それを藤巻が親指を立てて「さすがＴＫだぜ」と声を出さずに褒める。
ゆりはその指を曲がってはいけない方向へ曲げた。
悶える藤巻に気づいた様子もなく、奏は大山の問いに答える。
「祭りと言ったら――」
緊張の一瞬。
「焼きそばよね」
戦々恐々としていた大山たちは安堵のため息をついた。
これにはちょっとムッとしたが、同時に心の痛みを覚えた。なんでだ？
その原因を考えてみる。すぐに一つ思い当たることが出てきた。
……もしかして、これが焼きねぎに軽い文句を言われたときの初音の気持ちか？
だったら悪いことしたな。帰ったら謝って、目の前で丸々一本かじろう。
この決心は家に帰るまで置いておくとして、奏が焼きそばを選ぶなんて意外だよな。
屋台って言ったのは、遊園地デートの日にＴＫがやってた麻婆豆腐の屋台を思い出したからじゃなかったのか。
「あいつらがあからさまにホッとしているのは、なんでだろうな？」
奏が『屋台（焼きそば）』と書き込んでいると、日向が小声で話しかけてきた。
たしかに、知らない人からすれば異常か。
「あれはな、……」
結弦は奏と出会ったあの日のことを、簡単にではあるが教えた。

「なるほど、だからか。立華が麻婆豆腐好きなのは聞かされていたけど、そんな裏があったなんてな」
日向は納得したように頷いた。
「で、本当のところどうなんだ？　音無も食べたんだろ？」
「天使が作ってくれた麻婆豆腐のようにうまかった……。少し、辛かったけどな」
「そ、そうか」
なぜか日向は少し引いていた。信じてないのか？

この二人のこそこそ話にユイが気がついた。
「なに話してんですか？　あと音無先輩、お顔がものすごいことになってますよ？」
日向は結弦に許可を得てから、「立華の麻婆豆腐がすごいらしい」と耳打ちした。
すると、即座にユイは隣にいるひさ子に教える。
そのひさ子は入江に教え、最後には関根まで到達した。
岩沢が飛ばされたのは興味を抱いていないと確信しているからだろうな。

「ゆりっぺさん！」
まるで新しいおもちゃを手に入れた子供のような笑顔になった関根が勢いよく手をあげた。
「はい、関根さん」

「屋台で麻婆豆腐をっ！」

完全に不意をつかれた大山たちは、なにが起きたのかわかってい

ないようだった。
奏は「それがあったわね」って顔をしてから、大きく『屋台（麻婆豆腐）』と、書き込んだ。

演技

「ところで、音無君はなんかないの？」
空気を変えようとしたのか、ゆりがアイデアを求めてきた。
その期待にこたえたいが、あんなにも個性的な意見が出ている中で、新しいものとなるとなかなか難しい。
大山ばりに普通の意見を言おうものなら、確実に白い目で見られる。
慎重に考えないとな……。
結弦がなんとかアイデアをひねり出そうとしていると、突然――

へくちっ

奏のいる方向から可愛いくしゃみが聞こえてきた。
「寒い？　冷房切る？」
ゆりが心配そうに聞くと奏は「今のくしゃみはあたしじゃないわ」と、首を横に振った。
そして、「あそこから聞こえてきた」と、ホワイトボードの奥にあるスクリーンを指差す。
いっせいに部屋中の視線がそこに集まった。

「そこにだれかいるのか？」
結弦が呼びかけてみたが、反応は返ってこない。気配もない。
「もしかして……オ、オバケ？」
入江が不安そうに呟く。

「よぉし」

痺れを切らしたのか、藤巻は立ち上がり
「自分から出てこねぇなら、俺が引きずり出してやんぜ」
鼻息を荒くしながら回り込もうとした。
その時――

「あの日から……」
ついに謎の人物が喋りだした。
「この声は椎名さんだよ！」
そして一瞬で正体を暴かれた。
大山……いくら椎名が声色を変えてないとはいえ、どうかとおもうぞ？
もうちょっと引っ張ってもよかったんじゃないか？

ただ、本人は気にしてないようだ。
「なぜあの時、演技が伝わらなかったのか……」
「演技ってなんだ？」
「Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ」

藤巻やＴＫをはじめ、他のみんなもわかっていないようだ。
もちろん結弦にも心当たりはない。
「理由をずっと考えてきた……」
だから、こう言われても、全く話が見えてこない。
しかし、次の遊佐の一言でほぼ全員が納得した。

「釣堀での一件かと」
「あぁ！　『やられたなりー』ですね！」
あのユイですら、ちゃんとわかっていた。
「釣堀の一件ってなんなんだ？」
唯一、あの時気絶していた藤巻だけが取り残されたが、そのまま話は進んでいく。

「……私の演技力に問題はなかったはずだ」
「あっただろ」
結弦のツッコミは聞き流される。
「ただ一点……考えられるとすれば羞恥心による照れ！」
椎名はそう言うと、ようやくスクリーンの裏から出てきた。

「あの日以来、私は水着姿でい続けている……」
――上下黒のビキニにマフラーという格好で。
「アホですね」
「アホでも水着だぜ？」
「……いい頃合だ。ゆり！　演劇をするぞ！」

この椎名に対する反応は様々だ。
奏は特に変わった様子もなく、普通に『演劇』と書き込んでいる。
関根は「あの質量――ひさ子さん並！？」と、わけがわからない。
男子達は言わずもがな、大山なんかは耳を真っ赤にして手で顔を覆っているが、指の間からしっかりと見ている。

そして、ユイと日向はいつものようなじゃれあいに発展していた。
「水着姿だったらなんでも良いのかァッ！　あたしだって水着になったらすごいんだぞコラー！」
「どう、すごいんだよ」
「溢れる魅力、感じんだろォーーーッ！」
「ぜんぜん」
「あんだと！？　あたしの水着姿、見たことあんのかーーーーッ！？」
「今年、一緒に海へ行っただろ」
「日々進化しとるんじゃーーーーーッ！」

「それを今、披露してみますか？」
「してやりますよ！　――へっ？」
突然、横から割り込んできた遊佐の言葉で、あれだけヒートアップしていたユイが一瞬で止まった。
「では、隣の部屋でどの水着に着替えるか決めてください。それと、全部新品ですので」
そう言うと遊佐はひさ子の方に向きなおる。
「ひさ子さん、ユイさんを運んでくれませんか？」
部室は学校の中と違ってバリアフリーではなく、扉の間が狭いので車椅子は通れない。
だから、ひさ子に頼んだというわけだ。ちなみに、ここへは日向が運んできた。

「オーケイ」
ひさ子は簡単に了承してから、ユイを持ち上げようとしたが、なぜか抵抗しだす。
「ちょっ、待ってください！　あたしは一言も着替えるなんて……言いましたけど、言っていません！」
たしかに、海でもプールでもないのに水着はいやだろうな。
「あさはかなり……」
――普通は。

そこへ、関根が助け舟を出す。
「あ！　あたしも“たまたま”みゆきちにサイズとデザインがぴったりの水着を持ってる！　これはみゆきちも着替えるしかないよ！」
「えぇ！？」
その船は入江を巻き込んですぐに沈没した。

「仕方ないわね」

「ゆりっぺまでかばんをあさり始めたぞ！？」

最終的には女子全員が着ることになった。
もう夏は終わっているのに、なんでそんなに水着があるのか聞くのは野暮だろうな。

「二人とも、しっかり見張ってね」
「あぁ、まかせてくれ」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ」
そして、着替えている間の見張り役に結弦とＴＫが選ばれた。理由は単純で『比較的、安心できるから』らしい。

残りの男性陣は既に追い出され、女性陣はベッドのある奥の部屋で持ち寄られた水着を物色している。
「音無君とＴＫも覗いたら……覚悟しておきなさい」
念押しと同時にゆりが扉を閉めたことで、結弦はＴＫと二人きりになった。

やることもないので、アプリかなんかで時間をつぶそうと、結弦はチャーに弁償してもらった携帯電話を探す。
「Ｓｔｏｐ！」
すると突然、ＴＫに止められた。
「Ｓｔａｎｄ　ＵＰ」
そして今度は立つように促してくる。どういうつもりなんだ？
ＴＫの意図がよくつかめなかったが、結弦はその手をとって立ち上がった。

「Ｒｅｐｅａｔ　ａｆｔｅｒ　ｍｅ」

手を離し、回転しながらちょっと広めのスペースに移動したＴＫは、軽快にステップを踏む。
「Ｃｏｍｅ　ｏｎ！　Ｙｏｕｒ　ｔｕｒｎ！」
どうやら、ダンスを教えてくれるらしい。
断る理由がないどころか、完全に暇なので、ありがたく習うことにした。
「こうか？」
結弦は見よう見まねで足を動かす。
「Ｎｏ　Ｎｏ　……」

やっぱりＴＫはすごいやつだな。
一緒に踊っていると、まるで自分じゃないかのように気分が高揚してくる。
「Ｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！」
「Ｙｅａａａａａａａａａａａｈ！」

だから、誰の目を気にすることも――
「だいぶ、上達しましたね」
「ゆ、遊佐！？」
まだ、結弦はその境地に達していなかった。

「い、いつからそこに？」
「ゆりっぺさんが『二人とも、しっかり見張ってね』と、お二人にお願いしたあたりからです」
「最初からってことだな……」
結弦は恥ずかしさのあまり、遊佐の顔が見れなくなった。

「あまり気を落とさないでください。こういう日もありますよ」
そんな結弦を遊佐は慰める。
「Ａｎｄ　ｙｅｔ，　Ｉ　ｄａｎｃｅ」
ＴＫはまだ、一人で踊っていた。

「おっし！」
少ししてから、頬を叩いてむりやり気持ちを切り替え、結弦は復活した。

あのぐらいでいつまでも落ち込んでいるのも変だしな。
「もういいのですか？」
「あぁ、手間かけさせて悪かった」
「いえ」

「ところで、どうでしょう？　似合っていますか？」
遊佐は結弦の前でくるりと一回転してみせた。
それがさっきのダンスの記憶を呼び起こし、結弦は精神的ダメージを受ける。
「傷は深いようですね」

「いや……大丈夫。それより、どうして水着じゃないんだ？」
そう、遊佐はなぜか大き目のワイシャツ一枚しか着ていない。
「需要と供給です。あと、下にはきちんと水着を着ていますよ。見ますか？」
「遠慮しとくよ」

そのとき突然、奥の部屋と本部を繋ぐ扉が開かれ、
「よーし！　準備、でっきたよー！」
体に白いタオルを巻いている関根が元気よく入ってきた。
続いて奏たちも関根と同じように体にタオルを巻いて入ってくる。

だけど、一人足りない。
「ゆりはどうしたんだ？」
「音無先輩、そゆとこを詮索するのはダメですよ」
「わ、悪い」
また、ひさ子に運んでもらっているユイに注意された。今日はよく叱られる日だな。

「ゆりっぺ！　走り終えたぞ！」

そこへ野田が戻ってきた。肩で息をしているが、まだまだ余力はありそうだ。
「おい、貴様。ゆりっぺがどこにいるのか知っているなら吐け」
戻ってきて早々、立て掛けてあったハルバードを手に取り、結弦に突きつけた。

「ゆりなら隣の部屋で――」
――水着に着替えているから少し待ってくれ。
「ゆりっぺ、入るぞ」
言い切る前に野田は隣の部屋に入ってしまう。
野田の突発的な行動に結弦は反応が遅れてしまい、対処できなかった。

後を追うにも中には着替えているゆりが……そうだ！
「椎名！　止めてくれ！」
結弦は野田を相手にできそうな唯一の女性である椎名に頼んだ。
しかし、「必要ない……」と断られた。

次の瞬間、ゆりの悲鳴と野田の断末魔がほぼ同時にあがる。
「遅かったか……」

その後、見張り役だった結弦とＴＫは十数分間に渡ってゆりに説教された。
ちなみに、恐怖と幸福が入り混じった顔のまま気絶している野田は床に放置だ。

全員が着替え終わったということで、外にいる日向達も本部に戻ってきてもらった。

麻雀をして時間を潰していたらしく、手にはカードタイプの雀牌を持っている。
「いやー、竹山は見かけによらず麻雀強いなー」
「ツキがあっただけですよ。それと僕のことはクライストとお呼びください」
缶ジュースを持っている竹山と落ち込んでいる高松を見れば、勝敗は一目瞭然だ。

ふと、ゆりのほうを見ると、キョロキョロしていた。
「あれ？　大山君はどうしたの？」
どうやら、一人減っていることに気付いたようだ。
言われてみればたしかに大山の姿がない。

「水着はちょっと刺激が強すぎたみたいでさ、ティッシュで鼻を押さえて木陰で休んでる」
「あいつぁムッツ――純情だからな」
「想像だけでやられたってわけね。それともさっきの椎名さんの姿が止めかしら」
日向と藤巻から大山がいない理由を聞いて、ゆりは苦笑いを浮かべた。

「ところで、ゆりっぺ。なんでタオル巻いてるんだ？」
日向が指摘すると、関根が「水着コンテストをやるからですよー！」と即座に答えた。
それに日向たちよりも入江が大きな驚きを示す。
「い、いつの間にそんな話になってたの！？」
「なってないわ。タオルを配って巻いてもらったのは、少し肌寒いのとやっぱ恥ず……あとは色々よ」
すぐにゆりが少し顔を赤らめながら訂正すると、入江は安堵の吐息をもらした。

「えー、せっかくみんな着てるんだし、やろーよー。やりましょーよ」
関根はどうしてもコンテストをやりたいらしく、駄々をこねる。
そこに奏がやってきた。
「ゆり、文化祭の出し物は決めないの？」
「あ」
完全に忘れていたようだ。

「それならばっ、優勝者がそれを決めるなんてどーですか？」
関根がここぞとばかりにねじ込んできた。
よくもまぁ、色々思いつくもんだな。でも――

「賞品つけるとしても、もっといいやつじゃなきゃ、やる気でないか。なぁ、かな……で？」
結弦は同意を求めようとしたが、
「もしも勝てたら、麻婆豆腐の屋台……」
隣にいる奏からはやる気しか感じとれなかった。

「奏ちゃんも燃えてるし、依存はないわ」
「戦線内だけであれば」
「あさはかなり……」
続いてゆりと遊佐と椎名も承諾する。

「残るは岩沢さんとひさ子さんとユイだけだねっ」
「あたしはっ？」
「説得してくるっ！　岩沢さーん。ひさ子さーん。ユーイー」
関根は入江を置いて、三人にアタックした。

関根が一通り説明すると、「これでひなっち先輩のギャフンが聞けますね」と、さっきまで水着を拒否していたはずのユイはノリノリ。

しかし、残りの二人はあまり興味を持っていなかった。

ひさ子はまだ望みがあるとしても岩沢は絶望的――のはずだったが、横で話を聞いていた日向の何気ない一言で状況が急変する。

「それだと岩沢が優勝したらライブが二箇所開催になるな」

「いいね、やってやろうじゃん！」

一瞬で岩沢の目に火が灯った。

そこに、日向と同じく近くで話を聞いていた藤巻が批判の声をあげる。

「おいおい、そしたら男に決定権はなくなっちまうだろ」

だが――

「あたしたちの水着姿を間近で拝めるんですよ？」

「そうね、出し物を決定する権利か観賞する権利どちらか片方を選んでちょうだい」

関根と反論とゆりの圧力を前にして、「しょうがねぇな」と、あっさり引き下がった。

「あさはかなり……」

水着（前書き）

水着が大好きなひなっち先輩（前）

水着

ひさ子と入江の説得も終え、関根以外の女子は準備をしに向こうの部屋に行った。
そして俺たちは、部屋を片付けた後にイスを並べてそこに座ってる。
なかなか、みっともない姿だな。戻ってきた大山なんかはティッシュとゴミ箱代わりのビニール袋を抱えてるし。
でも、水着を見るために犠牲はつきもの。俺たちはがん首を揃えて待つしかないんだ。
ただやっぱり、少し不満がある。水着コンテストにではなく、音無たちの臨む姿勢に、だ。
もっとテンションをあげて、がっつかないと逆に失礼にあたるだろ？
さっきは遊佐が大きめでブカブカのワイシャツを着ているなんて男のロマンを体現してくれていたのに、こいつらときたら……
音無は立華、大山は椎名にしか興味がなさそうだし、野田はまだ寝てるし、竹山は関根と真剣な顔でなにか話してるし、高松やＴＫにいたっては目当てがいるのかさえ怪しい。
こうなると、俺と一緒に水着コンテストを楽しみにしている同士は――藤巻ぐらいか。
チラリと藤巻を見たら、力強く親指を立ててきた。心強いぜ！
「さぁさぁ、やってまいりました！　ＳＳＳプレゼンツ！　第一回美少女水着コンテストー！」

関根が高らかに開会を宣言すると、俺と藤巻は野次を飛ばしてそれを歓迎する。
「司会はエントリーナンバー一番である、あたしが務めさせていただきます。じゃー、ルール説明しますねー」
関根は体に巻いていたタオルを投げ捨てた。
「おぉ！」
思わず俺と藤巻は声をシンクロさせる。

出てきたのは黄色のビキニ――だけじゃなくてその上から白のTシャツ。
関根は伝家の宝刀、“水着の上からTシャツを着る”を実践してきていた。
水着の色が白い生地の下から、うっすらと透けて見えているのもポイントが高い！

「参加者は五分間のアピールタイムが与えられます。こんな風にアピちゃってください！」
そう言うと今度は、マイクを持っていないほうの手でTシャツのすそを恥ずかしそうに下へ引っ張った。
隠そうとしながら恥らう。……やってくれるな！
才能の片鱗は感じていたが、これほどの逸材だったとはっ！
「あたしは司会者なんでアピールタイムは、しゅーりょーです」
手を離すと笑顔に戻った。

「あ、そうそう。肝心の審査方法ですが観客と出場者の投票によって決まります！」
「出場者は自分に投票するのでは？」
珍しく高松が的外れじゃない問題点を指摘する。
「当然、自分以外に投票ですよー。他に質問ある人はいる？」

だれからも質問がないことを確認した関根は遊佐から借りたインカムを使って、隣の部屋へ呼びかけた。
「ゆさゆさ、そっちはどう？　オーケー？　うん、うん、うん、はいなー」
通信を終えると、「準備が整ったらしいからはじめまーす」向こうの部屋と繋がっているドアに手をかける。
「あ、出てくる順番はユイの割り箸で決めたらしいよ」
補足情報を口にしてからドアをおもいっきり開いた。つい立があるので中は見えない。

「エントリーナンバー二番！　王様を引く運命の下に生まれた、裏社会を牛耳るドンで、あたし達戦線のリーダー！　ゆりっぺさんどうぞ！」
関根が呼び込むとゆりっぺが入ってきた。

カチューシャについているリボンと同じ色のビキニのトップスに、デニム生地の短パンを合わせてきたか。
足元はサンダル。なかなか健康的な組み合わせだな。ゆりっぺにしては……

「あんまりエロイ目でじろじろ見んなぁっ！」
突然、ゆりっぺが割り箸を全力で投げてきた。
なぜかスローモーション近づいてくるそれに、王様とユイの字で書かれているのを認識した次の瞬間、真っ暗に――

目を開けるとゆりっぺが立っていた場所に岩沢がいた。
「日向、大丈夫か？」
「お、おぉ……」

そして、横にいる音無が心配そうに声をかけてくる。
いったい、どうなってるんだ？

混乱状態の俺へ、藤巻は渇を飛ばしてきた。
「日向！　気を散らされてるんじゃねぇ！」
そうだ、水着に集中しねぇと！
俺はあらためて岩沢に意識を戻した。

岩沢はオーソドックスに真紅のビキニか。
まぁ、ここまで普通の水着がなかったほうが不思議なぐらいだよな。
シンプルなデザインだけれど、スタイルもよくて、すげぇ似合ってる。
唯一、手に持っているアコギが、でかいウクレレみたいで個人的にマイナス。
でも、ギターがないと岩沢らしくないっちゃ、らしくないよな。

岩沢は今だれも使っていないイスを持ってくると、それに座った。
それから、関根に話しかける。
「アピールタイムっていつから？」
「今からですっ、それでは岩沢さんのアピールタイム、スタート！」
関根の合図と共に岩沢は演奏を始めた。

ゆったりとした曲調で、なんだか落ち着く。
これはユイに聞かされたことがない曲だな。即興か？
即興でこれだけ弾けるなんて、やっぱ岩沢はすげぇアーティストだな。
あぁ……、聴いていると、荒んでいる心が洗われて、きれいになっていくような気が……。

五分が過ぎ、演奏が終わると俺たちは大きな拍手を岩沢に送った。
岩沢はそれに手で応えながら、出番を終えて座っているゆりっぺの横に行き、腰を落ち着けた。
それを見届けてから関根は進行を続ける。
「さぁー、盛り上がってまいりました！　エントリーナンバー四番。大山さんをはじめとして、数々の調教をこなしてきたトップブリーダー、椎名さん！　どうぞー」

次は椎名か。すでに一度水着を見てる上に、今はなんだか穏やかな気持ちだし、少し盛り上がるに欠け……
「なぁぁぁっ！？」
「椎名さん！？」
俺と藤巻と大山、そしてゆりっぺも、ひときわ大きな驚きの声をあげた。そして次の瞬間――

「おおやまぁっ！？」
至福の表情のまま、大山が後ろへ倒れながらイスから落ちる。
それを音無が素早く頭を打たないように受け止めると、ＴＫが大山の鼻にティッシュを詰め込んだ。
「Ｎｏｓｅｂｌｅｅｄ」

大山がああなるのは当然だな。今の椎名は刺激的過ぎるぜ！
さっきは、ただのビキニ――それでも十分色っぽかった――と違って、露出がすごい。
いくら負けず嫌いだからってホント凄すぎる。すごいしか言えなくて、連呼しちまうぐらいすごい。
たしか、あの水着ってスリングショットってやつだよな？
海外のセレブとかが着ているイメージのあれだ。

もっと具体的に言うと黒い布地がマフラーから伸びて、大きな胸の上を越え、へその脇を通り過ぎて――

「だめだ。ＴＫ、俺にもティッシュくれ」

「Ｈｅｒｅ　ｙｏｕ　ａｒｅ」

「いくらなんでも、それはやりすぎよ！」

ゆりっぺは関根が脱ぎ捨てたタオルを拾うと、椎名に巻きつけた。

「あさはかなり……」

ゆりっぺに強制終了させられた椎名の次に出てきたのは立華だ。

立華が着てるのはフリルがたくさんついた青のパレオか。うん、白い肌によく映えて似合ってる。

普通の形の麦わら帽子をあわせてきているのもいい。南国みたいだ。

ただあんまりジロジロと見てたら、ゆりっぺか音無の鉄拳が飛んできそうだからな……。

俺はそれを避けるために隣へ視線を移すと、音無が立華を食い入るように見ていた。

おー、おー、さっきまでとは大違いだな。やっぱり、音無は立華のことが好きなのか。

……わが子を見守る父親みたいな雰囲気も感じ取れたのが、少し気になるところだがな。

しばらく立華の水着を――主に音無が――堪能してから、アピールタイムに移った。

するとすぐに立華は隣の部屋に行ってしまった。

向こうになんか用意してあんのか？

戻ってきた立華は少し大きめの鍋を持っていた。音無がその中身を聞く。

「奏、それに入っているのは麻婆豆腐か？」

「そうよ」

「いつの間に作ったんだよッ！？」

俺と藤巻が反射的につっこんだ。そしてスルーされた。

「材料が少なくて量はあまり作れなかったから、一口分ずつしかないけれど……」

立華はレンゲですくった麻婆豆腐を全員に配りだした。

大山や野田にも渡そうとしたが、二人は寝ているというか気絶している。

立華が困っていると、ゆりっぺが「ちょっと貸して」と彼女の手からレンゲを奪った。

「どうするの？」

「直接食べさせればいいの、よっ」

ゆりっぺはさっき自分が受け取ったレンゲと奪い取ったレンゲを、野田と大山の口に躊躇なく押し込んだ。

奇襲をくらって悶絶する二人。目を覚まさないまましばらく転げまわった後、力尽きたのか動かなくなった。

それを無表情で見届けた立華は、次のレンゲで麻婆豆腐をすくうと音無の前に差し出した。

――それも口元へ。

こっ、これはまさか……

「あーん」

あーんだ！　ゆりっぺの行動に触発されたのか！？

しかも、音無はそれに疑問を持った様子もなく、普通に受け入れている！？

とまぁ色々あったが、とうとう麻婆豆腐が俺に回ってきた。音無経由で渡されたけどな……。

それはいいとして、さっき音無に聞いた話から推測するに、おそらくこいつは人知を超えている。

現に、食べた藤巻は影が薄くなってるし、関根もマイクをほっぺたに跡が残りそうなほど押し付けて我慢してるじゃんか。

岩沢は表情を崩してないし、音無は幸せそうにモグモグしているけど、あっちはアテにならないな。

とにかく、気を引き締めて挑む！

……。

俺は本日二度目のブラックアウトを味わった。

コンテスト（前書き）

水着が大好きなひなっち先輩（後）

コンテスト

目を覚ますと音無が話しかけてきた。
「起きたか。麻婆豆腐を口にした途端に眠りだすから驚いたよ」
「あぁ、気合が足りなかったみたいだ。それより、水着はどうなった？」
音無が答える前に、俺は自分の目で状況を確認した。

どうやら、俺が気絶している間に出番を終えた人はいなさそうだな。
で、今は入江の番か。恥ずかしいのか、まだタオルを巻いている。
「よーではないかー」
そんな入江に悪代官――もとい関根が襲いかかろうとしていた。
ろれつが若干怪しいのはたぶん後遺症だろうな。

「逃げても無駄だよー？」
「あっ……」
部屋の角に追い込まれるのに、そう時間はかからなかった。
Tシャツ女子がタオル女子を追い詰める。なんか……いい。

「ほーれー！」
「ひゃぁっ！」
でも、関根は情緒のかけらもなくタオルを剥ぎとってしまった。
帯じゃないし、グルグルーあーれーは無理だったんだなー。
ただ、そこから現れた水着。それは驚くべき――否、喜ぶべきものだった。

「まさか、入江がスクール水着だと……？」
「旧タイプではなくて、新タイプのほうですね」

俺と同じように驚きながらも喜んでいる藤巻が呟くと、高松が補足した。

そう、入江は紺色のスクール水着を着ている。しかも、胸元に名前入りときた。

これはもう、用意してくれた関根を褒め称えるしかないな。

それにしても、椎名やひさ子の大きさには負けているけど、入江もなかなかあるんだな。

セーラー服のときは気づかなかったぜ。

「もう許してぇ！」

入江は俺たちの視線に耐えられなくなったらしく、関根からタオルを奪い返し、髪の毛を巻き込むことも気にせずに体に素早く巻いた。

そして、ゆりっぺ達の後ろへと逃げ込む。

「もう、みゆきちったら根性ないなー」

関根は深追いをせずに、次の参加者を呼んだ。

「続きましてはエントリーナンバー七番。可愛いですが餌をあげていいのは日向さんだけです。むしろ餌が日向さん？　ユーイ、にゃん！」

――出てこない。

「……って、ユイはだれか連れてこないと出て来れねぇだろ！」

俺が迎えに行こうと立ち上がったら、音無は変なことを口にした。

「なにか聞こえないか？」

「なに言って――」

耳に意識がいったその瞬間、『ペタリ、ペタリ』という音と、なにかを引きずってるような音が本当に聞こえてくる。

なんの音だ？　隣の部屋から……。
「なっ！？」
音の発生源はほどなくして見つかった。いや、やってきた。
「お待たせしましたッ！」
ユイだ。ユイがほふく前進でこっちの部屋に入ってくる。
その姿に俺の思わず突っ込む。
「ホラーの演出かよッ！」
「失礼な！　ユイにゃんは健気さをアピールしてるんだよ！」
そのユイの言葉に関根が食いついた。
「えっ？　勝手にアピールタイムスタートしてたの？」
関根は部屋に備え付けてある時計をチラリと見る。
「なら、一分ぐらい経ってるのとペナルティ分を減らして、残り三分ね！」
「そ、そんなー！？　うー……ひなっち先輩！　抱っこしてください！　時間がないですよ！　早く！」
ユイは動揺を見せたが、瞬時に気持ちを切り替えて、俺に半分強制のお願いをしてきた。
その勢いに負けた俺は、うつ伏せのユイを仰向けにしてから、いつものようにお姫様抱っこをする。
持ち上げるまで気にしてなかったが、ユイが着ている水着はワンピースタイプだった。
薄いピンク色で、下のほうがフリルがスカートのようになっている。
いくら俺の彼女で戦線屈指の絶壁で子供みたいな水着だからって、至近距離だと威力があるな。

不覚にも……。いやいやいやいやいや！

俺は気を紛らわすためと誤魔化すために咳払いをする。
それからユイに「それで、俺はどうすりゃあいいんだ？」と、これからやるべきことを聞いた。
「握手をしていきたいので、みんなの前に運んでください」
「へいへい」
言われたとおりに俺はユイを全員と握手させていった。

「清き一票をお願いします！」
ユイは最後に岩沢と握手を交わす。
他のメンバーの時よりも長い。完璧にユイの私欲だな。

「ねぇ」
もうそろそろアピールタイムが終わりだろうなと俺が考えていたら、無言で握手をしている岩沢がユイに話しかけてきた。
「な、なんでしょうか！」
すごい嬉しそうにユイは返事をする。

岩沢は俺をちょっと見た後、口を開いた。
「彼と握手してないけどいいの？」
「彼？」
ユイは俺を見上げる。すると、キョトンとした顔が一瞬で「しまった！」に変わる。

「アピールタイム終了まで十秒前！」
急に関根がカウントを始めた。
「ちょ、ちょまっ」
それにユイは慌てだす。でも、岩沢との握手をやめようとしない。

「先輩！　あたしはどーしたらいいんですか！」
どうやら、ユイは一度に沢山の情報が入ってきたせいで頭がパンクしたみたいだ。
下手したら煙が出てくるかもな。まぁ、答えてやるか。
「握手なんてしないでいいって」
俺の言葉を聞いたユイはふくれっつらをした。
そしてなにを思ったのか、ユイは首にかけている手に力を込めて、頭を俺のほうへ持ち上げ――
ほっぺたにキスしてきた。
「ゼロ！」
それと同時にアピールタイムの終了を関根が告げ、ユイはしてやったり顔で元の体勢に戻る。
冷やかしの視線が浴びせられるが、そんなことは気にならない。
頭の中はキスのことでいっぱいだった。
俺が突飛な行動に対して呆然としていると、突然ユイが軽くなる。
これはユイが急激なダイエットに成功したわけじゃない。
いつの間にかやってきた立華がユイを俺から取り上げたんだ。
立華は少し怒りのこもった目つきで俺を一瞥してから、ユイを適当なイスまで運び、体についていたほこりを払い始める。
俺は最後までなにも言えずに、すごすごと音無の隣の席へと戻った。
「お前って意外と純情なんだな」
「うっせ」
「あさはかなり……」

「では次ー。エントリーナンバー八番。彼女の前ではいかなる秘密も隠し通せない。あのＴＫさんさえも弱みを握られているとの噂。超能力か、はたまた盗聴なのか。謎多き可憐なるスパイ、ゆさゆさー！」

関根のでたらめな紹介で出てきた遊佐は、さっきの大きめのワイシャツのままだった。

本部に入ったときに見たし、インパクトが弱いな。

それにまださっきのことを引きずってて、遊佐には悪いがユイのことで頭がいっぱいだ。

「ゆさゆさのー、アピールタイムスタート！」

だから、興味なんて――

「では、脱ぎます」

「いいぞー！　遊佐ぁッ！」

超沸くよなっ！

遊佐は焦らすようにゆっくりとボタンを外していく。

服の隙間から見え隠れする黒い水着……。

ワンピースタイプか？　それともスク水？

「違います。競泳水着です」

言い放つと同時にワイシャツを脱ぎ捨てた。

「頭の中を読んだのか！？」

「俺の頭ん中がわかるみてぇだな」

「どうやら、私の思考を読んだようですね」

俺と藤巻と高松が同時に驚きの声をあげる。そして競泳水着に視線が釘付けになった！

遊佐の水着は継ぎ目がなくシャープなデザインで、生地からは水

をはじきそうな印象を受ける。
腰の辺りから斜め下へ伸びる白のラインがアクセントだ。

「ちなみに私は泳ぎが得意じゃありません」
「ここにきて、このカミングアウトッ！　最高じゃねーかぁッ！」
藤巻が雄たけびをあげる。

こう言っちゃなんだが、遊佐のアピールタイムは意外な盛り上がりをみせた。

「次がラスト！　エントリーナンバー九番！　健全なのか不健全なのかわからない魅惑のボディで、数々の男共をなぎ倒してきた女。その名もひさ子さん！　どうぞー」

ひさ子は呆れ顔で出てきた。入江と同じで元から乗り気じゃなかったしな。
肝心な水着だが、白の花柄の入ったこげ茶色の大人びたビキニだ。
その水着を押し上げる重量感たっぷりのあれが、さらなるフェロモンを撒き散らす。

どうやら、藤巻はそれにやられたみたいだな。
さっきまで下品な野次を飛ばしていたあいつが静かに見とれてるよ。

「では、ひさ子さんのアピールタイムですが――」
「あたしはいいよ。なんの準備もしてないし」
「そうだと思ってました！　竹山さん、お願いします」

突然、関根に名前を呼ばれた竹山は、驚いた様子もなく膝に乗せていたノートパソコンを開いた。
「僕のことはクライストとお呼びください」
そして、いつもの決め台詞と共に竹山はキーボードを叩く。
すると軽快な音楽が流れてきた。

「ひさ子さんのアピールタイムはパラパラですっ」
あらかじめ用意していた、ってわけか。でもなんでパラパラ？
「はー。仕方ないなぁ」
その答えは、イヤイヤながらもひさ子が踊りだしてくれたことで判明した。

揺れる。……動きにあわせて揺れるんだ！
関根の狙いはこれだったかッ！
これには藤巻もノックアウト寸前だし、ＴＫも――ＴＫは単純にパラパラに反応してるだけか。
そういや、ＴＫってブレイクダンス以外のダンスにも興味があるんだな。

それはいいとして、これで全員の水着を見たことになるのか。
まぁ皆よかったけど、俺が投票するのはやっぱ――ユイしかないよな。
ほふく前進して入ってくるガッツも見せてくれたのと……一応キスもしてくれたし。
あと、俺が入れてやらないと一票も入らなくて、ふて腐れちまうからな。
理由はそれだけ。ホントに――それだけだ。

優勝者

ひさ子のアピールタイムも終わり、気絶している大山たちを起してから、投票が始まった。
投票は竹山がプリントアウトしてくれた参加者名簿に丸をつけてから、箱に入れるという方式だ。
これなら字が尋常じゃなく汚かったとしても問題ない。

結弦は奏の欄に丸をつけて、遊佐が持っている投票箱に投じた。

「みんな、入れ終わった？」
全員が投票し終えたころを見計らって、ゆりが最後の確認を取った。
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ」
まだ悩んでいて入れてないってやつはいないようだ。

「俺もしっかりとゆりっぺに――」
「無記名の意味を調べときなさい！」
ゆりは分厚い辞書をどこからともなく取り出し、おもいっきり野田に投げつけた。
「アホですね」

「では、今から開票します」
開票作業は遊佐が投票箱から取り出し読み上げ、奏が裏返しにしたホワイトボードに書き込むという形で行われ、結果は以下のようになった。
一票【椎名、入江、無効】

二票【遊佐】
三票【岩沢、奏、ユイ、ひさ子】

「一位の三票が四人もいるわね……って、あたしがゼロ！？」
不思議なことに、野田の一票すらもゆりには入っていなかった。

野田は――ほぼ間違いなく意中の相手である――ゆりに入れなかったり、入れたと嘘をつくような人間じゃないよな。
となると、一票だけある無効がゆりに入れたやつか。
でも、丸を書くだけなのに、どうやったら失敗できるんだ？

考えてもわからなかったので、結弦は遊佐にこっそりと聞いてみた。
「どうして無効票があるんだ？」
「丸が汚すぎて、印をつけた対象が判別できなかったので無効としました」
そう言って一枚の用紙を差し出す。結弦はそれを見て納得した。

たしかに、どこに丸をつけたのかさっぱりだ。
ゆりの部分に線はかかっているが、他のメンバーのところにも侵食している。
さすがに線が安定しなさすぎだな。まだミミズの方が上手に丸を書けると思うぞ？

苦笑いする結弦の前で、落ち込むゆりに関根が沈んだ声で話しかけた。
「ゆりっぺさんの気持ち……よーくわかります。あたしもみゆきちに裏切られました」
とんだ言いがかりに、入江は目を白黒させる。
「しおりんに入れたら『みゆ喫茶』になっちゃうからだよ！？」

関根は入江のツッコミを無視し、ゆりに抱きついて泣いたふりをはじめた。ゆりも抱き返す。
ゼロ票同士で通ずるものがあるのだろうか。
奏はそんな二人に近づくと、頭を優しく撫ではじめた。
むしろ、こっちのほうがご褒美だな。

「結局、出し物はだれが決めんだ？」
日向の疑問に、まだ水着の女子メンバーを見ないようにしている大山が普通の意見を出す。
「やっぱり、じゃんけんで決着をつけるべきじゃないかな」
「腕立て伏せで決めるというのも――」
「ねぇだろ」
対抗するかのように出した案を藤巻に否定され、高松の眼鏡が曇った。

「じゃんけんが妥当じゃないか」
「それっきゃないよな」
「Ｔｈａｔ-ｓ　ｒｉｇｈｔ」
大山の意見を結弦が支持すると、日向をはじめ他のメンバーも賛同した。

「岩沢さん相手でもやっちゃいますよー」
水着なのに袖まくりをするユイ。気合十分だな。
奏も麦わら帽子を結弦に預け、岩沢はアコギをケースに入れ、二人ともユイと同じく臨戦態勢に入った。
そして、ひさ子も火花を散らす三人の輪に加わる。

そこへ遊佐が、「はじめる前に一ついいですか？」と、待ったをかけた。
「なにかしら、遊佐さん」
ゆりが話を聞く。
「だれが勝ったら出し物を何にするか、先に決めておいた方がいいのでは」
「たしかに、後でグダグダしたり揉めるよりも、勝った瞬間に「決定！」のほうがスッキリしそうね」
ということで、先に出し物を決めることになった。

必要はなさそうだが、まず初めにゆりは岩沢と奏に聞いた。
すると案の定、『ライブ』『屋台で麻婆豆腐』という答えが返ってくる。
二人がそれ以外を選ぶはずがないよな。

次にゆりが聞いたのはひさ子だ。
「ひさ子さんはどうする？」
「うーん……」
なにも考えていなかったらしく、少し考えだす。
近くで関根が「みゆ喫茶を！」と連呼していたが、それは耳に届いてないようだ。
ＴＫもダンスでアピールしているけど、効果は薄そうか。

その一方、残りのメンバーはだれが勝つか予想し合っていた。
「もうすぐ腹筋が割れそうな感じからして、岩沢さんかひさ子さんが本命ですかね」
高松の謎の理論に大山が反論する。
「僕はだれが勝ってもおかしくないと思うよ」
「当たり前だろ。そこをあえて予想するのが、おもしれぇんじゃねぇか」

「藤巻の言うとおりだな。俺は立華さんを押すぜ。あの動体視力があれば、相手の手を見てからでも後出しが間に合いそうだしな」
「いくら奏でもそれはムリだろ」
「あさはかなり……」

「ひなっち先輩もアホですね。それより、ユイにゃんが勝つと予想している人はいないんですかっ？　そこのパソコンをいじってる先輩とかはどうなんです！」
「僕は興味ありませんので。それと僕のことはクライ――」
「お前はグーでもチョキでもパーでもないやつを出して負けるよ」
「あんだとコラァッ！　ちゃんとパー出すって決めとんじゃあっ！」
ユイはまた日向の頭を狙い飛びついた。

そこへ、ひさ子にアピールするのをやめた関根と入江が話に加わる。
「いやいやー、ひさ子さんは強運だし、じゃんけんだったら絶対勝つよ」
「そうだね。トランプでも負けたところを見たことないもんね」
二人の話を聞いた瞬間、椎名が熱い眼差しでひさ子を見つめだす。

「えーと……」
近づきながら期待に満ちた目で見つめ続ける。
「……」
なおも近づき見つめる。

「あー、わかったわかった。あたしが勝ったら演劇でいいよ」
そしてとうとう、ひさ子は無言の圧力に負けた。
関根やＴＫを退けたひさ子を陥落させるなんてすごいな。

「……ありがとう」
椎名はお礼を言うと、ひさ子の首にマフラーを巻いた。
あれって大切なものなんじゃ？　それだけ椎名が本気ってことか。
最後にゆりはユイに聞く。
「ユイちゃんはなににするの？」
「あたしは……そうだ！　ひなっち先輩に新技の実験台になってもらいます！」
「それ、出し物じゃねぇだろっ！」
「いちいち細かいですね。じゃあ、みゆ喫茶にします」
「敵がもう一人いたよ！？」

今再び、四つ巴の戦いが始まろうとしている。

「負ける気がしませんね」
ユイは謎の自信に満ち溢れていた。
他の三人は口には出さないが、自分の勝利を疑ってないのが表情から読み取れる。
ひさ子もすごいやる気になってるな。マフラーを託されたからか？
そして、この試合の審判として号令をかけるのはゆりだ。
残りのメンバーはそれぞれの想いを胸に、勝負の行方を見守る。
「準備はいいかしら？」
全員が頷いた。
「いくわよ！　じゃん、けん――！」
ガチャ

「遅れてすまん」
ちょうどタイミングよく、柔道着を着ている松下が本部に入ってきた。
部活を終えたから急いでこっちに来た、って感じだ。
「……状況が把握できんのだが。だれか説明してくれぬか？」
その松下は拳を構えたままの四人を見て、困惑していた。
まぁ、水着姿の四人があんな体勢で固まっていればそうもなるか。
こうなった大体の経緯をゆりが説明した後、優勝者はじゃんけんではなく松下の一票で決めることになった。
戦線をサボろうとしてたんじゃなく、部活があって遅れただけなんだから、当然だよな。
ちなみに、松下はだれが勝ったらどの出し物なのかは知らない。
奏たちが松下の前に並んだとき、結弦は自分が少しモヤモヤした気分なことに気付いた。
奏を今すぐ隠してしまいたいような衝動。――この感覚はなんだ？
「さぁ、松下君。選んじゃって頂戴！」
ゆりが急かすも、松下は四人を直視することができないようだ。
結弦には、なぜかそれが少し嬉しかった。
「こういうのに関しちゃ、松下五段は大山と同類だからなぁ」
藤巻が呟いたその時、松下の柔道着から紙切れのようなものが落ちる。
ひさ子はそれに気付くと松下に教えた。
「肉うどんの無料券を落としたよ」

というわけで、文化祭の出し物は演劇に決定した。

台本

出し物が演劇に決定したので、次はメンバーを演劇班とライブ班に振り分けることになった。

しかし、岩沢が懸念を示す。

「ライブと演劇の両方をやるには時間か人が足りなさそうだけど、それは大丈夫？」

「問題ないわ。ライブは校庭でやるって決まっていて、ステージはもう発注済み。組み立てはその業者がやってくれるって。校庭は広いし体育の邪魔にはならないから、すぐに組み立てる許可も得ている。一週間もあればステージは完成しているはずよ」

「なるほど。その後、器材等はあたしらで運べばいいわけね」

「もしそれでも人が足りなければ、奏ちゃんのファンクラブや、そのうちできるガルデモのファンクラブに手伝ってもらえばいいしね」

岩沢はゆりの説明を聞いて納得したようだ。そこへユイが変なアピールをしてきた。

「ユイにゃんのファンも使ってください！」

「いねぇだろ」

藤巻の無遠慮な一言にユイは激怒する。

「失礼な！　あたしが今日遅刻したのはファンにサインを書いてたからなのに！　ね、ひなっち先輩」

同意を求められた日向は、なぜか顔をユイから逸らして聞こえないフリをした。

少し耳が赤いし、どうしたんだ？

そんな日向たちの様子を気にするそぶりも見せず、ゆりは話を進める。

「他に質問しておきたいことがある人はいない？」
　すると関根が手をあげた。それを見て嫌な予感がしたのか、入江は顔をしかめる。そして、的中してしまった。
「ライブ側にまわされたら演劇は出来ないんですか！？　みゆきちを主役もしくは準主役級の役柄を演じさせてあげたいんです！」
「あたしはやりたくないよっ！？」

「振り分けはあくまで目安。基本的にはみんな両方とも参加してもらうわ」
「それを聞いて安心しました」
　ゆりの答えを聞いて嬉しそうにしている関根とは対照的に、入江は明らかにがっかりしていた。

　ふとここで、結弦はあることに気づいた。
「全員が両方に参加するなら、二つの班に振り分ける必要はなくないか？」
「……たしかに、それもそうね。でも、仕切る人は後々必要になってくるだろうから、それぞれのリーダーだけは決めちゃいましょ」
　ゆりのこの言葉に、辞書と格闘していた野田が敏感に反応する。
「俺のリーダーはゆりっぺだけだ！」

　最終的にリーダーは、ライブ班は当然のごとく岩沢、演劇班は順当に椎名、急遽できた雑用班はゆりに決定した。

「他に決めることは……台本がまだあったわね。だれか書きたい人はいる？」
　ゆりが募ると、椎名が横をホッチキスで閉じてある手作りの冊子を机の上に置いた。

どうやら、椎名は今日のためにあらかじめ自分で書いて用意してたんだ。

表紙には筆と墨を使って、流暢な文字でなにか書いてある。

おそらく、演劇の題名なんだろうけれども、結弦には読めなかった。

「外界からの落人、って書いてあるわね」

でも、奏はそれを普通に読んだ。すごいな。

それはいいとして、どんな話なんだろう。やっぱり、時代劇とか？

題名からは、戦場から逃げてきた侍が閉鎖的な村にやってきた、そんな話を想像してしまうな。

「読んでもいいかしら？」

「……うむ」

その冊子を手にとったゆりは、許可を得てから中身を読みはじめた。

腕を組んだ椎名はそれを得意げに見つめている。

その椎名の自信とは裏腹に、ゆりの表情はページをめくる毎に段々と曇っていった。

直す箇所はけっこうありそうだな。

ゆりが最後まで読み終えたところで、奏が「ゆり、あたしにも見せて」と言って両手を出した。

そして、ゆりから台本を受け取るとすぐに読み始めた。

結弦も横から覗き込む。

……中も筆で書いてたんだな。たぶん、ゆりもそれで読めなかったんだ。

その証拠に、ゆりは結弦と視線があうと首を横に振った。

奏だけは表紙と同様、しっかりと読めるらしく、すごいスピードでページをめくっていく。
そんなに分厚い台本ではないので、すぐに読み終わった。

読み終わった奏は椎名のほうを向くと感想を述べる。
「面白かったわ」
それを聞いた椎名は少し顔を赤らめて「あさはかなり……」と、呟いた。

「んで、どんな話だったんだ？」
「……」
日向の質問は奏の耳に届かなかったらしい。
「あたしも知りたーい！」
関根に対しては即座に答える。

「おもちゃの国でいじめられているぜんまい仕掛けの子犬が、人間界に迷い込んで大冒険するお話よ」
時代劇じゃなかった！
「Ｉｔ' ｓ ｓｏ ｆａｎｔａｓｙ」

「演劇は椎名さんの台本を元にしてやるってことで、いいわね？」
誰からも異論が出ないのを確認したゆりは、奏が机の上に置いた台本をとって竹山に渡す。
「竹山君、これをコピーしておいてくれる？　余裕があれば、野田君とかのためにフリガナとかも振っといてもらいたいんだけど“できる”かしら？」
ゆりは最後の部分を強調した。

これは『このままじゃ読めないから翻訳しておいて』とは、書いた本人を前にして口に出せない。

だから、遠まわしに言ったんだな。

竹山もそれを理解しているようで、すぐに出来るとは言わず、中身をパラパラとめくって確かめている。

「二日もあれば可能です」

幸いなことに、竹山にも読めたみたいだ。

演劇については竹山の翻訳待ちということで、今日は解散することになった。

女性陣は水着のままでは帰れないので、松下と高松と一応野田を見張りに選び、ベッドが置いてある部屋で着替えている。

結弦たちは外で待機だ。

中から今日したイタズラの罰をまとめて受けているような関根の悲鳴が聞こえてきたけれど、結弦たちは気にしないことにした。

「暇だし麻雀でもやらねぇか？」

特にすることもなく暇していたら、カードタイプの雀牌を手にした藤巻が誘ってきた。

水着から制服を着替えるのに、時間はかからないよな。

そう考えた結弦が藤巻の申し出を断ろうとしたその時――

「お、理事チャー先生の言ってた通りだな」

五十嵐先生が現れた。

「こんにちは。だれかに用があるんですか？」

大山が話しかけると先生は結弦の方を見る。

「あぁ、音無にな。それと……日向だっけか、お前も幸村先生が探していたぞ」

二人は先生に連れられて、職員室までやってきた。
着いてすぐ、日向は幸村先生のところへ行ってしまったので、結弦は五十嵐先生と一対一だ。
先生はイスに座ると、自分のゴチャゴチャと散らかっている机からなにかを探し始めた。

「お、あったあった」
程なくして探し当てたのは一枚のプリント。
受け取った結弦は、それを複雑な思いで見つめる。
一番上には進路調査票と書かれていた。

あれから数日後、【異世界の子犬のパラレルワープ】の役決めが行われた。

【異世界の子犬のパラレルワープ】は【外界からの落人】のままだと受ける印象が硬すぎるということで、椎名の許可を得てから奏が新しくつけたタイトルだ。

それと変わったのはタイトルだけじゃない。

台本が完成した昨日、椎名と奏と関根がストーリーやキャラクターの名前などについて熱い議論を戦わし、大幅に手直ししたとのこと。

……関根も交じってるのは少し不安だな。

そして肝心の主役だけど、脚本を書いた椎名――の推薦で直井になった。

なんでも、姿形や動きなどが想像している主人公の子犬にピッタリだったらしい。

そして椎名は「汚名を返上する……」と、自ら脇役を選んだ。

ちなみに結弦は木の役。……一人だけ学芸会か？

あと、ガルデモの四人は仕事で役決めには不参加だったけれど、あらかじめ聞いていた関根の意見はユイとの友情の力でしっかり通っていた。

入江、力になれなくてごめんな。

全員の役柄が確定したところで、練習を始めることにした。

演劇班のリーダーである椎名が全員に指示を出す。

「……読め」
意訳すれば『竹山が頑張って翻訳してくれた台本を暗記するぐらい読み込むように』だろうな。
結弦は台本を開き、自分の出番を探した。
出番は結構あるな。立っているだけだから疲れそうだ。
セリフはもちろん無……
「……やってられるかぁっ！」
突然、ユイが大きな声をだした。そして台本を勢いよく閉じると、日向によじ登る。
静かにしているのが辛かったみたいだ。まだ一分も経ってないのに。
そんなユイを見て野田が鼻で笑う。
「フッ、軟弱だな」
「いや、お前はセリフも出番もないから、台本すらもらってないだろ」
日向がつっこむと、野田はゆりから渡された【雑用役】と書かれた紙を誇らしげに見せつけた。
「あさはかなり……」
「こんなんじゃ上達しません！　もっと実践的な練習をしましょうよっ！」
日向の頭にアゴを乗せ、ユイはゆりに必死に訴えかける。演劇のリーダーは椎名だぞ？
ただ、椎名も早く体を動かす練習をしたかったみたいで、期待を込めた目でゆりを見つめる。
二人の「もっと別の大事な時に使えよ」と言いたくなるぐらいの

熱意を前に、ゆりは陥落した。
「仕方ないわね。音無君、体育館が空いてるか見てきてくれないかしら」
「わかった」
「よし、俺も行くぜ」

結弦とユイを降ろした日向が本部から出ると直井もついてきた。
「トイレに行くのか？」
部室には台所はあるのにトイレはないので、校舎まで行かないといけない。
余談として、日向がユイを抱えてダッシュするのは恒例の光景になりつつある。
連れてった後どうしているかは、さすがに聞けないけどな。

そして直井だが、トイレじゃなかったらしく首を横に振った。
「音無さんの三歩後ろを散歩しようかと思いまして！」
「……そ、そうか」
「もはやストーカーだな」
日向が結弦の気持ちを代弁してくれた。

昇降口まできた三人が中に入ろうとしたところ
「ちょっといいですか」
後ろから声をかけられた。

振り返るとそこにいたのはブレザーを着た三人組の女の子。
見たこともないし、クラスメイトじゃないな。
「お前らはだれなんだ。音無さんや神である僕に対してなれなれしい。……そうか、ここにいるペットボトルのキャップ以下の男の知

り合いか」
「ちげーよ。つうか、だれがキャップ以下だッ！」
直井や日向の知り合いでもないのか。

「馴れ馴れしく、いきなり呼び止めてすみませんっ」
直井の言葉を真に受けた真ん中の眼鏡をかけた茶髪のショートカットの女の子が頭を下げてきた。残りの二人もそれに続く。
「そんなこと気にしなくていいから、頭を上げてくれっ」
それに驚いた結弦は慌てて頭を上げさせた。

彼女達が落ち着いたのを少し待ってから、「それで、俺たちになにか話があるのか？」と、結弦は本題に入るよう促した。
しかし、眼鏡の子は口ごもりながら横目で日向たちを見る。
どうやら、あの二人には聞かせたくない内容みたいだ。
「日向、直井、先に体育館の様子を見てきてくれないか？」
だから結弦は二人を先に行かせようとした。

「……ん、わかった」
日向はすぐに察してくれたが、直井は「音無さん一人じゃ危険です！」と渋った。
危険って――直井と二人きりの方が危ないだろ。

最終的に直井は
「お、音無さぁぁぁぁぁん！！！！！」
日向に制服の襟を掴まれ、仰向けのまま昇降口に引きずり込まれていった。

「まず、自己紹介からさせてください」

眼鏡の子はそう言うと、両隣にいる黒の長髪の子とライトブラウンでセミロングの子に目で合図を送る。
それに頷いた二人は寄り添い、黒髪の子が持っていたトートバッグをあさり始めた。
そして――

「あたし達はこーいう者ですっ！」
眼鏡の子が今度は口で合図をだすと、それにあわせてセミロングの子が小走りし、結弦に見えるように一枚の大きな白い幕を広げた。
ただ、手で持つ位置が悪いのかそれとも張りが甘いのか、少し垂れ下がっている。
だから、ちょうど上半分が見えない。でも、下半分は見えているわけで……。

「親……衛……隊……？」
そこに青黄赤の信号色で書かれている三文字を読んだ結弦は、さっきの直井の言葉を思い出す。
『音無さん一人じゃ危険です！』
今まさに危機が迫っていることを結弦は悟った。

日向達には話しづらそうにしていたことや、真剣な眼差し。そして親衛隊の文字。
まず間違いなく彼女達は奏のファンクラブの人たちだ。そして、こちらに良い印象は持っていない。
下手したら、付き合っていると勘違いしてて恨まれているかもしれない。
でなければ、あんな風に刺すような視線を向けてくるはずがないよな。
早く、なにか言い訳を考えないと！

「あの……」
「は、はいっ」
結弦が警戒しつつ頭をフル回転させていると、眼鏡の女の子が口を開いた。いよいよ、本題に入るのか。
「……あのっ、青い髪の先輩はっ、ユイにゃんとはっ、どーいった関係なんでしょうかっ！？」
「お、俺は奏とはまだっ……ん？　青い髪の先輩？　ユイにゃん？」
結弦は急いで用意した回答が、彼女の質問にはそぐわないことに気付いた。
彼女たちは奏のファンじゃないのか！
少し安心した結弦はもっと詳しく聞いてみることにした。

彼女達は元はガルデモのファンだった。
なので、夏にあった【ガルデモ・ビィート・セッション】のイベントに応募してみたところ、見事当選。
彼女達は歓喜に沸いた。

そしてイベント当日。
ユイのパフォーマンスを目の当たりにした三人は、揃って心を奪われた。
彼女達にとっては岩沢以上の衝撃だったらしい。
三人はすぐさま、ユイのファンクラブを結成をその場で宣言した。

しかし、そこからが問題だった。ユイの情報など、どこにもない。
夏休み中、ずっとガルデモのファンのネットワークを駆使しても見つからなかった。

当然だよな、一般人なんだから。

休みがあけ、絶望で打ちひしがれながら登校していた三人は、驚きの光景を目にする。

なんと、ユイが自分達の学校に登校しているじゃないか！

彼女達はこれが運命の再開だと信じて疑わなかった。

そして、すぐさまユイに話しかけ、ファンクラブはユイ公認の親衛隊へと格上げされた。

――幸せの絶頂。

その一方で、気がかりなことがあった。

イベントのときも、運命の再開をした日にも、一人の男の影。日向という青い髪の好青年だ。

ユイと日向はいつも一緒で、とても仲がよさそう。

彼女達の目には、二人が恋人同士のように映った。

別に、ユイへ恋人をつくってはいけないと言いたい訳じゃないらしい。

ただ、日向が実はストーカーでユイに迷惑をかけているとか、そういうたぐいではないときっちり確かめたい。

そしてもし二人が恋人同士じゃないのなら、天鼓祭の最終日にある後夜祭で、「一緒に踊ってください」と誘いたいのだとも。

でも、ユイに直接聞く勇気が湧かなかった。もちろん、日向本人に聞くのは論外。

最終手段として、ユイや日向と親しそうにしている結弦に声をかけた。と言うわけらしい。

言葉や目や態度でわかる。彼女達の想いは本物なんだな。

だったら、変に隠したりするのはやめよう。
結弦は軽く呼吸を整え――

「日向とユイはな、ちゃんとした恋人同士だ」

彼女達に教えた。
日向、勝手に教えてごめん。

二人が付き合っていると聞かされた親衛隊の三人は、結弦に日向への伝言を一つ頼み、少し肩を落とし帰っていった。
少し残酷だったかもしれないな。でも、あの状況で嘘をつくのも……。まぁ、今は伝言をちゃんと届けよう。
そう考えた結弦は、足早に体育館へ向かった日向たちを追った。

靴を履き替えて校舎に入ると、日向と直井が戻ってきた。
結構長いこと話し込んでたし、当たり前か。

合流してすぐ、日向は体育館の様子を教えてくれた。
「バスケ部とバレー部とバトミントン部と馬術部とバトルランキング部が使ってて、空いてなかったぜ」
「体育館広すぎないかとか、なんでバから始まる縛りだとか、最後の二つおかしいだろとか、突っ込み所がたくさんあるな。それはいいとして――」

「音無さん！　重要な仕事をきっちりとこなした僕を褒めてください！」
結弦がむりやり話題に変えようとしたその時、ふくれっ面の直井が会話に割って入ってきた。
声もかけず、日向と話し出したことがお気に召さなかったらしい。
結弦が投げやりな態度で頭を一応撫でてやると、すぐに直井はうっとりした表情になり、その場で足が溶けたように座り込んだ。

直井の無力化に成功した結弦は、話を元に戻す。
「日向、お前に伝えなきゃならないことがあるんだ」
「音無しゃんのありゃがたい御言葉だ。ひょーく、聞け」

「伝えなきゃならないこと？」
真顔の結弦を前にして、日向の顔に不安が走る。
『傷つけたりしたら、承知しませんよ！　あと、まだ諦めてませんから！』
そんな日向へ結弦は親衛隊の伝言を一言一句変えることなく伝えた。
「……え？　それだけ？」
ただ、あの件を知らない日向にとって、今の言葉は脈絡もない意味不明なもの。
「続き――あるよな？　……なぁ、目を逸らさないでくれよ！　お願いします、教えてくださいっ、この通りだァッ！」
「さっ、そろそろ本部に戻ろう」
「ひゃいっ、音無しゃん！」
「おとなしいぃぃッ！？」
にもかかわらず、結弦が話を一方的に打ち切ったので日向は大いに取り乱した。
「どうでしたかー？」
本部に戻ってすぐ、赤いギターを手にしたユイが結果を聞いてきた。
なんとかもやもやを振り払った日向がそれに答える。
「フロアからステージまで全部使われてたぜ。ところでユイ、演劇じゃなくてそっちの練習をするつもりだったのか？」
日向がギターを指差すと、ユイは頭を横に振ってた。
「少し暇だったので、岩沢さんとひさ子さんに出された課題をやってただけです！」

それを聞いたゆりが呟く。
「ひま、ねぇ――」
結弦にはゆりが笑いながら怒っているように見えた。
そんなゆりから、何気なく隣へ視線を移すと奏と目が合った。
今日はあまり奏と話してないな。

「ちなみに、ここは防音設備が全く整っていませんので、消音で練習してもらっていました」
そこへ突然、上半身裸でダンベルを持って筋トレしている高松が結弦の前に来て、必要のない補足説明をしてきた。
「って、高松も台本読んでねぇじゃんか!?」
横から日向が突っ込むと、ゆりがユイの時にはしなかった弁護をする。
「高松君はアホだけど、記憶力だけはすごいからいいのよ」

「じゃあ、高松はあの台本の内容を、もう全部暗記したのか?」
「眼鏡はダテではありません」
「すごいな」
高松の変な返しを肯定と捉えた結弦は、素直に感心した。

それを見ていた直井は勢いよく台本を手に取り、猛スピードでめくりだした。
――そこまでしてでも、褒めてもらいたいのか。
結弦が少し呆れていると、奏がおもむろにゆりへ近づき話しかけた。

「ねぇ、ゆり。体育館が使えないなら練習は?」
「あぁ、それを考えないとね。椎名さん、どうする? なにかある?」

話を振られた椎名は「宿題だ……」と口にし、次の瞬間には姿をくらましていた。
相変わらず凄いけど、アレはどうやってんだろ？

「あれっ？　椎名さんはどこに行ったの？」
ワンテンポ遅れて、真面目に台本と向き合っていた大山が椎名がいなくなったことに気付いた。
「椎名さんは『次の練習までに暗記してこい……』と言い残して帰ったわ」
ゆりの少し誇張した話を聞いて、藤巻が嬉しそうにする。
「てぇことは、今日は終わりか？」
「そうなるわね。ただ、次の練習までに暗記してこなかったら……」
この含みのある言い方に、藤巻を初めとした本部にいる数人に危機感が芽生えた。

「大山ぁ、俺んちで合宿やるぞ！　徹夜だァッ！　ＴＫや松下も来るか？」
藤巻の問いかけにＴＫはヘッドスピンで返事をする。あれがＹＥＳなのかＮＯなのか、全然わからないな。
そして松下は「夜食用に肉うどんの材料を用意したい。後で合流しよう」と先に本部から出てった。

「お前らはどうする？」
藤巻はかばんに荷物を詰めながら、残る結弦たちにも聞いてきた。
それにユイがすかさず答える。
「あたし達は出番を減らしてもらうように掛け合ってきますので遠慮しますっ！」
「覚える努力をしろよ」
「さぁ、先輩！　ぐずぐずはしていられませんよっ！　急いで監督を追いましょう！」

結弦のツッコミなどなんのその、ギターをケースに閉まったユイは日向の袖を引っ張って催促した。

「わかった、わかった。音無も行こうぜ」
「あぁ、奏も一緒に帰らないか？」
「うん。ゆりは？」
「あたしは体育館使用の申請書を出すために少し残るわ」
「そう……」
奏は残念そうだった。

戦線メンバーのほとんどが帰り、静かになった本部にゆりだけが残った。
そしていつもの席にすわり、申請書に理由や日時等を書き込んでいる。
そこへ、隣の部屋から遊佐が入ってきた。ゆりは扉が開く音でそれに気づく。

「遊佐さん、帰ってなかったんだ」
「こっちの部屋では集中できそうになかったので」
「ＴＫなんか踊りながら読んでたもんねぇ……」
遊佐が持っている台本を見て、ゆりは納得したように頷いた。

「それで、ゆりっぺさんはどうしたんですか？」
「あたしは申請書を書いて――」
「そういう意味ではありません」
ゆりは遊佐の質問の意図がつかめず、疑問の表情を浮かべた。
しかし、遊佐の次の一言で驚きに変わる。

「立華さんに関して、なにか気になることがあるのでは？」
「……遊佐さんには敵わないわね」
「いえ、カマをかけてみただけです」
今度は苦笑いに変わった。

ゆりは本部の出入り口の鍵を閉めて、だれも入ってこれないようにした。
ソファに座る遊佐の向かい側のパイプイスに腰を下ろしたゆりは、少し間を置いてから喋りだした。

「……あたしが気になってるのは奏ちゃんと音無君の関係。後は奏ちゃん次第って頭で理解はしているんだけどね。気になるもんは気になるのよ」
「親心みたいなものですか。それで、二人が付き合っているのが気にくわない、と」
遊佐の言葉を聞いたゆりは意外そうな顔をする。

「遊佐さんも見抜けてなかったのね。二人はまだ付き合ってないわよ？」
今度は遊佐が驚く番だった。
「な、なんだってー」
口調に抑揚はなく表情にもさほど変化はないが、目だけは丸くしていた。

「下の名前で呼び合っていたり、時おり音無さんがアイコンタクトのような視線を送ったりしていたので、てっきり……」
「あたしもそう思って、さり気なく奏ちゃんに『音無君とはうまくいってる？』なんて聞いたらキョトンとされたわ」

「となると、今が立華さんを嫁か養子にするチャンスですね」
遊佐にしてみれば、単なる渾身の冗談のつもりだった。しかし、それを聞いたゆりは目を輝かせる。
「それよ！」
そしてすぐさまいつもの席に移動し、なにかを考え出した。

「……ねぇ、遊佐さん」
しばらくして、ゆりが遊佐に声をかけた。
「なんでしょうか」
「一つ、頼まれてくれないかしら？」
「いいですけれど――ゆりっぺさん、悪役の顔になっていますよ？」
「ふふふ……音無君、覚悟しておきなさい」
遊佐の言葉はもはや、ゆりの耳に届いていなかった。

茶碗

結弦は自分の部屋で学校へ行く準備をしていた。ただ、すでに日は落ちていて外は暗くなっている。

もちろん、こんな時間から授業があるわけはない。

「お兄ちゃん、準備できたよー」

「あぁ、俺もすぐ行くよ」

かといって、文化祭の準備のために学校へ行くわけでもなかった。

中秋の名月。――そう、お月見だ。

今日は空に一つの雲もなく、絶好のお月見日和だった。

学校に到着した二人が会場の屋上――使う許可は取ってある――に上がると、ゆりが出迎えてくれた。

「初音ちゃん、音無君、いらっしゃい」

「こんばんは、今日はお月見にお招きいただき、ありがとうございます」

「いえいえ、ご丁寧にどうも。でも、もっと肩の力を抜いてちょうだい。ここはアホばっかだから」

ゆりが視線で示す先には、戦線メンバーの大半が集まっていた。

ちょっと話は逸れるが奏の意見で今日はみんな制服だ。

初音も例外ではなく、チャーが特別に用意してくれたセーラー服を着ている。

そして珍しく奏もセーラー服だった。

いつものブレザーもいいけど、こっちもすごい似合っていて可愛いな。

結弦が岩沢とおしゃべりしている奏に見惚れていたところ、後ろから誰かがやってきた。
「音無さーん」
いや、誰かじゃない。直井だ。
結弦は無視と決めこんでいたが、後ろで直井が必死のアピールを繰り広げる。繰り広げる。繰り広げる。
「お兄ちゃん、可哀想だよ……」

初音の一言に負けてしぶしぶ振り返ると、大切そうに両手で黒い茶碗を持った直井が満面の笑みで立っていた。
「言われたとおり、両手で持ちやすい形とサイズのものを人数分用意してきました！　あっ、これが僕の自信作なんで使ってください！」
直井は嬉しそうに持っていた茶碗を差し出す。

用意してくれなんて言った覚えはないんだけどな。結弦はこの行動に困惑した。
可能性としては、誰かが「音無君から頼みごとがある――」みたいな感じで直井を騙した、ってのが高いか。こんなことをするのは……。
ちらりとゆりへ疑いの眼差しを向けると、胸の下で小さく手をあわせて申し訳なさそうに謝ってきた。
やっぱりか。まぁ、正攻法で直井に頼みごとをするのは骨が折れるし、仕方がないな。

「これ以上に音無さんに相応しい物を今日は持ってきていません。ぜひこれを受け取ってください！」
ゆりに気をとられて一向に受け取ろうとしなかったので焦れたのか、直井は少し強引に結弦の手をとって茶碗を押し付けた。

その黒の茶碗はごつごつとした手触りなのに、吸い付くように手になじむ。

焼き物にはうるさい直井が自信作と言いきるだけのことはあるな。

結弦が感心していると、初音も直井の茶碗に興味を持った。

「あたしにも見せてもらっていいですか？」

「……音無さんが許可を出すのであれば、いいだろう」

遠まわしながらも直井の了承を得た初音は、結弦から茶碗を大切そうに受け取った。

「ふぁ……」

初音はその茶碗をいろんな角度から見て感動したのか、小さく声を漏らす。

この反応に気をよくした直井は、「これはだな――」と鼻高々になにか色々と語りだし、初音も耳を傾ける。

そこへゆりが口を挟んだ。

「盛り上がってるところ悪いんだけど、他の人の分はどこにあるのかしら？」

ゆりが質問したのにもかかわらず、直井は茶碗について語ることを止めない。

その代わり、手の動きだけで下の階にあると伝えた。

エレベーターが屋上までは通ってないから持ってこれなかったのか。

ゆりは直井の態度にはもう慣れたみたいで笑顔で礼を言い、それから談笑しているメンバーへ指示を飛ばす。

「野郎ども！　ブツは下だ！」

その瞬間、男子メンバーとユイが一斉に雄叫びを上げて扉に走り出した。

「豹変しすぎだろ……って、ユイ!?」
「ユイちゃんは行っちゃダメよッ!」
結弦とゆりは車椅子の左と右のハンドルに飛びついてユイの暴走を止めた。
これで一安心――ではなかった。

「あっ」
初音の驚きの声の後、なにかが割れる音が屋上に響く。
この場でそんな音が出せるものは一つしかない。
ゆっくりと音がした方へ視線を移動させるとそこには――

大きく三つに割れた茶碗と、膝をついてそのかけらの一つを拾ったまま垂れる直井の姿があった。
「ごめんなさい!」
初音がすぐに謝るも、直井はうんともすんとも言わない。
「きっと俺が初音にぶつかったんだ。初音じゃなく俺が悪い。すまなかった!」
「お兄ちゃんは悪くないよ!」
「……」
結弦が頭をさげても、なんの動きも見せなかった。

「こりゃ重症ね」
「今なら帽子をとっても気づかれないですかね?」
「アホなこと言ってないで奏ちゃんたちのところへ行くわよ」
ゆりはその場を結弦と初音に託し、ハイエナのように帽子を狙うユイを連れて行った。
ユイがいると話がこじれそうだからな。正直助かった。

それはいいとして問題は直井だ。
今はもう一つかけらを拾い、それを呆然と見つめている。
よくよく見てみれば、かけらを持った手が小刻みに震えていた。

「あ、あたし、小さいかけら集めます！」
突然、初音が大きく割れた三つ以外の細かな破片を集めだした。
結弦が「手を怪我するから」と止めても言うことを聞かない。こういう時はホントに頑固だな。
……よし、だったら初音よりも先に破片を集めちまおう。

結弦も腰を落とし、細かい破片の一つに手を伸ばしたその瞬間——
「貴様……」
ずっと無言を貫いていた直井が口を開いた。いまだに目はかけらに釘付けだ。
初音と結弦は手を止め、次にくるであろう怒りの言葉を待った。

「……わかっているじゃないか」
「は？」
「え？」
そして、その言葉は二人を驚愕させた。

「えっとじゃあ……割ってよかったのか？」
結弦が恐る恐る聞いてみると、「はい！　うまく修復すれば、もっと味のある作品になりますから！」と、今日一番の笑顔で答えた。

「それにしても実に良い割れ方だ。狙ってはなかなかできない。さすがは音無さんの妹。わびさびを理解していたり、観覧車でも音無さんクイズを全問正解してみたり、見所があるじゃないか」
「でも、あたしの不注意で割ったのは事実ですし……」
普通なら怒りに任せて責められる場面なのに褒められるもんだか

ら、初音は戸惑いの色を隠せていない。
直井はそんなことを気にすることもなく、かけらと小さな破片を拾い出した。

あらかた拾い終えたところで、直井は結弦に声をかける。
「あの、音無さん！　僕はこれから修復プランを練りたいのでここでお暇させていただきます！」
「帰るのか？」
「はいっ、ここは五月蝿くなりそうですので」
直井は真っ先に戻ってきた日向を睨んだ。

「それでしたら、静かな場所へご案内しましょうか？」
「うおっ！？　……びっくりした、遊佐か」
いつかのように気配もなく遊佐がこっちにやってきていた。
「神は驚かない」
直井は表情こそ平静を装っているが、動揺は手に現れていて破片をいくつか落としていた。

「それで、静かな場所が近くにあるのか？」
「音楽室等は防音設備がしっかりしています」
「そこなら一人で行ける。案内など必要ない」
「ですが、鍵のありかは知らないのでは？」
「……いいだろう、案内させてやる」
「恐れ入ります」
こうして直井と遊佐は行ってしまった。

「あ……これ……」
二人が行ってから少しして、割れた位置から少し離れたところに

親指大の破片が落ちていることに初音が気付いた。
それを拾った初音は、まだ責任感を感じていたのか「あたし届けてくる！」と、一人で本部へ行こうとする。
しかし、すぐさま結弦がそれに反対した。
「初音一人じゃ危ないだろ。だったら俺が持ってくから」
結弦が手を差し出すも初音は渡そうとしない。あくまで自分で持っていきたいみたいだ。

「初音ちゃんに行かせてあげればいいじゃない」
そこへゆりが現れた。奏も一緒だ。
「あたしもゆりに賛成よ」
「奏も！？」

「ゆりさんも奏さんもありがとうございます！　じゃあ、あたし行ってくるねー！」
二人に気を取られている隙を突いて初音は屋上から出て行く。

結弦は慌てて追いかけようとしたが、手首を掴んできた奏に引き止められた。
「あまり過保護にしちゃいけないわ。それに初音ちゃんはしっかりしている子よ」
「でも……」
「まぁ、音無君が心配なのもわかる。だから一応、高松君に尾行させてるから安心なさい」
「心配しすぎか……。わかった、初音を信じるよ」

「さて、そろそろ始めるわよ！」
全員に直井の持ってきた茶碗が行き届いたのを確認したゆりは声

を張った。

「団子の影も形もないんだけど何を始めんの？」

「団子団子って、ひさ子さん食い意地が――」

「お月見だから団子って言ったんだよっ！」

関根が最後まで言いきる前に拳骨が落ちる。

「で、なにすんだ？　月を見てお団子を頬張る。お月見ってそんだけだろ？」

「藤巻君はつまらない男ね。それだけじゃ退屈じゃない。だから、レクリエーションを考えてきたの」

そう言うとゆりは一枚の紙を取り出し――

団子

調理室に移動した結弦たちは団子を手作りしていた。ひさ子と関根と入江が茹で担当だ。
そして松下だけがうどん作りに精を出している。

粉に水を混ぜてよくこねた生地から適当な大きさをとり、それを丸めるという単純作業に飽きたのか日向がぼやく。
「レクリエーションとか言うぐらいだから、もっと派手なモンを想像してたぜ」
「派手なのがいいなら、本気で潰しにかかる野田君から逃げたり、服に火をつけたり、紐なしバンジーとか色々あるわよ。どうする？」
「文句言ってスミマセンでしたぁっ」
日向はゆりの提案を土下座で断った。

そんな日向をよそに、奏はどんどんと団子を丸めていく。
その大きさや形は全て均等だ。
「器用だな」
思わず結弦が感想を漏らすと奏は「あたしはまだまだだよ」と言い、岩沢とＴＫの方へ視線を向けた。

岩沢は五本の指を巧みに使い、片手で四個ずつ、計八個の団子を同時に丸めている。
ＴＫはお手玉のように団子を空中へ投げて、形を整えたものから順々にお茶碗へ落としていく。
それぞれが完成させた団子の大きさや形も非の打ち所がなかった。
たしかにあの二人はレベルが違うな。

結弦が二人の技に舌を巻いていると突然、死角から頭をめがけて

勢いよく団子が飛んできた。
「なっ！？」
気づくのが一瞬遅れた結弦だったが、
「ガードスキル――ハンドソニック」
奏がそれを縦に真っ二つにしてくれたことで、かすりはしたものの直撃は免れた。

「だれだクルァッ！　ユイにゃんの大事な可愛い髪の毛にくっついただろうがぁっ！」
「僕のことはクライストと……」
被害者は二人に増えたけどな。

投げた犯人は藤巻。どうやら、大山と二人で団子をボールにして野球をしていたみたいだ。
食べ物を粗末にしたこの二人は、後で四百字詰の原稿用紙十枚分の反省文を書かされることになった。

「たくっ、ろくなことしないんだから。――なにか用？」
ゆりがユイの髪の毛に付いた団子を取り除いていると、野田がやってきた。
手には団子。それを自信満々に見せ付ける。
どうやら、「自分はちゃんとやってるぞ」アピールをしにきたようだ。

ただ、問題が一点。
「……あたし、一口大って言ったわよね？」
野田が丸めた団子は野球ボールぐらいあった。いくらなんでも大きすぎるだろ。
ゆりの少しずつ溜まっていたイライラがこれを火種に爆発する。

「これのどこが一口大よッッッ！」
ゆりはその団子を奪い取り野田の口にぶち込んだ。

それを奏が即座に注意する。
「ゆり、それはまだ茹でてないわ」
「そうだったわね。野田君が食べたそうだったからつい。野田君、ごめんね」
ゆりの謝罪は嬉しそうに口を動かす野田には届かなかった。
「アホですね」

「おーい音無ー。茹でるからそこの団子持ってきてくれ」
団子作りを再開した結弦に、茹で担当の一人であるひさ子が机の上に積まれているまだ茹でられていない団子を持ってくるよう頼んできた。
「わかった」
それに応じた結弦が団子の入った茶碗を手に取る。

「ん？」
そこに乗せられている団子を見た結弦は違和感を覚えた。
と、言うのも形が少し変だ。少し長めの耳のようなものが団子に沿うようについている。――まさかウサギか？
よくよく見てみれば、他にも目や口が彫ってある。結弦はこれがウサギだと確信した。

こんな可愛らしいウサギを作っていたのは、もちろん――
「あさはかなり……」
椎名だ。今も爪楊枝を使って慎重に顔を彫りこんでいる。
そして出来上がったウサギを見て顔をほころばせた。

しかしその直後に結弦の視線に気づき、いつもの表情に戻った。

「……用か？」

「いや、丸めた団子を運ぼうかと思ってさ」

「……どこへだ？」

「ひさ子たちのところに」

結弦が湯気を立ち昇らせるひさ子たちを指差した。

「……釜茹でするつもりか？」

「そこまで物騒じゃなけど、そうなるな」

すまし顔を取り繕っていた椎名の表情に動揺が走る。

「こ、こ、こんな可愛い子達をか……？」

「その後、ムシャムシャいただいちゃいますよー」

突然現れた関根が椎名に耳打ちした。どうやら、結弦が遅いのでひさ子に派遣されたみたいだ。

「あさはかなりぃぃぃぃっっっ！！！！！」

顔から血の気が引いた椎名はウサギ達を目にも映らぬ早業で回収し、どこかへ行ってしまった。

あのウサギ達をどうするつもりなんだろう？

「ねぇ、音無さん」

ひさ子に団子を届けた関根がこっちに戻ってきた。

そして唐突に脈絡もない質問をぶつけてくる。

「髪は短いのと長いの、どっちが好みですか？」

関根は髪型に悩んでいるのか？　所々ハネてるし、あんまりそういう風には見えないんだけどな。

「岩沢さんは短い方が似合ってると思います！」

ユイが横から的外れなことを言ってきたので、関根は「あたしも

そう思うよー」と、適当にいなした。
それから「立華さんとみゆきち来てー」と、なぜか二人を呼んだ。
髪型と関係があることなのか？

「立華さんは音無さんの前に、みゆきちは背中合わせで立ってくれる？」
「しおりん、またなんか企んでるの？」
「そんなことないよー。それより、ちょっと身長あわせて？」
関根が入江に背の高さをあわせるように頼んだ瞬間、奏がさり気なく背伸びした。
他の皆はそれに気づかなかったみたいだ。

「こんな感じ？」
入江はまだ埋まりきらない差の分を少し膝を曲げることで調節した。
「バッチリ！　ほらー、音無さん。立華さんが髪を伸ばしたらこんな感じになりますよー」
関根は入江の髪を手に取り、奏の肩から前に出す。
すると二人の毛質が少し似ていることもあって、奏が肩から胸元へ髪を下ろしているように見えた。

――髪を伸ばした奏もすごく可愛い。むしろこっちの方が奏らしいような……。

「あれー？　やっぱり、音無さんは長髪の方が好みなんですか？　顔が赤いですよー？」
結弦の変化を関根は見逃さなかった。こういう場合はなんて言ったらいいんだ。

「二人ともー、そろそろこっちを手伝ってよ」

結弦が返答に困っていると、タイミングよくひさ子が関根たちを呼んだ。
関根は少し残念そうな表情を見せたが、なにも言わずに入江と二人で戻ってった。

無事に月見団子と松下の肉うどんが完成したので、屋上に戻ってきた。

「こちらが立華さん、こちらが音無さんの分です。どうぞー」
そこで入江が茶碗に盛られた団子をここにいる全員に配っている。
二人はお礼を言って受け取った。

「ところでさ、なんで皿じゃなく茶碗なんだ？」
今さら疑問を抱いたのか、日向が団子を取りに来たゆりに質問した。
「そりゃあ、持ちやすいからよ」
はしゃぐユイと一緒に入江から団子を受け取りながら、さも当たり前のように答える。

「……それだけ？」
「それだけよ。そんなことより初音ちゃん達戻ってこないわね」
驚く日向を無視してゆりは話題を変えた。
「そういえばたしかに、もどっふぇまふぇんね」
ユイは喋っている途中で団子を口に放り込んだ。

「直井が熱中し過ぎて、初音がまだかけらを渡せてないのかもな」
結弦の言葉を聞いて奏が動いた。
「あたし、お月見団子届けてくる」

そう言うやいな自分の団子をゆりに預け、入江から四つの茶碗をおぼんごと受け取った。
そして、一人で直井たちのところへ向かおうとする。
「奏っ、一人じゃ扉が開けられないだろ？　俺も一緒に行くよ」
結弦は慌ててその後を追った。

まず二人は直井がいると思われる音楽室付近に足を運んだ。
やはり音楽室にいるようで、廊下で高松が静かにスクワットしながら中を覗いていた。
いくら音を出してないからって、よくバレないもんだな。

中で集中していたら悪いからと直井を気遣ったのか、奏は小声で高松に話しかける。
「高松君、初音ちゃん達はいる？」
突然話しかけられた高松は、大きく開いた目でこっちを見つめた。
しかしすぐに結弦たちとわかり安心したらしく、目を細め、手をゆっくりとメガネに置いてから口を開く。
「います」

「そうか。ところでなんで外に？」
「これは高松の分よ」
「中に入るタイミングを逃しました。ありがとうございます。ですので、ここから中の様子をうかがっていました」
高松は奏から団子を受け取りながら結弦の質問に答えた。
それであんな状況になってたのか。……でも、スクワットはないだろ。

「で、今はどんな状況なんだ？」
ツッコミを頭の中で押し止め、結弦はもう一つ質問した。
すると高松は、なにも言わずに扉の隙間を指差す。
どうやら「自分で確かめてください」ということらしい。
促されるまま覗こうとしたその時――

「初音ちゃん、直井君、月見団子を持ってきたわ」
――奏が普通に扉を開けた。
高松は即座に見えない場所へ逃げる。

「わざわざ持ってきてくださったんですか。ありがとうございます」
初音はこちらに気がつくとイスから立ち上がり、丁寧にお辞儀をした。
対して机を挟んだ向こう側に座っていた直井は迷惑そうな表情で奏を見る。
だが、その後ろにいる逃げ遅れた結弦を見つけた途端に満面の笑みに変わった。

「音無さん、これ見てください！　金継ぎと銀継ぎ、どっちが良いと思いますか！？」
そして直井は机の上に置いてあった紙を無造作に掴み、結弦に見せた。
左が黒い茶碗に黄色っぽいの継ぎ目、右が黒い茶碗に灰色っぽい継ぎ目。
そこには、修復時の完成予想図が二つ描かれていた。

……どっちがいいのか、まったくわからない。
これが結弦の正直な感想だった。でもこれは、適当に答えていい類じゃない。
「その金継ぎとか銀継ぎって、誰かに頼んでやってもらうのか？」
だから結弦は少し強引に話題をずらした。

「自分でやりますっ。僕はろくろを回すよりもこっちのほうが才能ありますし。神なので当然ですが」
「へぇ……知らなかった」
「えぇっ！？　僕にそれを教えてくれたのは音無さんですよ！？」

「……記憶にないぞ？」
直井はショックで、結弦は意外な事実に、目を丸くする。
「陶芸教室で運命的な出会いをしたあの日っ、アホの作品を元の形に戻した僕に説いてくれたじゃないですか！」
直井が熱く語ると初音が疑問を持った。
「お兄ちゃんはどうして陶芸教室に行ったの？」
「ユイのリハビリにいいかもってな。あと、同じことを繰り返してると飽きるだろ？　だから変化をつけるって意味合いもあったんだ」
「そうだったんだー」

出会ったあの日、直井は日向が作った焼く前の茶碗を踏み潰した。
おまけに、その勢いでユイが作った歪な形の茶碗までも壊そうとしたんだ。
でもそっちは日向が身をていして守った。はたから見たら日向が直井に踏みつけられただけだけど。
そして結弦は直井に体当たりし、ユイ達から引き離した。

その時になにか言ったかもしれない。でも興奮してたこともあって、よく覚えてないんだよな。
「俺、なんて言ったんだ？」
どうしても思い出せそうになかったので聞いてみた。
すると――

「ダメだぁーーーッ！　努力したものを他人が勝手に壊すなぁーーッ！　あれは手のリハビリを続けるユイが楽しそうに作った作品なんだよ！　頑張った結果なんだ！　精一杯心を込めたんだよ！　それを否定するなぁッ！　それにユイだけじゃない、他の皆も努力してるんだッ！　お前にはヘタクソに見えても、価値あるものなんだ！　お前だって理想の逸品を作るために努力してるはずだろォッ

！」

直井は臨場感たっぷりに教えてくれた。

直井がこういうことで記憶を違えてたことはないし、たぶん本当に言ったことだと思う。

ただ、奏や初音がいる前でやらせるんじゃなかった。恥ずかしすぎる。

初音なんか「お兄ちゃん、そんな恥ずかしいこと言ったの？」と、軽く引いてるし……。

奏は奏で――

「そこからどうして、金継ぎや銀継ぎに？」

至極、真っ当なツッコミをしてた！

言われてみればたしかに、あの発言からそこへどう行き着いたのか謎だ。

「は、そんな簡単なこともわからないのか。愚民にもわかるように噛み砕いて説明してやろう」

そう言うと直井は近くのイスを二つ動かし、片方に座りもう片方に足を乗せた。

「いいか？　努力の結果は人それぞれ。ならば努力の形も人それぞれということだ。だから一旦作品を割ってみて、それを修復してみろと音無さんは仰ったんだ」

「最後すごい飛躍したな。というか結局、俺が教えたんじゃなくて自分で見つけたんじゃないか」

「ところで、音無さんは進路どうするんですか？」

「え？　……あぁ、俺は大学に進学するつもりだ」

突然、話題が変わり音無は少し動揺する。

「どこの大学へ――」

なおも直井がグイグイと質問を続けようとしたところ、部屋にＭｙ Ｓｏｎｇが流れた。

すると奏は――まだ茶碗が一つ載っているおぼんを机に置き――携帯電話を取り出す。

どうやら電話がかかってきたらしい。携帯を開き、耳に持ってった。

「もしもし、ゆり？」

相手はゆりか。わざわざ電話をかけてきたってことは、なにかあったのか？

しばらく奏は、ゆりの話を相槌を打ちながら聞いていた。

そして電話を終えてすぐ「屋上に戻るわ」と言い残し、音楽室から出てってしまった。

「お兄ちゃん！」

奏の素早い行動についていけないでいると、初音が結弦の背中をはたいた。

「な、なんだ？」

「暗い中を女の子一人で歩かせちゃダメだよ。早く追いかけて！」

「でも初音が――」

「あたしは文人さんがいるから大丈夫だよ。それに高松さんや遊佐さんも戻ってくるはずだしね」

「わ、わかった」

「返事はいいから早く！」

一つ気になることはあったが、初音の迫力に押された結弦は音楽室を後にした。

「全くもう……」

果たし状

走っていたら叱られそうなので、結弦は息切れしない速さで極力足音を立てないように月明かりに照らされる廊下を駆け抜ける。
程なくして、歩いている奏の姿を確認した。
結弦は小走りから早歩きに切り替えて速度を緩めたが、なおも近づいていく。
そして、距離が詰まったところで奏の肩に手を伸ばした。

そういえば、前にもこんなことあったな。
そう頭によぎった瞬間――

なにかに足が引っかかった。

「うわっ！？」
体勢を崩した結弦は、踏ん張ることも避けることもできずにそのまま奏を巻き込んでしまう。
咄嗟にできたことといえば、奏を抱きしめてから体をひねるだけ。
二の腕から落ちることで奏の体へのダメージを少しでも減らそうとしたのだ。

そして二人は結弦の腕を下敷きにして転んだ。

「ごめんっ、怪我はないか！？」
倒れてからすぐ、腕を引き抜き上体を起した結弦は奏の心配をする。
「どこも痛くはないわ。だけど――」

「ちょっとーッ！　なにしてんのよッ！」

そこへ足音と共に聞きなれた勝気な声が響いた。
顔を上げると、すごい形相のゆりが見下ろしていた。
大きな音を聞きつけて駆けつけたんだろう、少し息が乱れている。

「それはどういうつもり？」
「えっと……」
改めて状況を確認してみた。

今、結弦は斜め後ろから奏に覆いかぶさっている。
見方によっては勘違いされるシチュエーションだ。
そして、ゆりはその見方をしていた。

「二人っきりなのをいいことに、後ろから襲い掛かるなんてサイテーね」
「いやっ、これは――」
「あ、シャドーズ・スクールでも襲ってたし、人数は関係ないのかしら」
ゆりが言っているのはおそらく、入江にタックルされて転んだ際に不可抗力で奏に抱きついて転んでしまった時のことだ。
「それも襲ったわけじゃ――」
「さ、奏ちゃん、逃げるわよ！」
言い訳には耳を貸してくれず、ゆりは奏の手を取って結弦から引き離し連れてってしまった。

……結局、なにに引っかかったんだ。
恨めしく後ろを振り返ると、そこには何一つ引っかかるようなものなどなかった。

重い足取りで屋上に戻ると、なにやら揉めていた。
ゆりがさっきのことを言い触らしてるのか？
どうにかして誤解を解かないとな。

近づいてみると、その中心にいるのがゆりではなく関根とひさ子だと判明した。
「あっ、音無さんだ！　ちょーどいいところに！」
その関根は結弦に気付くと、その揉め事に引きずりこむ。

「天使はやっぱり、さらっさらな長い髪がいーですよ！　ね、長髪好きの音無さんもそー思うよね？」
「ウィッグなんて演奏の邪魔になるだけだろ？　音無からも関根に言ってやってくれ」
「そこは練習で克服するんです！　ヘビメタじゃないんだからいけますって」
「その練習は演奏の質の向上ためにまわすべき。そこまで時間に余裕はないんだから」

これはなんの口論だろうか。唐突に、天使とか練習とか言われてもわけがわからない。
ゆりがさっき電話をよこしたのは、奏にこれを止めてもらうため？
しかし、奏は止める様子はない。ただ、穏やかに見守っているだけだ。
ちなみにゆりはというと、奏の後ろから結弦を目で威嚇していた。

「さぁ、音無さん！　天使といったら長い髪か短い髪か、言っちゃってくださいっ！」
「邪魔になるぐらいなら、そのままだよなっ？」
二人に詰め寄られた上に、ゆりからも睨まれている結弦は、頭の中の整理が追いつかず――

「天使なら羽をつけた方がいいんじゃないか？」
「その手があったか！」
「音無が壊れたッ！？」
変なことを口走った。

なんとか中心から脱出した結弦は、状況を把握するために誰かから話を聞こうとした。
しかし、ゆりは話を聞いてくれそうにないし、奏はそのゆりに守られている。
日向とユイはいつものようにお互いに技をかけあっているので除外。
遊佐はこの場にいないし、入江は関根とひさ子の間に入って頑張ってる。
野田、藤巻、大山、松下、ＴＫには聞いても、まともな答えが返ってこなさそうだ。

残すは離れたところにいる竹山と岩沢の二人だけだった。
ここは竹山、もといクラ……やっぱり、岩沢にしよう。
結弦はクラの後の数文字が思い出せなかったので、すぐに竹山を諦めた。

で、岩沢だけど、なにも持たずにギターの指の動きの練習をしている。
邪魔したら悪いし、一区切りつくまで待つべきだな。
そう考えた直後、岩沢がこちらに気がついた。

「なに、あんたもライブに出たいの？」
「え？　俺が？　いやいや、ユイじゃあるまいしそんな……」
「冗談よ」

少し焦る結弦の姿を見て岩沢はクスッと笑った。
岩沢でも冗談を言うんだな。ちょっと意外だ。

「それで、なにか聞きたそうなツラしてるけど？」
「あぁ、いつもと違う感じでひさ子と関根が言い争ってるから気になって。なにか知らないか？」
「あれは立華さんの髪型をどうするかで議論をしている。――ライブでの髪型ね」
岩沢は結弦が怪訝そうな顔をしたのを見て、一言付け加えた。

「ライブ？」
「文化祭で立華さんとユイが演るって聞いてない？」
「いいや。今、初めて聞いた。ガルデモの前座としてなのか？」
「前座はあたし。立華さんとユイには”Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅｖｉｌ　ａｎｄ　Ａｎｇｅｌ”、通称ガルデアのツインボーカルとしてメインを張ってもらうよ」

岩沢が前座なのも驚きだが、奏とユイにやらせる？
「大丈夫なのか？」
「二人とも想いのこもった、いい詩を書いてきた。だから大丈夫よ」
根拠はピンと来ないけど、たしかに奏やユイがやるって決めたら中途半端にはしないだろうし、岩沢もそれを許さないだろうな。
余計な心配だったか。

しばらくして初音たちが戻ってきた。
なぜか服が汚れている遊佐と高松も一緒だ。
高松を除いた三人は、真っ直ぐ結弦の方へやってきた。

直井はレジ袋に入った新聞紙に包んである茶碗を結弦に見せる。
「僕はこれがあるので、今日はもう失礼します。……音無さん、最後まで一緒にいられなくて残念です」
「わかったから、もう行け」
どうやら直井は挨拶のためだけに戻ってきたようで、すぐに帰っていった。

次に話しかけてきたのは遊佐だ。
「すぐそこで、立華さんのファンクラブさんからお預かりしました」
そう言って、一枚の封筒を差し出してきた。

表には【音無結弦様へ】と印刷されている。裏は白紙。
「あのね、綺麗な黒髪の女の人だったよ。顔はよく見えなかったんだけどＳＳＳメンバーじゃないと思う」
初音が手紙を渡してきた人のことを少し教えてくれた。

どうやら、本当に奏のファンクラブの人みたいだ。
結弦は封筒の上を破って中から手紙を取り出し、広げてみた。
表紙と同様、パソコンかなにかで作って、それをプリントアウトしたもののようだ。

【果たし状　音無結弦様
我らが立華奏ファンクラブは貴方様を敵とみなしました。
なので後夜祭のダンスパートナーの権利を賭け、文化祭の日に五対五で勝負です。】

短めにまとめられた、ほのかにアホの香りが漂う内容だった。
百歩譲らなくても敵とみなされるのは、なんとなくわかる。
このタイミングで校内で遊佐に手紙を渡したってことは、さっきのアレも見ていたんだろう。

でも、それがどうやったら勝負に繋がるのか。理解し難い。
そもそも、ダンスパートナーの権利を賭けるってなんだ？
申し込むのは自分達でも、だれと踊るか決めるのは奏だろ？

「面白いじゃない」
「ゆりっ！？」
ゆりはいつの間にか結弦の後ろに立ち、肩越しから手紙を読んでいた。

「音無君、受けて立ちなさい。勝ったら今日のことは不問にしてあげるわ」
「もし負けたら？」
「奏ちゃんを誘う権利を放棄してもらう。後、死より恐ろしい罰ゲームなんてどうかしら？」
ゆりの目は笑っていなかった。

前日

あの日以来、演劇やライブの練習や準備を着々と進めていった。
ゆりや奏のファンクラブが文化祭前になにか動きを見せると思っていたが、沈黙を保ったままだ。

あんなに怒ってたゆりが、急に態度を変えて「勝ったら不問にしてあげる。けど負けたら……」と言ってきたし、なにか企んでると思ったんだけどな。
……嵐の前の静けさ？　ありえそうだ。
ファンクラブのほうも、このクラスに一人や二人いるだろう会員を使って小さな嫌がらせをしてくると予測していたけど、そんなことはなかった。
こっちは奏に嫌われたくないからかもな。

そんなこんなで迎えた――

中間テスト当日

「って、なんでテストがあんだよ！」
日向は結弦のクラスにやってくるなり、雄叫びをあげた。
初日から最終日の今日まで、テストが一つ終わるたびに叫んでいるので慣れてしまったのか、普通の生徒はピクリとも反応を示さない。

「ここは学校だぞ？　あるほうが普通じゃないか」
「だからって文化祭前はねーだろうよっ！」
日向は結弦に熱く訴えかけた。
その情熱はテスト勉強にまわしてくれ。

「あのねぇ、なんども言うようだけれど、二学期の中間テストが終わった次の日から文化祭。それが創立五年の歴史、すなわちこの学校の伝統なのよ」
「歴史短くねぇ！？」
ゆりの説明を聞くたびに、日向は同じツッコミを繰り返していた。
「それより、あと十五分でチャイムが鳴るわ。早く自分の教室に戻るべきよ」
奏の冷たい言葉にユイが便乗する。
「そうですよ。ひなっち先輩はアホなんですから、早く戻ってこの休憩時間に一文字でも多く詰め込まないと赤点まっしぐらですよ」
「お前だけには言われたく――ユイ、なんでここにいるんだ？」
「ゆさゆさにゆりっぺ先輩への伝言を頼まれました！」
ＳＳＳの同学年の女子と急速に仲良くなって、お互いをあだ名や名前で呼び合うようになったユイは、日向と違って現実逃避のために来たわけじゃなかった。
「文化祭の準備をするために泊まる許可がもらえたのね」
「はいっ、そうですっ」
野外ライブで使う器材は雨で壊れたり盗まれたりしたら困るので、前日に準備することになっていた。
運び終えた後には交代しながら夜通しで番もするので、学校に泊まる許可が必要。
でも、テスト期間に突入するまでど忘れしていて、申請してなかった。
そのために、許可が下りたのが最終日の今日になってしまったわけだ。

もちろんこれはＳＳＳメンバーに連絡が行き届いているので、みんな着替えを用意している
「今日、学校に泊まるのか？　俺なんも聞かされてないぜ？」
わけじゃなかった。

日向には連絡がいっていなかったのか。
まぁ、連絡しなかった犯人は大体目星がつく。
「じゃー、ユイにゃんは教室に戻りますねー」
明らかに挙動不審なユイはすごい速度で逃げてった。

テストも終わり、結弦たちはひとまず本部に集合していた。
まだ全員が集まったわけじゃないが、じきに来るはずだ。

「くぅーっ、やっと解放された。あんな堅っ苦しぃ問題解かされて、頭痛ぇっ！」
そう考えていた矢先に、伸びをしながら藤巻が本部に入ってきた。
「テストを切り抜けたので、私たちの楽園がやってきます。そう、学園祭……」
「なんで脱いでるの？」
続いて晴れ晴れとした表情で上半身裸の高松と、それを訝しげに見上げている大山が。

「これで全員かしら？」
「例のごとく、直井君がまだです」
ゆりの問いかけに遊佐が答えた。
「それなら始めちゃってていいわね。男子は器材をステージに運び始めて！　女子は明日のライブの段取りの確認をする！」

ゆりの指示を受けて、結弦たちは機材の置いてある音楽室へ向かう。

その道すがら、ＳＳＳと同じように学校に残っている生徒が沢山いた。

「やっぱり、他の生徒も準備で沢山残ってるな」

「テストで教室使ってたし、今から急ピッチで進めるんだろ」

日向と話していた結弦はあることに気付いた。

「そういえば校庭にステージが設置されたのっていつだっけ？」

「えーと、予定が狂って遅れたけど、それでも一週間は経ってたような……。でも、それがどうした？」

「砂埃とかで汚れているんじゃないか？」

「あっ」

というわけで、結弦と日向が先にステージに行って掃除をすることになった。

ロッカーから箒とちりとりを、残っている一年生からは雑巾を借りてやってきたが、さほど汚れていない。

「これならすぐに終わるな」

「よっしゃ、チャチャッとやろうぜ！」

――甘かった。汚れがたいしたことはなくても、キリがないな。

それもそうだ。ここは校庭で、次から次へと砂が風に飛ばされてくる。

いくら掃こうが拭こうが砂が尽きることはない。

「永久ループかッ！」

それでも掃除を続けていると、結弦より先に日向が音をあげた。

さらに箒を投げ捨て開き直る。
「あれだ！　砂かなんかで壊れたら、俺が弁償するさ！」

「よく知らないけど、ああいう機材って高いんじゃないか？」
「出世払いでお願いします。たぶん、安月給なもんで」
音無の言葉を聞いた途端にへりくだった。
そもそも、なんで壊れる前提？　壊れないように祈った方がよくないか？
あと、学生なのに月給っておかし――まさか？

「内定がもらえたのか？」
前々から日向は高校卒業後すぐに働くと公言していた。
日向のことだ、ユイのためなんだろうけど、将来のために金を稼いでおきたい、と。
そして最近は色々と就職先を探していたんだ。

「おうよっ！　チャーさんが経営する会社だぜ！」
「コネってことだな。そっかー……。なにはともあれ、おめでとう」
「なんか照れるな」
結弦が祝福の言葉を送ると日向は頭をかいた。

「あっ、音無もどうだ？　コネ入社」
「遠慮しとくよ」
「まぁ、俺と違って勉強できるしな。やっぱ、医者目指してるのか？」
――医者。
結弦は黙り込んだ。
なにかを察した日向は箒を拾って掃除を再開する。

「実は……まだ迷ってるんだ」
しばらくして、結弦が口を開いた。
「迷ってる？」
「俺が――」
「やっと見つけたッ！」
そのとき突然、息を切らしたひさ子が現れた。

「急にどうしたんだよ。今大事な――」
「お前のファーストキスの相手がゆりだって、ユイにバレたんだッ！」
「……は？」

キス

日向は事態が飲み込めていないようだったが、「ユイがどこかへ行っちゃったんだよ！」というひさ子の一言を聞いた瞬間、どこかへ走り出す。

どこかユイがいそうな場所が思い当たるのかもしれない。

そこは日向に任せよう。

となると今すべきことは――

結弦はもっと詳しく話しを聞くためにひさ子と一緒に本部へ戻った。

本部に入ると、ゆりがイスの上で正座してうな垂れていた。

その落ち込みたるや尋常じゃない。奏が頭をカチューシャごと撫でているのにピクリともしないぐらいだ。

岩沢はそんなゆりを慰めるかのように、アコースティックギターで物悲しいメロディを奏でていた。

そのメロディはゆりの今の心境を表しているようでもあった。

まず奏に話を聞いてみようと近づいたら、「まず私が、わかる範囲でお話します」と、遊佐が間に割って入ってきた。

「最初の方は、予定通りにライブの段取りの話をしていました。ですが、ちょっとしたきっかけで恋愛方面へと話題がそれます。そしてひさ子さんが初キスを済ませていない――」

「それは言わなくていいから！」

「――ことが判明したりして、盛り上がっていきました」

遊佐の暴露に驚いたひさ子は慌てて大声を出すも、完全に手遅れ

だった。

顔を赤らめるひさ子に、関根のハネた髪の毛が反応を示す。

しかし、おちょくれる雰囲気ではないとしっかりと認識しているようで、なにも言わなかった。

反応を示した毛もすぐにへたる。

「みゆきちさんがしおりんさんに寝込みを襲われて初めてを失ったことや」

「ゆさちゃん、誤解される言い方はやめてっ」

「椎名さんの初めての相手がぬいぐるみだと判明したりして」

「あさはかなり……」

「話題はゆりっぺさんのファーストキスへ移りました」

遊佐はさらに被害者を増やしつつ話を進めていき、ようやく本題へと到達した。

「ゆりっぺ先輩のファーストキスを聞かせてくださいよー」

「いやよ」

ユイさんが駄々をこねるようにしつこく聞いても、ゆりっぺさんは首を横に振るだけでした。

「あれれー？　ゆりっぺ先輩はキスまだなんですか？」

「そうかもね」

挑発にも乗りません。

「うー」

小さく不満の声を漏らしたユイさんは、自称誘導尋問のエキスパートのしおりんさんに、視線で援護を求めました。

その視線に気付いたしおりんさんは、笑顔で「任せて！」と口を

動かさずに答えます。

「さあ、いたいけな子羊よ。あたしの目を見なさい」

しおりんさんは中途半端に直井君が催眠術をする時のマネをして、ゆりっぺさんに迫りました。

もちろん、しおりんさんは催眠術を使えません。直井君も日向さん以外には使えませんが。

どうやらこれは、しおりんさんなりの誘導尋問のテクニックだったようです。

「ゆりっぺさんはファーストキスは済ませている。マルかバツか」

「……」

「済ませてますね」

ゆりっぺさんがなにも答えなかったのに、しおりんさんは自信満々でした。

私にはゆりっぺさんの変化がわかりませんでしたが、なにか見極める秘訣があるのでしょうか。

そして次の質問へ。

「それはあたし達が知っている人物である。マルか正解か」

完全に決めてかかっています。しかし、それが功を奏しました。

……結果的に悪い方向へ転がってしまいますが。

「そ、そんなわけないじゃない！」

ゆりっぺさんはしおりんさんから目を逸らしました。

野田さんレベルではムリですが、それなりの洞察力を持った人であればゆりっぺさんの動揺は伝わってきたはずです。

「えっ、もしやゆりっぺ先輩はＳＳＳメンバーの誰かが相手なんですか！？」

ユイさんもその条件をクリアしていました。

「じゃあ次は――」
そしてとうとう、しおりんさんは真実を暴いてしまいます。
「ゆりっぺさんのファーストキス相手はひなっちさんである。って、冗談で……ゆりっぺさん？」
今までに見たことがないほど、ゆりっぺさんが青ざめていました。
しおりんさんの冗談が、ゆりっぺさんにとっては冗談でなかったのです。

ですが、ゆりっぺさんらしくありません。
いつもなら、もっとうまく誤魔化したはずです。
おそらくは動揺しているところに一発で的中されて、精神を立て直す暇もなく、表情に出てしまったのだと思います。

野田さんでも気付くほどの変化をユイさんが見逃すはずがありません。
「ひなっち先輩となんですか？」
ユイさんの言葉からは、先ほどあった熱が失われていました。
「あーと、それは、えーと……」
そしてゆりっぺさんもいつもの冷静さを失ったままでした。

そこへ追い討ちをかけるかのように、ユイさんが超能力的勘を働かせました。
「チャーギルズの観覧車で――ですか？」
「なっ！？　どうしてそれが！？」
ゆりっぺさんは口からも驚きが漏れました。

「それを聞いたユイさんは、ウサギのぬいぐるみを駆使して本部か

ら外の車椅子へと行き、そこから猛スピードでどこかへ行ってしまいました」
「あさはかなり……」
椎名の腕の中にはニンジンをかじっているウサギのぬいぐるみがあった。

――ん？
結弦はあることが引っかかった。
「観覧車はユイが日向と、ゆりは野田と乗ったんだろ？」
だからゆりと日向が観覧車でキスできるはずがない。そしてもう一つ。
「それにキス自体もチャーギルズに行くより前に、見せ付けられたことがあるんだ。つじつまが合わない」
――だからこれはユイの勘違いか、もしくはドッキリ？

「それが合うのよ」
落ち込んでいたゆりが――まだ表情は暗い――少し復活した。そして結弦の疑問を解消する。
「だって、あたしと日向君が一緒に観覧車に乗ったのは小学生の時だから」
そういえば前に日向とゆりと一応大山も小学校の時の同級生だって言ってたな。

「じゃあ日向とキスしたって言うのは――」
「ただの事故だけどホントよ。人生の汚点だし、墓場まで持っていきたかったわ」
ゆりは悔しそうに唇を噛んだ。奏はなおも撫で続ける。

「でも、それより先にユイちゃんの精神的ショックのほうをまず考えるべきだった。あたし、どうかしてたわね」

ゆりは気合を入れるためか、頬を両手でおもいっきり叩いた。
奏は頭を撫でる手を止め、岩沢も曲調を明るいものへと変える。
「ユイちゃんを探してくる！　そしてちゃんと説明して誤解を解いてくるわ！」
完全に元気を取り戻したゆりは勢いよくイスから飛び降りた。そして――

「あ、足が……」
悶絶する。ずっとイスの上で正座していたから足が痺れたみたいだ。
そこに一通のメールが結弦の携帯へと届いた。
バイブレーションでそれに気付いた結弦は中を確認する。

『ユイを見つけた心配は要らない俺に任せてくれ』

「ゆり……もうこの件に関して俺たちの出番はなさそうだぞ」
「……へっ？」
足をさするゆりは間の抜けた表情を見せた。

けんか

学校近くにある小さな公園。
僅かにある遊具には目もくれず、ユイはそこで一人佇んでいた。
車椅子の足置きに乗った自分の足を恨めしく見つめながら、ユイは呟く。
「秀樹のアホ……」
珍しく下の名前で呼ばれた本人はこの場にはいない。

――少女マンガなら、『だれがアホだ』って軽く頭をこづく場面なのにね。
そう考えたユイは笑みを浮かべる。
しかし、目からはとめどなく涙が溢れていた。

しばらく涙を流し続けていると、後ろから足音が近づいてきた。
振り返らなくても、すぐに誰だかわかる。
部屋の窓ガラスが割られたあの日から、毎日のように聞いてる足音。
ベッドで寝たきりのころは一番の楽しみだった足音。
一番支えてくれた優しい人の足音。
でも、今は聞きたくない。

ユイはどうにかして逃げ出そうとした。
けれど出入り口は後ろにある一つだけ。公園自体も狭いので隠れる場所すらもなかった。
顔を極力あわせずにこの場から逃げる手段は一つしか残ってない。
ユイは涙を拭き、覚悟を決めた。
――秀樹が全部悪いんだもん、躊躇なんてしないからっ。

勢いよくその場で反転すると、駆け寄ってきた日向を轢くべく猛スピードで突撃する。
日向が驚きの声をあげながら逃げても、ユイはスピードを緩めなかった。
そして、あと一息で轢けるというところで
「あっ！」
車輪が小石に乗り上げ、バランスを崩した。

ヘッドアタック！
車椅子から投げ出されたユイは、その勢いを活かして日向の腰に頭突きをきめる。
さらに、援護するかのように石が三つほど日向めがけて飛んできた。
全ての攻撃がヒットした日向はその場に倒れた。

見事に日向を倒したユイはガッツポーズを決める。
少し勝利の余韻に浸っていると、あることに気付いた。
――逃げようとしてたのに、いつの間にかいつものペースに乗せられてる！
ユイは急いで車椅子に戻ろうとした。

「なんか俺に言うことは？」
「……おはようございます」
が、後一歩のところで生き返った日向に捕まった。

ユイは公園のベンチまで連行された。
日向はそのベンチに白いハンカチを敷く。
そしてそこにユイを座らせ、自身はその隣に座った。

「なぁ、ユイ」
ユイはそっぽを向いた。
いくら話しかけられ肩を揺すられようとも、無視を決め込む。
そんなユイの頑なな態度に日向は諦めたのか、ため息をつくと携帯電話を取り出した。

「……ゆりっぺ先輩へ愛のメールですか」
操作する日向へ、ユイはトゲのある言葉を浴びせた。
「んなわけねぇだろ！　見てみろ、ほらっ。音無にだ」
すぐさま反論した日向は、ユイに画面を見せつける。

「ゆりっぺ先輩を音無先輩の名前を使って登録してるんですね」
「俺、どんだけ疑われてんの！？」
「浮気ものなら、そのぐらいしてますよ」
「あー……。わかった、音無からの返信があったら見ていいから」
真面目な顔に戻った日向は、ユイの手を取って携帯を押し付けた。

「で、そのことなんだけどさ、話聞いてくれないか？」
なにも答えずにユイは再びそっぽ向く。
しかし今度は、ユイの承諾を待たずに日向は話しだした。

「ゆりっぺと事故で一回だけキスしちまったのは小学校六年生のときで――」
「――そのキスが忘れられないんだ」
ユイが口調をマネて続きを捏造すると、日向はすぐさまそれを否定する。
「ちげぇよ！　たしかに忘れちゃいないけど――もう一度したいとは微塵も思ってないからなっ」

「ふーん、だったらなんでチャーギルズの観覧車ではキスしてくれなかったんですか？　思い出の場所だから？」
ユイの最後に付け加えた一言が予想外だったのか、日向は目をまん丸にする。
「どうして観覧車でしたって知ってんだ？」
「はぐらかさないでください」
ずっと視線を合わせないようにしていたユイが、真剣な眼差しで日向の瞳を見つめた。

そんなユイに気圧されたのか喋りはじめる。
「観覧車でキスしなかったのはだな……」
日向は一度そこで言葉を切り、深呼吸してから

「ユイがずーっと音無と立華に興味津々でタイミングが無かったからだ！」

不満を叫んだ。それに対しユイもキレる。
「あたしのせいにすんのかぁ！」
「そーだろっ、俺はずっと唇を狙ってたんだぜ！？」
「狙ってるってケダモノじゃないですか！」
「誰がケダモノだぁッ！」

この後しばらく、二人は壮絶な口げんかを繰り広げた。

「とにかくさ、ゆりっぺとはその一回だけなんだ。信じてくれ」
「まぁ、二股をかけてないことだけは認めてあげます」
そう言いつつもユイの表情は晴れてない。

「二股だけはってどういう意味だよ？」
ユイはこの問いを無視して、一つのお願いを口にする。
「先輩、靴を脱がしてくれませんか？」
「なんで急に靴が――」
「いいから早くしてください。あと靴下もついでに。あ、スカートの中は覗いちゃダメですよ」
ユイに急かされた日向は言われたとおりに靴と靴下を脱がせた。

「よーく見ててください」
その裸足に注目させてから、ユイは目をつぶった。
そこから急に眉間にしわを寄せ
「オリァァァァァァッ！」
気合を込めた掛け声と共に全身にも力を込める。
手に握った日向の携帯もミシリといやな音をたてた。
そして――

ユイの両足の親指が僅かに動いた。

「よっしゃぁ、見たかぁっ！」
「おぉ！　すげぇじゃんか！　……でも、今見せることなのか？」
日向の一言で、誇らしげだったユイの表情がまた暗くなった。

「どうしたんだユイ。今日のお前、おかし過ぎるぞ」
「ひなっち先輩がゆりっぺ先輩とキスするからいけないんですよ」
「それは謝る。ユイが気の済むまで罵ってくれていい。でもさ、それだけじゃないんじゃないか？」
「……」
二人の間を今日何度目かの沈黙が支配した。
しかし、この沈黙は意を決したユイによって破られた。

「……あの約束ってまだ有効ですか？」

思い出

「や、約束ってなんですか！？」
いきなり茂みの中や木の上や裏から、ユイにゃん親衛隊の会員番号二番三番四番――ユイって名前の響きが一っぽい、という謎の理由で一番は永久欠番――の三人が出てきた。
両手に石を持ったまま三人はユイに詰め寄る。
「よければっ、その秘密を教えてください！」

ユイは困ったような表情をし、日向に視線で助けを求めた。
すると日向は思いがけないことを口にする。
「なんで今日は隠そうとしてんだ？　いつも、隙あらば話を聞かせようとしてたじゃんか。俺が話そうとするとキレるくせに……」

「あ、そうでした。じゃ、先輩はあっちに行っててください」
「なんでそうなるんだよっ？」
「ガールズトークですから」

ユイは日向が一人寂しくブランコで遊んでるのを確認してから語り始めた。

出会いは突然。交通事故で首から下が動かなくなったあたしが部屋でベッドに横になりながらテレビを見てたら、前触れもなく野球のボールが窓を割った。
そのボールは導かれるようにあたしの方まで飛んできて右腕に直撃する。

あれには驚いたな。二階で学校や公園からも遠いこの部屋にボールが飛び込んできたからじゃなくて、あたしの感覚すらなかった右腕に痛みが走ったから。

久々の感覚で嬉しいんだか、痛くて悲しいんだか、わけがわからなかったよ。

あたしはいつの間にか悲鳴をあげてたみたいで、それを聞きつけたお母さんが血相を変えて部屋に飛び込んできた。

そして、泣いているあたしや破片が散らばる部屋を見て、お母さんはパニックに陥ったの。

当然だよね。普通の状況じゃないもん。

でもね、お母さんって強いんだよ。

すぐに落ち着きを取り戻して、パジャマを捲り上げてあたしの腕を見る。

それで大怪我ではなさそうだって判断した。それからタクシーを呼んだんだ。

タクシーを待ってると、インターホンが鳴った。

諸悪の根源がぬけぬけと訪ねてきたの。

その名は日向秀樹。それと音無先輩が付き添いで一緒に。

お母さんは激怒して、二人を追い返しましたとさ。めでたしめでたし――とはいかなくて、それから毎日のようにひなっち先輩は部活が終わってから謝りに来た。

もちろん、門前払い。でも次の日懲りずにまた来るの。

それとは別に音無先輩もときどき訪ねてきた。

ひなっち先輩のように毎日じゃないのは、すぐに音無先輩が無実だってわかったから。

それからお母さんと急激に仲良くなって、さらには家にあがってくるようになった。
誤解が晴れたのになんでだろう？　お母さんやあたし狙い？　とか最初は思ったけどそれは違った。
音無先輩はひなっち先輩のことを許してもらおうとしてたの。
そして最終的には成し遂げた。音無先輩は詐欺師の才能があるのかもね。

その説得の最中に聞いた話なんだけど、あのボールは甲子園出場を決めたウイニングボール。
セカンドを守っていたひなっち先輩が最後のアウトをフライで取ったんだって。
太陽が眩しい上に熱中症にもなりかけてて危うく落とすところだった、ってひなっち先輩は笑いながら言ってた。
それでこれはひなっち先輩だけには秘密なんだけど、あたしはその試合をしっかりと見てたんだよね。
近くにある学校が甲子園出場がかかってるとあれば見るっしょ！
そのボールは今、記念としてあたしの部屋に大切に飾られてるんだ。

あともう一つ、こっちはお母さんには内緒の話なんだけど、あれは偶然に起きた事件じゃないらしいの。
ひなっち先輩が「俺はこのボールをあの家に投げ込まなきゃいけない気がする」って、訳のわからないことをほざいたんだって音無先輩が教えてくれた。
しかも本当に投げ込んだんだよ？　ほんと救いようのないアホだよね。
それで、出会えたわけなんだけどね――。

で、ひなっち先輩はあたしにも謝るために初めて家にあがってき

た。

ただ、あたしとひなっち先輩は初対面じゃなかったんだ。

テレビで会ったとか、部屋から玄関先にいるひなっち先輩を見たとかそんなんじゃないよ。

話は少し戻って腕を怪我したあの日、あたしはタクシーに乗って病院へ行った。

そこで全治一週間の打撲だって診断されたの。

それと、お医者さんから腕が動くようになる可能性の話があった。

神経がどうたらこうたらって退屈な上に意味不明だったけど、腕が動くようになるかもしれない、という事だけはわかった。

その後、怪我が完治したのを確認してから、過酷なリハビリ生活が始まった。

先の見えないリハビリだった。一日が終わっても進歩が感じられない。まさに苦行。

一週間を待たずに、あたしは心が折れそうだった。

さらに追い討ちをかけるように、お母さんの仕事が忙しくなってあたし一人で病院へ通うことになる。

正確には、移動はいつもお世話になってるタクシーの運転手さんに運んでもらって、病院では車椅子に乗っけてもらって看護婦さんに運んでもらってたんだけどね。

その日も、前日と同じように代わり映えのしないリハビリを始めた。違うのは応援してくれるお母さんがいないことだけ。

そんな時に不審者は現れた。

「ユイちゃん、お兄さんがお見えになったわよ」

看護婦さんに連れられて、見ず知らずの男がやってきた。

でも、その頃には音無先輩とは和解してて、ひなっち先輩の風貌も聞かされてたから、すぐにその人が誰だかわかった。

見ず知らずのストーカーだってね。

あたしが怯えていることに気付いた看護婦さんが不審がって詳しく話を聞こうとすると、ストーカー男が逃げだした。

それを取り押さえたのがひなっち先輩ってわけ。

ストーカーは逮捕とまではいかなかったけど、二度とあたしの前には姿を現さなかった。

それと、病院のセキュリティはこれをきっかけに強化されたんだよ。

で、ひなっち先輩が病院にいたのはなぜかというと、後輩が練習中に怪我をしたからその付き添いできたんだって。

学校から近いこの病院を選ぶのは当然だよね。

これがきっかけで、ひなっち先輩は練習がない日や休日に会いに来てくれるようになった。

あたしは薄々、この人があのボールを投げ込んだ犯人じゃないかと、勘付いてたけどそれに対してはなにも言わなかった。

だって、ずっと一人で――看護婦さんはノーカウント――やるのはつまらなかったんだもん。

だから、お母さんに許してもらって、家に上がってきたときのひなっち先輩の顔は面白かったな。

ハトがテッポウウオをくらったようなマヌケ面だったよ。

ただ、同時に怖くもなった。もう病院に来てくれないんじゃないのかなってね。

けど、そんなことはなかったの。

逆に家にも来るようになって、休みの日は車椅子に乗せて病院へ行くようになった。
さらには病院の先生に教えてもらって、家でもやるようになった。
ちなみに甲子園は一回戦負けだって。ひなっち先輩がスクイズに成功して先制したけど逆転負け。
――それもしっかり見てたけどね。

それから二ヶ月ぐらい経って、まだ指すら動かなかった。
だから、あたしはどんどんと弱気になってく。
でね、ある日あたしはひなっち先輩に、本音をポロっと言っちゃったの。
そこでひなっち先輩はあたしと一つの約束をしてくれた。

「おしまい」
「……えっ？　一番気になるところなのにですか！？」
親衛隊はいいところで話を打ち切られ、ショックを受ける。
「ひなっち先輩は勘違いしてそうだけど、この約束はお母さんや音無先輩も知らない二人だけの秘密だからね」
――そう、すっごく大切なんだもん。
ユイはあの日のことを思い起こした。

回想（前書き）

ユイの回想

回想

いつものように家でリハビリをしていた。
お母さんは仕事に行ってて、音無先輩は来てない。だから、その日は秀樹と二人きり。
いつの間にか、信用されてたんだ。……九割がた、音無先輩のおかげだろうけどね。

あたしはベッドの上で上体を起して、秀樹は床に座って見守っている。
あたしは買ってもらったばかりの、ピンクと黒でちょっとオシャレなジャージを着てた。
秀樹は、青のTシャツの上から水色のストライプが入った白いシャツ、下はジーンズとダサい。
女の子の家に来たんだから、もっと服にも気を使ってくれてもよくない？

それは置いといて、あたしはお医者さんに指示されたメニューをこなしていた。
リラックスしながら頭の中で動くイメージをしっかり固め、それからゆっくり力を込める。
たしかイメージ法とかそんな名前だったかな。
とにかく、そうやって練習してた。

それに飽きたら、あたしは決まって秀樹に一つのお願いをする。
「ひなっち、つねってください」
「おう」
リハビリには全く関係ないんだけど、痛覚が戻ってきたことを確認するために頼んでた。

ちなみにこの頃は、二人きりでも絶対に秀樹とは呼ばないし、学校の先輩でもなかったのであだ名だけで呼んでた。

「このぐらいか？」

秀樹はあたしの腕をとると、軽くつねった。でも、ぜんぜん痛くなかった。

これじゃ、あたしの腕を持ったほうの手からの温もりしか感じられない。

「もっと」

だから、あたしは強くつねるよう指示を出す。

すると秀樹は爪を立てて――ギッ。

「つねりすぎだろぉがぁッ！」

あまりの痛さにあたしはキレた。加減ってもんがあるっしょっ！

「わりぃ、わりぃ」

秀樹はすぐに謝ると、両手をマッサージしだした。

最初は、つねったところをさするだけ。そこから次第に本格的なマッサージへと移る。

筋肉をほぐすようにしてくれたり、伸ばすようにしたり、一つ一つの動作が割れ物を扱うように丁寧。

お医者さんから習いたての頃はぎこちなかったくせに、気持ち悪いぐらい上達しちゃって。

――でも、ひなっちは二ヶ月でこんなに上達してるのに、あたしときたら。

その日は、ついネガティブなことを考えちゃった。

情けなくて、涙が溢れてくる。自分ではふけないので流れっぱな

し。

こんな風に泣いたのは、事故で寝たきりになったんだ、って頭で理解しちゃったあの日以来だったな。

「どうした？」

見られたくないから静かにしてたけど、すぐに気付かれた。

こういう時は空気を読んで、鈍感でいろっての。

「目がホコリに入っただけですから気にしないでください」

「それ、大怪我じゃね？」

「っるっさい！」

顔が見られたくなかったあたしは、そっぽ向いた。

「……大体、部活にも行かずに、こんなとこでのんびりしてていいんですか？」

「今日はないからな。そんなことより――」

「この間にも自主練習してる人がいるかもしれないじゃないですか。あたしみたいな子に構ってたら、レギュラー奪われちゃいますよ」

突然、秀樹がまとっている雰囲気が変わる。

「あたしみたいな子ってどういう意味だ？」

「見たまんま、ベッドで寝たきりの動けない女の子ですよ。別にボール当てたことなんて、もう怒ってないし来なくてもいいんですよ？」

つい心にもないことを付け加えてしまう。

この日のあたしは本当にネガティブだった。

「わかった」

秀樹は立ち上がると、大切に飾ってあった野球のボールをわし掴みにする。

――持って帰っちゃうんだ。もう来る気はないってことなのかな……。

すごく悲しかったけど、あたしは意地を張ってなにも言わなかった。

すると秀樹はあたしの頭上にボールを持ってきて、そのまま手を離す。

硬いボールは重力に逆らうことなく、あたしの頭の上に落ちた。

「なにすんじゃオラァ！　痛いだろうがぁッ！　ケンカ売っとんのかぁっ！」

当然、あたしは手の先から髪の毛の先まで怒りが駆け巡った。

それを見た秀樹は変な一人芝居を始める。

「あー、しまった。また怒らせちまったな。こりゃ、また謝りに来るしかねーや」

棒読みだったり、わざとらしく頭をかきむしったり、色々とひどい。

「すみませんでした！」

そして一通りやり終えると、秀樹はあたしに向かって頭をさげてきた。

「なんのつもり？」

あたしがその行動の真意をたずねると、秀樹は頭を上げる。

その表情はいつになく真剣だった。

「もう来る必要がないって言われたけどな、理由がないんだったらつくってやんよ！　いくらでもだ！」

「答えになってないし……。それに同情なんていらないもん……」

「同情なんかじゃねぇよ！　どっちかつーと俺のエゴだ」

「自己満足ってこと？　だったら――」

「惚れてるんだよっ！」

「え？」

このタイミングで告白？

この瞬間のあたしは、心の底から『この人はアホ過ぎる』と、思った。

でも、そんなことはすぐに吹っ飛んだ。

――だって、既にあたしも秀樹のことを好きになってたんだから。

「最初の頃は義務みたいに感じてたんだ。――でもさ、ユイと話してると楽しかった。そして、頑張ってる姿を見てると応援したくなった。力になりたくなった。終いには好きになってたんだよ」

「なにそれ……。あたしは立てないよ。指の一本すらも動かせないんだよ？　そんな人を好きになれるの？　なれるわけないじゃん」

だけど素直になれなかった。自分に自信がなかったし、一緒にいたら不幸になるだけだとも思ってたから。

「でも、なっちまったんだ。だから、そんな風に言わないでくれないか。好きな人の悪口なんて聞きたくない。それが本人からでもな」

「言うよっ！」

つい感情が高ぶっちゃって、あたしは大声をだした。

「どれだけ辛いと思ってんの？　動けないからだけじゃない。沢山の人に迷惑をかけるんだよ？　自分のことが嫌いになるに決まってるじゃん！」

「だったら動かせるように俺がしてやんよ！」

あまりに突拍子もない宣言に、あたしは一瞬言葉を失った。

「……どうやって？」

なんとか絞り出せた、もっともな質問。
「……」
秀樹はすぐには答えられず、黙ってしまった。

それはそうだよね。
どんなに有名なお医者さんでも『可能性があるかもしれない』とは言っても『可能だ』とは言ってくれない。
確実に治る方法なんて、今のところ存在してないんだから。でも――

「お、俺がお前の腕として動いてやんよ！　今日から俺の腕は俺とユイのための腕だ！」
とんでもなくおかしな答えだけど、秀樹はあたしのために自分なりの答えを示してくれた。
そして、ない頭からひねり出してくれたこの答えは、すごく嬉しかった。

「迷惑にならない？」
「ならない！」
「いつまで？」
「いつまでもだ！」
「お母さんの負担も減らしてくれるの？」
「任せろ！」
秀樹はいやな顔ひとつせずに全て即答してくれた。
これがあたしと秀樹が交わした約束。

「ほんとに……本当に体が残念なユイが彼女でいいの？」
「さっきも言っただろ！　体が動かなくたって胸が残念だって俺は本気でユイが好きだ！」
「だれが貧乳だコラァッ！　揉んだことないけど、ここには絶妙な

柔らかさがたぶん詰まってんだぞオラァッ！　……まぁ、今日だけは許してあげます。だから、さっきの約束のための指きりげんまんしてください、ひなっ……秀樹」

「おう」

あとね、この日に指きりげんまんを交わした右手の小指が、一番最初に動くようになった指なんだよ。

約束

「終わったか？」
「はいっ、大爆笑でした」
ユイにゃん親衛隊の三人には帰ってもらって、秀樹と二人きりに戻った。

とは言っても、まだどこかで覗いてそうだなぁ。
……そうだ！　しおりん発案のアレがある！　ゆさゆさにアレをやってもらえばいいんだ！
「ちょっと待ってくださいね」
秀樹に断りを入れてから、ユイはメールで限定一個の【ユイにゃんの小悪魔ボイス収録目覚まし時計】争奪、【宇宙一のユイにゃんのファンは誰だ？　早押し百問クイズ】の緊急開催をゆさゆさにお願いした。

これはファンに囲まれたりして困った時のために、あらかじめ用意してたクイズとその賞品。
誰かにメールして開催日時や場所をファンの情報網に乗せてもらえば、あっと言う間にファンはそっちに流れるって作戦なんだ。
今回初めてやる試みだから、うまくいくといいな。
ちなみに、しおりん杯は手書きのサイン色紙、みゆきち杯は寝顔のブロマイド、ゆさゆさ杯はインカムのレプリカが賞品なんだよ。

メールを送ってから数分後、すごいスピードで公園から離れてく複数の足音が聞こえてきた。
――みんな、ごめんね。
心の中で謝ってから、目の前に立つ秀樹と向き合った。そして本題へと戻る。

「では気を取り直して、もう一度言います。……あの約束ってまだ有効ですか？」
再度、質問をぶつけると、秀樹は明らかに困ってた。
あの時のような下手な一人芝居でもない。
もしかして、忘れちゃったの？
ユイの中に失望感にも似た感覚が広がってく。
けど、それは早とちりだった。
「ブランコこぎながら考えてたんだけどさ……どの約束ことを言ってんだ？」
秀樹は忘れたわけじゃなかった。
「一緒に学園祭をまわるって約束か？　それとも、来年また海に連れて行くってやつか？　なんにせよ全部守るし、忘れてたら言ってくれよな」
逆に、全部覚えてるのかもしれない。
でもさ、普通はそんな小さな約束のことじゃないって、話の流れでわからない？
少し安心したのと同時に、今度は怒りがふつふつと沸きあがってきた。
だから――
「どの約束のことか思い出すまで座らせませんよ」
ユイは秀樹が隣に座ろうとしたのを手で邪魔した。
ここからベンチに座るための戦いが始まった。
「楽器屋へ一緒に行く」
「今度、ユイが作った料理の毒味をする」
「ＴＫの秘密を解き明かす」

「プロレス観戦に行く」
「キャッチボール」
「松下五段が肉うどんで、どこまでやってくれるか確かめる」
「映画観賞」

こんなにあったんだぁ。約束してた自分でも感心した。
でも、肝心な約束が出てこない。出てくる気配さえもない。
どうして？　やっぱり忘れちゃってるの？

「わかった、椎名にギャフンと――」
「んなもんじゃないっって、さっきから言ってんだろがーっ！」
ついに、ユイは我慢の限界をむかえた。

「じゃあ、どの約束のこと言ってんだよ」
「いつまでも俺がお前の腕になってやる、に決まってるじゃないですかっ！」
この一言を聞いた途端、秀樹は固まった。

――本当に忘れてるんだ。
失望を通り越し、頭の中は絶望に支配された。
さらにそこへ追い討ちがかかる。

「それは約束じゃねーよ」

約束じゃ、なかった――？
じゃあ、この一年はなんだったの？
ユイの中で、なにかが音を立てて崩れていった。

「ユイの腕が動くようになったから、約束はもう果たされたってこと？」

「そうじゃない」
「だったら、どうしてっ！」
ユイの目からは再び涙が溢れてきた。

「あのなぁ、破れないものは約束とは言わねぇんだよ」
「約束と言わないなら、なんて言うの？」
秀樹はなにも言わずに新たに白いハンカチを取り出すと、優しくユイの涙を拭こうとする。
しかし、ユイはそれを手で弾いて拒否した。涙も意地と気合で止める。

「そんなのいいから答えてよ」
すると秀樹はユイから目を逸らした。
人を泣かせといて、その態度はなに？　ワケわかんない。
でも、ユイはなにも言わずに秀樹の言葉を待った。

「それは約束じゃなくて誓い――当然というか――いや、ご褒美――ちげぇな。なんて言ったらいいか」
少しして、変なことをモゴモゴと口にしだした。
「俺はその発言を取り消すことは一生ないし、ユイもなかったことにはしないよな？」
「うん」
「だから、絆みたいなもんで――あー、もうっ！　約束なんて簡単な単語にしたくねぇんだよっ！」
ユイは秀樹の言葉の意味がすぐには理解できなかった。

「……つまり、あの時の言葉は今も生きてるってこと？」
「あたりまえだ」
秀樹が肯定すると、ユイの硬く握られた手が小刻みに震えだした。

「……だったら、あたしの流した涙はなんなんだオラァッッ！！！！」

ユイは秀樹からハンカチを奪い取り、それをムチのように振り回して攻撃した。

「返せ！　涙を返せ！　ゆりっぺ先輩とかっ！　岩沢さんとかっ！　戦線には可愛い子が沢山いるからっ！　不安になるだろーっ！」

ユイはどさくさに紛れて、抱いていた不安を口にする。

「んなコトあるかっ。ユイが一番可愛いよ」

それを秀樹はしっかりと聞いていた。

「騙されるかぁッ！」

だが、ユイは攻撃の手を緩めるどころか、より過激にする。

その攻撃を逃げることなく受けながら、秀樹は喋り続けた。

「騙そうとなんかしてないって。水着コンテストのときにさ、ほっぺたにキスしてくれただろ」

「ぶっ潰してやらーっ！」

「ユイがそんなことしてくれたのは初めてでさ」

「必殺、殺人、ギロチン、アターーックッッッ！」

「俺はすごい嬉しかったんだぜ」

ユイはそこでピタリと手を止めた。

「ゆりっぺ先輩とあたし、どっ――」

「ユイに決まってんじゃんか」

――どっちのキスが嬉しかった？

秀樹はユイの質問を最後まで聞かずに答えた。

「……しょうがありませんね。そこまで言うなら文化祭を一緒に回ってあげてもいいよ」

「後夜祭も頼みますよー、ユイさーん」

わざとらしく下手に出ながら、秀樹は新たに青と深緑と灰色のチェック柄のハンカチを取り出し、ニヤついてるユイの涙の跡を拭く。
「考えといてあげます。ところで、何枚ハンカチを持ってるんですか？」
ユイは日向からハンカチを奪った。
「自分用に一枚、ユイ用に二枚、後予備が二枚で計五枚だな」
「――秀樹はあいかわらず、アホですねっ」
ユイはハンカチで日向の視界を塞いで、今度はほっぺじゃなく――
―

参戦

今、本部にいるのは結弦と、落ち着かない様子で歩き回るゆり。
機材の運搬中にぎっくり腰になって床でうつ伏せになっている竹山と、その治療――軟膏っぽいのを塗った後に見たこともない葉っぱで覆う――をしている椎名。
そして、明日のライブについて色々と話している岩沢と奏の計六人だ。

さっきまでいた遊佐と関根はクイズがどうたらと言い、マスコットとツッコミ役として入江とひさ子を半ば無理やり連れて、どこかへ行ってしまった。

結弦が日向達を待ってないで大山たちの手伝いに戻った方がいいかなと考えていると、ゆりが「やっぱり、ユイちゃんを探してくる！」と今日何度目かの宣言をした。
さっきまでは、宣言し本部から出て行こうとするたびに結弦か奏が止めていた。
しかし、今回はその必要がなかった。
ゆりがドアノブに手をかける前に扉が開いたからだ。

「ユイちゃん！？」
「あんなちんちくりんと一緒にするな」
だが、ゆりの期待とは裏腹に、入ってきたのは直井だった。

「……遅かったわね。なにしてたのかしら、遅刻よ」
あからさまにガッカリしているゆりの質問に答えず、直井は結弦に直接報告する。
「音無さん、今日は学校に止まると聞いたので夕食を用意してきま

した。外に沢山あります。音無さん以外の人からは材料費をもらいますが」

これに奏が反応した。岩沢に断りを入れてから立ち上がる。

「あたしも少し作ったわ」

そう言うと隣の部屋へ行き、大きな寸胴鍋を抱えて戻ってきた。

「それって……」

奏といえばアレしかない。

「音無さーん、こっちも――」

奏は湯気が立ち昇る寸胴を少し傾けて中身を見せてくれた。

その寸胴に入っていたのは赤く煮えたぎる麻婆豆腐、ではなかった。

「これって豚汁か？」

寸胴の中は、豚肉、さといも、にんじん、ごぼう、しいたけ、こんにゃく、と具沢山な豚汁で満たされていた。

「そうよ、炊き出しに豚汁は外せないもの」

「うまそうだな」

「食べる？」

奏は机の上に寸胴を置くと、どこからともなくレンゲを取り出す。

そして素早く豚汁をすくうと、慣れた手つきで結弦の口元に差し出した。

いい香りが鼻をくすぐる。

レンゲの上に載っている豚肉とさといもも本当にうまそうだ。

「いただきます」

結弦が食べようと口を開いたその時、

「奏ちゃん、危ない！」

そのレンゲは横から飛ぶように突っ込んできたゆりの口の中に吸い込まれた。

「まったく、油断も隙もあったもんじゃないわね。……これ、おいしい」

ゆりはレンゲを片手に持って結弦を睨みつけながら口を動かしていたが、豚汁のおいしさで表情が一瞬ゆるんだ。

「口にあってよかった。ところでなにが危ないの？」

奏は少し嬉しそうにした後、首をかしげた。

すると、ゆりはテストが終わった後に配られた明日の文化祭のプログラムを取り出す。

「これよ」

そして二日目のあるページを指し示した。

そこに印刷されているものは奏だけじゃなく結弦をも驚かせた。

『立華奏元生徒会長ファンクラブｖｓ．天上高等学校ＳＳＳ裏番音無結弦、五対五のデスマッチ！』

「ファンクラブなんて――あったの？」

「こんな大々的にやるのか！？　しかも裏番！？」

二人の驚くポイントは違ったが。

「音無君はＳＳＳの名誉のために戦うわ。だから奏ちゃんが直接食べさせて、浮ついた気持ちになったら困るのよ」

「あたしが食べさせたら、うわつくの？」

「絶対に浮つく」

ゆりは力強く答えた。

そして結弦はそれを否定できなかった。

「そう、なら仕方ないわ。……五対五って書いてあるけれど結弦の

他に誰が出るの？」
「まだ、決まってないんだ」
結弦はチラリとゆりの方を見た。
「あたしは出られないわよ？　その時間、おじチャーんに頼まれごとがあるから」
もしかしたら、すでにゆりが選定しているかもしれないと思ったが、それはなかった。
全部、自分で交渉して自分で決めろってことか。

「それだったら、あたしが出るわ」
奏が立候補した。
「いいのか？　負けたら死よりも――」
「それは音無君だけだから」
「え？　罰ゲームは俺だけなのか？」
「当然でしょ。音無君がまいた種じゃない」

「結弦、なにかしたの？」
「それは……」
――奏を押し倒したのを見られた。
とてもじゃないが、それは口にできない。

「調子はどうかしら」
ゆりもさっきまで椎名に丸投げしていた竹山の具合を急に気にしだした。

「……隠し事？」
ただ、二人の態度が急に変わったことに奏が気付かないわけがなかった。
「いやいや、ちがうぞ！　まいた種って言うのはな、えっと……」

「ほらほら、音無さん！　こっちも食べてください。大好物の焼きねぎも用意してますよ」
結弦が必死に言い訳を考えているところに、タイミングよく直井がおにぎりと焼きねぎを外から皿に乗せて持ってきた。
どうやら豚汁のくだりで、慌てて外へ取りに行ってたみたいだ。
結弦はありがたくそれに乗っかることにした。

「ありがとう、って、なんで俺の好物が焼きねぎになってるんだ？」
「ち、違うんですか？　初音から得た情報なんですが」
直井は少し青ざめた。

たしかに出し物を決めたあの日に反省して以来、おいしそうに食べるように心がけていた。
初音はそれが原因で好物だと認識したのか。
なかなか、焼きねぎブームが終わらないわけだ。

……ん？　初音から得た情報？　いつの間に直井は初音を呼び捨てるような仲になったんだ？
そう言えば、前に初音も直井のことを文人さんって呼んでいたような。
いや、これ以上詮索をするのはよそう。過保護になるのはよくない。
初音ももう十三才なんだ。もう大人……まだ子供だな。
よし――

「結弦はなにをしたの？」
奏はまだ誤魔化されてくれてなかった。
結弦は再び窮地に立たされる。

そこへ突然、こういうことには興味を示さなさそうな岩沢が話に

入ってきた。
「あたしのせいなんだ」
「岩沢さんのせい？」
しかも、事情も知らないはずなのに庇おうとしてくれている。
「あぁ、ちょっとしたいざこざが合ってね。音無が間に割って入って仲介してくれようとしたんだけど、最終的にはこうなった」
岩沢はゆりが持っているパンフレットを指差した。
「二人とも大変だったのね」
かなり曖昧な説明ではあったが、奏は納得してくれたらしい。
結弦は奏に見えないように手を合わせて、感謝の態度を示した。
「借りを作りっぱなしも悪いから、あたしも参加するよ」
「話が見えてこないですけど、音無さんが困ってるのはわかりました。それならば神である僕にもお手伝いさせてください！」
岩沢に続いて直井も参戦を表明した。
「岩沢、直井、あと奏も、ありがとうな」
「で、残すは後一人か。アテはないの？」
「やっぱり、ＳＳＳのメンバーぐらいしか……」
「不本意ではありますが、あの愚者はどうですか？　数合わせぐらいにはなります」
愚者とは十中八九、日向のことだろう。
「そうだな、頼んで――」
「あぁっ！」
突如、ゆりが結弦の声をかき消すほど大きな声をだした。
「ユイちゃんの迎えに行かなきゃ！」

「だからそれはユイは日向に任せとけば大丈夫だって」
「結弦の言う通りよ」
結弦と奏は外に出ようとするゆりを止めようとする。

「二人ともそこをどいて。あたしはユイちゃんを探すんだから」
だが、ゆりが今日一番の身のこなしを見せて、結弦と奏のディフェンスの横をすり抜けようとしたその時、
「それには及ばないぜ」
日向が戻ってきた。
扉を開けっ放しにしてから一旦外に戻り、ユイをお姫様抱っこして本部に入ってくる。

「ゆりっぺ先輩、ひなっち先輩のことは諦めてください」
入ってくるなりそう言い放ったユイの表情は自信に満ち溢れていた。

見張り

しばらくして、機材を運び終えた藤巻たちが戻ってきた。
大山とＴＫがいないのは、じゃんけんに負けて機材の見張りをしているからとのこと。
その後、遊佐たちも戻ってきた。
なぜか関根がシルクハットをかぶり先がカールしたヒゲを付けているけれど、触れないでおこう。

見張りを除いた全員が揃ったので、奏と直井が用意してくれた晩御飯を食べることになった。
全員が自分の分を確保――大山とＴＫの分はちゃんと残してある――したところで、ゆりが乾杯の音頭をとる。
「では、明日からの天鼓（てんく）祭の成功を祈って。――乾杯！」
『かんぱーい！！！』
全員が高々と深皿に入った豚汁を掲げた。

和気藹々と食べていると、大山がいないからか、両手に食べかけのおにぎりを持った藤巻がやってきた。
「豚汁はともかく、あの短時間でよくこんな量のおにぎりを用意できたもんだな」
藤巻はなれなれしく片腕を直井の首に巻く。
「ふん。神である僕には下僕がいるからな。あと触るな」
すると直井はめんどくさそうにその腕を振り払った。

「一人で作ったんじゃないのか」
結弦の声を耳にした途端、直井の態度はコロッと変わる。

「はいっ。ひとみ現生徒会長をはじめとした、現生徒会の面々に手伝わせました！」
直井の表情は“褒めてもらえるかも”と期待で満ち溢れていた。
もちろん、褒めはしない。適当に流す。

「へー……って、ひとみ生徒会長？　奏が生徒会長じゃ？」
「ちがうわ。あたしは元生徒会長よ」
結弦の勘違いを奏は訂正した。するとさらに高松が補足する。
「立華さんの任期は一学期までした。二学期からは七月にあった選挙で決まったひとみさんが会長を務めています」

「そうだったのか。たしかに三年生がずっと会長なのもへんだもんな。ところで手伝ってもらえるってことは直井はそのひとみ会長と知り合いなのか？」
「知り合いというより、たまたま空席があったので僕も生徒会の一員になりました。いずれは会長にもなる予定です。もちろん、その前に僕は神ですが」
「……がんばれよ」
「はいっ！」

「食べながらの人はそのままでいいから耳だけ傾けて。明日の予定を話すわ」
「その前に一ついいか？」
松下が深刻そうな表情でゆりの話を止めた。

「なにかしら？」
「肉うどんが……ないのだ」
「へ？　今さら？」

「うどんなら常備してあるやつがあるわ」
奏は隣の部屋から袋に入ったうどんを持ってきた。
「しかし、他の材料が……。このままではつくれんっ」
結弦には松下が段々とやつれていってるように見えた。

ここでゆりがひらめく。
「奏ちゃんの豚汁にうどんを入れるなんてどう？」
「いやいや、それは……」
でもそれは日向ですら躊躇するような案だった。

「おおっ、その手が！」
「いいのかよっ！？」
しかし、松下からは好評価を得た。
うどんと肉とスープがあれば何でもいいのか？

「じゃ、無事に解決したところで話を戻すわね――」

ゆりの長い話を要約するとこうだ。
基本的に見張りは三人ずつで二時間交代。ゆりと椎名以外の女子は免除。
見張り以外のメンバーは基本的に自由行動。
仮眠を取るなり練習するなりあさはかなり、好きにしろとのこと。
ただし夜這いをしたら、あの世を探しに行く名誉な任務が与えられる。
それを聞いた藤巻が「久々だな」って、震えながら呟いたのが印象的だった。
あと、文化祭の開始時刻は九時なので、七時ごろからライブのリハーサルをする。
で、本番は午後二時からなので、十二時半には本部に集合。
それまでは自由に文化祭を見ていていいそうだ。

説明が終わったあと、じゃんけんで見張りの順番を決めた。
その結果、結弦は野田と竹山と一緒に五時から七時まで見張ることになった。

――朝五時半。うっすらと明るくなってきてはいるけど、まだ日は昇っていない。
そんな肌寒いステージの上で結弦は見張りをしていた。

ステージから見える校庭には鳥すらいなくて静かだ。
その静寂を野田が素振りと鼻息で乱している。
なぜか寝てないらしく目の下にはクマができていた。
クマって一日で現れるものなのか？
あと、さすがにステージの上だと機材を壊しかねないので校庭に降りてもらった。

で、もう一人の見張りの竹山はというと来ていない。
腰の状態がかんばしくなく、まだ本部で休んでいるからだ。

その代わりに来たのが見張りを免除されていた岩沢だった。
代わりと言っても、前の組からずっといたらしいが。
もしかしたら、野田と同じように徹夜で練習していたのかもしれない。
岩沢なら十分にありえるな。

今はギターをアンプに繋ぎ、ミュートにして弾いている。
暇なので結弦はそれを眺めていた。
音が出てないからなんの曲かもわからない。

なのに、なぜか見ていて飽きなかった。

それからさらに約一時間。
日が昇ってきても気にせず、ぶっ通しで練習し続けていた岩沢がはじめて手を止めた。
そしてギターをスタンドに立て掛ける。
どうやら、少し休憩するみたいだ。

床に置いてある鞄からタオルを取り出し、額ににじんでいた汗を拭いた。
続いてペットボトルを取り出し、水分補給をする。
またすぐに弾きはじめるんだろうな、と思っていたらこっちにやってきた。

「あんたも物好きだね」
「え？」
結弦の隣に岩沢は座わった。

「音も出してなかったのに、ずっと見てたでしょ」
――気付かれてた。
「ごめん、集中を乱しちゃったか」
「いいや。これでもプロだから、穴が開くぐらい見られてても問題ないよ」

「さすがにそこまでは……」
「そりゃ残念だ」
全く残念そうじゃなかった。

ここで結弦は本部での助けてくれたことのお礼を言うことにした。
「さっきはありがとうな」
「さっき？」
岩沢はとぼけているんじゃなく、本当にわかってないようだ。
「嘘付いてまで誤魔化してくれただろ」
「あぁ、あれね。別にお礼なんて言わなくていいよ。事情なんて知らないし興味もないけど、困った時はお互い様」

「でも、参加するなんて大丈夫か？」
「なんで？」
「なんの勝負かもわからないんだぞ」
過激な勝負方法かもしれない。

「もし仮に危ない勝負だったとしたら、立華さんが止めるよ」
「……たしかに」
目をつぶらずとも、そんな状況が容易に想像できた。

「さて、休憩終わり」
岩沢はそう宣言すると立ち上がった。
「もうすぐリハーサルなのにまだやるのか。すごいな」

「もうそんな時間？」
「ほら、六時半を過ぎてる」
結弦は携帯電話を開いて画面を見せた。

「あー、じゃあ皆が来たら教えて」
岩沢は再びギターを手にした。

天鼓祭

天上高等学校は昨日の様相から一変し、見事に飾りつけられていた。
正門にはカラフルなアーチがかけられ、校舎の窓からは垂れ幕がかかっている。
看板も客を一人でも誘い込むべくいたるところに置かれ、もうすでにいい匂いを放つ屋台なんかもあった。
生徒達もコスプレをしていたり、変な仮面をつけて校内を闊歩していたりと、天鼓祭の準備は万端だ。

例年、理事長であるチャーが校内放送で天鼓祭の開始を宣言している。
生徒達は皆、その放送を心待ちにしていた。

ＳＳＳのメンバーはというとライブをやる会場であるステージに集合していた。
男子メンバーはいつも通りの服装だが、女子の何人かは昨日とは逆の制服を着ていた。
具体的に言えば奏がセーラー服になっていて、ガルデモの四人はブレザーだ。

奏がセーラー服な理由はよくわからないが、ガルデモがブレザーなのはおそらく、目立ちにくくする――男子はほとんどが、女子も六割ぐらいがブレザーを着ている――ためだろう。
有名人は大変だな。

それと、奏に関しては違う点がもう一つあった。
カツラ――じゃない、ウィッグをかぶって長い髪になっていた。

あのお月見の日にあった戦いは関根が勝ってたのか。

で、もうリハーサルは終わっていて、今はゆりが最後の確認をとっている。

「本当に機材の見張りは竹山君と野田君に任せちゃっていいのかしら」

「まだ長く歩いたりはできませんので構いません。それと、僕のことはクライス――」

「おう、ここは任せて先へ行け！」

「使いどころおかしいだろ」

日向がツッコミを入れたその時、スピーカーから耳鳴りのような音が鳴る。

『あーあー』

続いてチャーの声が聞こえてきた。

そして、無駄な前置きを口にすることなく本題へと入る。

『九時をまわった。これより天鼓祭を開始する。開場！』

こうして、天鼓祭は始まった。

「おっしゃー！　全部制覇するぞー！」

ＳＳＳの中で真っ先に動いたのはユイだ。

急に発生した突風と共に、ものすごいスピードでスロープに突入する。

「危ないことしてんじゃねーよ！」

日向は慌てて車椅子のハンドルを掴むも、ユイのスピードは緩まらなかった。

どこにそんな力があるんだ？

「先輩の財布を早く空にしますよ！」

「のわあああああああ！！！」

校庭に降り立ってもなお勢いが衰えることなく、そのまま日向を引きずり校舎の方へと消えていった。

「しおりん、ゆさゆさ、あたし達も行こー」
関根たち、そして
「Ｗｅ　ｇｉｖｅ　ｓｔｒｅｅｔ　ｐｅｒｆｏｒｍａｎｃｅｓ！」
「うむ」
ＴＫと松下もステージを後にした。

そんなメンバーを見ていた藤巻が毒を吐く。
「あんなにはしゃいで子供かっつーの」
が、そんな口調とは裏腹にどこかソワソワしていた。
早く行きたくてしょうがない。そんな様子だ。

「おーっと、可愛いねーちゃんがいるかもしんねぇな」
「一般開放は十時からだろ」
「こうしちゃいられねぇ！　大山ぁ、ナンパしに行くぜ！」
急に理由をひねり出した藤巻は、結弦の指摘など物ともせず、大山を連れて正門の方へと向かった。

「さて、そろそろあたし達も行きましょ」
そう言ってゆりは奏の手をとった。すると奏は結弦の手をとる。
さらに直井が結弦の空いている方の手をとった。
「まぁ、そうなっちゃうわよね……」
ゆりの顔にはありありと「余計なものがくっ付いてきた」と書いてあった。

「岩沢さんたちはどうするの？」
奏が残っている三人にたずねた。
「あたしは物足りないからここに残って弾いてる」

「関根たちのクラスでなんか出しているらしいから、そこに行く予定」
「ノープランです」
まさに三者三様の答えだ。ちなみに椎名はいつの間にか消えていた。

「それだったら……高松君はひさ子さんをエスコートしてあげるってのはどう？」
「なるほど、紳士キャラも悪くありませんね」
ゆりの案に高松は乗り気だ。
「うーん、じゃあお願いしよっかな」
そして、ひさ子も受け入れた。

「あ、そうそう岩沢さん」
「ん？」
ゆりに呼ばれた岩沢は、ギターをアンプに繋ごうとした体勢のまま振り返る。
「校庭でなにかやるみたいだし、裏に隠れるなり幕を降ろしちゃっていいからね」
「わかった」

岩沢たちに別れを告げ、四人は校舎に向かって並んで歩いていた。
――手を繋いだまま。
このままじゃ絶対に目立つし、通行の妨げにもなる。
そう考えた結弦はなんとか普通な状態――手を離す方向へ持っていこうとした。

「なぁ、なんで手を繋いだままなんだ？」

「結弦は知らない？　デートのときは繋ぐものよ」
奏の目にはどんな風に映っているんだろう。

「デートなのか、これ」
「ちがった？」
奏では不思議そうに首を傾ける。
もしかしたら、デートの定義自体が違うのかもしれないな。

そこにゆりが口を挟む。
「嫌なら離せばいいじゃない」
どうやらゆりは、微塵も手を離す気はないようだ。
とは言え、奏とゆりが手を繋いでて、自分は離すのはなんか癪だった。
だから、結弦は先に直井の方をなんとかすることにした。

直井相手に下手な交渉を持ちかけても無駄だ。となれば――
結弦は無言のまま素早く、握られた自分の手を引き抜こうとした。
すると直井は万力のような力でそれを拒絶する。

その後何度も挑戦したが、直井の反応速度と力は結弦の能力を凌駕していた。
――直井もダメか。
結弦は諦めると同時に肩を落とした。

その直後、直井がとんでもないことを思いつく。
「そうだ！　音無さんと元会長が手を離せば途端にダブルデートに――」
これでますます手が離せなくなった。

「ところで、どこに行くんだ？」

「そうねぇ……奏ちゃんは行きたいトコある？」
「考えてなかった。みんなは？」
「音無さんと二人っきりになれる場所に決まっているだろ」
誰も、お目当てはないようだ。

そこで結弦は一つの提案をする。
「じゃあ、飯にしないか？」
「お昼にはまだ早いでしょ。朝ごはんにしては遅いし」
が、即座にゆりが反対してきた。

「でもさ、これから人が増えて十二時近くになれば込むし、奏は午後からライブがある。満腹の状態で歌うとお腹が痛くならないか？」
結弦が問いかけると奏は頷いた。
「音無君の言う通りね」
「他人の体調管理までやってのけるなんて、さすがは音無さんです！」
ゆりや直井も納得してくれた。

「決まりだな。それで食べたいものはあるか？」
「あるわ」
意外にも奏が一番に反応した。
「なにが食べたいんだ？」
「祭りと言えば……」

ここはやっぱり麻婆豆腐か？
いやでも、このパターンで麻婆豆腐が出てきたことはない。
だから、別のものだろう。でも予想が付かないな。

「“わたあめ”か“ケバブ”よ」

ケバブ

結弦は奏の“まさかのチョイス”に戸惑っていた。
「焼きそばじゃなくて、ケバブ!?」
「わたあめでは、さすがに腹は膨れないだろ」
ゆりも同じ気持ちのようだ。直井はそうでもないみたいだが。

みんなの反応がよくなかったからか、奏はしゅんとした。
それを見た結弦は慌ててフォローに入る。
「嫌なわけじゃないんだぞ？　でもさすがに、ケバブってのは売ってないんじゃないかな？」
「売ってるよー」
「そうそう、売ってるけどさ、やっぱり……って、どちらさまですか？」

さり気なく会話に紛れ込んだ、やや左の方で前髪を分けているショートカットの女の子は、人懐っこそうな笑顔をこちらに向けていた。
「知り合い？」
結弦がたずねると、奏は頷き、ゆりと直井も肯定した。
「え？　三人とも？」
まさか全員の知り合いだとは思ってなかった結弦は驚いた。

「あー、音無先輩はわたしのこと知っててくれてないんですか？　ひどいです。こう見えても生徒会長なんですよ」
結弦の一連の行動を見ていた会長は、わざとらしく頬を膨らませながら、ブレザーの袖についている生徒会の腕章を見せた。
「ご、ごめん。えーと、ひとみ会長さん――で合ってるか？」
「あってます！　けど、次忘れてたら……」

どうするかは考えてなかったらしく、人さし指をアゴに当て、空を見上げながら考えだした。
が、なかなかいいアイデアが浮かんでこないらしく、眉間にしわを寄せる。

「それで、会長はどうしてこんなところに？」
そんな会長の思考を直井がぶった切った。
すると会長は眉を吊り上げ、直井に詰め寄る。
「それはこっちのセリフだよ。生徒会は見回りするって『あれ、耳にタコをつくるのが目的だっけ』って錯覚するぐらい言ったよね？」

「でもっ、僕には音無さんとデートするって使命が――」
焦りの表情を浮かべた直井は、同意を求めるように結弦を見つめる。
そんな直井に、結弦はいつものように優しい言葉をかけた。
「行ってこい」

「ではでは、ごっ機嫌よー！」
スキップしだしそうなほど上機嫌な会長の後ろを、直井はとぼとぼとついて行った。
――ん？　今、会長が振り返ったような。
でも、一瞬過ぎて表情までは見えなかった。

ここで結弦はあることに気がついた。
「あ、そういえばお店の場所を聞くの忘れてた」
「場所なんて限られてるし、すぐ見つかるでしょ」
「それもそうだな」
最悪、誰かに聞けばいいか。

「ところで奏ちゃん、わたあめとなにが食べたいんだっけ？　ケ、ケ……」
「麻婆豆腐よ」
「え？」
「こっちから匂いが漂ってくるわ」
奏は結弦とゆりを軽く引っ張りながら歩き出した。

目的のお店は奏の嗅覚の活躍もあって、すぐに見つかった。
「麻婆豆腐ヤキソバわたあめケバブ屋……。これはまた、色んな系統に手を出したもんだな」
校舎の一階にあったこのお店は、まるで奏の好みをピンポイントで狙ってたかのようなラインナップだった。

偶然にしては出来過ぎてる。
ここ、確実に奏のファンクラブが絡んでるよな。
恨まれてる人間が入っていいんだろうか。
結弦は躊躇したが、奏がいるので安全だろうと高をくくり、引き戸を開いた。

「いっ、いらっしゃいませー！」
中に入ると、ブレザーの上からエンプロンをつけている女の子が奏に気付いた。
その途端に満面の笑みへと変わる。
ただ一瞬、でも確実に、結弦を睨みつけてきた。
間違いない。ここは敵の陣地だ。
結弦は警戒を深めた。

三人は一番奥にある窓際の席に案内された。
「立華先輩は外がよく見える一番奥の特等席に、仲村先輩はその隣に、残りの人は自由に座ってください。このテーブル以外でもいいですよ」
座席――奏の特等席は王様のイスみたいにゴージャス――まで指定してきたが、結弦に対しては投げやりだ。

そんな接客態度を受け流した結弦は奏の正面の席に座ろうとしてイスを引く。
しかし、その椅子の座面からは剣山のように針が突き出ていた。
徹底してるな。
結弦はゆりの正面の席に座らざるを得なかった。

「では、メニューをお持ちするので少々お待ちください」
少女はさり気なく結弦の肩に肘をぶつけてから、部屋を出ていった。
おそらく、隣の部屋に調理している部屋があるんだろう。
ただ、こっちの部屋にメニューを用意してない理由がわからない。

ふと、隣のテーブルに目をやると、そこにはしっかりメニューが用意されていた。
瞬時に結弦は理解した。彼女は特別メニューをとりにいったんだと。
そして、自分に渡されるメニューがろくなもんじゃないんだろうとも。
その予感は的中する。

「お待たせしました。どうぞ」
それぞれに配られたメニューは作りから差があった。
簡単に言えば高級レストラン、普通の手作り、ティッシュだ。

とりあえず、結弦は綺麗に折りたたまれたティッシュを開いてみた。
ちゃんとメニューは書いてあるようだけど、読めないな。
予想以上に酷い代物で、結弦は苦笑いしかできなかった。

「音無君、はい。奏ちゃん、あたしにも見せて」
するとゆりが自分に渡されたメニューを結弦に渡し、自分は奏のメニューを一緒に見だした。
「ありがとな」
ゆりに感謝しつつ結弦は、焼きそばと一応ケバブも注文してみた。
奏は一通り、ゆりは結弦と同じで焼きそばとケバブを注文した。

数分後、麻婆豆腐とわたあめと焼きそばが先に運ばれてきた。
麻婆豆腐からは刺激的な香りと湯気が立ち昇り、わたあめはふわっふわで、焼きそばもアツアツ。全て出来立てのようだ。
ただ、結弦の焼きそばだけは冷めていた。
ここが、ラーメン屋さんとかじゃなくてよかったよ。

結弦たちが食べ始めようとしたその時、前触れもなく教室の引き戸が大きな音を立てて倒れる。
そこから小さな屋台と共に十人ぐらいが突入してきた。
そしてイスやーテーブルを掻き分け、なぎ倒しながらこっちへ突っ込んでくる。
そのまま結弦に体当たりをかます——直前で急停止した。

「お待たせしました！　ドネルケバブです！　ウチのお店は本格的なんです！」
屋台の中では、大きな串に刺さった肉がぐるぐると回り、横についている機械から発せられる熱で焼かれていた。

「えーと、ドネルケバブって言うのはですねー……」
「俺の知り合いがトルコ人で――」
「サインください！」
「あのね、あのね、――」
「隠し味は塩だぜぇい！」
「このお店は立華先輩が去年ケバブを食べ損ねて残念がってたって聞いて――」
六人がかりで説明している間に、残る三人がケバブを作り始めた。
焼かれている肉を長い包丁でスライスし、パンのようなものの中に入れる。
さらに野菜をいれ、最後に塩をかけて完成。
これがケバブってやつなのか。
完成した三つのケバブはどれもおいしそうだった。
白い皿に載せられ、三人の目の前に置かれた。
結弦の目では、奏やゆりのケバブとの違いは見つけられなかった。
もしかして、これには細工してないのか？
かぶり付いてみる。
――二重の意味で甘かった。
最後にかけたのは塩じゃなくて砂糖だったみたいだ。
さすがに段々と気が滅入ってきたな。
けど、そんな暗い気持ちはケバブを食べる奏の姿が目に入ったことですぐに吹っ飛んだ。
女の子らしい小さな口でかじりついて、満足そうに口を動かす姿。
今なら、「重曹とかじゃなくてよかった」、ってポジティブに考

えられるな。
荒れた教室を元に戻しているファンクラブの人達が、こっちをチラチラと盗み見ているのも、もはや気にならない。
一通り食べ終わった奏は、最初に半分だけ食べて残りを取っておいた麻婆豆腐にレンゲを伸ばす。
幸せそうに麻婆豆腐を食べる姿を見て、結弦の心は完全に癒された。

食事が終わったあと、奏はトイレに行ってしまった。
だから、帰ってくるのを待っている間はゆりと二人っきりだ。
するとゆりはここぞとばかりに、でも他の人には聞こえないように小声で結弦に話しかけた。
「もう感づいているとは思うけど、ここは奏ちゃんのファンクラブが有志でやってるお店よ」
「やっぱりか」

「じゃあ、これは気付いてる？　さっきのひとみ会長も奏ちゃんのファンクラブの一員よ」
「なっ！？　あの会長がか！？」
驚きすぎて、つい大声を出してしまう。
すぐに我に返り、ソーっとファンクラブの方を見てみたら冷ややかな視線を返してきた。
いや、ここでは元々そうだったな。
「す、すみません」
結弦の謝罪は無視された。

結弦は声のトーンと話題を戻す。

「さっき会った時は普通にしてたじゃないか」
「そりゃ、いい人な上に頭もよくて、奏ちゃんの前でもあったし、過激派でもないからね。生徒会に入ったのも奏ちゃんと一緒に仕事がしたいからって噂よ」
「人は見かけによらないな」
でも言われてみればたしかに、奏の方をよく見ていたような……。
「そうね。ま、好きってより憧れや目標みたいな感じらしいから心配は要らないと思うわ」
「そっか、教えてくれてありがとうな」
「それともう一つ、――」

ナンパ

麻婆豆腐ヤキソバわたあめケバブ屋から出た結弦たちは、奏を真ん中にして手を繋ぎ、校舎の中を目的もなくぶらぶらしていた。
とは言っても暇なわけじゃない。

「立華会長、ウチに寄っていって下さい！」
「あたしはもう会長じゃないわ」
「すみません、ついつい癖で」
こんな風に、生徒会長を退任してもなお人気が健在な奏に自分達の所へ寄ってもらおうと、声をかけてくるからだ。

そして奏は誘われるたびに立ち寄る。立ち去るときにはゆりがライブの宣伝をする。この繰り返しだ。
なので暇を持て余すどころか、逆に忙しかった。
もちろん奏のファンクラブらしき人たちもいて、結弦はちょくちょく睨まれていた。
唯一救いなのが、さっきの過激派の店のやつらのような攻撃的な人達には当たってないって事だな。

そんな感じで色々とまわっていると、女子生徒たちに囲まれている五十嵐先生が目に入ってきた。
がっしりと捕まれた両方の腕を反対の方向へ引っ張られ、明らかに困っている。

「さすが五十嵐先生。モテモテだわ」
「そんなに人気なのか？」

「奏ちゃんほどじゃないけれど、先生の中ではダントツよ」
「知らなかったな。……ん？」

ゆりと話してたらふと、あの女子の中に見覚えのある後姿があることに結弦は気付いた。
「あれって入江か？」
メイド服を着てなにか板のようなものを持っているものの、あの髪の毛の長さや色からして間違いようがない。
「違う。彼女は入江さんじゃないわ」
しかし、即座に奏に否定された。

「じゃあ、あれは誰なんだ？」
「気になるなら声をかけてみればいいじゃない」
ゆりはそう言うなり、歩幅を大きくしてどんどんと近づいていく。
そして空いてる手で彼女の肩を軽く二度つついた。

不思議そうに振り向いた彼女は――本当に入江じゃなかった。
知り合いでもない。見覚えすらもなかった。
こんな髪だったら、普段から目立つと思うんだけどな。

すると突然、彼女の表情が明るくなった。
「あっ、入江さんだと勘違いしたんですねっ」
彼女はウィッグを持ち上げて黒い髪を見せてくれた。

「それってなんかのキャラとかじゃなくて、入江のコスプレなのか？」
「はいっ、みゆ喫茶ですのでっ」
今度は紐で首から下げているボードを持ち上げ、そこに張ってある『メイドみゆ喫茶』と書かれた華やかなポスターを結弦たちに見せた。

「入江さんはここにいるはずなので、時間があればっ」
「必ず行くわ」
「ありがとうございますっ」

奏が約束してしまったところで、五十嵐先生が結弦たちに気づき話しかけてきた。
「おぉ、立華と仲村、あと音無か。楽しんでるか？」
そしてそこで生まれた一瞬の隙を突き、囲いから抜け出してこっちに逃げてきた。
ただ、女生徒の一人を振り切れずに右腕はまだ占領されたままだ。

「今日の午後二時からガルデアのライブがあるので是非来てください」
そんな先生へすかさず、ゆりがライブの宣伝をした。
すると笑顔が引きつる。
ここも先生にとっては安息の場ではなかったみたいだ。

「すまん、仲村。俺は忙しくてな。行けそうも――」
先生が遠まわしに断ろうとしたその時――
「忙しいなら、ライブに行けるよう、わたしがスケジュール管理してあげる！　もちろん、スノファイにも来てもらうよ！」
腕にぶら下がった生徒が奏に熱い視線を送りながら、とんでもない提案をした。
この子も奏のファンだったのか。いや、正確には奏と五十嵐先生のファンだけども。

「あっ、抜け駆けっ？　先生っ、あたしならみゆ喫茶とライブと仕事と他全部の行動予定表を作れますっ」
そこへ入江のコスプレしている子も対抗しだした。二人の間に火花が散る。

「ちょっと、二人ともズルイよ」
「せんせーのしゅみはなんですか？　わたしはかんさつです」
さらにこの二人の戦いを皮切りに他の子達も動き出す。
そして、五十嵐先生は再び囲まれた。

これを見ていた結弦は、つい心の中で思っていたことを口にしてしまう。
「この学校は変なやつが多いな」
「安心しなさい。普段から変なのは基本的にＳＳＳメンバーぐらいよ。今日はみんなハメを外しすぎちゃってるのね」
ゆりの言葉に奏もウンウンと頷いた。
――ＳＳＳの変なやつって野田とかあそこら辺を指してるんだよな？

結弦がそれをきちんと確認しようかしまいか迷っていると、突如ゆりが大きな声をあげた。
「え！？　なんで！？」
視線の先は窓の外。
「二人とも付いてきて！」
なにがあったのか結弦も見ようとしたが、窓を覗き込む前にゆりが動き出した。

奏に注意されながらも、廊下を走り階段を駆け下り外へと急ぐ。
ゆりは途中から繋いでいた手まで離した。
かなりの緊急事態みたいだな。

下駄箱を飛び出て、踊り狂うＴＫと松下の横を目もくれず通り過ぎ、三人は正門までやってきた。

時刻は十時をまわっているので正門付近はすでに一般人でいっぱいだ。
そんな中をゆりは迷うこともなく突き進む。
そして、ゆりはお目当ての人物を見つけたようだ。

藤巻と大山、そして見知らぬ私服で紫がかった赤色の髪をツーサイドアップにしている少女。
どうやら藤巻はその少女をナンパしているらしい。
大山は顔を真っ赤にして、それを止めようとしている。

で、少女はというと全く相手にしていなかった。
清清しいくらい無視。でも、なぜかその場から離れようとしてなかった。
待ち合わせでもしてんのか？

「なにしてんのよっ！」
そこへ乱入したゆりは、怒り心頭といった様子で藤巻にドロップキックをかます。
その一撃は見事に頭を捉え、藤巻を吹っ飛ばした。

奏はすぐさま注意する。
「ゆり、こんな場所でジャンプしたら下着が見えちゃうわ」
「大丈夫よ。今日は見えてもいいやつだから」
「奏、ドロップキックの方を先に注意してくれないか？」

その横で、慌てて駆け寄った大山が藤巻の状態を確認していた。
「……気絶してるよ！」
「当然じゃない。手加減してないもの」
大山の報告を聞いたゆりは満足そうに頷く。

ここまで沈黙を保っていた少女が急に口を開いた。
「ゆり姉、あたしなら大丈夫だったのに」
「あたしはぼたんの事は信用してるけど、知らない男は信用してないわ」
「いや、それ藤巻だから。って、ゆり姉？」
この少女はたしかにゆりのことをそう呼んだ。
たしかにこの二人、少し似てるな。

「結弦は初めて会うのね。この子はゆりの三つ下の――」
「しまった、久しぶりに会ったからわからなかったよ！　その子はゆりっぺの妹だったんだ！」
奏の紹介に被せるように大山が大声で説明してきた。
「――妹の“ぼたん”ちゃんよ」
が、奏は気にせずに言葉を続けた。

「あ、どうもはじめまして」
ぼたんと紹介された少女は丁寧にお辞儀した。
「えっと、音無結弦です。ゆりにはいつもお世話になってます」
結弦もお辞儀し返した。

「今日は一人できたの？」
「ううん、“ひな”も“はなき”も来てるよ。あの柄の悪い人を怖がってあそこに隠れてるけど」
そう言って校門を指差した。
たしかに、そこから誰かがこっちの様子をうかがっている。

「二人とも、おいでっ！」
ゆりが呼ぶと、警戒しつつもこちらにやってきた。
茶がかった黒いセミロングの女の子と茶色で短髪の男の子だ。
ぼたんちゃんと一緒で、ゆりに似ている。

この二人もゆりの妹と弟なのか。

「えっと……仲村ひなげし、中学校一年生です」

「はなき、小五」

自己紹介を終えると、ひなげしはゆりの後ろに隠れ、はなきは顔を背ける。

その理由をぼたんが教えてくれた。

「ひなは臆病で、はなきは人見知りなんだよね」

ぼたんは結弦にさらに近づくと耳打ちしてきた。

「ところでさ、ゆり姉とはどうゆう関係なの？　一緒にいたみたいだけど」

「えっ？」

唐突な質問に結弦は一瞬頭が追いつかなかった。

「おっ、万年日照りのゆり姉に男の影がようやく？」

嬉しそうにしたぼたんだったが、すぐに結弦と奏が手をつないでる事に気付く。

「と思ったけど本当に驚いただけみたいだね。ざーんねん。……ゆり姉、ひな、はなき、行こ！」

「え、ちょっと。あたしは奏ちゃんと――」

「そんなんだからゆり姉はモテないんだよ。はなき手伝って！」

ゆりはぼたんとはなきに両腕を掴まれ、連れていかれた。

レンゲ

大山と一緒に藤巻を保健室に連れて行った後、結弦は奏と二人っきりで文化祭をまわることになった。
とは言え、状況はゆりと一緒だったときと大きく変わらない。

「会長さんっ、見ててってー。安いっす安いっすよー！」
校舎から出て少し歩いていると、また声をかけられた。
今回は男子が一人だけのようだ。
「あたしはもう会長じゃないわ」
「すみませんっす！」
このやりとりも今日何度目だろうな。

「ところで、ここはレンゲしか売ってないのか？」
下に敷いたシートの上に、レンゲだけが並べられていた。
「はいっそうっす！」
「去年もこうやって露天を開いていた。このレンゲも去年ここで買ったのよ」
奏は愛用しているレンゲを取り出した。

「あっ、覚えててくれたんすか？　ありがとうございます！　陶芸部冥利に尽きるっす！」
「へぇ、この学校に陶芸部なんてあったんだな。直井にも教えてや……いや、あいつなら知ってるか」
結弦は陶芸部なのにレンゲしかないことは、触れないでおいた。

「こう見えても陶芸部は十年の歴史があるんすよ！」
「この学校って創立五年じゃ？」
「……」

指摘した途端、表情がみるみると曇っていく。
たぶん、奏がいるから見栄を張ったんだ。
やっぱり、この男もファンクラブなんだな。

「なんかすまなかった」
「いえ、嘘ついた自分が悪いんす」
悪くも無いのに結弦が謝ると、陶芸部も気まずそうに謝る。
「こっちはバランスがいい。こっちはすくう時の進入角度が絶妙だわ」
奏はそんな二人をそっちのけでレンゲを吟味していた。

「結弦、どっちがいいと思う？」
奏が両手に持った模様の付いていない真っ白なレンゲ。
「えーと……両方ともいいんじゃないか？」
結弦には違いが全くわからなかった。

「アルテマ・スクゥとリーサル・ボマーの二振りを選ぶなんて、さすがお目が高いっす」
でも、陶芸部にはきちんと違いが判別できているらしい。
ネーミングセンスはおかしくても――奏に合わせたのかもしれないが――さすがは製作者ってことか。
「やはり、スクゥの長所は……」
そして、その製作者の陶芸部は色々と解説し始めた。
奏もそれにしっかりと耳を傾けている。

それを見ていた結弦は妙な疎外感に包まれた。
実際、話についていけてないし、置いてきぼりなんだけどな。
だからか、それを打破すべくあの二人の間に割って入りたくなった。
欲を言えば奏をこの場から連れ去りたかったが、さすがにそれは

不自然なので諦めた。

間に割って入るためにはなにをすればいいのか。

結弦は目に付いた二本の真っ白なレンゲを手にとってみた。

正直、スクゥやボマーと同じ品物にしか見えない。

それでも結弦は勝負に出た。

「これなんてどうかな？」

「……調和がとれている逸品ね。それで麻婆豆腐を食べれば楽しくなりそう」

奏は食べる場面を想像したのか、微笑んだ。

――これって最上級の褒め言葉じゃないのか？

運良く素晴らしい品を選べたみたいだな。

結弦はひとまず安心した。

「し、素人がその二振りを一発で選ぶなんて考えられないっす……」

対して陶芸部は異様な驚きを見せていた。

頭を抱え、唸りながら体をうねらせている。

おそらくだけど、この二本が一番自信のある傑作だったんだ。

「これをどうするの？」

陶芸部に気をとられている結弦に奏は質問してきた。

どうするってどういう意味だ？

……もしかして、奏は遠まわしに買ってくれとおねだりしているのか？

その考えに行き着いたとほぼ同時に、結弦の口は勝手に動いていた。

「買う！　買って奏にプレゼントする！」

「え、――」

「スッヒオォォォォォ！」

結弦の言葉を聞いた陶芸部がなぜか、この世のものとは思えない叫びをあげた。

急になんだ!?　壊れたか？

結弦は頭をフル回転させる。

そして一つの答えを導き出した。

そうか、これは本当に自信作で、展示だけしていたレンゲだったんだ。

「売り物じゃなかったのか。すまんっ」

結弦はすぐさま謝罪した。

「違うっす。売り物で合ってるっすよ」

そうは言いつつも顔は真っ青だ。

奏の前だから引くに引けないのかもしれない。

「無理はしなくていいんだぞ？」

「平気っすから！」

「そ、そうか」

結弦は陶芸部の気迫と意地に負けた。

「奏はどっちが気に入ったんだ？」

結弦の問いかけに奏は不思議そうな表情で首をかしげる。

――しまった、どっちも気に入ってたのか。だったら両方ともプレゼントした方がよかったな。

そうだ、内緒でもう一本も買っておいて、後でプレゼントすれば

いいんだ。
密かに財布の中身も確認してみる。
実はケバブ屋で全額支払っていたので――ゆりの「奏ちゃんの分も払っとかないと何されるかわからないわよ？」と言うアドバイスを受けて――減ってはいるがまだ余裕はある。
これなら問題ないな。

そこでちょうど、悩んでいた奏がどっちにするか決めたらしく、結弦が右手に持っているほうを指し示した。
「……こっちが女性用よ」
「女性用？」
レンゲに男性用女性用があるのか！？

「二振りで二千百円になるっす」
そこへ落ち着きを取り戻していた陶芸部が、考える間を与えないようにしているかのごとく結弦からレンゲを奪い、支払いを求めてきた。
しかも、さりげなく二本ともだ。
ただ、最終的に両方とも買うつもりだった結弦は、なにも言わずに財布からお金を出した。

そして紙袋に入れてもらった二本のレンゲを受け取ろうと手を伸ばしたその時、頭に冷たい感触が。
「雨か？」
「違うわ。雪よ」
結弦の勘違いをいつものように奏が間髪入れずに訂正してくれた。

「って、雪！？　こんな時期に！？」
見上げると本当にちらほらと雪が降ってきていた。
「風に流されて、こっち側にも降ってきているのね」

なのに奏は驚いた様子を見せていない。
なんでだ?

「あの、受け取ってくださいっす」
「あ、悪い」
結弦は考え事を中断し、陶芸部から二本のレンゲを受け取った。

その二本のレンゲを両方とも奏に差し出すと、奏は再び首をかしげた。
「ペアレンゲだから男用は結弦が持つのよ?」
「ペアレンゲ?」
結弦は自分の耳を疑った。
ペアリングなら知っている。けど、そんなノリでペアレンゲ?

その時、結弦たちの元に駆け寄ってくる二人がいた。
「助けてくださいッ、会長ッッッ!」
「もう、ダメなんですッッ!」
ぜんぜん知らない女子二人だ。かなりの緊急事態らしく化粧が崩れるのも気にしてはいない。
「あたしはもう会長じゃ――」

「「このままじゃ私たち、なぶり殺されちゃいますッ!」」

雪

結弦と奏は二人に先導されて校庭にやってきた。
しかし、その校庭は結弦の記憶にあるそれとは異なっていた。

勢いが強まっている雪。
それが積もりに積もり、一面を真っ白く彩っていた。
まさに雪化粧。まさに銀世界だ。

しかし、その雪も校庭の一部にしか積もっていない。
ＳＳＳのライブ会場や校外にある住宅街には、積もるどころか、ほとんど雪が降っていなかった。
まるで計算されているかのように。

その局地的な雪景色の中に、大人が余裕で通れるぐらいの大きさのアーチが二つ――赤色と青色――建っている。
両アーチの近くにはそれぞれ五十人以上の人たちが集まっていた。
すごい大所帯だな。

そして赤色のアーチ近くの集団の中には、見覚えのある連中が立っていた。
そう、ゆりをはじめとした戦線メンバー達だ。
全員がいるわけじゃないが半数以上のメンバーが揃っていた。もちろん、ゆりの妹達もいる。あと、入江の偽物が数人いるな。
他にもチャーや五十嵐先生がいて、赤の方はかなり豪華な顔ぶれだった。

逆に青のアーチ付近はというと、人の多さだけなら赤と同じぐらいだけども、目に付くのはケバブ屋にいた過激派が数人と、こっち

にも入江の偽物が数人いるぐらいか。
あとは知らない人ばかり。

それにしても、これとなぶり殺しがどうやったら繋がるんだろうか？
みんなリラックスしているように見えるんだが。
こっから惨劇が起こるなんて想像できないな。

――結弦が少し拍子抜けしていると突然、奏が手を離して駆け出した。
まさか何か見つけたのか？
結弦も急いで後を追う。

奏が向かった先は青いアーチの方だ。
「会長だぁッ！」
それに気付いた面々が喜びの声をあげる。
まるで逆転ホームランを打ったかのような歓声だった。

「というか、なんであいつら頭に紙風船をつけてるんだ？」
さっきは遠目で気づかなかったけれど、青いアーチ付近は青、赤いアーチ付近は赤の紙風船を装着していた。
おそらくは髪に直接つけているのではなく、紐かなんかでアゴからぐるりと頭頂部まで巻き、それに風船を括りつけるか貼り付けてあるんだろう。

「あの風船はですね、あっ！？」
結弦たちを連れてきた一人が驚きの声をあげる。
その視線の先にいるいち早くゲートに到着した奏は、高く飛び上がり――

「ガードスキル――ハンドソニック」

瞬時に青い紙風船を五人分なぎ払った。

着地してすぐ、さらに別の紙風船へと狙いを定める。そして――

『立華先輩、スノファイはまだ始まってませんよー。それと立華先輩達にはそっちチームに入ってもらいます。本当はクジでチーム分けなんですけど赤に強い人が偏っちゃってますんで！』

割る直前で奏は停止した。

「今のスピーカーからの声ってひとみ会長か？」

『そうですよ。あたしが司会進行を任されている現生徒会長です！あっ、こっちですこっちー』

結弦は少し離れたところにテントを発見した。

そして、中にイスから立ち上がり左手を机について、右手を元気よく振っている会長の姿を確認した。

その隣には直井までいる。

『どうやら、音無先輩は初めてで、なーんも理解しないようですね』

会長は嬉しそうに口元を弛ませながら座る。

『ならばっ、説明してしんぜようっ！　うちの直井がねっ！』

「人に丸投げするのか！？」

『音無さん、ご安心を。神である僕はどんなにちんけな催しでもきちんと把握してます。だから、説明など造作もありません』

そう言い放った直井は、手にしていた何かを自分の背中に隠した。

「ここにいるのはスノファイに参加する人たちよ」

すると、奏が先に説明を始めた。

「そのスノファイってのはなんなんだ？」

「スノーファイト、つまりは雪合戦のことね」

「雪合戦て……。じゃあ、雪はどうやって調達しているんだ？」
「毎年、理事チャー先生が降雪機をたくさんレンタルしてきて、屋上から降らせているわ」
見上げるとたしかに、屋上の方から強く雪が吹き出ていた。

「ルールはシンプルに二チームに分かれて雪を投げ合うの。頭につけた紙風船が壊されたら退場。そして敵チームのゲートを通り抜けたらほうの勝ちよ」
『補足だけど、今年からはさっきの立華先輩みたく故意に雪以外で紙風船を割るのは禁止ですよー。あと試合の前に作戦会議タイムを設けます。この間に雪で壁を陣地内につくったり、どう攻めて守るかを話し合ってくださーい』
『説明ご苦労』
結局、直井はなんの説明もしなかった。

ゆり達は結弦が説明を聞いている間に、選抜メンバーで会議を始めていた。
「まずは戦力の確認からする。めんどくさいから役に立ちそうな人だけね。椎名さん、ひさ子さん、高松君、ＴＫ、松下君、日向君、おじチャーん、五十嵐先生、……」
「なぁ、先にはじめるなんてひきょ――反則じゃねーの？」
「ひなっち先輩、ビビってんですか？　って、イタイッ！　先輩、イタイです！　先輩がイタイですッ！」
ユイの挑発じみた言葉を聞いた日向は無言でアイアンクローをくり出した。

そんな二人を無視してゆりは話を進める。
「対して向こうは奏ちゃんと音無君ぐらい。総合力はまだ勝ってる

わね」
「圧勝じゃないの？」
「ひさ子さん、奏ちゃんの戦闘能力と音無君の悪知恵を甘く見ないで。油断すれば割られるわよ」
そこにずっと話を聞いていた五十嵐がポツリと感想を漏らす。
「お前ら、相手が同じ部活の仲間でも容赦しないんだな」
するとそれを聞き逃さなかったゆりが「手加減をする方が失礼ですから」と返した。
「じゃ、次はルールの確認に移るわね。ルール上、打撃や武器での紙風船への攻撃はアウト。でも裏を反せば防御に使うのは構わない。そして攻撃でも雪を使ってさえいれば問題ない」
「つまりはどうことでしょうか？」
「……雪でつくったクナイなら使用可能だと？」
「その通りよ」
「Ｉｃｅ　ｗｅａｐｏｎ」
高松より先に椎名がゆりの言わんとしていることを理解した。
「なるほどな。でもさ、そんな回りくどいことしなくても椎名のスピードがあればゲートをくぐるのは簡単なんじゃ？」
「ゲートをくぐる瞬間を見てもらえなきゃ意味ないじゃない。審判は一般人なのよ」
「スピードを落とせば集中攻撃にあうだけだしな」
ようやくユイの顔から手を離した日向が出した案はゆりとチャーによって即座に否定された。
「まったく、ひなっち先輩はアホですね」
「それで音無君はまず、椎名さんを潰しにくると思うわ」
「一番動きが素早くて厄介だからな」

松下をはじめとして、ほぼ全員がゆりの考えを肯定する。
「……面白い、受けてたとう」
椎名は不敵に微笑んだ。

しかしそこへ、日向が異論を唱えた。
「椎名を最初に狙えば被害が大きくなるし、俺だったら後回しにするぞ」
「もちろん正攻法じゃこない。これを使ってくるのよ。時間がなかったからつくりかけだけど」
ゆりはあらかじめ用意してあった手のひら大の雪の塊を皆に見せる。

「ただの雪玉、ですか」
「違うわ。つくりかけって言ったでしょ。もっとよく見なさい」
高松はゆりから雪玉を受け取ると、穴が空くぐらい見つめた。
「やはりただの雪玉のように見えますが」
「なんで、一方向からしか見ようとしないのかしら？」

少しいらだっているゆりに言われて高松が雪玉を回転させると、椎名が真っ先に反応した。
「ゆり、これはどこに売っているんだ……っ？」
「だから、それはあたしの手作りだって」
その雪玉は可愛い子犬になっていた。
「……まさか、これを投げてくるのか？」
「えぇ、おそらく」

『ゆりっぺさん、聞こえますか』
その時、ゆりへ通信が入る。屋上にいる遊佐からだ。
「なにか動きがあった？」
『ひとみ会長が作戦タイムの開始の宣言をしたので、青チームが雪

の壁を作り始めてます』
「出遅れた！　みんな、壁作りに着手してッ！」
ゆりは手持ち無沙汰にしていた妹達や他の人たちに指令を飛ばすと、みな一斉に雪を転がしだした。

『それともう一つ、耳に挟んでもらいたいことがいます』
「なにかしら」
『大山さんが向こう側に紛れてます』
「……一般人に紛れてて気づかなかったわ。ありがとう。その対策も練る必要がありそうね」

両陣営は思い思いの位置に盾となる大きな雪の壁を配置し、それぞれ作戦を立てて、決戦の時間を迎えた。
雪はすでに止んだ。弾となる雪は十分な量ある。後は戦うだけ。
結弦たちもゆり達もひとみ会長の号令を待つ。そして――

『第三回、スノーファイト。制限時間は無制限。始めッッッ！』
戦いの火蓋は切られた。

「……ガードスキル――ハーモニクス」

駆け引き

戦いが始まり、最初に動いたのは奏だった。
かまくらをつくる要領でいくつか作った、盛り土ならぬ盛り雪の間から、たった一人で出てきた。
『さぁ直井君、これをどう見ますか？』
『音無さんの活躍はまだか』
『んもー、青チームのエースだよ？　立華先輩が出てきたんだよ？　なんとも感じなのかな？』

ひとみ会長が解説席ではしゃぐ一方で、赤チームには動揺が走っていた。
その中で冷静を保っていた日向がゆりに問いかける。
「罠かも知れねーぜ？　どうする？」
すると、ゆりはそれに満面の笑みで答えた。
「受けて立つわ！」

「よしきた。じゃあ、だれが――」
「あたし一人でいい」
「なっ！？」
「ＯＨ！　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ」

ゆりの無謀な選択に日向と高松がすぐさま反対する。
「立華とタイマンなんて無茶だ！　罠の可能性もあんだぞ？」
「そうです、せめてアレを――」
「二年前に戦った時、卑怯な手を使っちゃったからね。今度はあたしが罠にかかる番よ。あぁ、もちろん真っ向勝負でも構わないわ。そうならそうで今回は正々堂々と戦う」

「正々堂々って、さっき先に作戦会議を――」

なおも反論してくる日向たちから視線を外し、ゆりはチラリと椎名を見た。

すると椎名は小さく一度頷く。

「ありがと。じゃ、行ってくる」

最後の最後まで反対していた日向や高松の制止を振り切り、ゆりも一人で前に出た。

「お待たせ」

「……」

『ここで仲村先輩と立華先輩の一騎打ちが現実のものに!?』

ひとみ会長の実況にも熱が入る。

相対した二人は雪玉を両手に持って距離をどんどんと縮めていった。

ゆりは真っ直ぐと奏を見据え足早に。奏は俯いて下をずっと見たまま。

お互いが射程圏内に入ったところで同時に足を止め、こう着状態へと移った。

しかし、依然として奏は下を向いている。

「奏ちゃん?」

さすがにおかしいと思ったのか、ゆりは心配そうに声をかけた。

それでも奏は俯いたまま佇んでいる。

ゆりはそんな奏の表情をもっとよく見ようと、覗き込んだ。

「あなたは――だれ?」

『なんと、最初に出てきていた立華先輩は、みゆ喫茶のウィッグを背格好が似ている人に被せた偽物だったぁッ!』

「いまだっ、奏！」
ゆりが気付くと同時に盛り雪の裏に隠れていた本物の奏は立ち上がった。
そして、ゆりの紙風船に向かって全力で雪玉を投げる。
かろうじで視認できるぐらいの剛速球。

「ゆりっぺぇぇぇぇーーーー！！！」
「平気よ！」
ゆりは体勢を崩しつつも、なんとかそれを避けていた。

だけど、青チームの攻撃は終わらない。
「まだまだチャンスだ！　突撃！」
結弦の号令で青チームの男子達が一気に前線に出て行き、一斉に両手に持った雪玉を投げつける。

精度はさほどでもないが、
「っ！　数が多すぎる」
弾幕のように降り注ぐ雪玉を前に、ゆりには逃げ場がなかった。
『これはさすがの仲村先輩も万事休すか――ああっと！？』

「あさはかなり……」
「Ｃｏｖｅｒ　ｙｏｕ」
しかしそこへ、赤チームの中でも段違いに足の速い椎名とＴＫが救援に駆けつけた。
椎名は氷のクナイで、ＴＫは縦横無尽に動き回り、迫り来る雪玉の群れを払いのけていく。

「よっ、間に合ったようだな」
『椎名先輩、ＴＫ先輩に続き、日向先輩をリーダーとした増援部隊

も合流したぁ！』

そこから激しい戦闘が始まった。

お互いに被害は出ていたが、結弦たちがいる青チームのほうがやや優勢だった。

「このままじゃ不利か。いったん、下がりましょ」

「わたしがしんがりを務めよう……」

「撤退すんぞぉ！」

「Ｂａｃｋ　Ｂａｃｋ　Ｂａｃｋ」

椎名が一番後ろで雪玉をいなしながら、ゆり達は撤退を始めた。

それを見た結弦はすかさず、次の一手を打つ。

「奏、あれを使おう」

奏は頷くと、準備していた切り札を拾い上げる。

手のひら大の子犬や子猫をかたどった雪像。まさにゆりが想定していたそれだった。

「ブリザードスキル――スカルプチャーボム（暫定）」

『立華先輩の新技きたーっ！　かっこの中まで律儀に言うところがすばらしい！』

技名――奏が悩んでいたので結弦が五秒で暫定的に決めた――を口にしながら、再び全力で投げつけた。

「……あさはかなり」

しかし、椎名は顔色一つ変えずにそれを真っ二つにする。

「本物だと見間違えなかったのか！？」

想定外の事態を目の当たりにした結弦は驚きを隠せていなかった。

奏はそれでもなお、雪像を投げ続ける。

「奏、むだ投げは……」

投げるのをやめさせようとした結弦だったが

「どんどんしよう！」

急に指示を変えた。

それを受けて、奏は雪像を投げるピッチをさらに早くする。

「……いくら数を増やしても同じだ」

けれども、椎名の余裕は消えなかった。

奏の剛速球以外にも普通の雪玉がいくつも椎名を狙っているのに、全てを真っ二つに切り裂いていく。

「あっ、あんなところに本物の猫が！」

その時、なんの前触れもなく結弦が声を張った。

「……なに？」

椎名は紙風船を守りつつも、結弦が指差したほうを見る。

するとそこには一匹の白い子猫がいた。

「あ、あ、あんなところで可愛い子猫が危険にさらされてるぅっっっ！！！！！」

椎名は自分の役割を捨てて、子猫の救出に走った。

拾い上げてホッとした表情になった直後、椎名は固まった。

「……これもまがいものだと？」

『大山先輩が個性のなさを利用して、椎名先輩の視界ギリギリにさりげなく子猫の雪像を置き、本物だと誤認させたぁ！！！』

「ナイスだ、大山！」

どこにいるかよくわからない大山へ、青チームの面々は次々に称賛の言葉を浴びせた。

椎名は雪像を元の場所に優しく戻してから、立ち上がる。
「やられはしたが、まだ終わってない……」
『あ、椎名先輩は終わりですよー。立華先輩に走っている最中に割られましたので』
頭の上にあった紙風船は見るも無残な姿になっていた。
「……あさはかなり」

椎名がやられている間に、ゆり達はなんとか自分たちの陣地に帰還できていた。

「失った戦力は大きいな」
日向は汗をぬぐう。
「そうね。でも、相手の手の内がわかったわ。奏ちゃんの偽物をたくさん用意してかく乱すること」
「厄介ですね」
高松は普通のことを言っただけなのに、さも重要事項であるかのようにメガネの位置を直す。

「そうかしら？」
しかもゆりはその意見に賛同しなかった。
「あくまで奏ちゃんは一人なのよ？」
ゆりの瞳には自信が満ち溢れていた。

その時、青チームが動きをみせる。
『今度は立華先輩が五人も出てきた！？　どれが本物なんだぁっ？』
全員、前髪を下ろすことで顔を見えづらくしていた。

「きたわね。おじチャーん、松下君、高松君、準備はできてる？」
「あぁ」
「うむ」
「できています」

「よし、行動開始！」
赤チームにあるいくつかの雪の壁のうちの三つが一斉に動き出す。
『なーんとっ、赤チームは雪を積むんじゃなく転がしてつくり、可動式にしていたぁッ！』

チャー、松下、高松をそれぞれ中心とした数人で雪だるまをつくるように転がして、青陣営へ突っ込んでいった。
大きくなりながら進むそれに、結弦たちは雪を投げ込むも、当たらない。
「もう、怖すぎてムリィーーーーーッ」
「あっ、あたしもーーー！」
大きさやスピードを増しながら一直線に迫りくる大きな雪玉の精神的圧力に耐えられなくなり、とうとう奏以外の偽物四人は逃げ出してしまった。

唯一、その場に残った奏は手に持っていた雪玉を捨てた。そして――
「ガードスキル――ハンドソニック」
松下たちが押していた大きな雪玉を一刀両断にする。

「そうくるのを待っていた！」
押していた松下たちの後ろには雪玉を持った戦闘要員が控えていた。
大きなものを斬った直後で隙だらけの奏へ向かって、多数の雪玉が襲う。

「ガードスキル――ディストーション」
『おお！？　これはどういうことでしょうか！？』
しかしその雪玉は全て、奏に当たる直前で軌道を変えて、一発も当たることはなかった。
その間に奏は、真っ二つにした大きな雪玉から切りだして雪玉をつくり、松下の部隊を半壊させた。

高松やチャーの部隊も合流して、さらに攻め立てるがいっこうに当たる気配はない。
直前ではじけ飛んだり、脇に逸れていったりしている。

「ファンクラブの意地にかけて、絶対に会長には当てさせません！」
実は過激派を主力としたファンクラブが奏に当たりそうになった雪玉を雪玉で弾くという、離れ業をやってのけていた。

「ゆりっぺ、このままじゃ全滅するぞ。俺たちも行こう！　まだ、雪だるまは残ってるしな」
また劣勢に追い込まれているのを見かねた日向は増援に向かうことを提案する。
「Ｉ'ｍ　ｕｎｔｉｒｅｄ」
ＴＫも自分が疲れていないことをアピールした。
「そうねぇ……」
その時、ゆりはあるものを見つけた。

スノー

『仲村先輩がゲート付近にいた大多数を連れて、大きな雪玉を転がして突撃していったぁ！』

大きな雪玉は、青チームの盛り雪の間をすり抜けた。

つまりは、奏との戦いを避けた形だ。

「奏ちゃんよりも先に後衛を叩くわよ！」

「手が空いてる人はゆり達を狙ってくれ！」

ゆりと結弦の指示が飛ぶ。

松下部隊を壊滅させ、高松部隊とチャー部隊と戦っていた奏もここで大きく動く。

過激派を中心としたディストーション部隊にその場を任せ、自らは下がってゆりの部隊へ乱入した。

そして、ゆりを見つけるとすぐさま攻撃態勢に移る。

「ゆり、勝負よ」

「た――奏ちゃん！？」

戻ってきた奏に慌てた様子を見せたゆりは、近くにいた雑魚を盾にして攻撃をしのいだ。

ここで追撃すればゆりを倒せたのに、奏は一度手を休めた。

『どうやら、立華先輩は仲村先輩とスポーツマンシップに則った真っ向勝負がしたいようですね！』

ひとみ会長の言うとおりらしく、奏はゆりが立つまで待っていた。

ゆりは戸惑いを見せながらも立ち上がり、

「うーんと……そう！　今、変な情けをかけて倒さなかったことを

後悔させてあげるわ！」
奏に挑んだ。
『い、一撃で仲村先輩撃沈！』
結果、いやにあっさりと倒された。
その時、大きな声が戦場に響き渡る。
「ゆりっぺがやられただとぉおおお！？」
青ゲートの向こうにあるライブ会場で野田が雄たけびをあげていた。
そして、見張りというゆりから与えられた自分の仕事を投げ捨て、猛スピードで走り出す。
『いけませんねぇ。参加者以外の介入はご法度ですよ。なわけで――ふぁいやー！』
会長の合図と共に、スノファイ脱落者たちが一斉に野田に向かって雪を投げつけた。
「へなちょこざいなっ！」
しかし、野田はハルバードで力任せに全てをなぎ払う。
ただの足止めにしかなっていなかった。
『みなさんご苦労様っ！』
が、それも会長にとっては予定通りだった。
突然聞こえてきたヘリコプターの音。
『ではでは、お願いしまーす』
「へぶぅっ！？」
次の瞬間、頭上から雪の塊がふってきて野田を押しつぶした。
『降雪機だけでは雪が積もらないので例年ヘリ輸送しているんです

が、遅れていた機体があってラッキーでした！　って、いつの間にか立華先輩が囲まれてる！？』

ディストーション部隊を倒したチャー・高松部隊と、ゆりに代わって日向とＴＫが指揮をとる部隊に、奏は挟まれていた。

「最後のチャンスだと思え！」

「脱いだからには百発百中です」

「一気に決めんぜ！」

「Ｋｉｓｓ　Ｙｏｕ！」

タイミングを合わせ、同時に八方から奏を狙う。

「ガードスキル――アブソーブ」

突如、包囲網を破って奏の元に大量の仲間が駆けつけた。

その際、日向は背後からの攻撃を受けてやられていた。

駆けつけた仲間――アブソーブ部隊は奏に雪玉をたくす。

そして、自らは体を張って奏の玉除けとなり、散っていった。

奏はその想いに応えるかのように、次々と敵を撃破していった。

その頃、赤ゲートの前でも戦いがひっそり始まろうとしていた。

「とうとう、見つかっちゃったよ」

大山が隊長のステルス部隊と

「ユイにゃん最終防衛ラインは通らせませんから」

ユイ、ひさ子、五十嵐、ひなげし、はなきの居残り組五人。

「本当はバレずにゲートを潜って勝つ予定だったのに！　でも、十五対五。数の上では僕たちが断然有利だね。って、えぇっ！？」

大山がだれかに説明するかのように興奮しながら喋っていたその

時、ステルス部隊の一人の紙風船が割れた。

「こうやって、一人ずつ倒してけば人数なんて関係ないね」

ひさ子の先制攻撃だった。

「しびれる……」

ユイはそんなひさ子を熱いまなざしを送る。

「それなりの距離がまだ残っているのに、命中するなんて……って、また一人やられた！？」

動揺する大山の後ろにいた一人の紙風船がまた割られた。

「田淵の言うとおりだ。倒しちまえばいいだけの話だよな」

今度は五十嵐の仕事だった。

「このまま話してたら全滅する！　みんなやるよ。……あれ？」

すでに大山以外の隊員は戦闘を始めていた。

「やめて……」

ひなげしは包囲され、あっという間に紙風船を割られてしまった。

「ひな姉ちゃんになにしたぁ！」

それを見ていた人見知りのはなきが覚醒する。

ものすごい勢いで雪をかき集めて、大きな雪玉を作った。

そして――

「あ……」

その隙に紙風船を割られていた。

見せ場もなくやられた二人とは対照的に、ひさ子と五十嵐は優勢だった。

ひさ子は持ち前の身体能力と、強運――本人は自覚はしてない――を駆使し、おとりとなって雪玉を避け続ける。

そして、五十嵐が一人ずつ着実に倒していく。
この見事なコンビネーションでステルス部隊はどんどんと追い詰められていった。

そしてユイはというと、大山と一騎打ちをしていた。
「ユイちゃんを倒せば後ろにだれもいない。これはチャンスだ！」
さらには雪で車椅子がうまく操作できない上に、雪玉の補充も一人では大変というハンデまでユイは抱えていた。

しかし、そんなことで臆するユイじゃない。
「知るかぁーっ、うぉらー！」
ユイは持っていた雪玉を全て、温存という言葉ごとおもいっきり投げた。
しかし、それはあさっての方向へ飛んでいく。

「自滅した！？　いまだ！」
大山はユイに接近し、手にした雪で優しく紙風船を挟んで割ろうとした。
が、そこで大山の動きが止まる。
いや、止められたと言ったほうが正しい。
大山は今、両腕を二人の女子にしがみつかられ、拘束されてた。

「き、君たちはだれ？」
恐る恐る大山がたずねる。
すると背後に立っていたもう一人が大山に膝カックンをしてから答えた。
「ユイにゃん親衛隊です！　あなたこそユイにゃんになにしようとしてるんですか？」
「そのー……。あっ、今日はガルデアのライブがあるんだ」
変な汗を流しながら時間稼ぎをねらう大山の横で、自由に動ける

親衛隊の一人は雪をバケツの中へ入れていく。
そしてそれをユイに渡した。

「それは、どうするつもりなのかな……」
「さよなら、大山センパイっ」
腕を捕まれたまま膝をついている大山の頭に大量の雪が降り注ぐ。
こうして大山は“ユイに倒される”という最上級の汚名を得ることとなった。

「よっしゃ！　次の敵を狩るっ……」
ユイが意気揚々とバケツを投げ捨てたその時、ひさ子を狙った流れ玉が彼女の紙風船を割った。
呆然とするユイに、唖然とする親衛隊の三人。

「じ、自決します」
ユイより一足早く我に返った親衛隊の三人は、そっと自分の紙風船を割った。

ファイト

青ゲート前、奏の負担を少しでも軽くすべく、結弦はＴＫに戦いを仕掛けていた。
しかし、かなり攻めあぐねていた。

陣内にいくつか作っていた小さな盛り雪を盾にしながら、死角から攻撃しても
「Ｏｎｌｙ　ａ　ｆｉｎｅ　ｌｉｎｅ！」
ギリギリのとこで反応されてしまう。

「Ａｔｔａｃｋ！」
「危なっ」
逆に、反撃を受けてやられそうにもなる。
ほんと、強敵だ。椎名みたく、わかりやすい弱点もないしな。

ただ、奏から意識を遠ざけることには成功している。
その点では結弦の思惑どおりだった。

「どうしたもんかな」
結弦が物陰からＴＫの動向を探っていると
「あの子は……」
ハーモニクス部隊のニセ奏がやってきた。

「あのっ、音無せんぱい……」
なにか報告があるみたいだな。
「どうした？」
結弦はＴＫを雪玉でけん制しながら、用件を聞こうとした。

「えーと……すなおに割られてください」

「はっ!?」

するといきなり襲ってきた。

しかも、普通の女子が見せるような動きじゃない。

TKクラスの身のこなし。

ただ者じゃない！　SSS以外にもこんなすごいやつがいたのか！

そしてもう一つ、重大な事実に結弦は気付いた。

彼女の紙風船は青ではなく赤だった。

「ハーモニクスを逆手に取ったのか！」

「もう遅いわよ」

至近距離だったこともあり、結弦の紙風船はあっけなく割られてしまった。

同時に直井の悲痛な叫びがこだまする。

「音無君、残念だったわね」

勝ち誇るニセ奏。

「そっちもな」

「え?」

ニセ奏は慌てて頭の上を手で確認する。

「あれ?」

そこにあるはずの紙風船はなくなっていた。

「もー！　変装までして相打ちなんて！」

悔しがるニセ奏はウィッグを外した。

その正体に結弦は奇襲されたとき以上の驚きをみせる。

「ゆ、ゆり!?」

「そうよ。わるい？」
「いや、悪くないけど――。さっきやられたのは誰だったんだ？」
「ぼたん以外にいるわけないじゃない。カチューシャ貸せばそっくりになるわ。奏ちゃんにはバレてたみたいだけど」
「そうなのか？」
「ビックリして一度手を止めてたでしょ。それよりも邪魔になるからさっさと出るわよ」

赤ゲート前、ひさ子と五十嵐対ステルス部隊。
人数では圧倒的に有利だったステルス部隊はとうとう三人になっていた。
「当たらない！」
「これがパンピーとスターの差なの！？」
「う、うわぁあああ」
とうとう、一人が手ぶらのまま逃げ出した。

「逃すか！」
五十嵐はそれを追いかける。
しかしそれが、今まで完璧だったひさ子との連携を崩すこととなった。

「先生！」
五十嵐はひさ子を狙う二人の攻撃の射線上に入ってしまう。
それに気づいた五十嵐は回避しようとするも遅かった。

割れた五十嵐の紙風船。
けれど、ひさ子は心を乱さず冷静さを保ち、残った二人を素早く

倒す。
そして、逃げた一人の後を追った。

『ここでついにＴＫ先輩までやられたぁ！』
戦いが進み、スノファイは最終局面を迎えていた。
フィールドに残っているのはごく僅か。
奏を守り雪玉を補給するアブソーブ部隊なんかも全滅している。
少ない生き残りも奏とチャーが排除していき、青ゲート前にはその二人しか残っていなかった。

向きあう二人。
『雪で足音が聞こえなかったのか！？　理事チャーがピンチだぁ！』
すると後ろからだれかがチャーを羽交い絞めにした。
ステルス部隊で逃げてきたやつだ。
背後から攻撃しなかったのは雪玉を持ってなかったからだろう。

チャーは舌打ちしながらその拘束を振りほどき、持っていた雪玉で紙風船をなぎ払ってたおした。
そして雪玉を保持したまま奏に向きあう。
ただ、奏がその隙を見逃すはずもなかった。

的確にチャーの紙風船を射抜く。
「……やられたか」
『あぁっ！　理事チャーがやられました！　残すは立華先輩と田淵先輩の二人！　さぁ、どうなるのか！』

奏が一対一で負けるわけがない。
「勝負あったな」

結弦は勝利を確信した。

でも、ひさ子はまだ諦めていなかった。

的を絞らせないように動きまわり、かく乱しようとする。

しかし、奏には通用しなかった。

山なりではなく一直線に飛ぶ奏の投げた雪玉は、ひさ子の紙風船のど真ん中を貫く。

『勝負あったぁって、ありゃぁっ！？　立華先輩の紙風船も割られたぁ！？　今なにが起きたの？』

ひとみ会長が驚くのもムリはない。

なにものかの攻撃によって奏の紙風船はぺしゃんこにされていた。

そして、会場中のみんながその一発が放たれた瞬間を見逃していた。

――ただ一人を除いて。

『ふん、全体を見てないから見逃すんだ』

直井だけはしっかりと目撃したらしい。

『まぁ、いい教えてやろう』

さっきまで結弦に夢中で解説をサボっていた直井が偉そうに説明しだした。

『あの一発は――』

「あたしが理事チャーに当たらないように投げたら、コントロールが狂って空高く飛んじゃったやつだよ」

直井よりも先に、脱落者達が集まっている所に奏と一緒にやってきた、ひさ子が教えてくれた。

「そうだったのか。運が悪かったな」

結弦の言葉を聞いた奏は首を横に振った。

「あれも、ひさ子さんの実力のうちよ」

『それが立華先輩に当たったわけ？　ミラクル！』

直井から話を聞き終えて感心している会長に、直井は一つの疑問をぶつける。

『で、この状況はどうするつもりだ？　音無さんの勝ちでいいのか？』

そう、見る限りフィールド上にはだれも残っていなかった。

『いやいや、これは引き分けって、あれ！？　あそこ！』

ひとみ会長が指差す先は校舎。そこからやってきたのは――

「お待たせしました」

遊佐だった。しかも赤い紙風船をつけている。

『なんと、参加登録をするだけしておいて隠れてた！？』

「あれ、反則じゃないですか！？」

過激派の一人が抗議する。

『登録はしてますし、隠れていただけですから問題はありません！青チームの後ろから出てきてゲートを通るとかなら問題ですが、違いますしね！』

しかし、会長に退けられてしまった。

「棚ぼたです」

遊佐はそのまま赤ゲートと青ゲートを通過し、赤チームの勝利を確定させた。

理屈

十二時半をまわり、結弦たちはライブの最終準備にとりかかっていた。
その準備というのは雪かき。いや、雪運びといった方がいいのか？
名前はなんでもいいけど、校庭が客席になるので雪が残ったままじゃ入れなくなる人がでてくるかもしれない。
もちろん、雪運びはスノファイを担当したクラスの生徒がしっかりとやってくれている。
けれど、早く終わったほうがいいのでＳＳＳも手伝っているんだ。

とは言え、全員が参加しているわけでもない。
例えば奏とユイとガルデモ、要するにガルデアの面々は衣装に着替えるために本部へ行っている。遊佐もその手伝いで。
あと藤巻も保健室にお世話になってるから、ここにはいないのか。

それと大山が――
「ふふふ、負けた。ユイちゃんに負けた……」
うん、そっとしておこう。

「しゃきしゃき働きなさい！」
ゆりに発破をかけられながら、結弦たちは用意されていたトラックに次々と雪を積んでいく。
下にはシートがしかれていたらしく、土はサラサラのままだ。
投げられた雪が飛び散ったとこや野田を埋めた箇所はぬかるんでいるけどな。

「これならライブの客も安心して見れるわね」
ゆりが勝利チームのメンバーに配られたジュースを飲みながら満

足そうに頷いていたところに竹山がやってきた。
「もう腰はいいのかしら？」
「歩く分には。それと僕のことはクラ――」
「油断すればまた再発するかもしれないのに、危険を冒してまでわざわざ来たってことは、なにか急ぎの用事があったんじゃないの？」
「はい、遊佐さんから岩沢さんがいないと連絡がありました。あなたと連絡がつかないとも。それと僕の――」
「そう言えば携帯を本部におきっぱなしだったわね。それよりも――高松君！　音無君！」
呼ばれた結弦は雪の入ったバケツを日向に押し付けて、ゆりの元へと小走りで駆け寄る。

「どうした？」
結弦から少し遅れて、上半身裸の高松もやってきた。
服は雪が溶けて濡れたから、乾かしているらしい。
「なんでしょうか。雪の運搬は順調です」
「今それはどうでもいいわ。岩沢さんの居場所に心当たりはない？　あと寒くないの？」
高松は両腕につくった力こぶを見せつけることで、岩沢の居場所を知らないことと寒くないことを同時にアピールした。
「そう……。音無君は？」
「最初に集合してたとき以来、見てないな」

ゆりは少し考え込んだ。
「……高松君は仕事に戻って。あたしと音無君で岩沢さんを探すわ。あと、竹山君は保健室に行ってサボりをたたき起こしてきてくれる？」
「了解です」

「わかりました。それと僕――」
「音無君はあっち、あたしはあっちから探す。もたもたしないで！」
ゆりは結弦の返事を待たずに、さっさと行ってしまった。

「一人で歩いてたらファンクラブの標的になりそうだんだけどな」
「だったら神である僕が！」
「行ってくる！」
ようやく結弦は一人で行く決心がついた。

岩沢がいそうな場所か。どこだろう？
少なくともうるさくない場所だろうな。いや、騒音は集中すればシャットアウトできるって言っていた。
なら、なんでライブ会場にも本部にもいないんだ。

スノファのせいか？　雪が飛んできて楽器に当たるのを嫌がったとか？
そして本部にいないのは、会場が見えないから。
見張りが野田と竹山だけじゃ少し不安があったのかもしれない。

だからそういうのを考慮した位置、つまり校舎の中にいるんじゃないのか。
そう推理した結弦は校舎を目指した。

結弦は人気のなさそうところを求めて校舎の中を捜索していると、見覚えのない場所にたどり着いた。
大きな木でできた茶色の扉。その扉の中央のちょうど目線の辺りに、校長室と書かれた金色のネームプレートが張ってある。
「こんな不便な場所に校長室があったのか」

とりあえずノックしてみた。

……。

反応なし。

そもそも校長なんて一度も見たことないし、もしかしたらもしかするかもしれない……。

そう考えた結弦は思い切って開けてみた。

「――いた」

そこには本当にアコースティックギターを持った岩沢が校長室で練習していた。

しかし、まだ安心はできない。

「あの、岩沢？」

「……」

やはり集中していて聞こえてないみたいだった。

続いて肩を叩いてみる。これもダメ。

他に手段は……。

少しして結弦は一つの案を思いついた。

けど、これはどうなんだ？　効果があるのか？

自信はなかったけど、他になにも思い浮かばなかったのでやってみることにした。

言いたいことを適当なリズムに乗せて伝える。

「もうすぐー、ラーイブがー、はじまるからー、衣装にー、着替えてーくーぅーぅーれー、みんなが待ーぁってーいるー」

やった直後、結弦は抗えないほど強大な後悔に飲み込まれた。

理由はもちろん、恥ずかしいから。恥ずかしすぎる。
いっそのこと、成仏してしまいたい。

しかも肝心の岩沢は――
「あぁ、ゴメン。時間見てなかった」
「気付いた！？」

「それと、発声練習はもっとしたほうがいい」
「しかもアドバイスまで！？」

結弦の反応を見た岩沢は不思議がる。
「……なんで驚いているの？　あんたもライブで歌いたくなったんでしょ？　でも、今回は諦めて。準備がぜんぜん足りてない」
「いやいや、そんなつもりじゃないんだ。あくまで今歌ったのは岩沢を呼ぶためで。それに人前で歌う度胸も資格もないしな」

最後の結弦の一言を聞いた瞬間、岩沢はいぶかしげな顔をする。
「度胸はともかく、資格なんて必要ないよ」
「言い方が変だったかな。資格というか才能？　上手くなきゃ悪いっていうか……」
ますます岩沢の表情が怪訝そうになった。
むしろ、怒っていると言ったほうがいいのかもしれない。

結弦がどうしたら言いか混乱していると、岩沢が口を開いた。
「……あたしは自分に才能があるなんて考えたことは一度もない。事実、むかし一人で受けたオーディションは全部落ちた。けど――」
岩沢は持っていたアコースティックギターへ視線を落とす。
「諦めるって単語は出てこなかった。よぎりもしなかった。次はどんな音楽をやるかしか頭にはなかった」
一旦そこで言葉を切り、結弦へ視線を戻した。

「資格や才能がどうよりさ、したいかどうか。自分で決められればそれでいい。音楽以外でもそうだとあたしは思うよ」
——理屈じゃなく、したいかしたくないかを自分で決める。
「そうだな。資格とか才能とか関係ないよな」
結弦は妙に納得してしまった。

「で、歌いたいの？　歌いたくないの？」
「歌いたくない」
結弦はきっぱりと自分の意思を示した。
「ならいい」
すると岩沢はクスっと笑った。

「ところでさ」
「ん？」
「ここはどこ？」
「……え？」
岩沢が校長室にいたのも、理屈がどうのじゃなかった。

円陣

開演時間が迫り、みんな舞台上に集合していた。
なんだか少し、ピリピリした空気だ。本番前だし当然か。

ゆりなんかは最後の確認をしている。
「ぬかりや、やり残しはもうない？」
その問いかけに答えようとしたのか、高松は素早く定位置に手を置く。
「照明も音響も準備完了。あとは配置につくだけかと。お客さんも集まっています」
けど、遊佐に先を越されていた。

ゆりは松下にも聞く。
「あっちの首尾は？」
「快く了承してくれたぞ」
「Ａｌｌ　ｃｌｅａｒ」

そんな中で車椅子からこうもりのような羽を生やしたユイが、今のみんなの気持ちを代弁するかのようにポツリと呟く。
「身震いしますね」
だれかが「武者震いだろ」とツッコミを入れる前に、奏が車椅子に手をかけた。

保健室にユイを連れて行くつもりだ！

結弦は慌てて止めに入る。
「奏っ、ユイはいたって元気だぞ」
「そうなの？」

奏はユイに確認をとった。

「はい、プロなんですから体調管理は完璧ですよ？」

ユイは状況を把握していないらしく、戸惑いを見せた。

「お前はプロじゃねぇだろ」

「あたしの姿を見てみろやぁ！　小悪魔の角も羽も生えてんじゃあっ。どう見たってプロだろぉがっ！」

が、その表情も日向によってすぐに破壊されていた。

「よかった」

それを見た奏は安堵の表情を浮かべる。

ユイがライブに出たいがために体調がすぐれないのを隠しているかと少し疑ってたけど、あそこまで暴れられるなら心配ないって表情だ。

……後半は完璧に妄想だけどな。さすがにそこまで細かいところはわかるわけがない。

でも奏は優しいから、それに近いことは考えていると思う。

それはそうと奏の衣装――本当に羽をつけたんだな。

なんの素材で作ったのかは見当がつかないけど、すごく似合ってる。

前世が天使だったと錯覚してしまいそうなぐらいに。

奏の性格ともぴったりだしな。

真面目で優しくて少し天然。うん、天使だ。

そういえば、初めて会ったときも天使に見えたんだっけ。

それ以外にもちょくちょく奏が天使に見えることがあった。

ただ、ウィッグの上からつけた天使の黄色いわっかを見ると違和感を覚える。

やっぱり、天使ってのは勘違いだよな。

にしても可愛い。すっぽりと腕の中に収めたく――

「あー、見惚れてるんだー」

奏をジーっと見ていたら、関根のレーダーに引っかかってしまった。

「お客さーん、ウチの子かわいいでしょー？」

変な小芝居をしながら近づいてくる。

「なにに見惚れてたの？」

そこへ奏が質問してきた。

本人に「奏にだよ」なんてさすがに言えないし、どうしたら……。

結弦が考えあぐねていると、この状況を招いた張本人である関根が話題を変えてくれた。

「ところで、なんでみゆ喫茶に来てくれなかったんですかー？　みゆきちの活躍すごかったのに」

「すまん。時間がつくれなくて」

「ごめんなさい。明日は絶対に行くわ」

この結弦と奏の謝罪で納得してくれたのか、関根はウンウンと頷き、そして一通の封筒を手渡してきた。

「なんだこれ？」

結弦があけようとしたその時――

「ダメェッ！」

入江が見たこともない猛ダッシュをかまし、そのまま結弦から封筒を奪取する。

「おしい」

それを見た関根は悔しそうに指を鳴らした。

どうやら、あれが関根の話しかけてきた理由、すなわち真の目的だったようだ。
中身は今日撮った恥ずかしい写真か？

入江は遊佐が持っていた手動タイプのシュレッダーを使い、中身ごと封筒を切り刻んだ。
「って、なんでシュレッダーが？」
「たまたまです」
「そ、そうなのか」

「あ、そうだ。みゆきちー、これも衣装だから着といて」
関根は思い出したようにエプロンを取り出すと、シュレッダーを終えた入江に渡した。
受け取った入江は当然疑問を返す。
「どうしてエプロン？」
「みゆきちはあたしの嫁！」

言い放つと今度は岩沢のもとに。
「岩沢さん、前座が終わったらこれを付けてください」
関根は長い一本のツノのついたカチューシャを渡す。
「これは？」
「天使と子悪魔ときたら岩沢さんはモンスター、怪物です！」

最後に関根はひさ子のところへ足を運んだ。
「あたしにもなんか付けさせる気？」
「はいっ、これを」
関根はふちのない眼鏡を取り出した。
度は入ってなさそうだな。

「めがね……。インテリってこと？」

「いいえ、詐欺師です」
無表情になったひさ子は眼鏡を踏み潰した。

開演まであと十五分。
突如、ユイが舞台の中央にやってきて手を差し出した。
そして、期待に満ちた目でみんなを見回す。
あぁ、円陣を組みたいんだな。

気付いた結弦が手を重ねようとしたところ、先に日向が手を置いた。
その上から結弦が、さらに奏、ゆりと、どんどん集まり重ねていく。
最後に半分魂の抜けかかっている大山が置き、野田も含めた全員の手が一箇所に集まった。

……沈黙。

それに耐え切れなくなった日向が叫んだ。
「だれか掛け声かけてくれよっ」
するとユイへ一斉に視線が注がれる。

「へ？　あたしですか？　岩沢さんじゃないんですか？」
「いーんだよ。今日はガルデアなんだからさ」
「そうそう、どうしてもやなら、みゆきちがやるしね」
「しないよ！？」
「……あたし、やりますっ！」
ひさ子と関根の応援もあり、ユイはやる気になった。

そこへさらにゆりがユイの角付きカチューシャを外して、代わりに白いベレー帽を被せた。
左手しか使えないのに器用だな。
「どーんと決めちゃって頂戴」
「はいっ！」
ゆりに軽く肩を叩かれたユイは勢いよく喋りだす。

「今日はお客さんがガルデアを見るために来てます！　それで……それで……」
そこでユイの言葉が途切れた。
勢いに任せた見切り発車だったのか。

悩むユイに日向が言葉をかける。
「別にキレイにまとめようとしなくても、いいんじゃねーか？」
「それもそうですね。って、だれがまとめる才能がないだとオラァァァッ！」
「そこまで言ってねーよ！？」
「まぁ、ひなっち先輩は置いときましょう」
「置いとくなよ」

ユイは日向を無視して掛け声をかける。
「気合入れて、絶対に成功させますよ！」
「おぉ！」
「絶対ですよ！」
「おぉ！」
「絶対絶対絶対ですよ！」
「おぉ！」
「ぜった――」
「語彙なさすぎんだろ！」
またも日向がツッコミを入れた。

「文句ばっかりですね。ひなっち先輩はどうして欲しいんですか？」
「こうビシッと一発で決めてくれよ」
「しょうがないですね。わかりました」
ユイが大きく息を吸った。

「オペラショック！　……えっと、なんでしたっけ？　ありましたよね、作戦の名前」
「天鼓祭参入作戦よ」
「あと、オペラショックじゃなくてオペレーションだぞ」
すかさず奏が教え、結弦はユイの間違いを訂正した。

「そうですそれです！　ありがとうございます！　それと発音が良すぎて音無先輩は聞き違えちゃいましたか。ちゃんと言いましたよ。オクラしょうゆって」
「オペレーションな」
結弦は再度訂正すると、ユイは左手で丸をつくって大丈夫だとアピールした。

「では、いきますよ――」

「オペレーション、天鼓祭参入作戦、スタート！」

前座

豪華すぎる前座である岩沢が選んだライブを始まりを告げる曲、それは“Ｍｙ　Ｓｏｎｇ”だった。
岩沢が演奏を始めると同時にすこし会場がざわめく。
まさかしょっぱなからバラードで来るとは思ってなかったんだろう。

だけど、そのざわめきはすぐに止み、静まり返る。
立見席しかない会場に響いているのは、アコースティックギターの柔らかくも悲しげなメロディーと歌声だけ。
そう、岩沢は瞬く間に千人近い観客を自分の歌の世界に引き込んでしまった。

周りに合わせて常識ぶるな。本当に大切なのは自分の中にあるもの。
だから自分らしさを外に出していけ。自分の夢に嘘をつくな。
夢は叶っていなくても夢へ向かう原動力になる。だから進もう。
もしもその力が足りなくて立ち止まったのなら、あたしが歌で背中を押すから。

音楽を通して岩沢の飾らないメッセージが真っ直ぐ心へと入ってくる。
Ａｌｃｈｅｍｙがみんなを沸騰させる歌なら、Ｍｙ　Ｓｏｎｇはみんなの心に灯(ひ)をともす歌。
後向きな人を前向きにし、前向きな人の後押しをする。
終わるころには会場中がじんわりとした熱気に包まれていた。

――――――……。

演奏も終わり、音の余韻も消えて静寂が戻ってくると自然に拍手が沸き起こる。
結弦や他のＳＳＳメンバー達もステージ裏から拍手していた。
しかし岩沢はそれに応えることなく、次の曲を弾き始めた。

二曲目はＭｙ　Ｓｏｎｇと打って変わって明るい曲だ。
それも聴いたことのない曲。
もしかして今日のためにつくった曲か。

それともう一つＭｙ　Ｓｏｎｇと違うところがあった。
いや、違うように感じたといった方がいいかな。
二曲目は感情をそのまま閉じ込めぶつけてくるような歌。
頭で理解する前に、心の中を直接揺さぶってくる歌だった。

幸福に満ち溢れた歌詞が、歌声に乗って軽快に曲の上で跳ねる。
そして岩沢の表情も希望と幸せでいっぱいだった。
全身で表現することで、耳からだけじゃなく目へも届けているんだな。

見て聴いてるだけで、なんだか気持ちが高揚してくる。
さらには、楽しかったり嬉しかったりした思い出が走馬灯のように頭の中で映像となって駆け巡った。
まず最初に出てきたのは奏との出会いだ。走馬灯の最初は決まってこれなのか。
次に初音や親と過ごした日々。ＳＳＳメンバーが一丸となって取り組んだ、文化祭の準備。
そして奏と一緒に乗った観覧車。他にも次々と湧いてくる。

ただ、前に経験した時とは違って、嫌な感じはない。

むしろ、自分の人生の幸せさを再確認させてもらった気分だ。
他の人たちもこれを経験しているんだろうか。
結弦はバレないよう注意を払い、客席を覗いてみた。

見える範囲にいる観客達は皆、岩沢の方を見ている。
けど、言い方が少し悪いが“心ここにあらず”といった感じだった。
やっぱり、同じように走馬灯に近いものを味わっているんだろうな。

それを味わっていそうな人はＳＳＳメンバーの中にもいた。
ユイはもちろんとして、仕事をサボっている男子メンバー、それに関根入江も。
ちゃんと自分のすべき事をしているのは奏とゆりとひさ子と遊佐。
あとは客席でライブの映像を撮っている竹山と大山。
あ、ステージ下で警備を担当している野田もだ。

そもそも、今はあんまりやることがないんだけどな。
撮影や警備の他には、音響照明がちゃんと動作しているか定期的にチェックしたり――これはゆりと遊佐がそれぞれやってくれている――、最後の練習をするぐらいだ。
奏なんかは電源の入っていないキーボードを弾いて、しっかりイメージトレーニングをしていた。
ただ、さりげなく岩沢の曲のリズムに合わせて右足のかかとを上げ下げしていた。

サビに入ると、ますます伝わってくるパワーが増大する。
曲が激しくなったわけじゃない。むしろ、優しくなった。

なのに、さらに突き抜けた幸福感が流れ込んでくる。
岩沢の表現力に天井はあるんだろうか。

会場の客も走馬灯から引き戻され、再び岩沢の演奏に夢中にさせられていた。
ユイに至っては、日向が押さえてなければ今にもステージへ飛び出してしまいそうだ。
こんなに幸せだと逆になにか見落としているんじゃないかと心配になってくるけど、それもすぐに吹っ飛ぶ。

Ｍｙ　Ｓｏｎｇとも違う、ゆったりとした盛り上がりをみせた二曲目は、お客の頬を弛ませたまま終了――しなかった。

最後の最後で、観客の表情が驚きへと一瞬で変わる。
素人の耳でも判別できるほど明確に、最後の一音が外れていたからだ。
ヒソヒソ話をする人が会場中に続出し、会場中は大いにざわついた。

他にもユイは口を「え」の形にした状態で固まり、奏は手を止めて目を丸くしていた。
――岩沢が間違えるなんて。
結弦でも信じられなかった。

そんな状況にも関わらず、当の本人は眉の一つも動かしていない。
岩沢はプロだし、失敗を悟らせないようにするのは普通だろう。
けど、そういうのとは違うような気がした。
どちらかと言うと筋書き通り、そんな感じだ。

そして岩沢はまた、なにも言わずに次の曲を弾き始めた。

三曲目は二曲目と同じようにスキップがしたくなってしまうような軽快な曲調だ。
さっきの曲の続きってことだな。
ただ、きれいなメロディーとは言えない。不快な音がところどころ入ってくるからだ。しかもそれは段々と増えていく。
――徐々に崩壊しているかのように。

いつ崩れてしまうのか、いつ壊れてしまうのか。
おどろおどろしく雑じる異音に不安を掻き立てられる。
幸せなメロディに集中なんてできない。
いつかやってくる終わりに怯えながら、ただただ待つだけ――。

そして、その時はやってきてしまった。

一瞬で、明るかった曲の雰囲気が耳を塞ぎたくなるような悲しいものへと変わる。
痛みを、苦しみを、辛さを、音が訴えかけてきた。
弾いている本人さえも辛そうな表情をしている。

鬼気迫る演奏、これをイメージしただけでできるもんなのか？
曲もそうだ。想像だけでつくれるとは到底思えない。
とすれば、岩沢はこんな感情になるような体験をしたってことに――。
結弦は少し想像しただけで身震いした。

三曲目が終わる頃には、会場は完全に沈んだ空気に支配されていた。

それに気付いた藤巻が「おいおい、どうーすんだ。通夜みてーじゃねぇか」と、ぼやく。
「藤安君」
すると奏がステージ袖までやってきて、岩沢を見つめながら藤巻に小声で話しかけた。
「俺は藤安じゃねぇ――」
「岩沢さんなら心配いらないわ」
「は？」
藤巻はなにが心配いらないのかわからないらしく、アホ面を晒す。
それに気づかない奏の視線の先にいる岩沢はすでに新たな曲を弾き始めていた。

四曲目もたぶん、続きだ。二曲目、三曲目ときての四曲目なはず。
その証拠に、四曲目は静かで暗いメロディから始まっていた。
でも、暗いとは言っても悲しくなってはこなかった。
――そんな中でも誰かが支えてくれている。
そんな気がしたからだ。

ここでふと、結弦はひさ子の方へ視線を向けた。
ひさ子は自分のギターの手入れをしながらも、信頼九割心配一割ぐらいの表情でちょくちょく岩沢を盗み見ていた。
そんなひさ子の視線を受けながら岩沢は歌っている。

どんな状況でも支えてくれる人がいる限り立ち続けられる。
これは岩沢も同じなんだろうな。

後半になるにつれて岩沢の演奏は力強くなっていく。

もう、幸福のあまり盲目になることや絶望に打ちひしがれる心配なんてない。
不安を振りきり、幸せを分かち合って、前へと進んでいく強い意志を感じた。
そして盛り上がりが最高潮に達したところで一気に――
アホになった。
音がアホになる。口にすると意味不明かもしれないが、他の表現が思い浮んでこない。
岩沢の歌声も、アコースティックギターから放たれる音もアホになっているんだ。
こんな異物感溢れるものすごい音を組み合わせているにもかかわらず、違和感は残しつつもまとまっている様な気もする。
結弦にとっては初めて遭遇したタイプの音楽だった。
そのまましばらく聴いていると、この曲のアホ部分はＳＳＳメンバーをモチーフにしているんじゃないかと思えてきた。
そう思い込んだら『これはＴＫか』『これはユイっぽい』『あっ、奏がきた！』『日向はいいや』『クラ……？』と、次々とイメージが湧いてきた。
この一見混沌としている調子はずれ達が、いざ集まるときれいに組み合わさっている感じが、ＳＳＳメンバーらしい。
そういえば前に、岩沢がなんで前座をやるのかって聞いたら「ガルデモではできない新しい音楽ができるから」、みたいな事を言ってたな。
これが、その“新しい”ってやつなのかもしれない。
走馬灯のあたりも、そうなのかもしれないが。

それにしても、あの個性的なＳＳＳメンバーを音で表すなんて新しすぎる。

……かくいう自分もそのメンバーの一員なんだけどな。

一般人を圧倒するアホな四曲目は観客席を大いに魅了し、終了と同時にＭｙ　Ｓｏｎｇ以上の拍手を引き出していた。

やりきったような表情の岩沢は握った右手を掲げてそれに応える。

プロとしてじゃなく、一人のアーティストとしての岩沢がそこにはいた。

裏方

四曲目が終わった時点で会場はほんわかしていた。
しかし、ステージ脇にいる藤巻がまたケチをつけだした。
「ガルデアってロックバンドだよなぁ。こんな空気の中でやったら、だだ滑るんじゃねーの」
「岩沢ならラスト五曲目で――」
「んなことあるわけないじゃないですかっ」

ひさ子の言葉を遮るように、眉を吊り上げたユイが反論する。
「このユイにゃんがガルデモに加わるんですよ。言わば――」
「不安要素の塊だな」
日向の横槍にユイはぶちぎれ――

「そうですね」
なっかた。むしろ、しょんぼりとしている。
「あたしはかなりの美少女ですけど、ガルデモのみんなや立華さんと比べちゃうと劣ってますし、演奏や歌声もいい線はいってもまだ未熟です」
どうやらユイはステージに立つことに不安を感じているらしいな。

「不安がってるのかわかりにくいから、持ち上げるか卑屈になるか、どっちかにしようぜ」
日向もちゃんと気づいているようで、まずはきちんといつものようにツッコミの仕事をこなした。
そして、さらに続けようと口を開きかけたところ――

「ユイ、緊張してるの？」
入江が日向を押しのけて、ユイの肩に手を置いて顔を覗きこんだ。

ユイが心配だったとしても、入江がなにも言わずに人を押しのけるなんて、ちょっと意外だな。
蚊帳の外へ追い出された日向はというと、一人ポツンと輪の端っこからユイ達を見守っていた。
……そっとしておこう。

で、肝心のユイは「あたし、緊張しているんですか？」と、逆に聞き返していた。
これには入江も困り顔だ。
助けを求める視線をこっちに送ってきた。

えっと、これはユイに「そうだ、お前は緊張しているんだよ」って言えばいいのか？　……さすがに違うよな。
じゃあ、どうしたら――

結弦が悩んでいると、横にいた奏がユイの方へ歩いていった。
そして、両方の頬を人さし指と親指でつまんで外側に引っ張ってから一つの質問を投げかける。
「痛い？」
「いさいてす……」
ユイは涙目になりながら肯定した。

「なら緊張しているわ」
「それは夢の判別法だろ」
「夢のときにやるんだよ？」
結弦と入江がほぼ同時にツッコミを入れる。声は控えめだ。
それを聞いた奏は雷に打たれたような表情で静かに驚いていた。

「なに、ゴチャゴチャやってんの」
そこへゆりがやってきた。

どうやら、関根が呼んできたらしい。関根はゆりの代わりに音響のチェックをして――させられていた。
ただ目を輝かせて、しきりにこっちを見ている。
たぶん、怒られているところ――主に入江の――を見たいんだろうな。

関根の期待を背負ったゆりは「静かにしなさい。岩沢さんが五曲目を弾いてんのよ?」と言って岩沢を親指で指し示した。
ステージにいる岩沢はアコースティックギターからエレクトリックギターに持ち替え、ロックで観客を沸き立たせている。
「いつの間にっ!」
ゆりに言われてそれに気付いたユイは途端に元気を取り戻し、応援しだした。

その代わり、ちゃんと説教されている姿を見られなかった関根は元気を失っていた。
さっき的外れなことを言っていた藤巻がひさ子に正座させられ説教されているけど、それだけじゃ足りないみたいだな。

「椎名さんと男子共」
結弦が藤巻を見るのを止め、再び岩沢の演奏に聴き入ろうとしたところで、ゆりに呼ばれた。
仕事している三人と藤巻を除いた男子と椎名が集まってからゆりは喋りだした。

「この五曲目が終わったら本番よ。わかってるわね?」
「Ｉ　ｋｎｏｗ」
ＴＫに続いて結弦たちも頷いた。

「なら各自、位置につけ」

ゆりの指示を受けて、全員が所定の位置に付いた。
結弦は高松と一緒に奏の使うキーボードのところだ。

その時、会場から大きな歓声が聞こえてきた。岩沢が演奏を終えたんだ。
それに紛れて、ゆりが合図を飛ばす。
「椎名さん！　松下君！」
いつの間にか向こう側のステージ袖へまわった椎名と、肉うどんを安全な場所へ置いた松下は、一斉に幕を閉める。

「五分以内を目標に、急いで！　でも丁寧にね！」
ゆりがげきを飛ばす中、結弦たちも動き出した。
前列で歌い演奏する奏とユイのマイクスタンドと楽器は、前座の妨げになるかもしれないとのことでまだステージには設置されていない。
それを運ぶのが結弦たちの仕事だ。
なるべく素早く、でも人や物にぶつけないように注意しながら、結弦は高松と一緒にキーボードの端をそれぞれ持って運んでいく。

二人は無事に、場所を示す白いテープが張られてるところにキーボードを設置した。
ただ、細かいところは素人の結弦たちでは手が出せないので、岩沢たちにやってもらうしかない。
すでに、ツノをつけた岩沢はユイの方のセッティングを始めている。
近くにいるユイは、恍惚の表情でその姿を見つめていた。

奏も天使の羽をぶつけないように注意を払いながらキーボードのところへ来た。
「結弦、ありがとう」

そして結弦にお礼を言い、セッティングに取り掛かった。

結弦はそれを手伝おうとしたが、すぐに考え直した。

――邪魔になるだけだな。それに、また自分のやるべき仕事も残ってる。

結弦はステージ袖へ戻ろうとした。

……。

特になにかを感じ取ったわけじゃない。

けれど、結弦は少し歩いたところで理由もなく振り向いた。

すると、奏も手を止めて結弦の方を見ていた。

視線があう二人。

「……あのさ」

「……結弦」

二人は同時に声を出した。しかし、戸惑ったり譲り合ったりしたりせずに言葉を続ける。

「奏の演奏、楽しみにしてる」

「頑張るから見てて」

「音無！」

ステージ袖に戻ると、日向が中身の入った少し大きめのビニール袋を投げてきた。

結弦はそれをしっかりとキャッチする。同じような袋を日向とTKと松下が持っていた。

「ミスったら承知しないわよ」

ゆりの脅しを背に、結弦達はステージ裏から外に出た。

TKと松下はそこから校舎のほうへ行く。

回り込んだ結弦と日向はステージ下で警備を続けている野田に加わった。

客から見て、結弦が左側、日向が右側だ。

ただ、野田の攻撃範囲は広いし手数も多い。だから、あくまで補佐というかたち。

最悪、椎名がステージ袖でスタンバイしているしな。

なので、結弦と日向は中央にいる野田からだいぶ離れた位置にいた。

別の理由もあるんだけど……。

それはいいとして、リハのときにわかったんだけど、偶然ここから奏がよく見える。

おそらく、日向の位置からはユイがよく見えるだろう。

二人のためにゆりがやった、粋な計らいかな。

結弦がそんなことを考えていたその時、なんの前触れもなく幕が開いた。

――ついにガルデアのライブが始まる。

ガルデア

永遠とも錯覚してしまうほどゆっくりと開かれる幕に比例して、会場中の期待が高まっていくのを感じた結弦は、気圧されて思わずつばを飲み込んだ。

そして――

『Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅｖｉｌ　ａｎｄ　Ａｎｇｅｌ！』

ステージ床に埋め込まれているライトから立ち昇る、幾重にも交差する真っ白な光にバックを飾られ、それぞれの楽器を構えたガルデアが姿を現した。

奏が前列右側、ユイは前列左側。後列は右からひさ子、関根、入江、そして岩沢だ。

六人の登場で、会場からは雄たけびのような歓声が沸き起こった。

それに負けないようにユイが声を張る。

『ガルデモでもガルデエでもなく、今日はガルデアだぁッ！　間違えたら、どうにかすんぞオラァッー！』

元気にはしゃいでいるけれど、心なしか笑顔が硬い。

目を凝らしてよく見てみると、ギターを持つ手も震えているような……。

まさか、また緊張がぶり返し――

その時、ユイが目を大きく見開いた。そして一点を凝視する。

視線を追ってみるとそこには日向がいた。

しかも、大きな口を開いてあくびをしている。

一瞬で憤怒の表情へと切り替わったユイは首を動かして「早く演

奏を始めましょう！」と言わんばかりに五人へ合図を送った。
すると、視線が奏に集まる。
奏は首を縦にふり、キーボードに手をかけた。
それから静かに、でもはっきりとした口調で曲名を告げる。

『Ｍｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！』

どんな曲をなんだろう。これの歌詞は奏が作って曲を岩沢がつけたって耳にしたけど、そこまで。
リハもエアーだったから知らないんだよな。だから、楽しみだ。

……ん？
結弦は奏がキーボードに手を置いたまま固まっていることに気付いた。
ただ、さっきのユイみたいに緊張している感じじゃない。なのに弾きださないのはなんでだ？
あと、ユイや岩沢が急かしたりもしないのも不思議だ。

……もしかして静かになっているのを持っている？
観客もそれに続々と気付きだしたようで、会場からざわつきが次第に消えていく。
そして校舎のほうから楽しげな声がかすかに聞こえるだけになった頃、奏が演奏を始めた。

柔らかなタッチで一つ一つの音を丁寧に鳴らす。
穏やかに流れるメロディ。聴いてるだけでなんかホッとする。
けれどそんな安らげる一時は、本当に束の間だった。

心臓が早鐘を打つかのように、メロディが加速する。
さらに岩沢たちの演奏が加わることで、一気にロックテイストへ

と様変わりした。

ゆったりと奏が歌いだす。清らかで真っ直ぐで透き通った、何度聴いても天使のようだとしか比喩できない、キレイな歌声だ。

少しロックとマッチしてないのは、ちょっと不器用な奏らしいな。

でも、前のガルデモのイベントのときより断然うまくなってる。

しかも、キーボードを弾きながら歌っているのにブレたりはしなかった。

岩沢のレクチャーを受けながら、奏がすごい頑張って練習した結果。努力の賜物だな。

歌詞は奏の学校生活の実体験からか？

真面目に学校へ通う奏の姿が想像できた。

ただ、どことなく寂しさが漂ってるような……。

そこから駆け上がるようにサビへと突入する。

同時に岩沢が奏の歌声に重ね合わせるように歌い始めた。ハモりってやつだろう。

そうしたことで迫力とキレが一段と増し、連動して演奏にも熱が入った。

会場も盛り上がる。特に過激派をはじめとした奏ファン達がすごい。

最初からあそこまで全力で最後まで持つのか？　あと、明るい中でケミカルライト振るのは意味があるのか？

こんな結弦の心配や疑問はなんのその、激しく頭を縦に振ったり、太陽の光の元で青色に光る棒を振り回したりしている。

奏はそんなファンの応援に飲まれたりすることなく、来るのかさえわからない人を待ち続けているような切なさとほんの少しの期待

を感じとれる歌詞を、全身全霊で歌い上げていた。

二番もそんな雰囲気を引き継いだまま始まった。

歌詞からは箒を持った奏が寂しげに一人で床を掃いている姿が目に浮かんでくる。

けどそれは二回目のサビに入るなり、がらりと変わった。

――期待が高まり、早まている心音。あれだけ重そうだった足取りも軽くなってる。

――そして期待が確信へと変わったその瞬間、驚きの入り混じった喜びで笑みがこぼれた。

――長くつらかった日々がようやく終わりを迎え、今は未来への希望に満ち溢れている。

そんな風に嬉しそうにする奏が見えてきた。なんだか、聴いているだけのこっちまでも嬉しくなる。

きっと、奏が歌詞に込めた気持ちが伝わってきているからだな。

観客もさっきまでの熱狂と比べると少し落ち着き、表情を柔らかくして楽しんでいた。

奏が歌うと音はロックでも、和やかな空気にしてしまうらしい。

でも逆にそれが奏の持ち味――魅力。ロックで沸かせている奏よりも、こっちの奏のほうが個人的には好きだ。

その胸躍らせながらも和ませる“Ｍｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！”は、最後のサビへと入った。

奏は楽しそうに演奏し歌う。その姿は天使からの贈り物のように神々しかった。岩沢たちも完璧な演奏で魅せ、それを援護する。

ガルデアと会場の間には一体感のようなものが生まれ、空へ飛び立つような不思議な感覚を味わっていた。

基本は同じメロディーラインで歌詞も似ているのに、印象が全く違うんだな。

演奏を少しアレンジしたり、歌い手の気持ちが変化したら、こんなにも変わるもんなのか。

前向きで翔けるように奏でられる音楽は、結弦や観客達の心を完璧に鷲づかみにしていた。

スタッフでなければ、結弦も観客と一緒になってガルデア――特に奏へ――に声援を送っていただろう。

そして、ついに“Ｍｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！”は終わりを迎える。

完璧に歌いきった奏は、最後のアウトロまで気を抜くことなく弾ききった。

楽しく前向きに翔けぬけたような素晴らしい一曲。正直、もう少し聴いてたかったな。

――けど、そしたら奏のあんな表情を見れなかったんだ。

結弦はあらためてステージの方を見る。

奏は晴れやかな微笑みをたたえて満足そうにしていた。

暴走（前書き）

日向とユイと

暴走

『注目しろやぁっ！』

“Ｍｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！”が終わってすぐ、ピックを持った手を高く掲げたユイが大声で会場中の視線をムリヤリ集めた。

アホだな。もうちょっと、立華さんに華持たせたって良いだろ。

……今のはギャグじゃないからな？

『続けていくぞぉーーーっ！　Ｒａｉｎ　Ｓｏｎｇ！』

けどユイは待ちきれないとばかりに次の曲名を言い放ち、一気にその手を振り下ろす。その直後――

『ひゃっ！？』

ユイの短い悲鳴にも似た驚きの声とともに、不快な低い振動音が会場中に響く。

日向はすぐさま、音の発生源だと思われるユイの持つ赤いギターに視線を移した。

ん？　なにも起きてない？　いや、待てよ……。

よく目を凝らしてみたら白っぽい線が一本跳ねているのが見えた。

ユイのやつ、ギターの弦を切ったのか。どうするんだあれ。まともに演奏できねぇだろ。

ＴＫ――は屋上に行っちまったから、椎名の忍者ショーかなんかで時間稼ぎしないとまずいな。

なのにユイときたら『たかが一本！　このくらいなんだーーー！』と、やる気満々だ。

誰か止めてくれ！　椎名、忍者ショーだ！

『よっしゃあっ！　いっく――』
『わけないだろ！』
『いたいですっ！？』
日向の祈りが半分通じたのか、ひさ子の拳が弾き始めようと再び手を高く掲げたユイの頭の上に落ちた。
ユイは頭を抑え、少し涙目になりながらひさ子を恨めしげに見上げる。

そこへ岩沢もやってきた。手にはユイの持っているギターと同じように赤いギターを持っている。
なんか見覚えがあるな。たぶん、前のガルデモのイベントのときにユイに貸したギターだ。
『ほら』
岩沢がそれを手渡すと、ユイは嬉しそうにお礼を言って受け取った。
ちなみに弦の切れたギターは瞬きをしてる間に消え去っていた。
……さすがは椎名だ。

さらに、気づかないうちに関根と立華と入江が前に出てきていて
『みゆきちがお嫁であたしが旦那なら、奏さんはコウノトリ！』
『コウノトリの羽は真っ白じゃないわ。黒い部分もある』
『突っ込むところ、そこ！？　奏さんのコスプレは天使だよね！？』
ＭＣで、岩沢たちがギターをセットする間を繋でいた。チームワーク抜群だな。

少しして、ひさ子が手で小さく丸をつくったのを見ると、すぐさま自分の楽器のところへ戻っていった。

『じゃ、なにごともなかったようにいくぞぉ！　おっしゃぁーーー！』

またテンションを異様に高くしたユイは気合の入った本日三度目の掛け声とともに、暴走ぎみにギターをかき鳴らす。

それと同時にライトの光が白から雨を想像させるような水色へと変わり、ステージ全体から受ける印象が冷たくなった。

――“Ｒａｉｎ　Ｓｏｎｇ”か。たしか、寝たきりだった頃のユイが暇だったから頭の中でつくってた物語を歌詞として書き出したって言ってたな。つまり、黒歴史ってやつだ。

それに曲がついたとくりゃあ、それはもう大喜びに大騒ぎ。毎日のように自慢しまくられたっけ。でもその分、気合も入ってた。

放課後の練習だけじゃ足りないから、家でも練習。観客がいないと盛り上がらないとのことで、毎日呼び出された。

さすがにギターを弾くわけにはいかなかったから歌のみの練習だったけどな。

ただ「歌だけでも近所迷惑だから」って、ユイのお母さんはこっそりと菓子折りもってあらかじめ謝りに行ってたらしいんだ。俺も一緒に行くべきだったのにな――頭が下がるよな。

そんなユイのお母さんは今日こっそりとこのライブに来ていた。後ろのほうの端っこだ。

本当はいい場所を確保してるって前々から言ってたんだけど、仕事で来れるかわからないこと、あと見るなら自然体なユイの姿を見たいからって断られた。結局、ゆりっぺの妹達使ってるはずだ。

で、ライブ始まってすぐに偶然見つけた時にうっかり声を出しちまってさ、慌ててあくびしてる風を装ったんだ。

でもよくよく考えてみれば声がステージに届くはずもない。そーっとステージへ視線をやったら、やはりお母さんの存在はばれてなさそうだった。

けど、あくびはしっかり見られてたみたいで、おもいっきし睨まれたぜ。

そのユイは元気に歌いだしていた。そりゃあもう、イキイキとした表情で。

歌詞の内容が切ないのに、こんな歌い方してるのは「シュンを裏に抱えてリンをバーンとカマすのがいいんですよ！」だからだそうだ。……よく意味がわかんねぇ。

でも、その謎理屈で歌う“Ｒａｉｎ　Ｓｏｎｇ”は会場のみんなに受け入れられてた。

黄色と黒のロープギリギリの最前列でユイの髪の色と同じピンクい棒を振り回すユイにゃん親衛隊なんて、周りを巻き込んでの縦ノリで大騒ぎだ。

あと、少し隊員が増えてるような気もするな。物好きなやつらだ。

そんな盛り上がりの中、一息つく間もなくＲａｉｎ　ＳｏｎｇはＢメロからサビへと流れるように突入した。と同時に会場のボルテージも上がる。

ユイはそれに負けないように、どうしようもないってわかっているのについ文句やわがままを言ってしまう少女を歌で一心不乱に表現し続けた。

……ん？

ここで日向は違和感みたいなものを覚えた。

なんつーか、最初のＡメロと比べて、歌声や演奏から哀愁みたいな悲しさを裏に感じるような。

……もしかして、本番中に上達してんのか？

演奏の方は天才的な岩沢やリフ捌きがすげぇって言うひさ子のギターに引っ張られて、一時的にユイの実力がアップしてるってのもあるんだろーけど。

サビが終わっても、その悲しみは歌から消えることなく、むしろ徐々にではあるが強くなってった。
やっぱり、気のせいじゃねぇ。練習よりも断然いいな。
日向はユイは本番に強いことを初めて知り、思わず感心してしまった。

そのまま順調にＲａｉｎ　Ｓｏｎｇは進行していく。
ガルデアの演奏はまとまっているし、照明のスイッチングとかも完璧だ。
そして二度目のサビを終え、Ｃメロは情緒たっぷりにユイが歌い上げた。

そして、最後の盛り上がりに向けての間奏。そこにはユイのソロパートがあった。
体が小さいハンデなんて吹き飛ばしてしまうぐらい大きく、そしてがむしゃらで情熱的に弾き、会場を熱く惹きつける。
いつものアホなユイの面影なんて少しも残っちゃいない。
日向の目は、ユイが本物のミュージシャンであるかのように錯覚してしまった。

ユイのやつ、うまくなったなぁ……あれ。
日向は自分の目頭が熱くなっていることに気付いた。
ユイに感動させられて泣かされる！？
そんな恐怖に襲われた日向は、素早く目を拭いつつユイから視線をそらし、自分の本来の仕事である見張りを再開した。

でも、観客達は興奮して騒いでいても、ステージ前に設けてある黄色と黒の一線は越えそうもなかった。
まぁ、野田というあほな猛獣の恐ろしさは学校だけにとどまらず

近隣にまで浸透しているらしいからな。
少し安心した日向が肩の力を抜いて見回していると、ユイのお母さんが再び目に留まる。
ユイのお母さんは嬉しそうに――下手したら歌っている本人よりも――ユイの姿を見て、時おり声援を送っていた。

ユイのあんな姿を見れるなんて、つい最近になるまで夢にも思ってなかっただろうからなぁ……。
目の下から頬にかけてなにかが流れ落ちるのを日向は感じた。
ぬぁっ!?　あ……、こ、これはユイのお母さんに感情移入しすぎちまっただけで、ユイにやられたわけじゃねぇからっ！
日向は頭の中で誰かに釈明した。

そんな日向をよそに、ユイはＲａｉｎ　Ｓｏｎｇの最後のサビを熱唱していた。
今のユイの頭の中はガルデアとして皆で一つの曲をつむぎだす喜び、そしてそれを聴いてもらえる喜びでいっぱいだ。
視線を動かすたびに目に映る笑顔をパワーに変えて、ユイは一心不乱にギターを弾き、歌詞を歌声に乗せて客席へ届ける。

そこへふとユイの視線の端に背を向けた日向の姿が飛び込んできた。
――聴いてない！　秀樹が浮気した！
もうちょっと気づくのが早かったらそう叫んでたかもしれないほど、ユイはショックを受けた。

さっきの嬉しい気持ちなんかどっか吹っ飛んで、怒りでピックが手から飛んじゃいそう。

……こうなったら振り向かせてやる！
岩沢さんがギターの音で「ダメだよ」って注意してくれてる気がするけど関係ない！

ユイは今度は完全に暴走していた。自分ができる歯ギターを除いたあらゆる目立つ演奏を日向の背中にぶつける。
しかし、そこまでしてるのにもかかわらず、日向は振り向いてくれなかった。

――なんで？　どうしてっ！？

ユイの中に焦りが生まれる。
いまや岩沢以外のメンバーもユイの異変を察し、心配してサインを送るが、それに気づけない。
観客達はまだ、ただのユイのパフォーマンスの一環と勘違いしているようだが、それがバレるのも時間の問題だった。

――秀樹の心を奪ってるやつはどいつ！

焦りに焦るユイの怒り矛先が、ついに日向の視線の先へと向かう。
だがそこにいるのは、ちょっと心配そうにしているお母さんだった。
そこでようやく、ユイは我に返る。と同時に、仲間の心配そうな視線を感じる余裕も生まれた。

そうだ、今はライブ中でした。あたしはなにしてたんだろう。
みんなと創りあげたもので、たくさんの人が楽しんでくれてたのに……。
でも、もうすぐ曲の終わり。巻き返す時間なんてほとんど残ってない。どうしたらいいの？

その時、マイナス思考のユイの背中を岩沢のギターの音色が力強く押した。

まだ終わってない！　今からもう一度、持っているものを全部出し尽くせ！

――岩沢さんの言うとおりです！

その一発で立ち直ったユイは、曲に一瞬で感情移入しなおして気持ちをつくる。

そして全身全霊を傾けて、いやそれ以上に、Ｒａｉｎ　Ｓｏｎｇの最後の最後を曲の細部まで表現するかのように演奏しきり、歌いきった。

終わった瞬間、今日一番の歓声が沸き起こる。耳が痛くなるほどの歓声だった。

ユイはそれに手を振って応える。観客も、ものすごく満足しているような表情をしていた。

端っこにいるお母さんの表情も、さっきまでの心配そうな感じじゃなくて、微笑みに変わっていた。

そしてもう一つ、ユイは見た。

いつの間にか振り向いていたニヤけている日向の姿を。

アンコール

「アンコール！　アンコール！」

最後の曲の“Ａｌｃｈｅｍｙ”を歌い終えてもなお、尋常ではないほど会場は盛り上がっていた。

一体感がすごいと言えばいいのだろうか。演者と観客と音楽との境界が曖昧になっているような、言葉では表しがたい不思議な感じだ。

それと、熱気もすごい。少し肌寒い日だったのにガルデアや観客達から湯気が立ち昇っているように見える。

そう言う結弦も汗だくだった。

多彩な感性を持つはずの老若男女――学生が多めだけど――を、こんな風に一様に夢中にさせた一番の功労者は岩沢だろうな。

ガルデモの曲をアレンジしたものをメインに演奏していたんだが、奏好みの曲を演った次は日向を打ち抜き、その次は松下の胸を躍らせ体を踊らせる。

つまり、一曲だけじゃなく、色んな曲でみんなを惹きこむ。しかも、一度心を掴んだら離さない。飽きさせない。

そんな一分の隙もないセットリストを岩沢はつくりあげたわけだ。

もちろん、ひさ子達と相談したみたいだけど、最初に見せられた時点で文句の付け所がなかったらしい。

そんな岩沢が選んだアンコール。

『じゃー、ご期待に応えて！　いっくよー！』

『耳をよく食いしばりやがれやぁっ！』

関根とユイの前置きのあと、その曲名をガルデアの六人が声をそろえて言い放つ。

『――――――――っ！』

その瞬間、会場に沸き起こる歓声……は、なかった。起きたのはざわつきだけ。

それもそのはずだ。六人が口にしたのはそれぞれ違う曲名だったんだから。

でもガルデアの六人は、表情を崩すことなく堂々としていた。

そして、わけがわからず戸惑っている観客達に向かって、今度はユイだけが叫ぶ。

『“Ｔｈｏｕｓａｎｄ　Ｅｎｅｍｉｅｓ”！　ユイにゃん！』

それをきっかけにして、ガルデアは演奏をスタートさせた。

なぜ、ユイがポーズを決めて自分の名前を叫んだのかは不明だ。

疾走感溢れるサウンドが会場をかき乱す。

するとそれに刺激された観客の目に期待や喜びに満ちた光が戻った。

さっきまで抱いていたはずの違和感が残っている観客なんてもはやいない。

完璧に再びガルデアの虜になっていた。

少し長めのギターが強調されたイントロの後、ユイが歌いだす。

歌詞からは岩沢への憧れを、歌や演奏からはみんなと一緒に演奏できることの喜び感じとれた。

本人と日向がいる前で、よくもあそこまで堂々とできるな。

横目で日向の様子をうかがうと、案の定複雑な顔をしている。

憧れは恋とは違うってわかってても、なんかスッキリとしない。

そんな顔だ。

女心に対しての男心ってやつだな。

そんなことなどお構い無しに、ユイはサビを目の届かないかなたまで届けるように響きわたらせる。
花が咲いたようにイキイキとした表情で、心の底からライブを満喫しているのがわかった。
観客達も最後の力を振り絞りって声や体を使って応援し、そのテンションについていく。
今日なんども更新してきたライブの盛り上がりは、再びその天井を突き破っていた。

その活気のまま間奏に入ると、“歌番組で尺の都合上一部カットしている”ような、ちょっとした違和感を結弦は覚えた。
ただ、それをしっかりと分析する暇はなかった。そろそろ仕事の時間だったからだ。
後ろ髪を引かれつつも、結弦は袋を手に持ち、屈んで移動を開始する。

移動しながら聞こえてくる間奏はキーボードのアレンジが前面に出たもので、真面目で真っ直ぐで少し不器用な性格がよくでていた。
――なんか今日の奏の集大成みたいな演奏だな。
そんなことを考える結弦の足取りは、無意識のうちにそのリズムに合わせて動いていた。

『奏さんの“マーボーソング”！』

結弦が目的の位置につくとほぼ同時に、奏の歌声が会場に響き、ヴォーカルを交代したユイがリズムに合わせて早口で曲名を叫んだ。
客席からは驚きと期待が入り混じった歓声があがる。

一瞬で沸騰したかのように始まったサビは、奏の持つ麻婆豆腐へ

の想いで満ち溢れていた。
――これは奏が作詞したものだな。チャーギルズで見た歌詞の完成版か？
目をつぶらずとも浮かんでくる、レンゲにすくわれた湯気立つ赤い麻婆豆腐。食べてもないのに辛さの奥に隠れるうまみを感じて唾液が出てくる。
そしてその麻婆豆腐を奏が幸せそうに食べる姿までも。

客席ではもっとすごかった。聞くだけしかできない結弦とは違い、演奏や歌声、そして客席からの歓声や熱気をも肌で感じ取れる。
他にも表情の変化を捉えにくい奏がだれが見てもわかるほど目を輝かせていたり、麻婆豆腐を想像せずにはいられない照明演出などの効果と相まって、よだれを必死でこらえる人が続出する。
誘惑に耐え切れなくなり、麻婆豆腐を求め、数人がライブ会場を後にしてしまったぐらいだ。
過激派にいたっては、あらかじめ用意してあったタッパーに入れた麻婆豆腐を掲げながら、縦ノリで奏に声援を送っていた。
歌も演奏もそれだけ麻婆豆腐だった。

汗が止まらなくなるほど煮えたぎるようなサビを終えて、歌と曲、そしてライブ自体も終わりを迎え――
『続いてはーっ、みゆきち！』
ない！　関根のふりを受けた入江が腹の底からしぼり出すように叫ぶ。
『“のりしお”！』
一気に激しさを増すドラム。上から降り注ぐ何本かの白のスポッ

トライトが奥にいる入江を目立たせる。
普段の照れたり恥ずかしがる彼女とは違い、今の入江は堂々とした自信に満ちた表情だ。
そのいつもとは違う雰囲気を携えたまま入江は歌いだす。

入江が考えた歌詞には、いろんな人への感謝の気持ちが込められていた。
お世辞にも上手いとはいえない歌声では、控えめな自分自身を表現している。
一方で力強く打ち鳴らすドラムからは、入江の奥に潜む「怖いけど皆と頑張る！」といった強い意思を、客席にいるだれもが感じられた。
それがメンバーの信頼に繋がっているんだろうとも。

入江はその信頼を裏切ることないよう、得意なドラムや苦手な歌のどちらも、いつも以上に気合を入れて叩き歌った。
関根をはじめとしたメンバーが、演奏でそれをさらにサポートする。
そして観客達も全力で声援を送り、体を目一杯使って応援した。
一丸となって、全員で全員を支えあう。そんな関係がこの一曲の中で色濃く出ていた。

サビを歌い終えると、前面に推し出していたドラムは演奏の中に溶け込み、目立たなくなる。
そして照明も全て消え、ステージは薄暗くなった。

演奏の続く薄暗いステージから、低音が強く唸り始める。そう、関根のベースだ。
目覚めたてのトラのように、荒ぶる低音は耳ではなく体を直接揺さぶった。

観客達の興奮も再び高まる。

『……』

しかし、関根はなかなか歌いだそうとしなかった。口を閉じたままイタズラっぽい笑みを浮かべ、入江を見つめている。

演奏の方は、繋ぎの部分をループさせているだけだ。――徐々に徐々に低音を狂わせつつ。

なぜ歌いださないのか不思議に思う観客達を横目に、関根は入江を見つめていた。

まるで関根は入江になにかを期待しているように。そして入江もそれをわかっていた。その上で戸惑っていた。

そうしているうちにも、関根の弾くベースは暴走の一途をたどる。

いよいよ曲が岩沢たちのフォローが追いつかず、グダグダになりかねないほどの域に達してしまったその時、ついに入江が意を決した。そして顔を真っ赤にして叫ぶ。

『みっ、みっっ、“みゆきちラブ”！』

入江を辱めることに成功した関根は、笑みをこぼしながら中途半端な部分から無理やり歌いだした。

そんな関根のでたらめなアドリブに、岩沢たちガルデアの三人はしっかりついてく。ユイと奏は少し遅れたけれど、すぐに追いついた。

不規則で先の読めないアレンジが効いたベースにあわせて、様々な色に変化する照明がステージを鮮やかに照らす。

その下で茶目っ気たっぷりに歌われている、みゆきちラブは題名の通り関根にとっての入江の歌。あるいは、テンション高めなライブでのＭＣを早口に詰め込んだような歌だった。

ただ、裏に隠そうとしても隠しきれないほど溢れる愛情も伝わってくる。
関根が弾き出すまとまりのない音符を一つ一つを、岩沢たちがその方向性で繋ぐことで、みゆきちラブは少しお茶目なラブソングとして完成していた。

『次はひさ子さん！』
入江への気持ちを面白おかしく歌い弾ききった関根がひさ子へバトンタッチした。
すると、少しほんわかしていた雰囲気から一気に、自身を焼き続ける太陽のような、ギラギラとしたロックなものへと変わった。
ひさ子の額に浮かぶ珠の汗がライトに照らされ黄色くきらめく。
激しくかつキレのあるリフさばきは熱く、逆に表情はクールだ。
ひとたびギターを弦の上でピックを大きく滑らせれば、観客達は痺れたような喜びの悲鳴があがった。

ただ、さっきまでの四人の時とは違い、歌詞はもちろん、題名すらもひさ子は口にしなかった。一心不乱にギターを弾き続けるだけ。
今までの四人もそれぞれ個性を出していたけれど、その中でもひさ子は一線を画していた。
それもそのはず、ひさ子が自分を表現するのに歌詞や題名を必要としてない。
――ギターに自分を重ねる。
練習は経験に裏打ちされた技術こそが、自身を表現する一番の手段だったからだ。
弦の先まで意識の通ったギターは、等身大では収まりきらない自

分を放ち、それを観客たちの耳へ突き刺す。
えも言われぬ感覚に観客たちは歓喜し、喉が枯れるのもいとわず賞賛の叫びを返した。
その怒号にも似た声援に負けることなく、足りなければ岩沢たちが補って、ひさ子は増していく観客たちの期待を演奏で軽々と飛び越えていく。

今この瞬間のひさ子を真似ることはだれにもできない。
唯一無二な世界観を最高な仲間と一緒に楽器だけで創りあげていた。

ひさ子のギターが弾じるロックが、次のラストに向けて翔け上がっていく。
観客の期待も高まる。心はすでに岩沢の方へ向いて――いや、ひさ子によって向けさせられていた。

そして、関根とユイが切り出す。
『みんながお待ちかねの！』
『岩沢さんの！』
二人は視線でタイミングを合わせた。

『“Ｈｏｔ　Ｍｅａｌ”』

二人がタイトルを叫んだのと同時に、客席から歓声が爆発した。
そしてＨｏｔ　ＭｅａｌはＡメロＢメロを飛ばし、一気にサビへ入る。
と、同時に四方から紙ふぶきが空高く舞い上がった。

あの正体は半額券。近くの飲食店等に提供してもらったものだ。
全六種類で、それぞれがガルデアの希望したメニューの半額券と

なっていた。有効期限はあるけれど本当に使える。
岩沢がすうどん、ひさ子がおしるこ、入江がパスタ、関根はロシアンルーレットチョコ、ユイはオムライス、そして奏はもちろん麻婆豆腐。
ゆりや遊佐や竹山といったメンバーが頑張って交渉して手に入れたそれを、結弦たちがチャーが用意した巨大な扇風機を使って空に送り出す。

すると半額権は、傾いてオレンジに照らす日の光を浴びて、キラキラと輝いた。
まるで赤いダイヤモンドダストに囲まれたように幻想的な光景が広がる中、岩沢の歌が観客の心を捉えて離さない。

母親が優しく頷きながら暖かい食事を出すみたく、いつでもどこでも歌い演奏し続ける。
だから満タンになったら忘れていい。でも恋しくなったり迷った時には、思い出して補充しに来て。
来れば同じような人がいるから。少なくとも一生満足しきれないあたしがいる。

自分の実体験を基にして率直につづったそんなメッセージを、なんの迷いもなく力強く伸びのある声で歌い上げる。
演奏のほうもそれに引けを取らない。巧みで安定感があるのに挑戦的でもあるアグレッシブな音色に、何人もの観客を惚れ惚れとさせていた。

――やり残して後悔するなんてありえない。
演者も観客も全身全霊でこの一曲にぶつかり、ライブ会場も、心も、なにもかもが充実していた。全てが音楽になっていた。
そして、その中心にいる岩沢がライブの終わりを告げる最後の一

音を鳴らした瞬間、地鳴りのような低い音とひな鳥のような高い音が織り交ざった、今日一番の大歓声が湧き起こる。

今、まだ物足りないと感じているのは岩沢だけだった。

後

ライブが終わり、大半の客は天鼓祭を楽しむべく校舎の方へ戻っていった。

けれど、そうしない連中も少数ながらいた。虎視眈々とサインや会話する機会を狙う過激派をはじめとしたファンたちだ。

「あの、あっちの方に不審人物がいました！」

「マネージャーさんからこの色紙にサインを書いてもらうようガルデモの四人に伝えてと頼まれました」

「ユイにゃんはどこですか？」

「天使が落ちたるはこの地。早く迎えに行かねば災いが起こる。通してくれ」

「サイフ拾ったんでサインください」

あの手この手を使ってくるファンたちをなんとか撃退し、結弦たちはステージに集合することができた。

「みんな、お疲れ様！　いい仕事っぷりだったわ」

集まってまず、ゆりがメンバーへねぎらいの言葉をかけると、照れたり、誇らしそうにしたり、天狗になったりと、ほぼ全員が嬉しそうにしていた。

ＴＫが「Ｇｏｏｄ　Ｊｏｂ！」とガルデアの六人を両手で指差して一番の功労者たちを褒め称えると、関根が自分と入江の親指を立てて「ユートゥー！」と返す。

それを見た結弦は自然と奏の前に右の手のひらを差し出していた。

それに気付いた奏は自分の両方の手のひらを合わせ、音の出ないハイタッチをしてくれた。

「最高だよねぇ！　だったよねぇ！」
あれだけ落ち込んでいた大山も完全復活を遂げている。やってくるなり、結弦の左手を両手で拝むようにつかんできた。
「というかというか、あれだよねぇ！　どーんときたときの盛り上がりと言ったらもぉ――」
――むしろテンションが上がりすぎておかしくなっているな。
結弦は夢中で語っている隙に手を脱出させた。

その横にいる藤巻も調子に乗っていた。
「まぁ、あれだな。一人、二千円ぐらいとればかなりの儲け……」
乗り過ぎたために、股間にゆりの膝がめり込んだけれど。
「……あさはかなり」

ただそんな中で岩沢だけが難しい顔をしていた。それに気付いたゆりが、うめく藤巻を放置して声をかける。
「岩沢さん、どうかした？」
「……ん、なに？」
岩沢は声をかけられたことに驚いたようで、目をぱちくりさせた。その反応にゆりもキョトンとする。
そこへすかさず、ひさ子がフォローに入った。

「岩沢は明日のことを考えてるんだよ」
「もう？　……さすが頼りになるわね。明日も期待してる」
ゆりは岩沢のストイックさにあらためて感心したようで、小さくウンウンと頷く。
岩沢はすでに自分の世界に戻っていた。

「日向？」
ふと結弦は日向がキョロキョロしていることに気付いた。なにか

を探しているようだ。
聞こえなかったのか反応しなかったので、もう一度声をかける。
するとようやく、不思議そうな顔を結弦に向けて口を開いた。
「なぁ、直井がいなくないか？」
途端に日向へ軽蔑にも似た視線が八方から注がれる。

「あれ、あいつなんかやってる――のか？」
空気を察したのか、日向は声を細めた。結弦が頷くと、変な汗が日向の額を伝う。
「ふふん、知らないんですか？」
そんな日向をユイが小ばかにした。

さすがにユイのこの態度にはムッとしたのか、日向は「本当に知ってんのかよ」と挑発する。
けれどユイは「知ってますよ」と余裕を見せてみせた。
そして胸を張り、ライブのときにも見せなかったほど得意満面な笑顔で自信満々に言い放つ。

「小さくて気づかないだけです！」

「なるほどな。たしかにアイツはミニマム……って、気づかねぇほどは小さくねぇだろ！　それとお前が言うな！」
納得したとみせてからのツッコミ、いわゆるノリツッコミにユイは驚き、すぐにゆりへ「あってますよね？」と視線で肯定を求めた。
しかし、無情にもゆりの首は横に振られた。
ユイはすがるように結弦にも視線を向けてくる。少し可哀そうだったけど、嘘もつけないのでゆりと同じように首を横に振った。

「じゃあ、なんでいないんですか！　吐けよーオラァー！」
次の瞬間、ユイは日向に掴みかかっていた。

「ちょ、ユイ。は、放せって。俺が聞きたいぐらい。待て、首が――」

しかも車椅子からダイブして襟元にぶら下がっているもんだから、日向の首が絞まっている。

結弦と奏が慌てて引き離して車椅子に戻すと、すねてしまったユイは

「みゆきち、しおりん、聞いてー！」

入江と関根のところへ愚痴りにいった。

それを見た奏は諭すように注意する。

「日向君、いじめはよくないわ」

「そうだな。イジメカッコワルイ……って、いじめてないからな！？　どっちかつーと俺のほうがいじめられ……すみません。謝ってきます」

日向の二度目のノリツッコミは奏の揺るがない冷たい眼差しの前に敗北した。

「ね、ね、ところで、ゆりっぺ！　僕も知らないんだけど！　彼はどうしていないの！？　の！？」

無駄にテンションが上がっている大山がゆりに問いかけてきた。

「あぁ、大山君はユイちゃんに打ちのめされてたから聞いてなかったのね。直井君は明日の見回りを免除してもらうのを条件に、今日一日ずっと見回りなのよ。ほら、明日の劇の主役だから。少し手伝いに来てくれたけどすぐに見回りへ――大山君？」

「ふふふ……そうだった。僕は……」

ゆりの余計な一言で忘れていたトラウマを記憶の底から引きずり出された大山は座り込み、ステージの床に『の』の字を書き始めた。

そこにユイをお姫様抱っこしている日向が戻ってきた。日向は必

死の形相なのに対して、ユイは幸せそうな顔だ。
その後ろにいる関根と入江はニヤニヤしている。
――どんな恥ずかしいことをしでかしたんだ？　想像がつくような、つかないような。
ちょっと興味があったが、野暮なので結弦は聞くのは諦めた。
――それにそのうち耳に入ってくるだろうし。
結弦がチラリと関根を見ると、人さし指と中指を立てた。

「よし、誠心誠意あやまって許してもらってきたぞ！　だから、直井がいない理由を教えてくれ！」
「ひなっち先輩必死ですね」
「あぁ、必死さ。ここまできて、ここまでしたのに、知らずに終わったら夜も眠れねぇよ！」
「そのくだり、もう終わったから」
「な……んだって……」
ユイのチャチャにも動じなかった日向も、ゆりの冷たい一言には打ちのめされた。
ユイを落としこそしなかったけれど、なかば呆然とし膝をつく。

「他に、だれか教えてくれる人はいないのか！」
そして、周囲にいる戦線メンバーに助けを求めだした。
「ひな――」
「竹山ァ！」
結弦が教えようとしたのに、日向はビデオのチェックをしている竹山に声をかける。

「今は忙しいので後にしてください。それと僕のことはクライ――」
「あたしが教えてあげよーか？」
めんどくさそうにして振り返りもしない竹山と日向の間に割り込んできた関根は、雰囲気からして明らかに嘘をつこうとしていた。

「教えてくれ！」
なのに日向はそれに気づかない。それどころか神様をあがめているような目で関根を見ていた。
関根はユイに『騙していいよね？　本当の理由は後で教えるから』とアイコンタクトで許可を得てから、博士っぽい口調で説明を始めた。

「直井君はいないのはだね。直前に蒸発したからなのだよ」
「ライブの熱気に当てられて、ジュワーって逝きましたよね」
ユイも適当に話をあわせる。適当すぎて蒸発違いだけれども。
――いくらなんでも、これは信じないだろ。さっきのユイの間違いより酷い。
結弦はこの考えが、すぐに間違いだと知ることになる。

「そうか、そういうことだったのか！　これでぐっすり眠れるぜぇッ！」
ユイを落とさないように両腕を伸ばし、上半身をのけぞらせて、空に向かって歓喜の雄叫びをあげた。
あまりの壊れっぷりに、関根は竹山からビデオカメラを奪い、その姿を撮影する。

「まさか蒸発したとはなァッ！　想像もつかな――」
「そうじゃないわ」
喜びに震えていた日向の動きが、奏の否定の一言でピタリと止まった。
そして、間接がさび付いたオモチャのロボットのようにゆっくりと、奏と結弦のほうへ顔だけを動かす。

「リアリー？」
ほとんど口も動かさずに、かろうじで聞き取れるぐらいの声量で

弱弱しく、もう一度確認する。
奏の代わりに結弦が「蒸発はない」と言うと日向は「だよな！おかしいと思ってたぜ！」とテンションを再びあげた。

「結弦。彼はどうしてあそこまで必死なの？」
奏はそんな哀れな日向を不思議そうに指差す。
「さぁ……。ライブ終わりの開放感でおかしくなったんじゃないかな」
「違いますよ」
二人のところにユイが車椅子でやってきた。
壊れかけの日向の腕の中から脱出してきたみたいだ。
入江とかひさ子とかゆりあたりが手を貸したのかな。そういえば椎名の姿がない……。

「ユイちゃん。けがしてない？」
奏は日向のことよりもまず、ユイの体の心配をした。
――あんだけ暴走している日向にお姫様抱っこされていたんだから、そりゃ当然だよな。

「あたしよりも、ひなっち先輩の方の心配をしてあげてください」
「日向のやつ怪我してるのか？」
結弦は、ぐったりとしている藤巻や大山から聞き出そうとしている日向の姿を横目で見たが、そんな風には見えなかった。

「寝不足らしいんです。昨日、あたしとしおりんが交互に話しかけて眠らせなかったから。今になって眠気がやってきたみたいなんです」
「一日であそこまで？」
「軟弱ですよね」
前は一日ぐらいなら平気だったよな。連日の疲れがたたってか？

「ユイちゃんは眠れたの？」
日向が寝不足ならユイも？　と、奏は心配したようだ。
「バッチリですよ！」
ユイはエアギターで奏に自分の元気なことを証明してみせた。

「高松ッ！　記憶力のいい、お前なら知ってるだろ！」
寝不足でおかしくなっている日向はまだ、メンバーに直井のことを聞きまくっていた。
「日向君はユイちゃんだけじゃなくて直井君のことが好きなのね」
奏の中に新たな誤解が生まれているとも知らずに。

「そうですね。聞いた覚えがあります」
上着を脱いでいる高松はいつものようにメガネのブリッジに指を添え、少し考えるそぶりを見せる。
「おお……」
日向の期待も高まる。迷い込んだ洞窟の出口を見つけたような表情だ。

「たしか……、小さすぎて見落としているとか」
そして裏切られた。
「それはさっきユイが言ったやつだ！　記憶力は高松の取り柄だろ！　しっかりしてくれよぉ！」
日向は高松のシャツにしがみついた。しかも、シャツからいやな音が。

高松はそんなことおかまいなしに微動だにせずに眉間にしわを寄せる。
そして高松の脳裏にある一言が鮮明に写し出された。
「思い出しました。蒸発したのです！」
「それは関根！　言ったのはゆりっぺか直井のはずだ！」
高松をおもいっきり揺さぶる。その際にシャツが破れ、高松の鍛え上げられた筋肉がどんどんと露出していった。

それに合わせて次々とボディビルダーのようなポーズで筋肉を見せびらかしながら考える。
「――いい仕事っぷりだった」
「松下五段！」
ついに日向は高松に見切りをつけた。

「ん？」
松下はいつものように肉うどんを立ち食いしていた。
「どこから調達したんだよ！？　ライブ前の分は食い終わってたじゃねぇか！」
「……あさはかなり」
日向のツッコミ疑問に答えるかのように、いつの間にか戻っていた椎名がクナイを持つ要領で指に挟んでいる半額券を見せ付けた。
どうやら椎名が半額で買ってきたらしい。

その半額券を見て結弦は気づく。
「あれ？　うどんの半額券って『すうどん』じゃなかったか？」
その指摘を受けた椎名の体が僅かに動いた。一瞬、視線が半額券に走る。

「……どうにでも誤魔化せる」
椎名もお店の人も間違えたのか。
「誤魔化しちゃいけないわ」
「あとで謝りに行きましょ。一緒に行くから」
「……あさはかなり」
奏とゆりに向かって椎名はすまなそうに頭を軽くさげた。

「直井ワァッァァ！？」
「音無君、うるさいから説明してあげてくれる？」

「わかった」

とは言ったものの、日向はさっきから結弦以外の人に聞きまくっている。

しかもなぜか、結弦が近づくたびに他の人のところへ。今はひさ子だ。

――こうなったら。

「松下、一つ頼まれてくれないか」

「ん？　……うむ、なるほど。任せてくれ」

結弦の作戦を受けて松下はすぐに動いた。

動き回っている日向の足を狩って床に押さえつける。少しの乱れもない職人芸だ。

日向は脱出しようともがくが、完全に極まっていて松下を動かすことはできなかった。

「ありがとな。これでようやく説明できる」

結弦は日向の頭の近くにしゃがみ、説明を始めた。

ゆりは手を三度叩いて鳴らし、みんなの注目を集めた。

「さぁさぁ、浮かれるのもいいけど片づけがまだ残ってる！　明日は他の催しがあるんだし、ささっとやっちゃうわよ！」

ステージ下で一人、ハルバードを振っていた野田が階段を駆け上がりゆり目掛けて猛然とダッシュする。

それに気付いたゆりは涼しい顔で椎名に「あれを持ってきて」と、小声でお願いした。

「ゆりっぺ！　俺はなにをすればいいんだ！」

いち早くゆりのところに着いた野田は指示を仰ぐ。

ゆりは椎名が数秒足らずで持ってきた箒を受け取り、それを野田に押し付けた。
「野田君は落ちている半額券の回収。一枚残らずお願いね。期待してるわ」
「ふっ、力不足だ。一分以内に一まとめにしてやる」
ハルバードを箒に持ち替えた野田は、勇猛果敢に果て無き戦いに身を投じた。
それをみんなで見送る。だれも力不足については触れようとしなかった。

「あの量を一人でやらせるとは。今日のゆりっぺさんの悪役っぷりは絶好調のようですね。
「じゃないわよ」
唐突に遊佐に悪役と言われゆりは心外そうにした。
「そんなゆりっぺさんとユイさんにお客さんです」
「……お客？」
遊佐の後ろにいる四人を見るなりしかめっ面が一変、目を輝かせた。そしてユイを呼ぶ。

関根と入江と一緒にビデオチェックしていたユイは、呼ばれて振り返るなり目を見開く。
「なんですか――お母さん！」
そう、ライブを見にきていたユイの母親が遊佐とゆりの妹達に囲まれやってきていた。
藤巻を跳ねても気づかないほど大慌てで母親の元へ走り寄る。

嬉しそうに母親と喋るユイに奏とゆりが一つの提案をする。
「片づけはあたし達がやるからユイちゃんは、お母様と天鼓祭を楽

しんできて」
「行ってきなさい」

「でもひなっち先輩との約束が――」
ただ、ユイは『一緒に文化祭をまわる』という約束があったので少し躊躇した。
しかし、その日向が後押しする。
「いいぜ、親孝行してこいよ。俺は寝るから……」
限界を迎えた日向は藤巻の上で力尽きた。

「ありがとうございます。お母さん行こ」
ユイは母親と手を繋ぎ、校舎の方へ消えて――。
「ちょっと待って」
それを岩沢が呼び止めた。

――ユイがユイのお母さんと文化祭をまわることに不満を抱くようなタイプじゃないし、今言わなきゃならないほど重大ななにかがあったのか？

「弦やったでしょ。ギターにダメージないか、あたしが診てもいい？」
違った。やはり岩沢の頭の中は音楽関係でいっぱいだった。
いや、岩沢にとってはすごく重要なことなんだろうけどな。

「いいんですか！？　お願いします！」
「ん。用はそれだけ。楽しんでおいで」
「ハイッ」
ひらひら手を振る岩沢にユイはお辞儀した。

「ほらっ、なにボサっとしてんのよ。早く片づける！」

ゆりが一連の流れを見ていた戦線メンバーに働くよう尻を叩く。
ちゃんと仕事していたのは校庭で箒片手に奮闘する野田だけだった。

「ゆりなにしてるの？」
率先して動きはじめたゆりがマイクスタンドに手をかけたところで奏が声をかけた。
というか注意にも近い声色だ。表情もちょっとだけ怒っているようにも見える。

「え？　片づけだけど……」
ゆりもそれを感じ取ったらしく手を止めた。
「ぼたんちゃん達が待ってる」
奏は、迫力に少し気圧され後ずさりするゆりの手を掴んで、居心地が悪そうにしているゆりの妹達のところへ誘導する。
ユイのお母さんを連れてきた三人はステージの隅で片づけの邪魔にならないように大人しくしていた。

「でも――」
「あたし達だけでもちゃんとできるわ。信じて」
ユイと同じように遠慮の姿勢をとったものの、奏にこう言われては、ゆりも「わかったわ」と言うしかなかった。

「後はよろしくね」
「あ、その前に音無さん」
今まで大人しくしていたぼたんが結弦のとろに駆け寄ってきた。
そして、ジェスチャーで結弦に屈むようお願いする。
お願いされるがまま、膝を曲げて高さをあわせると、本日二度目の耳打ちをされた。

「明日もゆり姉は任せて」

意味深な言葉を残してぼたんはゆり達と文化祭に向かった。

――話が見えないけど、その前に仕事しないとな。

結弦は奏の使っていたキーボードに手をかけた。ただ、一人で運ぶのは危ない。

なので手が空いている人はと探したら、上半身裸の高松がこちらに向かって筋肉を見せつけてきた。

頼みづらいけど仕方ない。

結弦が声をかけようとしたその時、キーボードの反対側が少し浮いた感覚が。

「結弦、ちゃんと持ち上げて」

奏が反対側を持ってくれていた。

ただ、結弦がちゃんと持っていなかったので奏はいったん下ろした。

「ごめん。次は『せーの』で持ち上げよう」

奏は小さく一度頷いた。

「せーの」

土産

片づけを終えた後、ゆりは妹達と文化祭をまわっていたからその代わりに、結弦は奏と椎名の三人でお店に行った。

事情を説明し謝罪するとお店のおじさんも「勘違いしたのはこちらもだし、ライブも素晴らしかったから、いいよ」と笑顔で許してくれた。

それどころか、晩御飯をご馳走になってしまった。

どうやらお店のおじさんはひさ子のファンで、二人の顔写真が両面に張られたうちわを片手に、ライブの話を延々と聞かされるハメにはなったけどな。

店を出た頃には日は暮れ、文化祭も終わっている時間だったので三人はそこで解散して家に帰った。

「ただいまー」

玄関を開けてすぐに、もはや定番となってしまった焼いたねぎとチャーハンの匂いがしてきた。

――今日はチャーハンか。しまったな。メールで連絡しておくんだった。

後悔してももう遅い。結弦がどう言おうか迷っていると、制服の上にエプロンを着た初音がリビングから出てきた。

「お兄ちゃん、おかえりー。お父さんとお母さんは今日も仕事で遅いよ」

「すまん、晩飯は食べてきたんだ」

先制直球。この際、会話の流れがおかしくても仕方ない。

下手な言い訳をせずに結弦は頭をさげた。

そして初音の反応は――

「そーなの？　メールで言ってくれればよかったのに」

意外にも怒らず、むしろニコニコしていた。

普段なら激怒とまではいかなくてもふくれっ面にはなる。

でも、今日はそうじゃない。なぜなんだ？

その訳は、初音が嬉しそうに差し出す手に隠されていた。

転んだ人に差し出す手とは明らかに違う、なにかを期待する手。

具体的には『お土産』もしくは『頼んだもの』が、なにかだろう。

初音にはなにも頼まれていない。それに加えて初音の笑顔。

と、くれば――

「今日から文化祭だったんだよね。お土産は？」

「お土産は……」

すまん、それも忘れてた。今日は買い忘れた。明日一緒に買いに行こう。

結弦が素直に謝るか言い訳するか迷った隙をついて、初音は結弦の鞄の中を物色しだした。

そして、袋に入ったそれを見つける。

――ペアレンゲ。

スノファイのおかげで渡しそびれてしまったものだ。

「中はなんだろー。陶器のイルカ？　んー、レンゲかなぁ？」

袋の上から触っただけで初音は中身を当ててしまった。

って、やばい。このままじゃ開けてしまう！

「今日はチャーハンだから――」

「すまん、それは初音へのプレゼントじゃないんだッ！」
頭の中を含めれば帰宅してから三度目のすまん。それも今日一番の角度で頭をさげた。
これにはさすがの初音も驚く。
「どうしたの、お兄ちゃん!?　頭上げてよ！」
そっと袋を口の開いた鞄の上に置いてから、結弦の頭を手で押し上げた。

玄関からリビングに移動した二人の話題はまだペアレンゲだった。
台所に立つ初音はおたまでチャーハンを丁寧に盛り付けながら、イスに座ってコーヒーを飲む結弦と会話する。
「あれってそんなに大事なものだったの？」
「あぁ……」
――あれは奏へのプレゼントだから。
そう考えると急に気恥ずかしくなってきて、無意識に視線が泳いだ。

初音はそれを見逃さなかった。
そして結弦のその態度とあの中身はレンゲ、そして遊園地に行った日にゆりから聞いた情報。
その三つが情報が初音の頭の中で結びつき線になる。
「そういうことかぁ。だから今日はお兄ちゃん抜けてるんだね」
一人納得した初音は何度か頷いた。

「なにか言ったか？」
「うん！　今日のチャーハンはいい出来だよー。食べてみる？」
スリッパをパタパタと言わせ、テーブルまでチャーハンを持ってきた。

いい香りが立ち昇るチャーハンの米の一粒一粒がキレイに輝いている。
たしかに今日のチャーハンはいつにも増しておいしそうだった。

「じゃあ、一口だけ」
「はい。どーぞー」
初音はあらかじめ用意してあったスプーンですくう。そして結弦が食べやすい位置に差し出した。
それを結弦はためらうことなく口にする。
「うん、うまい」
ほのかに暖かいチャーハンはパラパラで、ムラはなく味も申し分なかった。

「ほんと？　うれしいな。……そうだー、こっちのネギもいい焼き加減だから食べてみて」
今度は一口とは言わず、焼いたネギを丸まる一本、結弦の目の前に置いた。
とりあえず、初音の言葉を信じて食べてみる。
――こっちはいつも通りだ。

「じゃあ、あたしもいただきまーす」
初音も手を合わせてからチャーハンを食べ始めた。
結弦もおいしそうな表情を心がけながら焼きネギと格闘していると
「ねぇねぇ、お兄ちゃん。今日文化祭だったんでしょ？　どうだったの？」
初音が文化祭の話を聞きたがった。

「そうだなぁ……」
前日の準備から始まり、スノファイやライブのことを結弦は話していった。

もちろん、恥ずかしい部分は隠したりぼやかしたりしたが。――岩沢を探しに行ったあたりとか。

それに相槌をいれながら、初音は冒険談を聞いている子供のように目を輝かせた。

初音はよく反応してくれるから話しがいがある。

でも、そんなに面白いのか？　まぁたしかに、普通じゃないやつらの話ではあるんだけどな。

「それでな、奏はなにを頼んだと思う？」

しばらくして話は、謝りにいったうどん屋さんでご馳走になった晩御飯になっていた。

「椎名さんがきつねうどんなら……」

すでに食べ終えた初音はスプーンを咥えたまま推理する。

「麻婆うどん？」

結弦は豆腐の代わりにうどんを入れた麻婆うどんを想像した。

微妙なラインだ。ありかなしかは実際に食べてみないとわからないな。

「ねぇ、あたり？」

「ん？　なにがだ？　あ、あぁ。残念、正解はカレーうどん」

奏が食べる姿まで想像していた結弦は、初音に答えを催促されて少し慌てたが、すぐに取り繕った。

「そっちかー。おしかったな……えぇっ！？　制服だったんでしょ！？」

今度は初音が度肝を抜かれる番だった。驚きのあまりスプーンを落っことす。

「すすらないで慎重に食べた、とか？」
「いいや、勢いよくすすったよ」
「えぇっ！？　そうしたら絶対に飛び散るよね？　大丈夫だったの？」
「それがな、左手に持ったマイレンゲで飛び散るカレーを全てキャッチしたんだよ」
――アレはすごかったな。

品よくすすると同時に、目では追いきれない速さでレンゲを持った左手を動かした。
すると、吸い込まれるように飛び散ったカレーがレンゲに集められていく。
まるで手が二つ以上あるかと勘違いしそうになるほどすごい、マグレなんかじゃ不可能な神業だった。
それを見ていた数人のお客や店主から拍手があがったぐらいだ。
椎名も少し嫉妬してたな。それに対抗しようとしたのかクナイを取り出したのには焦ったけど。

結弦が短い回想から戻ってくると、初音がニコニコしていた。
「そんなに文化祭の話が面白かったか？」
結弦の質問に初音は笑顔のまま首を振った。
「そうじゃなくてね、奏さんの話をするお兄ちゃんが楽しそうだなぁ、って」

「もしかしてニヤけたりは――」
「してたよ」
結弦は自分の顔が一気に熱くなるのを感じた。
――今、絶対に真っ赤だ！
別にニヤけるのが悪いわけじゃない。でもなぜか、とてつもなく

恥ずかしかった。

「ごちそうさま！」

結弦は急いでコーヒーを胃に流し込み、使った食器を台所に運び、そして自室へと戻る。

扉を大きな音がしない程度に素早く扉を閉めたところで、結弦は大きく息を吐いた。

――そうだ、明日の予定をゆりに聞かないと。

まだ残る恥ずかしさから逃れるように頭を切り替えた結弦は、鞄から携帯を取り出す。

すると、すでにゆりからメールが届いていた。

『明日は十二時に本部集合。遅刻したらオペレーション・ソロポエムよ』

ソロポエム。聞いたことのない作戦名だったが、内容のろくでもなさは十分伝わってきた。

奏と岩沢とユイ以外は発狂しかねないな。

結弦は携帯を閉めて、ベッドの上に腰を下ろした。

そこでふと、鞄から少し出ているペアレンゲの入った袋が目についた。

――明日の午前中はあいてるんだよな。

……。

結弦は再び携帯を開いた。

二日目

文化祭二日目の朝、結弦が初音と一緒に改札を抜けると、町内掲示板の横に一人のセーラー服を着た長髪の少女が立っていた。
その姿を見つけるなり結弦はその少女の下へ駆け寄った。初音はゆっくり歩いてその後を追う。

「奏、待たせちゃったか？」
「十分前に着いたところよ」
今は待ち合わせの時間の十分前。奏は二十分も前に着ていたことになる。
「……そうか、ごめんな」
「どうして謝るの？　結弦は遅刻してないわ」
奏は不思議そうに首をかしげる。

「それはそうなんだけど、待たせたらやっぱり――」
「でも結弦は時間通りに――」
「奏さん、こんにちは」
これ以上ループする前に、初音が結弦と奏の会話をぶった切った。

「こんにちは。今日は初音ちゃんも一緒なのね」
「ごめんなさい。あたしは待ち合わせがあるので、ここからは別行動です」
初音の口調は残念そうだが、口元からは笑みがこぼれていた。
それに気付いた結弦は少し眉をひそめる。――直井め。

奏との挨拶を終えた初音に結弦は最後の念押しをしていた。

「いいか、藤巻みたいな変な人に絡まれたらすぐ連絡するんだぞ。急いで戻ってくるから」
「はーい」
気のない返事をした初音は笑顔で手を振る。
――なんか逆に心配だ。初音なら大丈夫だと思うが。

「ほんとに――」
「結弦、行きましょ。邪魔したら悪いわ」
なおも念押ししようとする結弦のシャツを奏が引っ張る。
「あ、あぁ……」
奏に促されて歩き出すと同時に、手の甲に柔らかいなにかが当たった感触した。
自然とその方向に目をやると、ちょうど奏が手を引っ込めるところだった。
今までの心配事が一瞬で吹っ飛ぶ。頭の中はそのことだけでいっぱいになった。

今、手を繋ごうとした？　それとも、たまたまぶつかっただけ？
奏の表情からはそのどちらか判断できない。
ただ、ぶつかったことは事実。そして結弦の記憶があの柔らかさが奏ものだと告げていた。

手を繋いでいいのか？　でも学校の人、特に過激派みたいなやつらに見られたら面倒なことになる。
奏と並んで歩きながら結弦は悩む。二人の間にある結弦の手がソワソワと居場所が定まらない。
繋ぎたい。でも繋いだら……。
そんな考えが頭の中でぐるぐる回った。だが、その答えは唐突に現れる。

隣で歩く奏の表情。それがどこか浮かない。それを見た瞬間、結弦は周りの視線なんてどうでもよくなった。

――どうせ、被害を受けるのは自分だ。奏にこんな顔をさせるぐらいなら、そっちを選ぶ！

無駄に熱くなった結弦は奏の手を掴むように繋ぐ。

ここまで意識して自分から手を握りにいったのは初めてのことだった。

突然手をつながれた奏は一瞬驚いた顔で結弦を見上げる。けれど、すぐに俯いた。

――もしかして、奏は手を繋ぎたかったわけじゃない？　会話がなくてつまらなかった、とか？

さっきまでの熱さはどこへやら。軽いパニックに陥った。

理由はどうあれ手を離さないと、と結弦は手を引き抜こうとする。なのに、なぜか奏が離そうとしない。

むしろ引き寄せる形になってしまい、二人の距離が縮まった。

胸の鼓動が早まると同時に申し訳なくもあり、結弦は困惑する。

だから結弦は思い切って聞いてみた。

「……あのさ、手を繋ぐの嫌なんじゃないか？」

「嫌じゃないわ」

即答してくたけれども奏は依然として下を向いたまま。なので結弦はもう一歩踏み込んだ。

「でも、涙目になってる」

「これは……」

奏は空いている手でハンカチを鞄から取り出し目じりに押し当てて、溜まった涙をふき取る。

「……目にゴミが入ったの」

「え？　ゴミ？」
奏は早歩きで前に回りんで、結弦の驚きで見開いている目を覗き込んだ。
奏の潤んだ瞳に自分の顔が小さく映る。
「入っているの見える？」
「は、入ってる！」
さすがに小さいゴミなんて見えるはずがない。ただ恥ずかしさから咄嗟に嘘をついてしまった。
そして動揺を隠すため、なおも見つめ続けてる奏から視線を逸らす。
「どうしたらいいのかしら。こするのはダメよね」
「目薬は？」
「……」
奏は返事をしなかった。その代わりに繋いでいた手が離れる感触が。
横目で奏を見るとちょうど上を向いて目薬を差すところだった。
左手でまばたきをしないように押さえ、一滴二滴。そしてもう片方の目も同じようにしずくを落とした。
そして無事に目薬を差し終えた奏は、まばたきをして出てきた涙をふき取る。
「ゴミは取れたか？」
「とれたわ。ありがとう」
全部目薬のおかげなのに「どういたしまして」と言うのはおかしいと思った結弦は、笑顔で誤魔化した。

それからの道中、昨日のライブや今日の演劇の話をしながら歩いた。
特にライブに関しての話は秘密にしていた部分が話せるようになったのでかなり盛り上がった。
――マーボーソングが実際に麻婆豆腐を食べながら書いてたなんて知らなかったな。

学校まで十分程度の道のりもあっという間に過ぎ、天鼓祭と鮮やかに描かれたアーチが見えてきた。
すでに文化祭は始まっていて、にぎやかな笑い声が学校の外まで届いていた。
結弦と奏の前を歩いている人たちも、吸い込まれるように学校へ入っていく。今日も文化祭は大盛況だった。

「結弦は行きたい場所はあるの？」
奏は挨拶してくる生徒に挨拶をしながらたずねてきた。
「特にないというか、なにやっているのか知らないんだ」
そう、奏だけを誘うのに全精力を注いでしまって、調べもしてなかった。
――昨日も同じミスをしてるのに。
結弦は心の中で反省した。

「おうおー、そこの後姿の可愛い嬢ちゃんよ」
そこへ突然、後から軽い感じで男が声をかけてきた。
「藤巻君、やめようよー」
訂正、男じゃなくて藤巻と大山だ。昨日に続いて今日もナンパしてるのか。

「そんなショボイ彼氏置いて、俺達と遊ぼうぜー」
そう言うと藤巻は叩くように結弦の肩に手を置き、威圧的に結弦

の顔を覗きこんで――固まる。
「ご、ごめんなさい」
遅れて大山が正面に回って深々と頭をさげた。
「……大山、行こうぜぇ」
二人が結弦と奏だと気付いた藤巻はそそくさと大山をつれて門の方へと――

「奏ちゃんをナンパしてんじゃないわよッ！」
逃げる前に、イノシシのように突進してきたゆりが振るった鞄が頭部に直撃する。
そして、校門横の柵と柵の間にぶつかり顔が挟まった。
大山が驚いた顔で振り返る。

「え！？　なんで藤巻君はそんなに引きが悪いのッ！？　でも、僕も立華さんが今日もウィッグを被っているから気づかなかったよ！」
ここでようやく、藤巻がナンパした相手が奏だと気付いた。
「……あんたもね」
そんな大山にも魔の手がせまる。
「ひぃぃぃぃぃ！」

「奏、行こう」
「結弦？」
その隙に結弦は奏と一緒に学校へ逃げ込んだ。
チラリと後を見ると、藤巻の隣の柵の間にめり込んだ大山と、次の獲物を探すゆり、そして「がんばってくださーい！」と手を振るぼたんの姿が見えた。

――のっけからこんな調子で奏にペアレンゲを渡せるのかな。

逃走

「まちなさいよ！」
ゆりの次のターゲットは結弦だった。ぼたんを置いてきぼりで結弦を追う。
「どうしてゆりから逃げるの？」
不思議そうな奏に説明してあげたくとも、結弦にそんな余裕はない。
だから要点だけを叫んだ。
「追いかけてくるからだっ！」

結弦と奏は人と人との間を縫うように走って、校舎へ逃げ込んだ。
でも、このぐらいでゆりは負けも撒けもしない。
人を掻き分けながらほぼ一直線の最短ルートで校舎に突入してきた。
校舎の中にもそれなりに人がいて走りづらい。

さらに運の悪いことに
「ふはははは！　なんかわからないがチャンスだ！」
「仲村先輩を敵にするとは愚かね」
騒ぎを聞きつけてケバブ屋から二人の男女が出てきた。
ちょうど挟まれた形だ。

――前には過激派、後はゆりか。
ゆりはもちろん無理だから過激派をどうにかして突破しないと。
……そうだ！

結弦は前を向いたまま手探りで鞄から一本の油性ペンを取り出し

た。
「奏！　これであの二人の服にフルネームを書いてくれ！」
受け取りこそしてくれたものの、奏はなにか言いたそうに結弦を見つめる。
結弦はすぐに奏が勝手に名前を書くことを躊躇しているんだとわかった。
だから目を見たまま一度頷いて「大丈夫」と無言で伝える。

「……結弦がそう言うのなら」
意を決した奏はペンを構えて、……困ったような顔を結弦に向けた。
――あぁ、片手だからペンが開けないのか。
結弦は奏の持つ油性ペンのフタを取った。

「ガードスキル――ペンソニック」
次の瞬間、黒い刃が過激派の体を切り裂く。
「サーイーンー！」
「か……ほう……」
見事、過激派の二人の無力化に成功した。

だからといって安心はできない。後ろにはさらに距離を詰めたゆりがいるし、過激派だってもっといる。
追いつかれたり新手が現れる前に結弦と奏は階段を目指した。

ふとゆりの位置を確かめるために振り返ると、喜ぶ過激派の制服に書かれたサインが目に入った。
きれいな楷書体の字ででかでかと女の方は『立華奏』、男の方は『音無結弦』と書いてある。
……だ、大事なのはだれが書いたかだよな！

「おう、音無」
「こんにちはー、奏さんと音無先輩」
二階に上がると車椅子を押す日向とそれに乗るユイに偶然出会った。
デート中の二人は和気藹々とした雰囲気をかもし出している。

「じゃあな」
「こんにちは、またね」
それとは対照的に必死な結弦と、なぜか悠然としている奏は二人の横を通り過ぎた。

「ひなっち追って！」
二人の不審な行動からなにかを感じ取ったユイは日向に指示を飛ばす。
「は？」
「早く！」
ユイの剣幕に気圧されて、日向は慌てて車椅子を発進させた。

日向のドライビングテクニックと車輪を活かしたスピードで、すぐに結弦達の横に並べたユイは、物知り顔で話しかける。
「お困りのようですね！　なんなら、ひなっち先輩が解決しますよ！」
「勝手に決めんなっ」
「そうか……。だったらアレをなんとか……してもらえると助かる」
息が切れてきた結弦が指差した先に、いつの間にか回りこんだゆりが仁王立ちしていた。
四人は急停止してゆりの出方をうかがう。

ゆりは少し俯いて肩で息をしている。
そしてボサボサになった髪の間から上目使いで睨みつけてきた。
表情や迫力はもはやホラーの域だ。

「あれ、ゆりっぺだよな？」
少し疲れている様子の日向はつばを飲み込んだ。
「おい、音無。なにがあったんだよ」
「あれは奏に……」

「ゆりは今日の演劇が成功するか不安で、気が立っているのよ」
結弦より先に、息一つ乱れていない奏が説明した。しかも、結弦とは全く違う見解だ。
「なるほどな。そんな事情が」
「ゆりっぺ先輩がそこまで思いつめていたなんて知らなかった」
それを日向とユイは信じてしまった。

「いや、違――」
「悪い虫増えたわね！　消えなさい！」
結弦が訂正するのを待たずにゆりが襲ってきた。
逃げようにも後にはギャラリーが集まってきていて壁となっている。
もう、ゆりと正面きって戦うしかなかった。

「ひなっち先輩！」
「おうよ！　音無はユイを頼む」
さっきは嫌がっていたはず日向が意気揚々と前に出る。
――なにか秘策を思いついた？
一緒に戦う（ぎせいになる）という選択肢もあったが、結弦は日向を信じてユイの車椅子の後に立った。

「まずはあんたからね！」
ゆりが日向に標的に定めたその時、日向は大声を出す。
「野田！　ゆりっぺがピンチだ！」
「なんだとぉッ」
呼んでからわずか数秒で野田が窓を突き破って登場した。
――えーと一応、ここは二階なんだけど。あと日向は自分で解決するんじゃないんだな。
「ひなっち先輩カッコワルイです」
結弦同様、ユイも呆れ顔だった。

「ゆりっぺを傷つけようとしているやつはどこのどいつだ」
野田は手に持ったハルバードでギャラリーを威嚇していた。
「お前か！　お前か！　お前か！」
ハルバードの刃先を片っ端から突きつけていく。そのたびに散乱する窓の破片を踏みしめ、ジャリジャリ音を鳴らせた。

「ほんと、コバエのように次々沸いてくるわねぇ」
日向を秒殺したゆりはそんな野田へ矛先を変えた。野田の顔めがけて右拳を突き出す。
岩をも砕いてしまいそうなほど重い一発。ハルバードを投げ捨てた野田は素手でそれを受け止めた。

怒涛の暴力はなおも続く。
怒りに任せて大振りかつ強烈なパンチを繰り出していった。
野田は少しずつ後退しながらも、それを避けたり受け止めたりして耐えている。

――ゆりの様子がおかしいからか今日の野田はいつになく真剣だ。
一撃で伸されたりもしない。

微塵の油断も慢心もないし、むしろ防御面においては余裕さえ感じられる。

だけどなぜか押されぎみだ。相手がゆりだからとか反撃できないからとか、そんな理由じゃなさそうなんだが。

そう、言うならばまるでどこかへ誘導しているような……。

「うっ！？」

突然、床から放たれた一筋の光が結弦の目に飛び込んできた。

不意に目をやられた結弦は車椅子ごと転びそうになるも、奏が支えてくれた。おかげでユイは無事だ。

「ありがとうな。ユイもすまなかったな。――でも、今の光はなんだったんだ？」

結弦が発生源を探すとすぐに見つけられた。

飛び散ったガラスの破片。それが太陽光を反射している。

無意識に少し体を動かしていたり太陽の動きなどと相まって、その反射した光の一本がちょうど目に入ったわけだ。

タネがわかり安心した結弦はあることに気付いた。

「もしかして野田って……」

「えぇ、野田君はゆりをガラスの破片から遠ざけるために、ああしてるのよ」

奏には最初っからお見通しだったらしい。

「にしても野田先輩もたまにはちゃんとするんですね。見直しました」

ユイは奏と結弦に話をあわせるために「あたしもわかってました」という表情を取りつくろう。

「そうね。たまにはちゃんとするわ」

「……酷い言われようだ」

ガラス地帯からゆりを脱出させたら終わりなわけじゃない。ゆりの猛攻はまだ続いている。

反撃を許されない野田のストレスは相当なものだった。

「くそっ、どうなっている！　ゆりっぺは操られでもしてるのか！　ゆりっぺ！　俺はどうすればいい！」

「いや、ゆりに指示を求めるなよ！」

野田は結弦を睨みつけて、ぶっきらぼうに「そうか、ならキサマが指示を出せ。今回だけは聞いてやろう」と言ってから視線を戻した。

普段の野田なら絶対に言わない一言。それだけに、ゆりをすごい大切に想っていることが伝わってきた。

――なら、それに応えなきゃな。

結弦はゆりを傷つけずに怒りを納める方法を必死に考えた。

その結果、一つの案が浮かんだ。というか最初からそうしていればよかったのかもしれない。

素直にゆりにぶちのめされる。これしかない。でも、その前に奏をこの場から――

「奏、ユイをトイレに連れて――」

「まだかぁ！」

待ちきれなくなった野田が急かしてきた。

するとその叫びに反応して、うつ伏せに倒れていた日向が上体を起こす。

「……野田ァ、暴走したお姫様は愛そ注いで救うんだぜ。おめーの愛でゆりっぺの目を覚まさしてやれぇ！」

熱く叫んだ日向は再び突っ伏し、沈黙した。

「愛……キスかッ！」
野田はゆりの両手首をそれぞれ掴んで壁に優しく押し付ける。
「なっ、なにすんのよ！　放しなさい！」
まさかの唇の危機に、ゆりは必死で振りほどこうとした。でも、野田の握力の方が勝っている。
「子供が出来ても責任を取る。……違うな、出来なくても責任を取る」
そうビシッと決めた野田は目をつぶって顔を近づけていった。

「ちょっ、まちなさい！　やめてっ」
ゆりは頭を振って拒絶する。もはや怒りなど跡形もなく消え去っていた。
けれど、野田は止まらない。そして――

「ん！？」
結弦の視界が暗闇に包まれた。今度は光による目潰しじゃない。柔らかい何かが結弦の両目を覆っていた。その何かに手を触れた瞬間、正体がわかる。

「奏？」
――奏の手だ。奏の小さな手が視界を塞いでる。
結弦が手を外して後ろを見ると、背伸びをした奏がちょっと不服そうに見上げていた。
けれど、それは結弦に向けられたものではない。
「昨日、ちゃんと言ったのに……」
奏は肩越しにゆりを見ていた。

「まったくもう……」
ゆりは赤い顔をして肩で息をしている。怒りは完全におさまって

いた。
その足元には、こころなしかアゴが赤い野田が仰向けで転がっている。

「なにがあったんだ?」
「……」
見当も付かなかったが奏もユイも教えてくれない。
すると、日向が顔だけを動かして結弦のほうに向き「白だったぜ」と親指を立てた。
そんな日向の頭をゆりは無言で踏みつける。
さっきの赤い顔はどこへやら。ゆりはゴミを見ているかのように冷徹な目つきで日向を見下ろしていた。

「さてと……」

ゆりは日向の頭から足をどけ、こちらに歩み寄ってくる。

だいぶクールダウンしていても、完全には鎮火していない。

ひとたび大きな風が吹けば再び燃え上がりそうなゆりを前にして結弦は覚悟を決めた。

――命だけは守ろう。

「奏、ユイの目を隠して目をつぶっててくれ」

奏は素直に結弦の指示に従ってくれた。ユイの目を両手で隠して自身も目をつぶる。

その姿はまるでキスを待つ……。

――違うから！　そんなつもりで奏は目をつぶったわけじゃないし、俺もそんなつもりでつぶらせたわけじゃない！

結弦は頭をふって妄想を振り払った。

さらに、ユイの目がちゃんと隠されているか確かめることでなんとか誤魔化した。

――それにしても、さっきからずっとユイが大人しいな。いつもなら手を外そうとして奏と無言の戦いをはじめそうなものなのに。

ユイの手はまるでなにかに耐えているようにぎゅっとスカートのすそを握っている。

いよいよ限界が近くなったのか手で目隠しされたまま、ゆっくり結弦のほうを見上げた。

「トイレ……連れて行ってくれるんじゃないんですかぁ？」

「いけない」
弱弱しいユイの訴えかけを聞いて、奏は目を開けた。
そして手を車椅子のハンドルに移し、車輪を軸に百八十度回転する。
ちょうど、後ろにいる様々なコスプレや仮装をしたギャラリーが群がってできた壁と向き合う形だ。

目標はその先にある女子トイレ。近くてガラスの破片の心配もない。
奏はそこへ急行するため、勢いよくギャラリーへ割って入る。
壁はいくつかの悲鳴と歓声ともに二つに分かれて道をつくった。
その道を通って奏とユイは女子トイレに吸い込まれた。

「準備は完了かしら。もう思い残すことはない？」
ゆりは結弦が身辺整理もとい最後の瞬間を見られないように奏を遠ざけるのを待ってくれていた。
「えっと、あのさ」
「それは八十年後のあたしに聞いて頂戴」
でも、これ以上の時間稼ぎは望めなかった。
むしろ今のやり取りでスイッチが入ってしまったようだ。

清清しい笑顔なのに感じるのはどす黒い怒気だけ。
片方ずつ手をパキパキと鳴らせて近づいてくる。
――奏と二人っきりで登校していただけで、ここまで怒るものなのか？
そんな疑問も生まれたが、深く考えている暇はなかった。
ゆりが拳を握り、ひときわ強く床を蹴ったその瞬間――

「なぁにしてるんですかっ！」
廊下に聞き覚えのある女性の声が響き渡る。

そして、ゆりの後の方にもある人だかりをかき分けて姿を現す。
「ここでのイベントや出し物の申請はされてないし許可もしてません！」
現生徒会長のひとみだ。毅然とした態度で違反者達を叱り飛ばしていた。
「……ありゃ？」
ただ結弦やギャラリーの視線はひとみ会長にではなく、ゆりに集まっていた。

四十五度。

ゆりは理想的な角度で結弦に頭をさげる。誠意が十二分に伝わってきて、逆に結弦が恐縮してしまうぐらい丁寧なお辞儀だ。
次は気絶している日向と野田に、ギャラリーに、そしてひとみ会長に対しても頭をさげた。
「えーっと、これはまさか解決済み？」
拍子抜けしたような表情でひとみ会長はゆりのカチューシャを見つめる。

「くっ……」
その後で驚異的な回復力を持つ野田が意識を取り戻した。
手であごを触りながら体を起す。あごにはローファーの形が赤くしっかりと残っていた。
「なっ！？」
そして野田は異変に気付く。

「なぜ、ゆりっぺが頭をさげているんだぁッ！」
ゆりを見て、ひとみ会長を見て、またゆりを見た野田が吼えた。
投げ捨てていたハルバードを拾いあげ、ひとみ会長の後頭部につきつける。

女相手にも容赦しない野田の蛮行にひとみ会長は顔をこわばらせた。

――止めないと！

「野――」

急いで間に入ろうとした結弦を、ゆりが鋭い視線だけで止めた。

「……野田君、ちがうのよ」

それからゆっくりとした足取りで野田に近づき、柄の部分を押さえてハルバードをおろさせた。

「ゆりっぺ？」

素直に腕から力を抜いた野田は戸惑う。

「こうなった経緯を全部話すわ」

ゆりは窓際に行き、空を見上げながら儚げに語りだした。

「今日は『初日はライブＳｅｃｏｎｄ ｄａｙ，Ｗｅ ｐｒｅｎｔ ａ ｐｌａｙ戦線』が部隊名通り演劇をする日よ。そして監督は椎名さん――のはずだった。稽古を始めてすぐ、椎名さんには監督の才能もないことがわかったわ。だから変わりにあたしが監督になったの。ただ、あたしにもうまくやる自信はなかった。それでもやるしかなかった」

まるでサスペンスドラマで犯人が自白するシーンのようなゆりの語り口に、いつのまにか結弦も野田もひとみ会長もギャラリーも惹き込まれていた。

「毎日毎日、不安と戦いながら良くしようと試行錯誤。でも、よくなっているかどうかなんてわからない。だって、あたしプロじゃないもの」

両手を握り締め、段々と語気を強めていく。

「ストレスに押しつぶされそうだった。苦しかった。でも弱音なん

て言えない！　みんなの期待にそえるよう頑張るしかないじゃない！」

気づけばゆりは涙を流していた。とめどなく溢れる涙は頬をつたって床に落ちる。

「おかしくなりそうだった。ううん、おかしくなっちゃってた。気付いたら音無君たちを襲ってたもの」

最後まで言い切るとゆりは泣き崩れた。

「ごめんね。ごめんね。ごめんね。ごめんね。ごめんね――」

「ゆりっぺ……」

泣きながらひたすら謝り続けるゆりの背中に野田が優しく手を置く。

それを見守る人たちの中に、ゆりを責めるものなど一人もいなかった。

しばらくそうしていたゆりが急にスッと立ち上がる。

涙のあとが残るゆりの顔には満面の笑みが浮かんでいた。そして――

「と、まぁっ、こんな感じでやる『初日はライブＳｅｃｏｎｄ　ｄａｙ，Ｗｅ　ｐｒｅｓｅｎｔ　ａ　ｐｌａｙ戦線』の演劇は午後二時半から！　よろしくね」

元気よく二本の指を立ててピースサインをつくり、温かく見守っていた人たちを唖然とさせる。

「まさか……最初から全部宣伝だったんですか？」

「そうよ」

ゆりが断言すると、ひとみ会長は返す言葉が出てこなくて口をパ

クパクさせた。

ギャラリーもざわざわとする中、奏とユイ、そして途中でばったり出会って合流したぼたんが戻ってきた。

ユイの車椅子を押しているのはぼたんだ。その代わり奏とユイはたくさんの掃除用具を抱えている。

「ほうきを持ってきたわ」

「掃除すんぞー！　起きろー！」

奏は結弦にほうきを手渡し、ユイは自在ぼうきの先で日向をつついた。

まだ呆気に取られていたひとみ会長も意識を取り戻す。

「そうですよねっ！　あたしにも下さい。皆も手伝ってー」

奏からほうきの束を受け取り、ギャラリーにも呼びかけた。

それから皆で真面目に掃除していたら、ゆりがさり気なく結弦のところにきて

「さっきは本当にごめんね」

と、聞き取れるギリギリな声の大きさで謝罪してから別のところのガラスの破片を掃きに行った。

――あれはやっぱり、問題にならないようにゆりが機転を利かせてついた嘘だったんだ。

演技の意図はわかったが、暴走した理由は今の結弦にはわからずじまいだった。

掃除自体は最終的に、普通の制服の男や変な仮面をつけた男、入江のコスプレをしている女子やらサイン入りの制服を着た過激派と、様々な格好をしたギャラリーたちと連携して事にあたったので二十分とかからなかった。

応急処置で窓枠に透明なビニールを張ったその後、生徒会は見回りに戻り、ギャラリーも解散し、日向とユイはデートを再開、野田はふらっとどこかへ消えた。

そしてゆりは――

「大山君にも謝ってくるわ」

ぼたんと一緒に柵に捕らわれたままであろう二人のところへ行くとのこと。

ただ去り際に一瞬、不気味な視線を送ってきた。

まるでずっと観察されていたような、襲ってきた時とは異なる寒気を結弦に感じさせる視線だった。

「結弦？」

奏はゆりの背中を見送りながら固まった結弦を少し心配そうに見上げる。

それに気が付いた結弦は誤魔化そうとして――

「え？　あ、えーと……なんでゆりはあんなに怒っていたんだろうな」

ゆりが関係する話題を出してしまった。

ただ、思わぬ返事が返ってくる。

「ゆりはあの時、我を忘れたりしてなかったわ。なにか目的があって行動してた」

「あの暴走に目的があった？」
「そうね、だからなるべく怪我しないように藤――君達を扱ってた」
にわかには信じられない話だった。でも、奏がこんなことで嘘をつくようなタイプじゃないことは結弦も知っている。時おり鋭い観察眼を見せることも。
奏の話が真実であるとすると、目的こそ見えてこないが、一つの可能性が頭の中に浮かび上がってきた。
――まさか、ゆりが今日の演劇の後にあるデスマッチの主催者じゃ？
思い返せば、他にもゆりの行動や言動に怪しいところが……。
お月見の日にこけて奏に覆いかぶさった時にタイミングよく駆け寄ってきたり、やけに奏と一緒にいるのを突っかかってきたり。他にも――
「具合悪い？」
奏はまた難しい顔をしている結弦が心配で見上げていた。
保健室へ連れて行ったほうがいいのかもしれないと考えた奏は、結弦の答えを待たずに、手を取って階下に向かおうとする。
「ま、待ってくれ。体は大丈夫。ほら、すり傷すらないから」
そんな奏を引き止めた結弦は両手足を動かしてみせた。
「ならどこが悪いの？　気分がすぐれない？」
奏は結弦が無理を隠すために嘘をついても見破れるよう近づいて瞬き一つせずに見つめる。
「いたって元気だ」
その澄んだ瞳を結弦は瞬きを交えつつも見つめ返した。
――奏とこうするのが一番、意思疎通ができる気がするな。

その裏づけにお互いの目を通して、結弦には奏の心配してくれている優しい気持ち、奏には結弦が嘘を言ってないことと心配してくれたことに対する感謝の気持ちが、しっかりと伝わっていた。
それを見せつけられている赤の他人たちの気持ちは伝わっていなかったが。

また二人きりで学園祭をまわることにした結弦たちは、昨日約束して行けなかった所へ行くことにした。
それでまずやってきたのは一番近くにあった漫画研究部。部室ではなく、一般の教室で作品を公開しているらしい。
扉には三行にわたって【漫画研究部、作品展示会場、締め切り】と書かれた紙が張ってある。

「こんなときは、『たのもー』かしら」
「もっと普通でいいんじゃないか。こんにちはー」
結弦が引き戸を開けると、学校らしくない光景がそこにはあった。

窓は暗幕で覆われていて、光源は天井の蛍光灯だけ。
その人工的な光が照らすのは、等間隔に穴の開いた下にキャスター付きの白いボードで囲って作った、いくつかのブース。
ブースの中に設置してある机の上にはいくつか薄いマンガ本が何冊か置かれていた。

「なんか漫画喫茶みたいだな」
来たことはなかったが結弦の中の漫画喫茶のイメージはこれだ。
「これが漫画喫茶……はじめて来たわ」
そして、なぜか奏は少し感動している。

すると入口近くで店番をしていた女子生徒が笑顔で話しかけてきた。
「ウチはぜんぜん漫画喫茶じゃないですよー。本家はもっと本があって、ブースも密集してて、閉鎖的で個室があったりしますし、サービスもいーっぱいです――って、会長さん！　来てくれたんですか！？　あっ、言うの忘れてた。いらっしゃいませー」
「今の会長はひとみさんよ」
「そうでしたね。ささっ、こっちへどうぞー」
かなりの早口でまくし立てながら奏だけを部屋の中央へ案内する。
意図して無視された感じだ。

――彼女も奏のファンなんだ。
ため息をついた結弦はその後に続こうとした。けれど――
「わぁっ、しゃらいませー！」
「会長さまー」
続々とやってきた奏の存在に気付いた女子生徒達の波に流され、いつの間にか教室の端まで追いやられてしまった。
結弦のことなんて歯牙にもかけない。

「少し落ち着くまで待つしかないか」
奏のところに戻るのを諦めた結弦はもう一度教室を見回した。
ブース以外は全て撤去された殺風景な教室。その角に気配なくひっそりと佇んでいる幽霊いた。
……って、違う、あれも生徒だ！
幽霊の正体は、あまりの存在感の無さに結弦が誤認してしまうほど影の薄い男子生徒だった。

その男子生徒は結弦に気付くと、のったりと近づいてきた。
肌は白を通り越して青白く見え、表情は少し長めの前髪で顔と一緒に覆われている。

失礼な話、何度見ても幽霊と錯覚してしまう外見と空気を持っていた。
唯一人間らしい所と言えば、瞬きをしても瞬間移動したり消えたりしないことだ。

その幽霊に似た男子生徒は結弦に対して微妙な距離が残ったところで止まった。
――これ以上は近づきたくないし近づかれたくもないみたいだ。
これがパーソナルスペースってやつかな。
けれど、男子生徒は結弦から視線を外さずさない。外そうともしない。
結弦は話しかけられるのを待っているように感じた。

――おそらくは下級生だと思うんだけど、どうやって見分けるんだったか……そうだ、バッチだ。好きな場所に支給されたバッチをつけるんだ。つけない人も多いけれど。たしか今は三年が赤で一年が青、二年は黄色だったな。
結弦はすぐにブレザーの襟元にあるのを見つけた。色は黄色で予想通り下級生だ。
なので敬語を使わずに、なるべく明るい感じで話しかけた。

「やぁ、君も漫画研究部？」
「一応」
「他に男性部員は？」
「いない」
全てぶっきらぼうに返される上に会話が続かない。
すぐに話題が尽き、結弦にとって嫌な沈黙の時間が流れる。

しばらく、そうしていると男子生徒が緩慢にだれもいないブースを指差した。

そのブースには蛍光灯の光もあまり届いてなく、どこかこの男子生徒と同じ空気をまとっていた。
「あそこにあるのがオススメなのか？」
男子生徒は頷く。
「もしかして君がこれを？」
今度は反応なし。肯定も否定もしなかった。
愛想の悪さが少し引っかかったけれど、とりあえずブースに用意してある背もたれのない丸イスに座って、勧められた厚くない冊子を読んでみた。

『音無、お前……』
『力を抜けよ日向』
上半身裸で驚くぐらいムッキムキの二人が――

「なんだこれ！？」
結弦にとって見るも読むもおぞましい黒い薔薇の宴を前にし、丸イスから転げ落ちる。
鈍く痛むお尻をさすりながら、抗議しようと男子生徒を見た。

前髪に隠されていない口元が笑っている。それも滑稽だから面白かったからとかそんな雰囲気じゃない。
悪意に満ちた笑い、それもとびきりの憎しみが込められていた。
顔の全容が見えなくても、結弦はこの男子生徒が敵意と言えるほど自分を嫌っていることがわかった。

――彼も奏のファンか。本当にいたるところにいるんだな。しかも奏が見てないことをいいことに、手の込んだ嫌がらせをしてくるなんて。
……まてよ。本当にあれは彼が書いたものなのか？　もしかしたら、他の女子生徒が書いたものかもしれない。もしも今、奏はあの

本を読んで――。

体にさっき以上の寒気が走った。

「か、奏！」

結弦は女生徒達をかき分け、奏の元へ急行する。

「今日は色々と楽しみだ……」

そんな姿を見送った男子生徒は、不気味な笑みを浮かべて薄暗い自分のブースへ戻っていった。

「奏！　無事か！？　平気なのか！？」

すぐにたどり着けた結弦は、失礼な発言で周りから白い目を向けられるのもいとわない。

そんな結弦の声に反応して奏が振り向いた。

「この作品、すごく共感できるわ」

「なっ！？」

――奏があれを支持するなんて。

結弦は打ちのめされたようなショックを受けた。

「特にこの部分は目からうろこだったわ」

追い討ちをかけるように奏は、目がうつろな結弦に気に入ったページを見せる。

一コマ目

『麻婆豆腐があるわ』

かわいく二頭身にデフォルメされた奏がちょこんと座っている。

テーブルの上には湯気立ち昇る出来たてっぽい麻婆豆腐だ。

二コマ目

『でもレンゲがないわ』

スプーンしかなくて、ちょっと困った表情の奏。

三コマ目
『こういうときは……』
四コマ目
『テイクアウトよ』
ちっちゃい奏がドヤ顔でポーズを決めていた。

そう、そこに描かれていたのは奏をモチーフにしたゆるふわ四コマ漫画だった。
さっきとは百八十度違う、ほのぼのとした作品に結弦は心が少し癒される、と同時に気が抜けた。

「どうしたら、こんなアイデアが浮かんでくるのかしら」
「奏をモチーフにしたからじゃないか？」
「モチーフ？」
奏は聞き慣れない単語に首を少しひねる。

「モチーフてのは……題材かな」
「えっ」
奏は驚いた顔でもう一度四コマ漫画を最初から最後までめくる。
色んな角度からも気の済むまでチェックして確かめた。
そうして出た結論は――

「あたしはこの子みたいに可愛くないわ」
「奏は可愛いよ」
気が抜けていたので思ったことがついぽろっと口から出てしまった。
周囲から結弦に突き刺さる視線。

――なんてトラップだ！

結弦は奏の手を取って出来るだけ急いで教室から脱出することとなった。

暗闇

二つの足音が階段を駆け上がる。
結弦は奏を連れて上の階、三階まで逃げていた。
――さすがに追っては来ないか。
目と耳で確認できたところでようやく結弦は足を止められた。

そんな結弦の一安心した表情を見た奏は
「この階に結弦が行きたかった場所があるの？」
急いで脱出した理由を勘違いしていた。
「……え、あぁ！　うん、そうだ。たしかこの辺りだったはずなんだよな」
それに乗っかった結弦は面白そうな教室を探すことにした。

この階にはさっきの漫画研究部みたいな部活動の作品の展示をしているところが多い。
なので人気はなく静か。外や二階から届く笑い声の方が大きいぐらいだ。
雰囲気はまるで放課後の校舎、どことなく隔絶されたような感じが漂っている。

そんな三階を少し歩いていたら
「お二人さん。もうすぐ始まるよ、お早めに」
一人の男子生徒が扉から右半身だけを出して無愛想に呼び込み、すぐに教室の中へ引っ込んだ。
彼の滑らかなコールアンドアウェイで、なにが始まるのか興味を持った二人はその教室へ寄ることにした。

切れ込みの入った黒い布を抜けて入った教室の中は薄暗かった。

窓には暗幕、天井にも半球状に黒い布が張ってある。中央近くのスタンドライトがなければ完全な暗闇だ。

そんな部屋の中央には手作り感が溢れる黒い球体から三本の脚が伸びた機械が設置してあった。

――あれが展示物ってわけじゃないよな。

それをしげしげと観察していると奏に袖を引っ張られた。

「座りましょ」

奏は近くのリクライニングチェアの一つに座る。結弦も隣に置かれたリクライニングチェアに腰を落ち着けた。

そのチェアはちょうどいい硬さで座り心地は抜群、大きさも結弦がゆったりとくつろげるほどだ。

逆に言えば、奏には大きすぎて――結弦の口元が少し弛んでいた。

静かな室内。そこでふと結弦は気付いた。

――この教室にいるの、カップルばっかりだ。

二つずつ並んで点在している座席で男女が仲むつまじく小声でおしゃべりしている。

他にも初々しく微妙な距離感を測っているようなカップルや同姓で熱い視線を交わしている二人も。

どことなく居心地の悪さの覚えた結弦が隣をチラリと見たら

「あれ……奏？」

奏の姿がリクライニングチェアごとなくなっていた。

――いつの間にかイスごとトイレに行った？　いやいや、そんなわけない。

狐につままれたような顔で奏を探す。

「こっちよ」

すると近くから声が聞こえた。それも下の方から。

結弦が視線を下げると、リクライニングチェアの背もたれを倒している奏と目があった。
黒い枠に小さな体が無防備に横たわり、ウィッグの髪の毛がチェアの上で無造作に広がっている。手はスカートと太ももの境目の上だ。
その姿はさながら絵画のようで――
「結弦も寝転がったほうがいいわ」
「え？　……あ、あぁ」
顔が少し赤い結弦はリクライニングチェアを操作し、奏と同じぐらいまで倒した。

「こんなでいい――っか！？」
結弦は耳まで真っ赤にして奏とは反対側へ顔を逃がす。
いつもとは違った角度から見る奏の無防備な横顔で、胸の鼓動が一瞬で最高潮に達したのだ。
――普段は平気なのにちょっと意識するとこうだ。……これってもしかしなくても。

結弦が自身の奥に潜むそれに気付きかけたその時――
「なんだっ！？　うわっ」
部屋の明かりが落ちる。突然の事態に驚いた結弦は立ち上がろうとしたがリクライニンチェアの上だったので足を滑らせた。
「大丈夫だった？」
「奏のおかげでな。ありがとう」
けれど、奏が咄嗟に制服をつかんでくれたので大きくこけずに済んだ。

「ライトを消しました。ここではお静かに」
「すみません」
事後承諾なのに少し横柄じゃないか、とは言えず、結弦は頭をさ

げた。暗闇の中でだったが。
そんな暗い部屋の中央で一筋の白い線が現れる。懐中電灯の光だ。
男子生徒はそれで手元を照らし、「げば、ごわんあうぇ」機械の電源を入れた。

真っ黒だった天井に吊るされた球状のキャンパスに様々な色や大きさの星が浮かび上がる。

秋の星空。それもお月見した日の快晴ぶりでも遠く及ばない、結弦たちの住む地域では絶対に拝めない、鮮やかな天体図だった。
「わぁ……」
「すごーい……」
いたるところからため息のような感激の声が漏れた。
細かいところまでつくりこんであって結弦も感心する。

「キレイだ。あれって秋の星空だよな」
「……」
「奏？」
反応がない。

――いつもなら同意してくれたり「静かにしなきゃダメよ」と注意してくれるのに。
不思議に思って首を動かすと、暗闇に慣れてきた結弦の目に姿勢よく穏やかな顔で眠る姿が映った。
そう、奏はすやすやと眠っていた。
――疲れが溜まってたのか。
結弦はプラネタリウム観賞が終了する五分ぐらい前まで外がうるさくなっても起こさず、一人星空を――時々奏も――眺めていた。

「失礼なことをしちゃったわ」
黒い幕を潜って教室を出る奏は落ち込んでいた。
「結弦が起してくれなかったら、少しも見ないで出るところだった」
「疲れてたんだし奏は悪くないよ。それに謝って許してもらったじゃないか」
奏は終わってすぐにプラネタリウムを作った天文学部の生徒に謝りに行っていた。
むしろ相手も縮こまってしまって、謝り合いに発展していたが。
「でも……」
「あれっ？　お菓子が落ちてる」
結弦は流れを変えるため、床に落ちていたうなぎパイを拾った。
中身は折れているものの開いてない。
「あそこにも落ちてるわ」
奏は他にもうなぎパイが落ちている事を発見した。
拾っただけでも十個近い。でも、まだまだ散らばっている。
「なんでこんなにうなぎパイだけが？　さっきの騒ぎが関係してる？」
「よぉ」
二人が首をかしげていると、チャーとゆりを大人にしたような女性と白い犬がやってきた。
――ゆりのお母さんかな？
「妻だ」
結弦の視線に気づいて、チャーは奥さんを紹介する。
奥さんが先に会釈をしてきたので、結弦は慌てて会釈を返した。

「そんなことより、ここで仮面をした男が猛威をふるってたらしいが、なんか知らねぇか？」
「仮面ですか？」
「おう、チャーギルズの釣堀で展示していた仮面だ」
チャーの仮面と口にしたことに奏は大きく反応する。

「主は釣られてしまいました？」
「らしいな」
いつかリベンジしてあの仮面をゲットする気だった奏は大きな衝撃を受けた。
ついさっきした失敗よりも精神ダメージは大きかった。

「その様子だと、立華はなんも知らんようだな。音無、お前は？」
「ちょっと前に廊下が騒がしかったぐらいしか」
「そうか……。他にもなんかあったら電話で知らせてくれ。あと、うなぎパイは回収しとくから置いてっていいぞ」
「わかりました」

手がかり

チャーにああ言われたが、二人は仮面の男やうなぎパイに繋がる手がかりを得るため、出し物をまわるかたわら、聞き込みをした。そこで集まった情報からうなぎパイの出所が判明する。

「盛況だな」

体育館横の建物の二階にある柔道場。本来ならば人気が少ないところだが、男どもで溢れかえっていた。

時おり、畳になにかを打ち付けたような振動が響く。

「椎名さん、こんにちは」

「あさはかなり……」

入口にはテーブルとイスが設置してあり、そこに椎名が座っていた。

机の上にはたくさんの名前がごちゃごちゃと書かれた紙、そしてぬいぐるみの山。

「……これは可愛さのあまり作りすぎて置く場所がなくなったので、布教の意味も込めて配っているわけではない。偶然にも体育倉庫にて偶然にも抱えきれないほど山積みになっているのを偶然にも発見しただけだ……」

結弦の視線でこれから来る質問を察した椎名が先回りして珍しく饒舌に答えた。

「うなぎパイは？」

奏は床に置かれているダンボールに入ったうなぎパイを指差す。

「……これも参加賞だ。ぬいぐるみと一緒に配っている……それと、

ぬいぐるみは私物ではないから勘違いするな」
「だれも私物だって言ってないわ」
「……あさはかなり」
墓穴を掘っても椎名の完璧なポーカーフェイスは崩れることはなかった。

「……それで参加するのか？」
椎名は奏ではなく結弦に聞いた。
「なにをやるんだ？」
「……柔道対決」
「まさか松下と、じゃないよな？」
椎名は無言で参加表明用紙の余白を人さし指で二度叩く。
――参加して確かめろってことか。嫌な予感しかしない。

「……賞品はＳＳＳの誰かとツーショット写真だ。……ゆりにも話は通してある」
「だからこんなに男が集まってるんだな」
「結弦どうするの？」
椎名も奏も目に期待が鮮明に映っている。
椎名はぬいぐるみを配りたいからで、奏はうなぎパイ騒動の真相に迫りたいからだ。
選択の余地はなかった。期待という強制力に背中を押されて、結弦は用紙に自分の名前を書き込む。

椎名から柔道着と白帯を借り、整理券も持って人をかき分け中に入ると、ちょうど試合が始まるところだった。
「手加減はせんぞ」
「この筋肉を活かせるのは柔道だけだと思っていました」

白い柔道着で身を包んで、見合っているのは松下と高松。偶然にも戦線メンバー同士の戦いだ。

松下は結構な数をこなしているのか呼吸が乱れている。汗もかなりの量だ。

けれど、高松もメガネを外しているので実質的にはハンデなし。それどころか高松にハンデが課せられているようなものだった。

「審判は未熟ではありますが、私、クライストが務めさせていただきます」

試合を仕切るのは竹山。丁寧な挨拶に見物人から「竹山がんばれー」と、応援の声があがる。

見物人の中には男子生徒に混じって、めったにお目にかかれない男同士の真剣勝負を記録に残そうと、苛烈にシャッターを切る女子生徒もいた。

「クライストです。それでは……始め！」

先に動いたのは高松だった。距離を詰め、襟を狙って右手を伸ばすも、肩の上を通過する。

松下が動いたわけじゃない。高松が目測を誤ったのだ。

そのミスを見逃さず、松下は伸ばされた腕の上腕辺りを左手で掴む。

ほぼ同時に左手を軸に自らの体を半回転させながら相手の懐に入り込んで体勢を崩し、わきの下から右手を回り込ませて完全に腕をロックする。

松下はその勢いを殺すことなく、流れるように投げの体勢に入った。

高松はなんの抵抗も出来ないまま、松下の背中の上から空中を通り、最終的に畳へと叩きつけられる。

お手本のようにきれいな一本背負いが決まり、

「それまで！」
竹山が松下の勝利を告げた。開始から一分も経っていない、あっという間の決着だった。

「ありがとうございます。この筋肉は受身にしか使えませんでした」
「こちらこそありがとう」
勝負を終えた二人はがっしりと熱い握手を交わす。
拍手する見物人達の間から、レンズを伸ばして写真を取っている女子生徒の指にも熱が入った。

「じゃ、着替えてくる」
それを見届けた結弦は、整理券を奏に預けて一人更衣室へ。

臭い柔道着を帯でしっかりと締めて戻ると、ちょうど一人の挑戦者が畳に沈められるところだった。
高松戦のときよりも大きな拍手と歓声。
「これで後一人だぜ……」
という独り言も結弦の耳に入ってきた。
――次、勝ったらきりのいい数字で、体力をかなり消耗してるってことはまさか……。

「おお、百人目の相手は音無だったか」
松下は男子生徒の手を引っ張りあげながら、戻ってきた結弦にさわやかな笑顔を向ける。
「やっぱり、百人組手なのか」
「うむ、椎名に頼まれてな。昨日の肉うどんの借りがあったから断れんかった」
「椎名が？」

「あの、お二人とも位置についてください。積もる話は勝負の後でお願いします。負けたあなたも畳の上から早く出てください」
審判の竹山に注意され、結弦と松下は畳のラインのところにそれぞれ立った。
畳の上で向き合った途端、結弦は無意識に一歩下がりそうになる。
――これが松下の本気。いつもの温和な感じとは全く違うな。
可視化してしまいそうなほど強力なプレッシャーを松下が放っていた。

さらに、周りで見物しているほとんどが秒殺された挑戦者達。
彼らは松下が百人組手を達成する瞬間を待ちわびている。なぜかクラッカーを用意している人もいた。
それに混じって奏のファンの殺気にも似た刺すような視線が。
高松が中立だとしても、結弦を取り巻く環境は完璧にアウェー状態だった。

しかし、結弦には奏が――
「結弦も松下君も頑張って」

結弦も秒殺された。

「ん……あれ」
結弦が制服に着替えて戻ってくると、少し減った見物人達はお祭り騒ぎを止め、中央の畳の方に釘づけ。また試合が始まりそうな雰囲気だった。
「百人で終わりじゃないのか？」
「えぇ、次は変則マッチで――」

真っ先に見つけた高松に聞くが、話の途中で椎名と奏の姿が目に飛び込んできた。
二人とも新品に近いキレイな柔道着で、中には白のインナーを着ている。そして奏はウィッグを外していた。完全に真剣勝負の様相だ。

しかも、二人はあることを賭けていた。
「あたしが勝ったら隠していることを全部話してもらうわ」
「あぁ……ぬいぐるみの出所からうなぎパイの仕入れルートまで洗いざらい話そう……」
――椎名はぬいぐるみを自作していたことを隠したいだけなんじゃ？
結弦はなんとなく椎名が暴れたという仮面男とはなんの関わりあいもないような気がした。

「私が勝ったらあかつきには……」
「えぇ、キュートよね」
二人の間で確認を終えたところで、竹山に変わって審判を勤める松下が二人を所定の位置に立たせた。
「それでは準備はいいか？」
松下の問いかけに二人は相手から視線を逸らさず小さく頷く。

「うむ……始めッ！」

開始早々、椎名は後ろに下がりながらクナイを投げた。
「ガードスキル――ハンドソニックｖｅｒ．６」
奏もどこからともなくレンゲを取り出してそれを弾き飛ばすと、前へ出て椎名の左手で襟をとる。
そこから投げの体勢に入るも、いつの間にか椎名は大きな目がくりっとしてて可愛い赤いリボンをつけていたクマのぬいぐるみと入

れ替わっていた。

「って、柔道じゃない！？」

結弦の驚きの声と共に、クマのぬいぐるみが場外へ飛んでいく。

変わり身にびっくりして手がすっぽ抜けてしまったのだ。

その姿がスローモーションで目に映る奏の脳裏に昨日のスノーファイトでの一幕がよぎった。

『可愛い小さな雪像をつくって、一番厄介な椎名の弱点を突こう』

『椎名さんは可愛いものが弱点なの？』

結弦を中心として進めていた作戦会議で、奏は初めてその事実を知った。

可愛いものに対して過剰な行動を取ることは奏も知っていた。

でもそれは、優しい椎名は少し天然でおっちょこちょい、これらが組み合わさったことで起きることだと思い込んでいた。

しかし、今は違う。あれが大切なものだと知っている。

――クマのぬいぐるみになにかあったらいけない。

だからこそ奏は試合中にもかかわらず、放物線を描くクマを助けるため、畳を強く蹴った。

クマへ伸ばされている手。それは一本だけではなかった。

身代わりにした張本人である椎名もクマを救おうと疾風の一部となって手を伸ばしていた。

ほぼ同時にクマへたどり着いた二人は影を空中で交差させる。

そして、お互いに背中を向けて着地した。

「あさはかなり……」

椎名は滑らかに振り返ると、手にしたそれを得意げに見せ付ける。

赤いリボン――だけ。本体は椎名の手になかった。

「クマさんは無事よ」
驚愕で目を見開いて自分の震える手を見つめる椎名に、奏はクマのぬいぐるみを差し出した。
リボンこそ取れているがクマには汚れも傷もなかった。
「……私の負けだ」
それを優しく受け取った椎名は、クマのぬいぐるみを強く抱きしめ、背中を丸めて後ろへ倒れ両肩を畳につけた。

「一本！　それまで！」
松下の判定と同時に、謎の感動に包まれた見物人達から暖かい拍手が二人に送られた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4725m/

Angel Beats! :One of Possibilities

2011年10月2日00時40分発行